

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第145集

今井白山遺跡

一般国道50号(東前橋拡幅)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集

1993

建設省
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第145集

IMA I HAKU SAN
今 井 白 山 遺 跡

一般国道50号(東前橋拡幅)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集

1993

建 設 省
群 馬 県 教 育 委 員 会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道50号は、前橋市を起点として、茨城県水戸市に至る延長152kmの主要幹線道路です。このうち前橋市天川大島町から今井町にかけての東前橋地域は、かねてより交通渋滞が激しく、これを緩和するために、また道路交通の安全確保を図るために、今井町の上武道路と交差する地点から天川大島町間の5.1kmの現道拡幅工事が昭和63年度より始まりました。これに伴い工事区域内に所在する埋蔵文化財発掘調査も始まり今井白山、今井道上、笈井八日市、野中天神の4遺跡の発掘調査を今年度まで行いました。

平成2年度に調査が終了した今井白山遺跡については、報告書刊行のための整理作業を平成3年度より行い、これが完了したので、ここに今年度調査報告書を刊行することにしました。報告書には、古墳時代後期、奈良平安時代の住居跡の遺構・遺物が主に報告されていますが、特筆すべきものとして、『類聚国史』の弘仁9年の条に見えるところの地震に伴う災害を物語る可能性のある遺構が報告されています。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の方々から種々、ご指導、ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用される事を願い序とします。

平成5年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺 弘 之

例 言

1. 本書は一般国道50号（東前橋拡幅）改築工事に伴う今井白山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は、群馬県前橋市今井町183～185、165～170番地に所在する。
3. 本遺跡の名称は、遺跡所在地の町名と字を併記して、「今井白山遺跡」と呼称する。
4. 本調査の事業主体は建設省関東地方建設局であり、発掘調査および整理事業については財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
5. 調査・整理体制および期間は下記のとおりである。

発掘調査 調査研究第2課長 桜場一寿・能登 健

調査担当 飯島義雄・神谷佳明・石北直樹・樋口伸男・黒田 晃

調査期間 平成2年1月30日～同年3月31日

平成2年11月13日～平成3年2月4日

整理事業 調査研究第2課長 能登 健

整理担当 飯島義雄

遺物・図面整理、図版作成等

阿部和子・佐子昭子・安達好子・五明志津江・馬場信子・
本多琴恵・佐藤美代子・吉田文子・六反田達子・原島弘子・
嶋崎しづ子・茂木範子・木暮芳枝・角田孝子・小菅優子・
島崎敏子・神谷順子・狩野フミ子・福島和江・橋爪美頼

遺物写真撮影 佐藤元彦

遺物の保存処理 関 邦一・小村浩一・渡邊静治

機械実測 長沼久美子・佐藤美代子・尾田正子・高梨房江・千代谷和子

事務担当 邊見長雄・松本浩一・佐藤 勉・神保佑史・岩丸大作・国定 均・
笠原秀樹・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・船津 茂

整理期間 平成3年4月1日～平成4年2月29日

6. 吉川和男氏、飯島静男氏、寒川 旭氏には専門の立場から、それぞれ玉稿を賜わった。
7. 石器石材の同定は、飯島静男氏に依頼した。
8. 挿図の方位は座標北である。ピットの数字は深度を表す。土師器の実測図中の☆印は無調整の部分を示す。
9. 本文の執筆は下記のとおりである。
桜井美枝 第4章 5. 第3遺物集中出土地点
神谷佳明 観察表 古墳・奈良・平安時代の土器
黒田 晃 観察表 中世以降の遺物
飯島義雄 上記および第5章を除いた部分
10. 本書を作成するにあたっては、木津博明・山口逸弘氏に格段の協力を得た。明記して心から感謝申し上げる。

目 次

序	
例 言	
挿図目次	5・6
表目次	6
図版目次	6・7
第1章 調査の経過と方法	8
第2章 遺跡の立地と周辺の遺跡	9
第3章 基本土層	12
第4章 検出された遺構と出土遺物	15
1. 竪穴住居	16
2. 溝	133
3. 井 戸	135
4. 土 坑	136
5. 遺物集中出土地点	149
6. 沢	159
7. 遺構外出土の遺物	
(1) 土 器	160
(2) 石 器	161
(3) その他	161
第5章 特 論	
1. 今井白山遺跡の岩石について	166
2. 今井白山遺跡における地震跡	172
3. 今井白山遺跡出土の土器片の鉱物学的研究	180
第6章 ま と め	192
遺物観察表	195
写真図版	

挿 図 目 次

図1	一般国道50号（東前橋交差点）工事に伴い 発掘調査を実施した遺跡	8	図59	1区16号住居遺構・出土土器図	69
図2	今井白山遺跡の調査地の範囲と発掘区の 設定方法	9	図60	1区17号住居遺構図	70
図3	今井白山遺跡周辺の遺跡の分布	10	図61	1区17号住居遺構図	71
図4	今井白山遺跡基本土層図	12	図62	1区17号住居遺構・出土土器図	72
図5	今井白山遺跡全体図	13	図63	1区17号住居出土土器図（1）	73
図6	1区23号住居遺構・出土土器図	16	図64	1区17号住居出土土器図（2）	74
図7	1区23号住居出土土器図（1）	17	図65	1区18号住居遺構図（1）	75
図8	1区23号住居出土土器図（2）	18	図66	1区18号住居遺構図（2）	76
図9	1区1号住居遺構図	19	図67	1区18号住居出土土器図	77
図10	1区1号住居遺構・出土土器図	20	図68	1区19号住居遺構図（1）	78
図11	1区1号住居出土土器図（1）	21	図69	1区19号住居遺構図（2）	79
図12	1区1号住居出土土器図（2）	22	図70	1区19号住居遺構図（3）	80
図13	1区2号住居遺構図	23	図71	1区19号住居出土土器図	81
図14	1区2号住居出土土器図	24	図72	1区19号住居出土土器図（1）	82
図15	1区2号住居出土土器図（1）	25	図73	1区19号住居出土土器図（2）	83
図16	1区2号住居出土土器図（2）	26	図74	1区20号住居遺構図	85
図17	1区2号住居出土土器図（3）	27	図75	1区20号住居出土土器図	86
図18	1区3号住居遺構図	28	図76	1区20号住居出土土器図	87
図19	1区3号住居遺構・出土土器図	29	図77	1区21・22号住居遺構・出土土器図	88
図20	1区3号住居出土土器図（1）	30	図78	2区1号住居遺構・出土土器図	89
図21	1区3号住居出土土器図（2）	31	図79	2区2号住居遺構・出土土器図	90
図22	1区4号住居遺構図（1）	32	図80	2区3号住居遺構図	91
図23	1区4号住居遺構図（2）	33	図81	2区3号住居出土土器図	92
図24	1区4号住居出土土器図	34	図82	2区4号住居遺構・出土土器図	93
図25	1区5号住居遺構図	35	図83	2区5号住居遺構図	94
図26	1区5号住居出土土器図	36	図84	2区5号住居出土土器図、6号住居遺構・ 出土土器図	96
図27	1区6号住居遺構図（1）	37	図85	2区7号住居遺構・出土土器図	96
図28	1区6号住居遺構図（2）	38	図86	2区8号住居遺構・出土土器図	97
図29	1区6号住居出土土器図	39	図87	2区9号住居遺構・出土土器図	98
図30	1区7号住居遺構図	40	図88	2区10号住居遺構図	99
図31	1区7号住居遺構・出土土器図	41	図89	2区10号住居出土土器図	100
図32	1区8号住居遺構図	42	図90	2区11号住居遺構図	101
図33	1区8号住居遺構・出土土器図	43	図91	2区11号住居出土土器図	102
図34	1区9号住居遺構図（1）	44	図92	2区12号住居遺構図	103
図35	1区9号住居遺構図（2）	45	図93	2区12号住居出土土器図	104
図36	1区9号住居遺構・出土土器図	46	図94	2区13号住居遺構・出土土器図	105
図37	1区9号住居出土土器図	47	図95	2区14号住居遺構・出土土器図	106
図38	1区9号住居出土土器図、10号住居遺構・ 出土土器図	48	図96	2区15号住居遺構図	107
図39	1区11号住居遺構図	49	図97	2区15号住居出土土器図	108
図40	1区11号住居遺構・出土土器図	50	図98	2区17号住居遺構図	109
図41	1区11号住居出土土器図	51	図99	2区17号住居出土土器図	110
図42	1区11号住居出土土器図	52	図100	2区18号住居遺構図	111
図43	1区12号住居遺構図（1）	53	図101	2区18号住居出土土器図	112
図44	1区12号住居遺構図（2）	54	図102	2区18号住居出土土器図	113
図45	1区12号住居出土土器図	55	図103	2区19号住居遺構図	114
図46	1区12号住居出土土器図	56	図104	2区19号住居遺構・出土土器図	115
図47	1区13号住居遺構図（1）	57	図105	2区20号住居遺構・出土土器図	116
図48	1区13号住居遺構図（2）	58	図106	2区20号住居出土土器図	117
図49	1区13号住居出土土器図	59	図107	2区21号住居遺構・出土土器図	118
図50	1区14号住居遺構図	60	図108	2区22号住居遺構・出土土器図	119
図51	1区14号住居遺構・出土土器図	61	図109	2区23号住居遺構・出土土器図	120
図52	1区14号住居出土土器図（1）	62	図110	2区23号住居出土土器図	121
図53	1区14号住居出土土器図（2）	63	図111	2区24号住居遺構・出土土器図	122
図54	1区14号住居出土土器図	64	図112	2区24号住居出土土器図	123
図55	1区15号住居遺構図	65	図113	2区25号住居遺構図	124
図56	1区15号住居遺構・出土土器図	66	図114	2区25号住居出土土器図	125
図57	1区15号住居出土土器図	67	図115	2区26号住居遺構図	126
図58	1区15号住居出土土器図	68	図116	2区26号住居出土土器図	127
			図117	2区27号住居遺構図	128
			図118	2区27号住居出土土器図	129

図119	2区28号住居遺構・出土遺物園	130
図120	2区28号住居出土遺物・ 29号住居遺構・出土土器園	131
図121	2区31号住居遺構・出土遺物園	132
図122	2区1号溝遺構・出土土器・4・5号溝 遺構園	133
図123	2区3号溝遺構・出土土器園	134
図124	2区1区1号井戸遺構・出土遺物・2号井戸 遺構園	135
図125	2区26号土坑遺構・出土土器園	136
図126	2区23号土坑遺構・出土土器園	137
図127	2区24号土坑遺構・出土土器園	138
図128	1区1～8号土坑遺構園	139
図129	1区9・10・13・15～18・20・23号土坑 遺構園	140
図130	1区19・21・24・26～28号土坑遺構園	141
図131	1区30・33・35・36号土坑・2区1号土 坑遺構園	142
図132	2区2～4・7～9号土坑遺構園	143
図133	2区10・12・13・15・16・22・25号土坑 遺構園	144
図134	2区27・28号土坑遺構園	145
図135	1区2・6・10・11・23・28号土坑出土 遺物園	146
図136	1区27・30・33・35・36号土坑・1区確認 面出土遺物園	147
図137	2区1・7・11・25号土坑出土遺物園	148
図138	第1遺物集中出土地点園	149
図139	第1遺物集中出土地点出土遺物園(1)	150
図140	第1遺物集中出土地点出土遺物園(2)	151
図141	第2遺物集中出土地点・出土土器園	152

図142	第2遺物集中出土地点出土土器園	153
図143	第2遺物集中出土地点出土遺物園	154
図144	第3遺物集中出土地点園	155
図145	第3遺物集中出土地点出土遺物園(1)	156
図146	第3遺物集中出土地点出土遺物園(2)	157
図147	第3遺物集中出土地点出土遺物園(3)	158
図148	1区1号沢遺構園	159
図149	1区1号沢出土遺物園	160
図150	遺構外出土土器園(1)	161
図151	遺構外出土土器園(2)	162
図152	遺構外出土土器園(1)	163
図153	遺構外出土土器園(2)	164
図154	遺構外出土土器園(3)	165
図155	地震跡の分布園	172
図156	地震跡aの平面形	173
図157	地震跡aの断面形(その1)	174
図158	地震跡aの粒径加積曲線(その1)	174
図159	地震跡aの断面形(その2)	174
図160	地震跡bの粒径加積曲線(その2)	174
図161	地震跡bの平面形	175
図162	地震跡bの断面形	175
図163	地震跡bの粒径加積曲線	175
図164	地震跡bおよび陥没部の断面形	176
図165	地震跡fの断面形	176
図166	地震跡fの平面形	176
図167	地震跡gの断面形	177
図168	今井白山遺跡発掘区周辺の地形	177
図169	土器片1の粉末X線回折パターン	189
図170	土器片2の粉末X線回折パターン	189
図171	土器片3の粉末X線回折パターン	189

表 目 次

表1	今井白山遺跡土坑一覧	15
表2	今井白山遺跡石材一覧	169

表3	研究試料の出土地点	180
----	-----------	-----

図 版 目 次

図版1	航空写真	243
図版2	遺跡全景・1区23号住居	244
図版3	1区1・2号住居	245
図版4	1区2・3号住居	246
図版5	1区3～5号住居	247
図版6	1区6～8号住居	248
図版7	1区8・9号住居	249
図版8	1区9～12号住居	250
図版9	1区12・13号住居	251
図版10	1区13～15号住居	252
図版11	1区16～18号住居	253
図版12	1区18・19号住居	254
図版13	1区19号住居(1)	255
図版14	1区19号住居(2)	256
図版15	1区19～22号住居	257
図版16	2区1～3号住居	258
図版17	2区4～8号住居	259
図版18	2区8～11号住居	260
図版19	2区12～15号住居	261
図版20	2区15・17～19号住居	262
図版21	2区19～23号住居	263

図版22	2区23～26号住居	264
図版23	2区26～29・31号住居	265
図版24	2区溝・2区井戸・2区23号土坑	266
図版25	2区24・1区1～3・5号土坑	267
図版26	1区6～8・27・28・35・36号土坑	268
図版27	1区36・2区1～4・8・9・12・25号 土坑	269
図版28	第1・2遺物集中出土地点	270
図版29	第3遺物集中出土地点	271
図版30	1区沢・2区グリッド土層断面	272
図版31	2区グリッド土層断面	273
図版32	2区地割れ(1)	274
図版33	2区地割れ(2)	275
図版34	1区23号住居出土遺物	276
図版35	1区23・1号住居出土遺物	277
図版36	1区1号住居出土遺物	278
図版37	1区2号住居出土遺物	279
図版38	1区2号住居出土遺物	280
図版39	1区3号住居出土遺物	281
図版40	1区3～5号住居出土遺物	282
図版41	1区5～7号住居出土遺物	283

図版42	1区8・9号住居出土遺物	284
図版43	1区9～11号住居出土遺物	285
図版44	1区11号住居出土遺物	286
図版45	1区12号住居出土遺物	287
図版46	1区13～14号住居出土遺物	288
図版47	1区14号住居出土遺物	289
図版48	1区15号住居出土遺物	290
図版49	1区15・17号住居出土遺物	291
図版50	1区17～19号住居出土遺物	292
図版51	1区19号住居出土遺物	293
図版52	1区20～22号住居出土遺物	294
図版53	2区1～3号住居出土遺物	295
図版54	2区4～10号住居出土遺物	296
図版55	2区11・12号住居出土遺物	297
図版56	2区13～15号住居出土遺物	298
図版57	2区17・18号住居出土遺物	299
図版58	2区18・19号住居出土遺物	300
図版59	2区20～22号住居出土遺物	301
図版60	2区23・24号住居出土遺物	302
図版61	2区25～27号住居出土遺物	303
図版62	2区28・31号住居・溝・井戸・26号土坑 出土遺物	304
図版63	2区23・24・1区2・6・11号土坑出土	

遺物	305	
図版64	1区23・28・35・2区11号土坑出土遺物	306
図版65	1区28・30・33・35・36 2区1・11号土坑出土遺物	307
図版66	第1遺物集中出土地点出土遺物	308
図版67	第2遺物集中出土地点出土遺物	309
図版68	第3遺物集中出土地点出土遺物	310
図版69	第3遺物集中出土地点・1区1号沢出土 遺物	311
図版70	遺構外出土遺物(1)縄文土器	312
図版71	遺構外出土遺物(2)石器	313
図版72	遺構外出土遺物(3)土器・鉄器等	314
図版73	今井白山遺跡出土の土器片の鉱物学的 研究(1)	315
図版74	今井白山遺跡出土の土器片の鉱物学的 研究(2)	316
図版75	今井白山遺跡出土の土器片の鉱物学的 研究(3)	317
図版76	今井白山遺跡出土の土器片の鉱物学的 研究(4)	318
図版77	今井白山遺跡出土の土器片の鉱物学的 研究(5)	319

第1章 調査の経過と方法

一般国道50号は前橋市で国道17号から分岐して、桐生・足利・佐野・小山などの都市を結び、水戸市に至る北関東の幹線道路の一つである。この国道50号に前橋市今井町で交差するように計画された、埼玉県深谷市から前橋市田口町までの国道17号の広域バイパスである上武道路の建設に伴い、前橋市街地東部の交通量の大幅な増大が予想された。そこで、前橋市街地から上武道路と国道50号の交差点までの間の道幅を広げることになり、道路両側の埋蔵文化財包蔵地の記録保存を構想することとなった。この間の大部分を占める旧利根川の河道とされる所謂「広瀬川低地帯」は、これまで積極的に発掘調査の手が入れられて来なかった地域である。しかし、県下のこれまでの発掘調査の所見から、河川の沖積地においても水田等の遺構の存在が確かめられてきたため、群馬県教育委員会により試掘調査が行われた。その結果、低地部では水田が、微高地部では竪穴住居等の遺構が検出され、本格的な発掘調査が行われることになった。

発掘調査の対象になったのは、今井道上・今井白山・箕井八日市・野中天神の4遺跡であり、昭和63年度の4月の今井道上遺跡を端緒として、工事計画に合わせながら順次調査を実施し、平成4年度で完了する予定である(図1)。

また、出土資料の整理は平成3年度から開始し、発掘調査の終了した今井白山遺跡から着手することになり、ここに報告するに至った。

今井白山遺跡の発掘調査は平成2年1月から3月までと、平成2年11月から平成3年の2月までの合計約5カ月で実施した。調査対象面積は1,700㎡である。調査は、最初に道路の南側で行い(1区)、次に北側で実施した(2区)。

調査は、まず表土掘削のため掘削重機(バックホー0.7㎡)を使用し、古墳時代以降の遺構の検出を行い、主に竪穴住居を対象にした調査を実施した。その後、下部文化層の有無を確かめるために試掘を行い、弥生時代以前の遺構を確認し、弥生時代の土器棺墓、縄文時代中期の竪穴住居などの調査を実施した。



図1 一般国道50号(東前橋拡幅)工事に伴い発掘調査を実施した遺跡
(1 野中天神 2 箕井八日市 3 今井白山 4 今井道上)

縄文時代の遺構調査終了後、遺跡の立地条件を理解するため、東西方向の土層の堆積状況を確認した。

調査区の設定にあたっては、日本平面直角座標系の第IX系（原点 経度 $139^{\circ}50'0''$.000 緯度 $36^{\circ}0'0''$.000）の $X=40.850\text{km}$ 、 $Y=-61.450\text{km}$ を測量上の原点とし、調査地上4mごとのメッシュをかけ、X軸を南から北へAからYまでのアルファベットを使い100mまではAを冠した。また、Y軸は算用数字を用いて順次数を増してグリッドを設定した。そして、各区の南東隅を基点とした。

第2章 遺跡の立地と周辺の遺跡

今井白山遺跡は成層火山である赤城山（1,828m）の南に広がるのびる裾野の末端部に位置し、同山麓を南流下する荒砥川が利根川の旧流路とされる広瀬川低地帯に流入する地点に形成された扇状地の先端に立地している。

赤城山南麓については、旧石器時代以降の各時代の遺跡が知られ、県内でも有数の遺跡密集地帯である。

本遺跡の立地する荒砥川扇状地の地域は、現況が水田耕作地ということもあり、一般には住居跡等の遺構の存在については否定的に見られていた。しかし、県内のこれまでの発掘調査の知見によれば、河川の沖積地においても水田等の生産遺構が存在することが確かめられて来ており、沖積地あるいは扇状地を含めて遺跡の存在する対象地として視野の中に入れなければならない状況になって来ていたのである。

本遺跡の南部に広がる広瀬川低地帯についても、これまで利根川の旧流路ということと遺跡の存在が積極的に説かれる状況にはなかったと言える。しかし、本遺跡を含む一般国道50号東前橋拡幅に伴う一連の遺跡の発掘調査により、この広瀬川低地帯にも各時代の遺跡が存在することが確実になって来たのである。そうした見地でこれまでの広瀬川低地帯内を改めて見直してみると、例数は限られているが、遺跡の存在は早くから指摘されていたのである。

広瀬川低地帯内でこれまで報告された遺跡の状況を見てみよう。

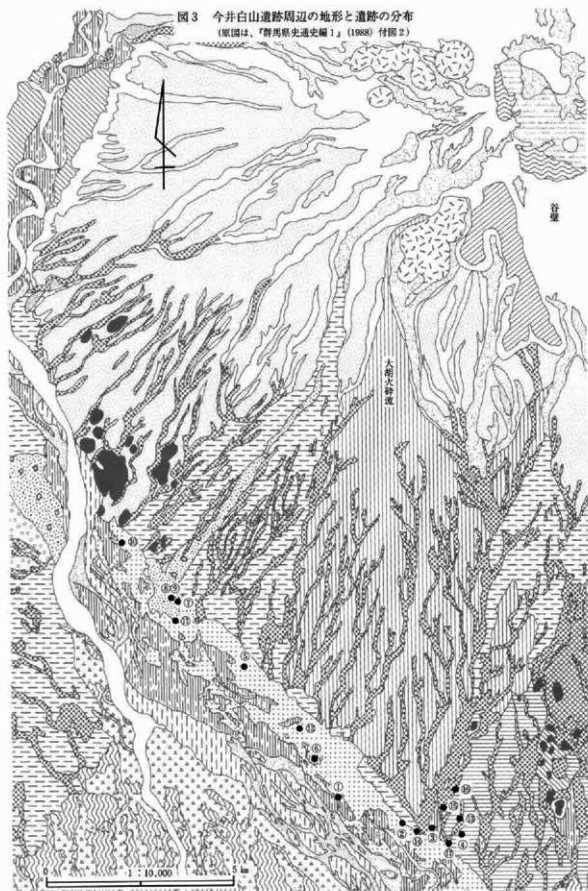
前橋市関根町付近の現利根川との接点と小高田町までの赤城山南麓に沿った地域の中央部には、縄文時



図2 今井白山遺跡の調査地の範囲と発掘区の設定方法

第2章 遺跡の立地と周辺の遺跡

図3 今井白山遺跡周辺の地形と遺跡の分布
(原図は、『群馬県史通史編1』(1988)付図2)



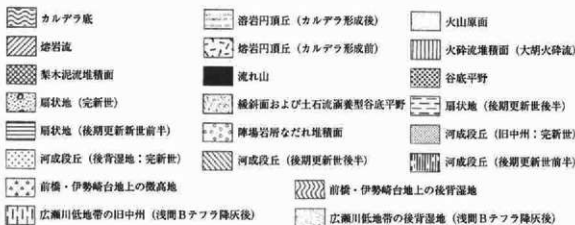
代後・晩期の西新井遺跡 (5) が存在する。本遺跡は、「幸塚町の北部白川右岸の水田地帯で、土地改良工事中、多数の土器片や石器の出土を見た。土器は主として縄文後期のものであるが、精巧な耳飾りもあり、そこは利根川の旧流路の一つである桃ノ木川にも近く、低地であるので、その遺跡の性格は判断しがたい。白川の流れによる漂流物にしては狭い範囲に多数出土しているし、住居跡とも考えられない」(尾崎喜左雄 1971『前橋市史』第1巻)と報告されたが、その後「遺物は2地点から集中的に採集された。この南北2地点は、約60mの間隔をもって存在しており、北地点の方が、約1m高い。両地点とも、遺物は約30mの範囲にわたって分布していた。この2地点の間では遺物は全くといってよほど採集されなかった。また、2地点間の採集遺物には、大まかにみて時期差はないようであり、これらは磨滅しているものは少なく、石皿などの大形の石器を含んだ生活用具一式が集中的に分布していることから、漂流物とは考えられない。発掘調査を経れば断定はできかねるが、おそらく二つの小集団が併存してひとつの集落を形成していたものと推測される」(設楽博己 1984『群馬考古通信』第9号)とした。上記二者の理解を総合してみると、この地点には縄文時代の遺構が存在するものと考えてよいものと思われる。

また、北西端部には古墳時代の住居跡の存在が予想されている遺跡 (10) が、そしてその下流部には古墳時代の包蔵地とされる神明A (7)・神明B (8) 遺跡、そして神明古墳 (9) が存在し、それらの神明遺跡群の南部には平安時代の住居と水田が検出された青柳寄居遺跡 (11) が存在する。また、西克井遺跡の南東方向には桂堂大塚古墳 (6) が、西新井遺跡と桂堂大塚古墳の間には奈良・平安時代の集落である茶木田遺跡 (13) が発掘調査されている。これらの中で、神明遺跡群は広瀬川低地帯の中に形成された白川の扇状地上に立地していることが注目される。

このように、広瀬川低地帯内には少なくとも縄文時代後期以来、人の生活の痕跡が確実に存在するのである。各時期・各場所ごとに居住域・墓・そして生産域として活用されている。

そして、今井白山遺跡に隣接する赤城山南麓には、旧石器群や縄文時代から平安時代にかけての住居や古墳などの検出された荒砥北三木堂遺跡 (12)、縄文時代の敷石住居の検出されている笈井遺跡 (14)、縄文・奈良・平安時代の住居や古墳時代の方形周溝墓の検出された荒砥北原遺跡 (15)、弥生・平安時代の住居の検出された荒砥前原遺跡 (16)、全長71mの前方後円墳である今井神社古墳 (17) をはじめとして、各時代・時期の遺跡が濃密に存在している。

上記のことを踏まえると、赤城山南麓部の台地上の遺跡を考えると、解析された沖積地や南部に広がる広瀬川低地帯との関係が問われねばならないと言えよう。



第3章 基本土層

今井白山遺跡は荒砥川扇状地上に立地するため、河道の変化により遺跡内の地点ごとに堆積している土層の変位が大きい。全体的には、シルト層と砂層そして礫層が地点ごとにその順序を変えて堆積し、その結果、表土下には上記土層が竊状に姿を示す。ここでは、2区の4グリッド (AX-43) における土層堆積状況を代表させて示す。

1層 暗褐色土 耕作土。2層 暗褐色土 粒子やや細かく粘性なし。しまりあり。白色軽石粒 (FP) をやや多く含む。鉄分少し沈着。3層 におい黄褐色土 2に似るが、白色軽石粒を少し含む。鉄分が多く沈着する。4層 におい黄褐色土 粒子細かくシルト質で粘性なし。しまり弱い。におい黄褐色シルトブロックを含む。5層 におい黄褐色土 4に似るが、やや黄色味が強く、におい黄褐色土ブロックを少し含む。6層 におい黄褐色土 5に似るが、明黄褐色シルトブロックを含む。7層 灰黄褐色土 6に似るが、やや灰色味が強く、褐色シルトブロックを含む。8層 灰白色土 7に似るが、やや白味が強く、しまりが無い。褐色シルトブロックを少し含む。9層 褐灰色砂層 粒子粗く、砂質で粘性なく、しまりなし。なお、9層以下には小円礫を主体とした砂礫層が存在した。



図4 今井白山遺跡基本土層図

また、古環境研究所による本遺跡におけるテフラと重鉱物組成分析の結果は下記の通りである。

- 2区6グリッドでは、岩相から天仁元 (1108) 年に浅間火山から噴出したと考えられる浅間Bテフラ (As-B, 新井 1979) の下位に、軽石の混じった砂質シルト層が認められた。この軽石の最大径は5mmである。発泡のよい白色の軽石粒が認められる。この軽石は、岩相からAs-Cに由来するものと考えられる。
- 2区27グリッドでは、下位よりシルトおよび砂質シルト層、砂層、土壌から構成されている。シルトおよび砂質シルト層には、噴砂が認められる。また最下位のシルト層からは、石器が検出されている。砂層の上部、および土壌の下部の2層準には、軽石粒が認められる。土壌下部の2層準のうち、上位には最大径12mmの粗粒の白色軽石が認められる。この軽石には、角閃石の斑晶が認められる。これらのことから、この軽石は6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名-伊香保テフラ (Hr-I, 早田 勉 1989, 年代は坂口 一 1986) に對比されると考えられる。Hr-Iは従来二ツ岳軽石 (FP, 新井房雄 1962) と呼ばれた降下テフラ層と、二ツ岳第2軽石流 (新井房雄 1979) と呼ばれた火砕流堆積物の総称である。FPの下位にある2層準の上部の砂層中には、軽石が少量含まれている。軽石の最大径は、4mm。発泡のよい白色の軽石粒が認められる。この軽石は、岩相から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石 (As-C, 新井房雄 1979, 石川正之助ほか 1979) に由来するものと考えられる。下部の砂層中には比較的多くの軽石が含まれている。軽石の最大径は4mmである。発泡のよい白色の軽石粒が認められる。この軽石も、岩相からAs-Cに由来するものと考えられる。
- 砂層の重鉱物組成の分析結果から、本遺跡付近では、As-C降灰時 (4世紀中葉) 以降も氾濫に由来する砂層が堆積したようである。このような砂層の堆積は、As-B降灰時 (天仁元年, 1108年) 以前には終了していたと思われる。

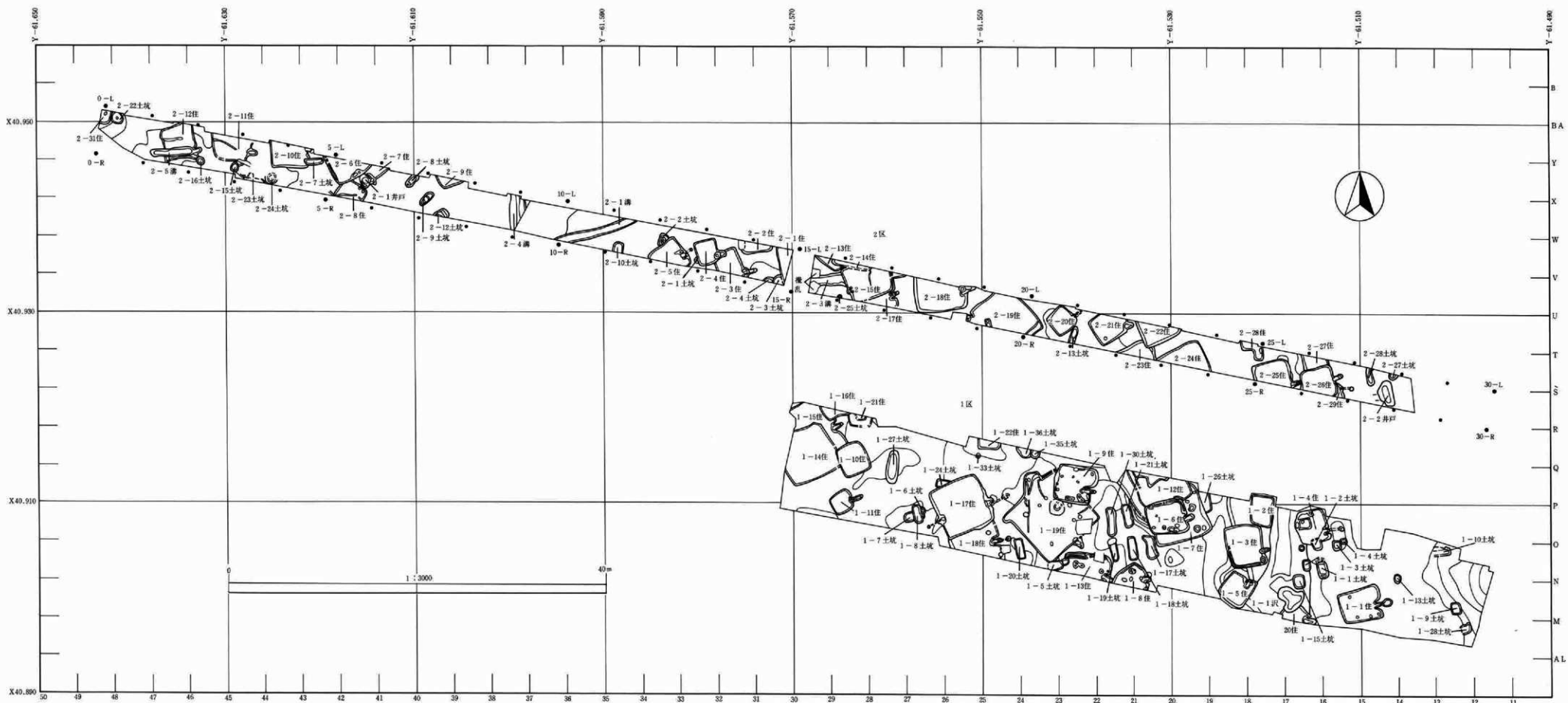


图5 今井白山道路全体图

第4章 検出された遺構と出土遺物

国道50号を挟んで、南側の1区と北側の2区を合わせて、縄文時代以降の各種の遺構が検出され、多くの遺物が出土した。

竪穴住居は縄文時代の敷石住居が1軒、古墳時代が24軒（前期1軒、中期4軒、後期20軒）、奈良時代が15軒、平安時代が7軒、時代不明が5軒の合計52軒認められたが、時期が不明なものの中には、竪穴住居とは異なる遺構の可能性もあるものも存在するが、とりあえず竪穴住居の中に含めた。

なお、発掘時には竪穴住居を54軒として取りあつたが、整理の結果、2軒を他の住居に統合させた。

溝は発掘時には4条認められたが、現代の1条は省略した。井戸は2基検出され、土坑は発掘時には1区で28基、2区で28基の合計56基検出された。それらの土坑の内、木根等の跡と思われるものは省き、46基を記載する。土坑には、縄文時代に属するのが2基、弥生時代に属するのが2基、古墳時代に属するのが1基存在するが、他は帰属時期が確定しない。ただし、弥生時代の土坑の1基は、竪穴住居の可能性があるが、調査範囲が限定されていたことなどの理由により、全体像がつかえず、土坑として扱った。

古墳・奈良・平安時代以前の文化層の存在を確認するために、下部の調査中に、遺構を伴わない縄文時代の3箇所の遺物集中出土地点を検出した。1区で1地点、2区で2地点である。

1区の竪穴住居の下から、縄文土器や石器の出土した沢が検出された。

遺構外から、縄文時代以降の各種の遺物が出土した。遺構内から出土しても、明らかに遺構の時期よりも溝の遺物も遺構外出土の遺物と合わせて記載する。

また、本遺跡では地震の結果で生じた亀裂・噴砂等の現象が認められた。本章では遺構との係わりを記載し、総合的には第5章で検討する。

名 称	位 置	平面形状	長軸方位	規 模 (m)		名 称	位 置	平面形状	長軸方位	規 模 (m)			
				長軸×短軸×深さ	深さ					長軸×短軸×深さ	深さ		
2区26号土坑	AY45	不整形	N-79°-E	123×	91×	76	1区26号土坑	AO18	長方形	N-12°-W	(240)×	97×	11
2区23号土坑	AX43	不明	N-78°-W	-×	-×	32	1区27号土坑	AP27	楕円形	N-8°-E	358×	132×	59
2区24号土坑	AX43	円形	N-78°-W	不	明		1区28号土坑	AL12	不整形	N-68°-E	110×	90×	33
1区1号土坑	AN15	長方形	N-14°-W	170×	90×	51	1区30号土坑	AO21	不整形	N-3°-W	307×	105×	58
1区2号土坑	AN16	不整形	N-14°-W	(122)×	98×	60	1区33号土坑	AP24	楕円形	N-24°-E	52×	37×	24
1区3号土坑	AN15	長方形	N-13°-W	105×	80×	30	1区35号土坑	AQ23	円形	N-12°-W	(76)×	98×	31
1区4号土坑	AN15	長方形	N-84°-E	55×	53×	31	1区36号土坑	AQ23	楕円形	N-28°-W	(152)×	126×	30
1区5号土坑	AN22	長方形	N-79°-E	113×	90×	23	2区1号土坑	AV32	円形	N-5°-W	80×	67×	37
1区6号土坑	AO26	不整形	N-7°-W	118×	(54)×	17	2区2号土坑	AV33	長方形	N-16°-E	132×	81×	60
1区7号土坑	AO26	長方形	N-78°-E	(100)×	89×	7	2区3号土坑	AU30	円形?	N-15°-E	(97)×	119×	25
1区8号土坑	AO26	長方形	N-6°-W	192×	83×	4	2区4号土坑	AU30	円形	N-82°-E	(89)×	(53)×	20
1区9号土坑	AM12	長方形	N-19°-W	125×	88×	40	2区7号土坑	AX42	楕円形	N-90°-E	185×	59×	36
1区10号土坑	AN12	長方形	N-99°-E	(125)×	73×	22	2区8号土坑	AX39	楕円形	N-42°-E	(150)×	73×	21
1区13号土坑	AN14	卵形	N-5°-W	87×	56×	21	2区9号土坑	AW39	楕円形	N-48°-E	387×	78×	45
1区15号土坑	AM16	長方形	N-14°-W	141×	115×	31	2区10号土坑	AV34	楕円形	N-8°-E	(107)×	107×	16
1区16号土坑	AN16	長方形	N-15°-W	113×	70×	30	2区12号土坑	AW39	楕円形	N-53°-E	(137)×	110×	90
1区17号土坑	AN30	不整形	N-9°-W	245×	119×	15	2区13号土坑	AT22	楕円形?	N-12°-E	(170)×	65×	10
1区18号土坑	AN20	長方形	N-8°-W	242×	136×	20	2区15号土坑	AX44	不整形	N-13°-E	(76)×	72×	25
1区19号土坑	AN21	長方形	N-8°-W	(178)×	72×	5	2区16号土坑	AX45	円形	N-84°-W	79×	72×	25
1区20号土坑	AN23	長方形	N-10°-W	(200)×	84×	24	2区22号土坑	AY47	円形	N-81°-E	126×	(108)×	33
1区21号土坑	AO21	長方形	N-13°-W	240×	89×	38	2区25号土坑	AU28	楕円形?	N-41°-E	(47)×	32×	25
1区23号土坑	AQ25	不明	N-12°-E	90×	78×	6	2区27号土坑	AS14	不整形	N-84°-E	108×	(67)×	19
1区24号土坑	AP25	長方形	N-72°-W	(188)×	89×	20	2区28号土坑	AS14	不整形	N-21°-W	(180)×	72×	35

表1 今井白山遺跡土坑一覧

第4章 検出された遺構と出土遺物

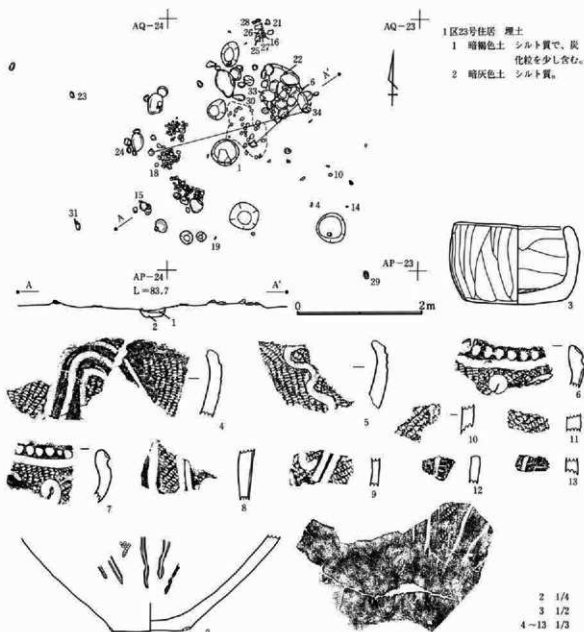


図6 1区23号住居遺構・出土土器図

1. 竪穴住居

1区23号住居 図版番号 遺構図版2 遺物図版34・35

位置 AP-23 残存深度 確認できなかった。平面形状 プランが確認できず不明である。規模 不明である。主軸方位 不明である。埋没土 不明である。周壁 不明である。床面 顕著な硬化面確認できなかった。周溝 未検出である。柱穴 ビットは6基確認したが、積極的に柱穴と認定するにいたらなかった。掘り方 ほとんど検出できなかった。遺物出土状況 完形の小形鉢形土器1点(3)や深鉢形土器の破片多数と製片素材の削器・使用痕のある製片(14~28)、磨石(29)、凹石(30・33)、蔽石(31)、石皿(32)がほぼ同じレベルで出土した。また、被熱によりはじけた礫が約2.5m離れて出土し、接

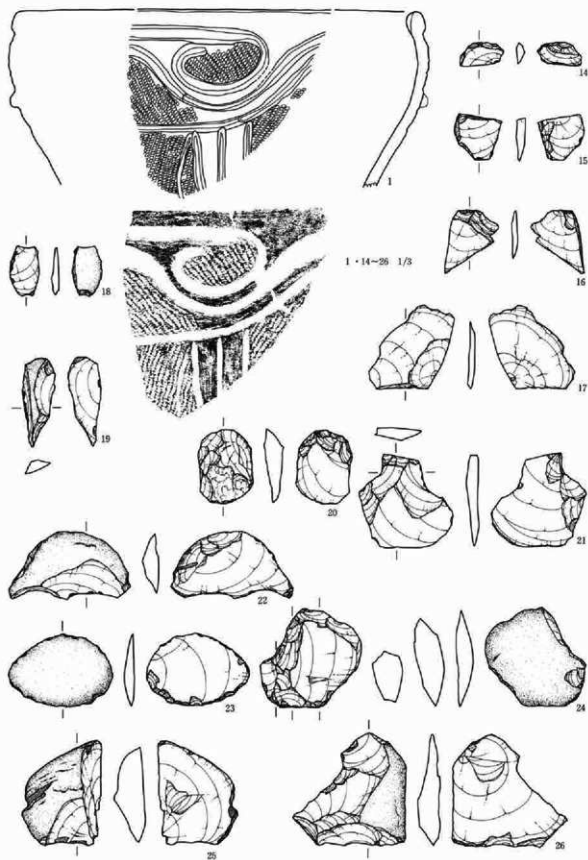


图7 1区23号住居出土遗物图(1)

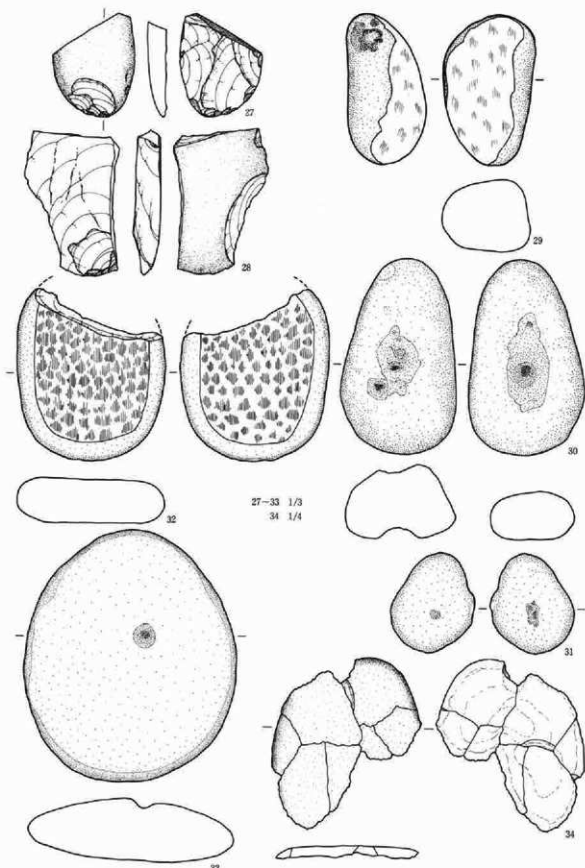
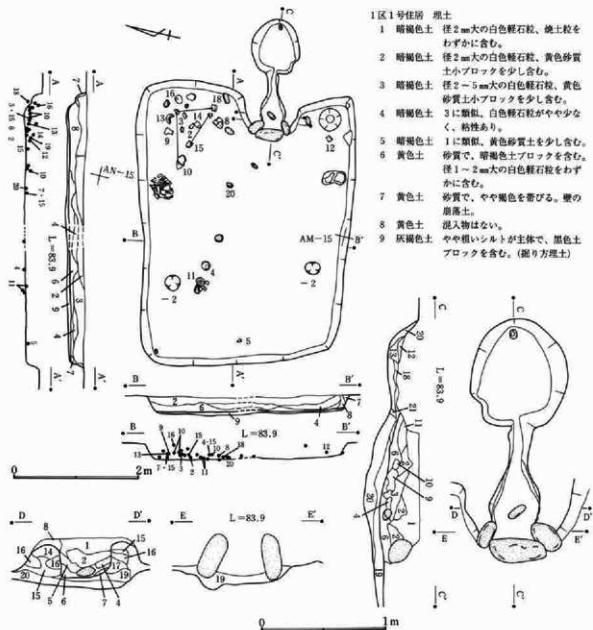


图8 1区23号住居出土遺物图(2)



1区1号住居 垣土

- 1 暗褐色土 径2mm大の白色軽石粒、焼土粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 径2mm大の白色軽石粒、黄色砂質土小ブロックを少し含む。
- 3 暗褐色土 径2-5mm大の白色軽石粒、黄色砂質土小ブロックを少し含む。
- 4 暗褐色土 3に類似、白色軽石粒がやや少なく、粘性あり。
- 5 暗褐色土 1に類似、黄色砂質土を少し含む。
- 6 黄色土 砂質で、暗褐色土ブロックを含む。径1-2mm大の白色軽石粒をわずかに含む。
- 7 黄色土 砂質で、やや褐色を帯びる。壁の崩落土。
- 8 黄色土 混入物はない。
- 9 灰褐色土 やや粗いシルトが主体で、黒色土ブロックを含む。(掘り方埋土)

1区1号住居 カマド 埋土

- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1 暗褐色土 径2-5mm大の白色軽石粒、焼土粒、黄色粘土粒を少し含む。 2 黄色土 粘性があり、焼土粒、暗褐色土ブロックを少し含む。 3 黄色土 粘性があり、暗褐色土ブロックを多く含む。(天井部の崩落土) 4 黄色土 粘性があり、焼土粒をやや多く含む。 5 黄色土 粘性があり、焼土粒を多く含む。 6 灰褐色土 灰主体。 7 褐色土 焼土ブロック。 8 黄褐色土 焼土粒、黄色粘土粒を少し含む。 9 黄色土 4に類似、焼土粒を非常に多く含む。 10 黒褐色土 焼土粒、灰をやや多く含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 11 灰褐色土 焼土粒、灰、黄色粘土粒を少し含む。 12 灰褐色土 焼土粒、灰を少し含む。 13 暗褐色土 焼土粒、炭化物、黒色土ブロックを含む。 14 暗褐色土 やや砂質で、固く締まる。炭化物、焼土粒を少し含む。 15 赤褐色土 やや砂質で、焼土粒を多く含む。 16 暗褐色土 黄色粘土粒、焼土粒を少し含む。 17 黄褐色土 やや粘性があり、締まりあり。焼土粒、暗褐色土ブロックを含む。 18 灰褐色土 焼土粒、炭化物、黒色土ブロックをわずかに含む。 19 暗褐色土 やや砂質で、炭化物を少し含む。 20 灰褐色土 シルト質で、黒色土ブロックを少し含む。 21 暗褐色土 締まりなし。 |
|---|---|

図9 1区1号住居遺構図

第4章 検出された遺構と出土遺物

合する資料(34)が検出された。石器・使用痕のある剥片の内、15・20の石器は黒色安山岩であり、他は黒色頁岩である。磨石・凹石・敲石・石皿の礫素材の石器はすべて粗粒安山岩である。所見 偏平な円礫や小礫がやや多く検出され、配列の規則性はみとめられなかったが、加曾利E3期の敷石住居と考えて置きたい。なお、1区19号住居の西部中央部の調査時に、本住居に属する偏平な円礫群の一部が露出していた。

1区1号住居 図版番号 遺構図版3 遺物図版35・36

位置 AM-14 残存深度 33cm 平面形状 隅丸長方形。規模 東辺3.2m 西辺3.0m 南辺4.0m 東辺4.4m 主軸方位 N-87°-E 埋没土 自然埋没と考えられる。周壁 約66°の勾配で立ち上がる。床面 ほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は確認できなかった。14.452m² 周溝 未検出である。貯蔵穴 東

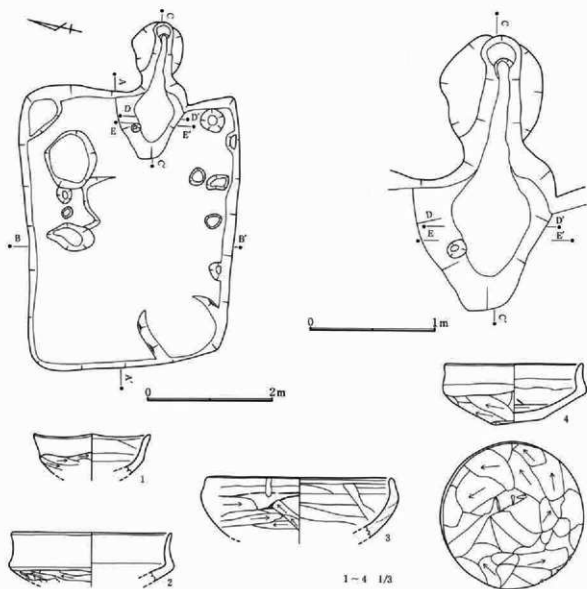
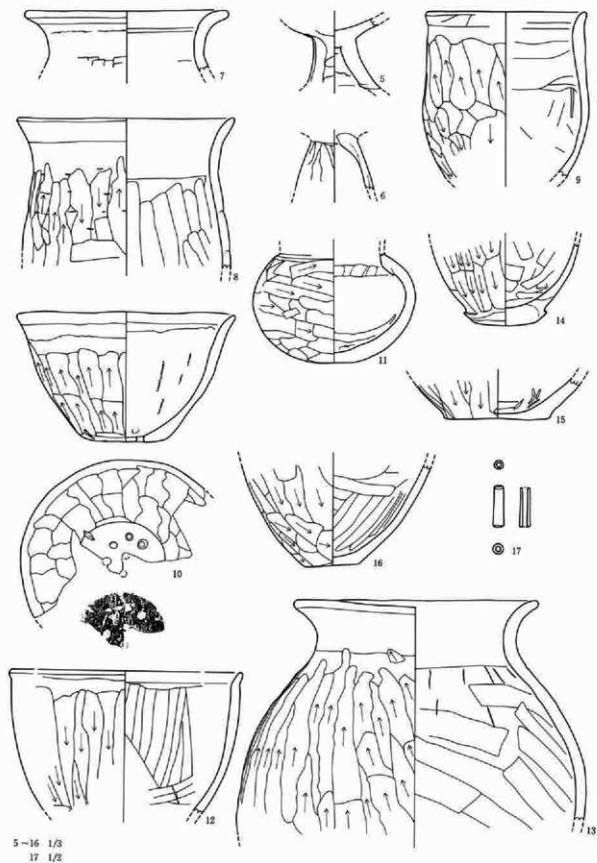


図10 1区1号住居遺構・出土土器図

1. 竖穴住居



5-16 1/3
17 1/2

图11 1区1号住居出土器物图(1)

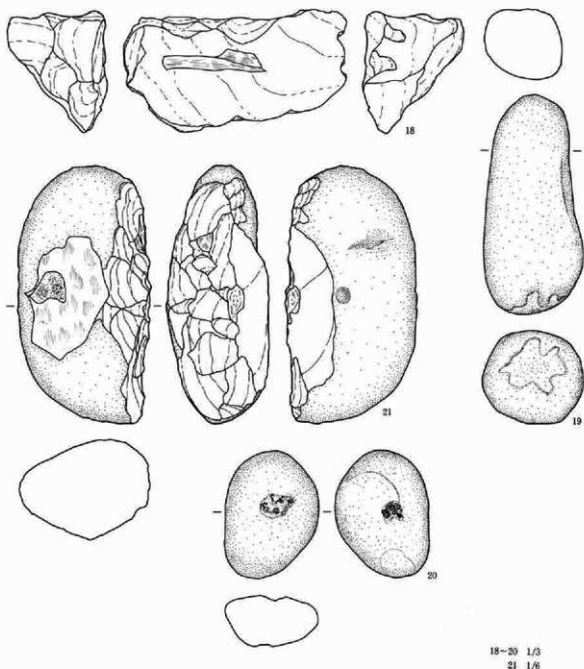


図12 1区1号住居出土遺物図(2)

南隅に確認した。円形。直径35cm 深さ22cm。柱穴 床面調査時に検出できず、掘り方調査時にも積極的に柱穴の掘り方と認めるビットは検出できなかった。掘り方 北東部にやや大きなビットを検出した。竈 位置 東辺やや南寄りに付設。主軸方位 N-87°-E 形状 馬蹄形状。規模 全長1.80m 屋外長1.20m 屋内長0.60m 袖部幅1.00m 燃焼部幅0.28m 焚口 焚口では角閃石安山岩を用いて鳥居状に構築されていた。燃焼部 壁より内側に構築され、中央部からは葎打痕のある被熱礫が出土した。袖壁

1. 竪穴住居

から竪口に向かってすぼまる。煙道 燃焼部から緩やかに立ち上がる。掘り方 舌状。遺物出土状況 東北隅部の床面直上を中心にして、主として土師器が出土した。また管玉 (17)・加工痕のある軽石 (18) も出土した。竪口中央部の角閃石安山岩の礫 (21) は、端部が剝離により加工されるとともに側面が削られていた。所見 出土土器から古墳時代後期に属すると考えられる。

1区2号住居 図版番号 遺構図版3・4 遺物番号37・38

位置 AO-17 残存深度 58cm 平面形状 不正隅丸長方形。規模 東辺3.2m 西辺3.0m 南辺1.8m 北辺2.3m 主軸方位 N-12°-E 埋没土 基本的に自然埋没と思われるが、床面からやや浮いて多量の炭化材と被熱礫が出土した。周壁 約84°の勾配で立ち上がる。床面 ほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は確認できなかった。7.204㎡ 周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 床面調査時にも、掘り方調査時にも検出できなかった。掘り方 ほとんど検出できなかった。遺物出土状況 炭化材と礫に

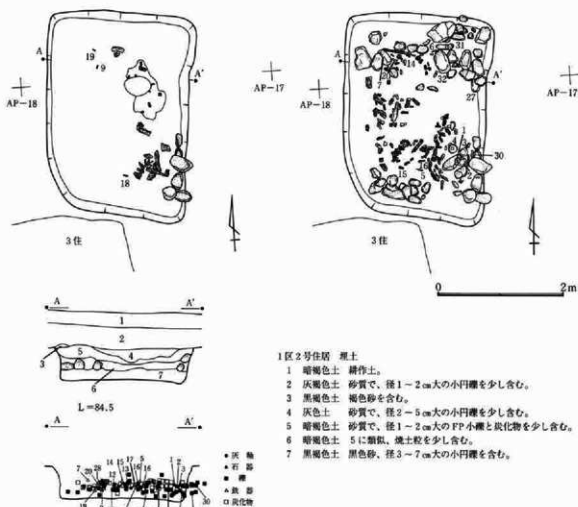


図13 1区2号住居遺構図

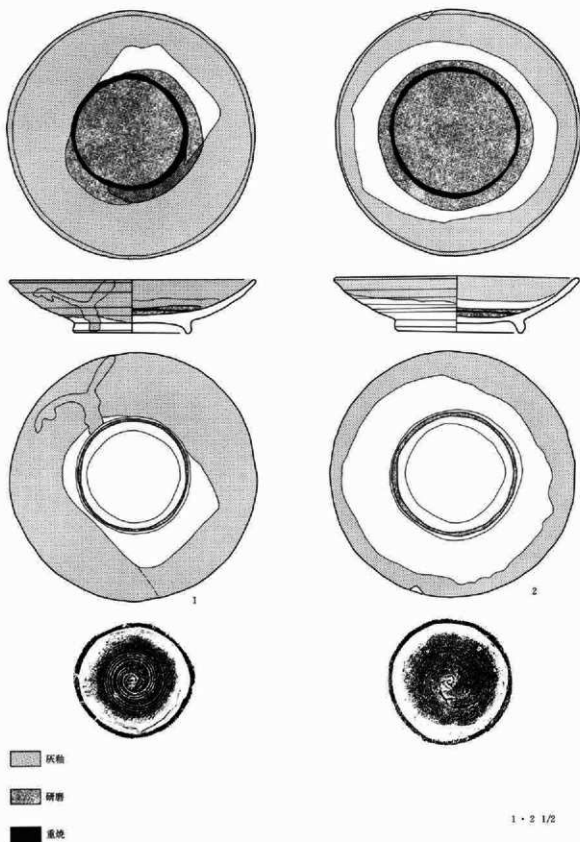


图14 1区2号住居出土土器図

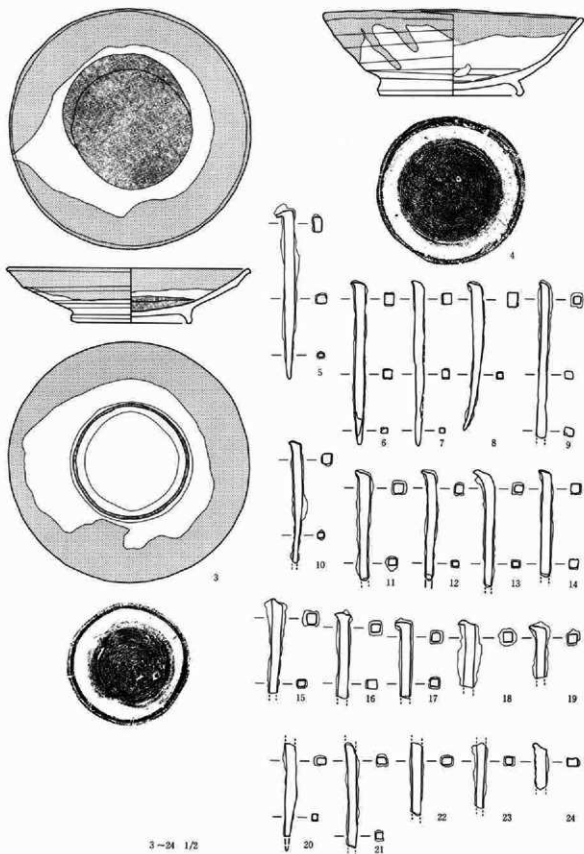


图15 1区2号住居出土遗物图(1)

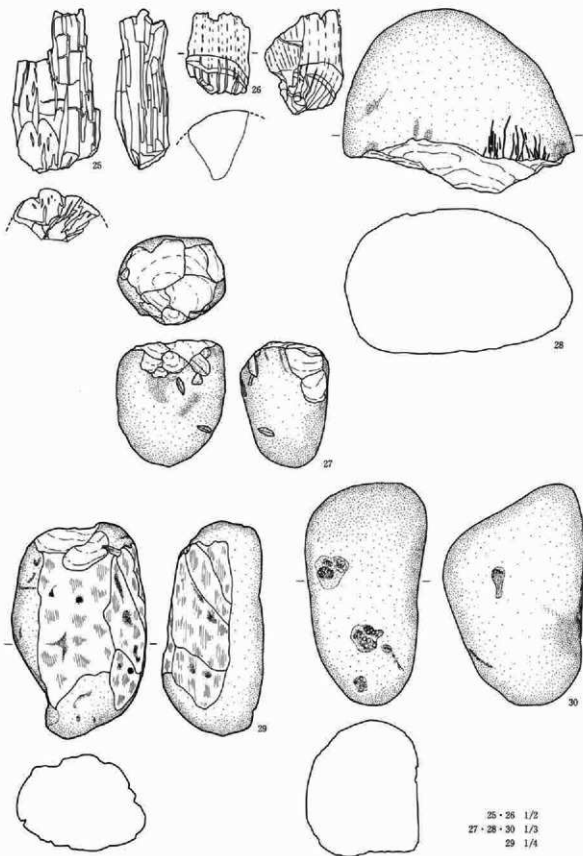
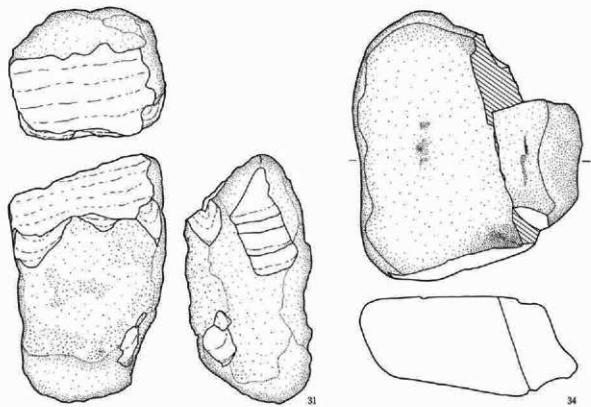


図16 1区2号住居出土遺物図(2)

1. 整穴住居



31 · 33 1/4
32 1/6
34 1/3

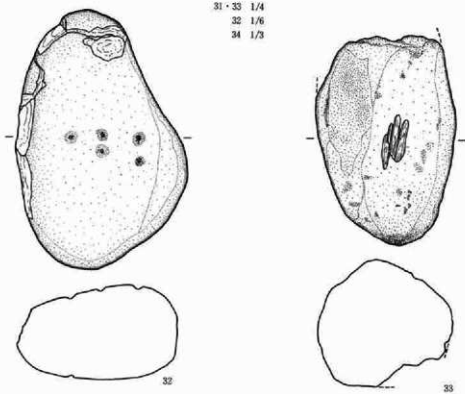
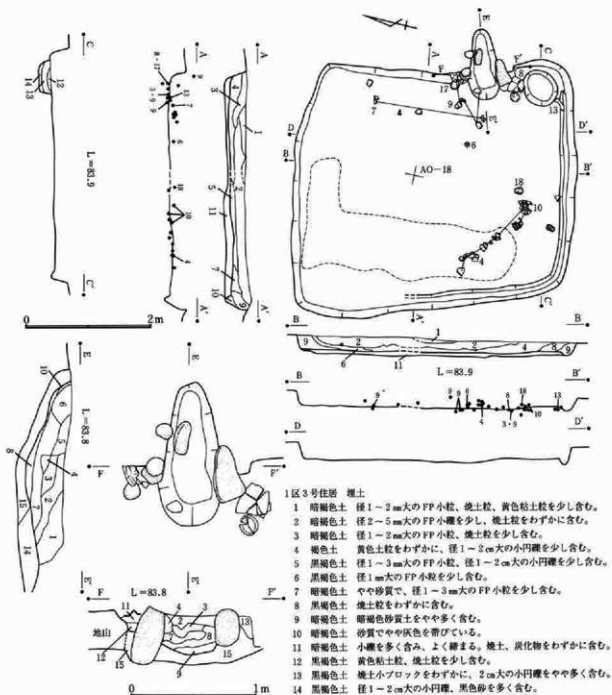


图17 1区2号住居出土遗物图(3)



1区3号住居 堀土

- 1 暗褐色土 径1-2cm大のFP小粒、焼土粒、黄色粘土粒を少し含む。
- 2 暗褐色土 径2-5mm大のFP小粒を少し、焼土粒をわずかに含む。
- 3 暗褐色土 径1-2cm大のFP小粒、焼土粒を少し含む。
- 4 褐色土 黄色土粒をわずかに、径1-2cm大の小円礫を少し含む。
- 5 黒褐色土 径1-3mm大のFP小粒、径1-2cm大の小円礫を少し含む。
- 6 黒褐色土 径1mm大のFP小粒を少し含む。
- 7 暗褐色土 やや砂質で、径1-3mm大のFP小粒を少し含む。
- 8 黒褐色土 焼土粒をわずかに含む。
- 9 暗褐色土 暗褐色砂質土をやや多く含む。
- 10 暗褐色土 砂質でやや灰色を帯びている。
- 11 暗褐色土 小礫を多く含む、よく締まる。焼土、炭化物をわずかに含む。
- 12 黒褐色土 黄色粘土粒、焼土粒を少し含む。
- 13 黒褐色土 焼土小ブロックをわずかに、2cm大の小円礫をやや多く含む。
- 14 黒褐色土 径1-2cm大の小円礫、黒色砂を多く含む。

1区3号住居 カマド 埋土

- 1 黄褐色土 黄色粘土粒をやや多く、焼土粒をわずかに含む。
- 2 黄褐色土 1に類似、焼土粒を多く含む。
- 3 黄褐色土 粘性があり、焼土、暗褐色小ブロックを少し含む。
(天井部崩落土)
- 4 暗褐色土 黄色粘土をやや多く、焼土粒を少し含む。
- 5 暗褐色土 黄色粘土を少し、焼土ブロックをやや多く含む。
- 6 褐色土 焼土ブロックを多く、黄色粘土ブロックをやや多く含む。
- 7 褐色土 黒褐色土小ブロック、黄色粘土ブロック、焼土ブロックを少し含む。
- 8 黒褐色土 7に類似、やや黒色味が強く、焼土ブロックはやや少ない。
- 9 黒色土 焼土ブロックを少し含む灰を主体とする。
- 10 赤褐色土 焼土。
- 11 黒褐色土 焼土粒、炭化物を少し含む。
- 12 黒灰色土 粘土ブロックを主体とする。
- 13 黄褐色土 シルト、黒色土ブロックを少し含む、よく締まる。
- 14 黒褐色土 焼土ブロック、小円礫を少し含む。
- 15 黒褐色土 焼土粒、炭化物を少し含む。

図18 1区3号住居遺構図

1. 竪穴住居

混じって完形の灰軸陶器4点(1~4)と多量の釘(5~24)が出土した。パレオ・ラゴの同定によれば、炭化材の樹種はブナ科のコナラ属コナラ節とコナラ属クヌギ節であり、主体は20年以内の比較的若木で、大きさは半径40mm以内である。炭化材の分布状況を見ると、コナラ節が南半部にやや集中している様子が窺えた。また、炭化材の中には端部を尖らせるように加工したものが認められた(25・26)。釘の出土状況に明確な規則性を認めることはできなかった。礎の中には削り痕や敲打痕、また被熱により節理で割れた接合資料(27~33)などが存在した。所見 4点の灰軸陶器の内の3点(1~3)には、内面中央部と高台端部に磨痕が認められ、使用の結果による磨滅というよりは、意識的に磨った結果と考えるべきかもしれない。本遺構を規模と形状から住居としたが、顕著な硬化した床面が認められず、被熱した礎が多量に出土したにもかかわらず礎を意識的に組込んだ様子も窺えず、周囲の壁にも礎を構築した痕跡は無く、竪穴住居とするには疑問が残る。出土した灰軸陶器から平安時代に属すると考えられる。

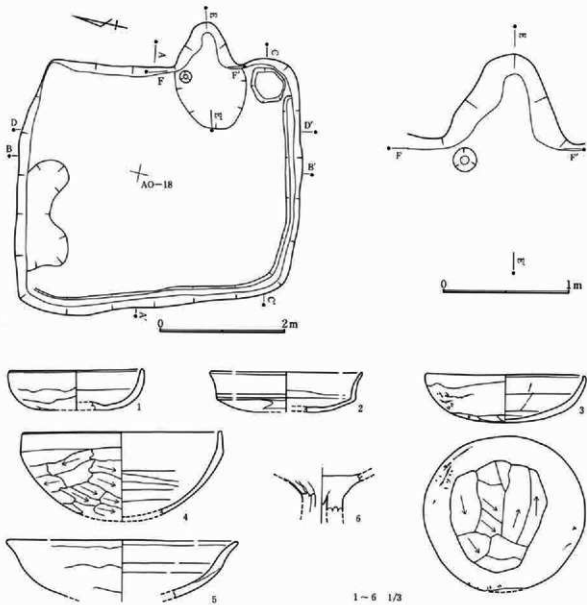


図19 1区3号住居遺構・出土土器図

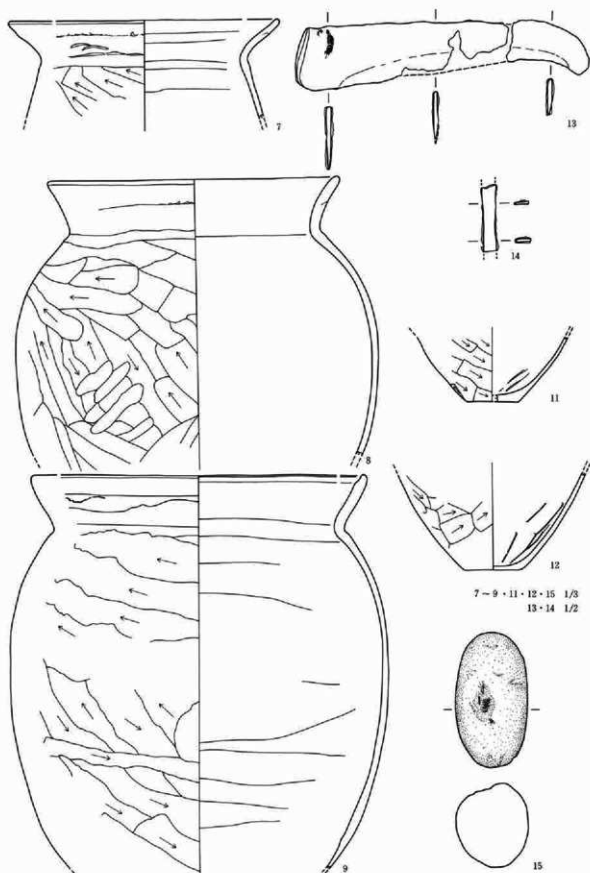


図20 1区3号住居出土遺物図(1)

1. 壺穴住居

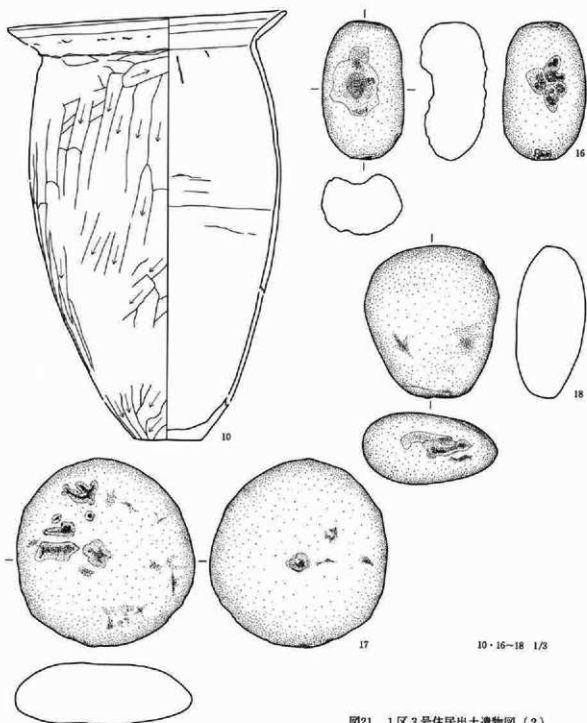


図21 1区3号住居出土遺物図(2)

1区3号住居 図版番号 遺構図版4・5 遺物図版39・40

位置 AN-17 残存深度 40cm 平面形状 不正隅丸方形。規模 東辺3.8m 西辺4.2m 南辺3.4m 北片3.3m 主軸方位 N-104°-E 埋没土 自然埋没である。周壁 約76°の勾配で立ち上がる。床面 はほぼ平坦で、北西部に粘土が貼られている状況が確認された。16.674㎡ 周溝 南辺と西辺南部で検出された。貯蔵穴 南東隅部で検出された。平面 楕円形。長軸71cm×短軸55cm。深さ20cm。柱穴 未検出である。掘り方 顕著な掘り方は検出されず。竈 位置 東辺中央やや南よりに付設。主軸方位

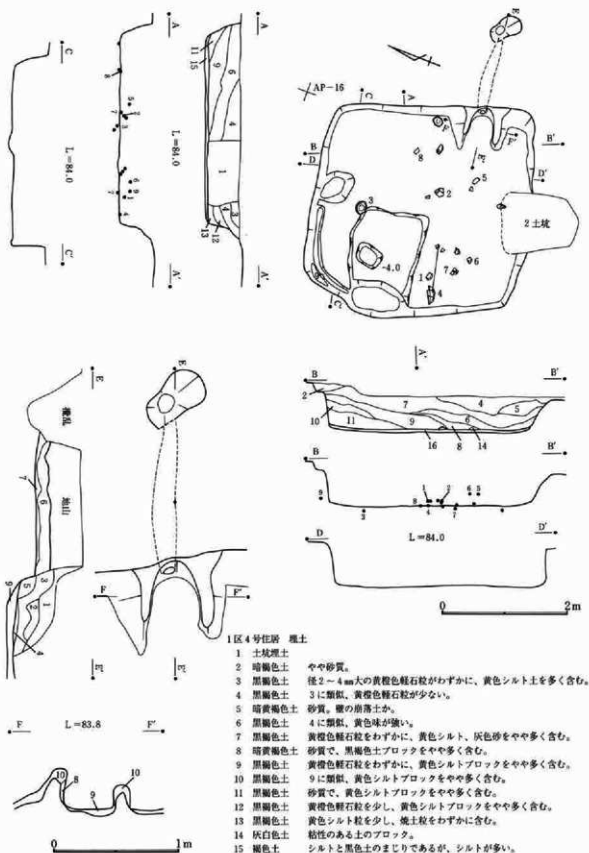


図22 1区4号住居遺構図(1)

1. 竪穴住居

1区4号住居 カマド 埋土

- 1 暗灰褐色土 灰白色粘土ブロック、黒色土ブロックをやや多く含む。
- 2 黒色土 灰白色粘土ブロックをやや多く、焼土粒を少し含む。
- 3 灰白色土 粘性があり、黒色土粒、焼土粒を少し含む。
- 4 黒色土 灰主体。
- 5 黄白色土 粘性があり、白色粘土粒、焼土粒を少し含む。
- 6 浅黄色土 シルト質で、焼土ブロックを非常に多く含む。
- 7 浅黄色土 6に類似、焼土ブロック、灰を多く含む。
- 8 暗褐色土 焼土を多く含む。
- 9 暗褐色土 焼土粒をわずかに、灰をやや多く含む。
- 10 黄白色土 黄白色シルト、灰白色粘土を多く含む。

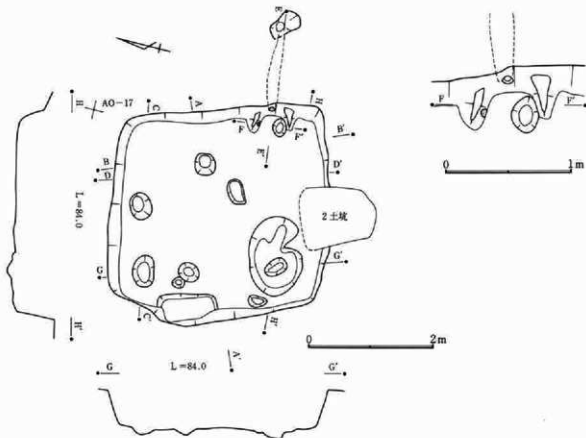


図23 1区4号住居遺構図(2)

N-78-E 形状 舌状。規模 全長1.10m 屋外長0.60m 屋内長0.50m 袖部幅0.75m 燃焼部幅0.30m 焚口・燃焼部 遺存状況 不良である。皿状の落ち込み。燃焼部は壁の内側である。袖ほとんど検出できなかった。補強材として両袖に礫が使用されていた。煙道 燃焼部から緩やかに立ち上がる。掘り方 舌状。遺物出土状況 竈の周辺と南西部から土師器と左利き用の鎌(13)、敲打痕のある礫などが出土した。鎌の基部の柄を着ける部分には布が遺存していた。所見 出土した土器から奈良時代後期に属すると思われる。

1区4号住居 図版番号 遺構図版5 遺物図版40

位置 AO-15 残存深度 70cm 平面形状 隅丸方形である。土境2基に切られる。規模 東辺3.1m

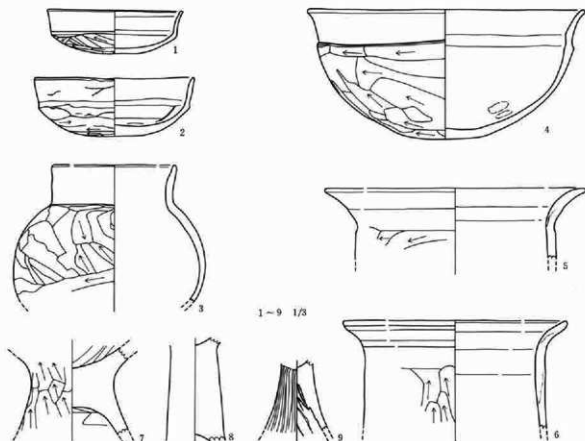
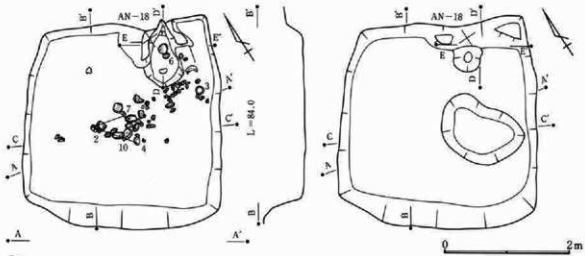


図24 1区4号住居出土土器図

西辺3.2m 南辺3.1m 北辺2.6m 主軸方位 N-73°-E 埋没土 自然埋没である。周壁 約80°の勾配で立ち上がる。床面 ほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は確認できなかった。10.892m² 周溝 北西隅部で一部検出した。貯蔵穴 未検出である。柱穴 床面検出時にビット1基を検出したが、柱穴として対応するビットが検出できず、積極的に柱穴とは認められない。掘り方 大小9基のビットを検出した。北西隅部と南西隅部のビットは柱穴の可能性がある。竈 位置 東辺中央やや南よりに付設されていた。主軸方位 N-84°-E 形状 馬蹄形状。規模 全長2.20m 屋外長1.50m 屋内長0.70m 袖部幅1.00m 燃焼部幅0.40m 焚口・燃焼部 舌状。燃焼部は壁の内側である。袖 両袖ともに地山を削り出している。煙道 燃焼部の壁面のやや上部から緩やかに立ち上がる。トンネル状に遺存していた。遺物出土状況 中央部から南西部にかけて土師器が出土した。所見 出土土器から古墳時代後期に属すると考えられる。

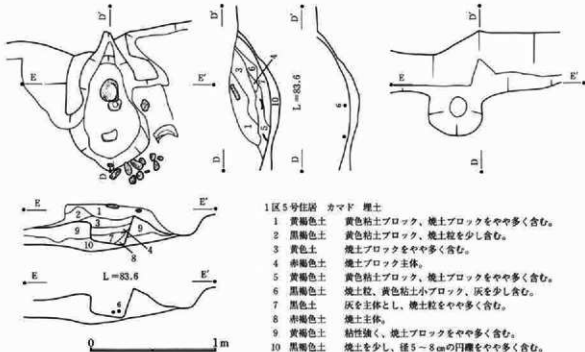
1区5号住居 図版番号 遺構図版5 遺物図版40・41

位置 AM-17 残存深度 67cm 平面形状 不正隅丸方形。規模 東辺3.10m 西辺2.60m 南辺3.10m 北辺2.60m 主軸方位 N-28°-E 埋没土 自然堆積である。周壁 約72°の勾配で立ち上がる。床面 ほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は確認できなかった。9.574m² 周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 未検出である。掘り方 中央部やや東寄りにやや大きなビットを検出した。竈 位置 東辺の中央やや南寄りに付設されていた。形状 舌状。規模 全長1.10m 屋外長0.20m 屋内長



1区5号住居 埋土

- 1 暗褐色土 径3mm大のFP粒をわずかに含む。
- 2 暗灰褐色土 やや砂質で、径1mm大のFPをわずかに含む。
- 3 黒褐色土 径1-3mm大のFP粒と焼土粒をわずかに含む。
- 4 暗褐色土 径1-2mm大のFP粒をわずかに、径2-5cm大の小円礫を少し含む。
- 5 暗褐色土 砂礫主体。
- 6 暗褐色土 径1-3mm大のFP粒をわずかに、径3cm大の小円礫を含む。
- 7 暗褐色土 褐色の砂、1-2cm大の小円礫を少し含む。



1区5号住居 カマド 埋土

- 1 黄褐色土 黄色粘土ブロック、焼土ブロックをやや多く含む。
- 2 黒褐色土 黄色粘土ブロック、焼土粒を少し含む。
- 3 黄色土 焼土ブロックをやや多く含む。
- 4 赤褐色土 焼土ブロック主体。
- 5 黄褐色土 黄色粘土ブロック、焼土ブロックをやや多く含む。
- 6 黒褐色土 焼土粒、黄色粘土小ブロック、灰を少し含む。
- 7 黒色土 灰を主体とし、焼土粒をやや多く含む。
- 8 赤褐色土 焼土主体。
- 9 黄褐色土 粘性強く、焼土ブロックをやや多く含む。
- 10 黒褐色土 焼土を少し、径5-8cmの円礫をやや多く含む。

図25 1区5号住居遺構図

第4章 検出された遺構と出土遺物

0.90m 袖部幅1.20m 燃焼部幅0.30m 焚口・燃焼部 平面楕円形。袖 右袖の遺存不良。煙道 ほとんど未検出である。燃焼部からやや急角度で立ち上がるか。掘り方 楕円形。遺物出土状況 中央部の床面直上から埋土中位にかけて、土師器が集中して出土した。加工した角閃石安山岩の礫(10)が出土した。所見 出土土器から古墳時代後期に属すると考えられる。

1区6号住居 図版番号 遺構図版6 遺物図版41

位置 AO-19 残存深度 44cm 平面形状 不正隅丸長方形。規模 東辺3.20m 西辺2.90m 南辺3.20m 北辺3.40m 主軸方位 N-78°-E 埋没土 自然埋没である。周壁 約76°の勾配で立ち上がる。床面 ほぼ平坦であるが、中央部にやや凹凸がある。14.044㎡ 周溝 東辺・北辺そして南辺の一部に確認された。貯蔵穴 未検出である。柱穴 床面検出時に6基のビットを検出したが、北東隅に検出できず、柱穴として積極的に確認できなかった。掘り方 中央部と周囲が掘削されていた。竈 位置 東辺中央部やや南寄りにつ設されていた。主軸方位 N-80°-E 形状 不明。規模 全長1.10m 屋

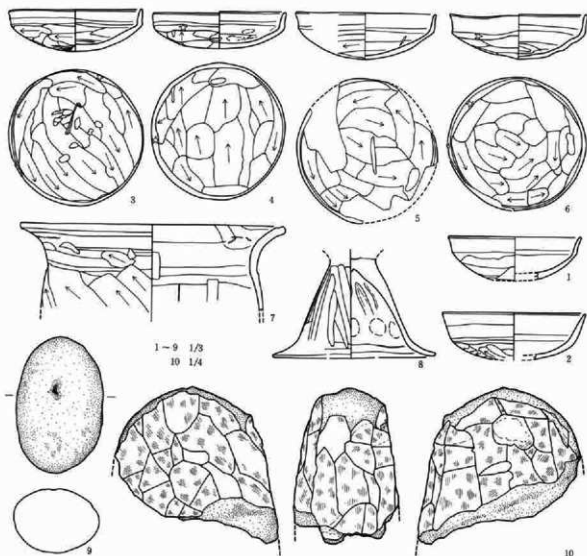
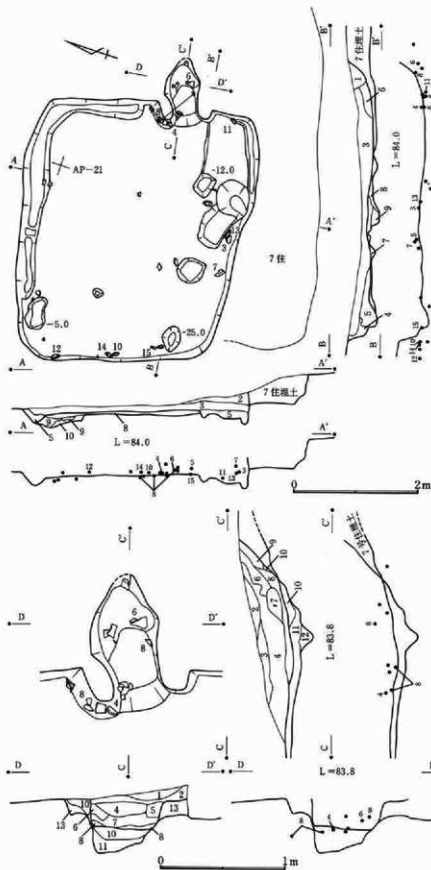


図26 1区5号住居出土遺物図

1. 竪穴住居



- 1区6号住居 掘土
- 1 黒褐色土 灰色の砂粒を多く含む。
 - 2 暗灰褐色土 径1mm大の白色軽石粒と炭化物をわずかに含む。
 - 3 灰褐色土 砂質で、白色軽石粒と焼土粒、黄色シルト粒をわずかに含む。
 - 4 灰白色土 灰色の砂をブロック状に非常に多く含む。
 - 5 灰白色土 灰色の砂をブロック状にやや多く含む。
 - 6 黄白色土 粘性があり、やや灰色を帯びている。
 - 7 暗灰褐色土 砂質で、焼土粒を少し、灰白粘土粒をやや多く含む。
 - 8 灰褐色土 砂質。
 - 9 灰褐色土 8に類似、色調はやや暗い。
 - 10 灰白色土 砂質で、暗褐色土をブロック状に多く含む。
- 1区6号住居 カマド 掘土
- 1 灰褐色土 黒褐色土ブロック、焼土ブロックをやや多く含む。
 - 2 黒褐色土 灰褐色砂質土をやや多く、焼土粒を少し含む。
 - 3 黒褐色土 灰褐色粘土ブロックを少し、焼土をわずかに含む。
 - 4 灰褐色土 灰褐色砂を少し、焼土小ブロックをわずかに含む。
 - 5 灰褐色土 粘性があり、焼土を多く含む。
 - 6 赤褐色土 焼土。(天井部崩落土)
 - 7 黒褐色土 焼土小ブロックをやや多く、灰を少し含む。
 - 8 黒色土 灰主体。
 - 9 暗褐色土 焼土粒を少し、径2~4mm大の白色軽石粒をわずかに含む。
 - 10 黒褐色土 焼土粒、灰を少し、灰色砂をやや多く含む。
 - 11 暗褐色土 砂質で、焼土、灰を多く含む。
 - 12 暗褐色土 砂質で、灰を少し含む。
 - 13 暗褐色土 砂質で、焼土粒をわずかに含む。

図27 1区6号住居遺構図(1)

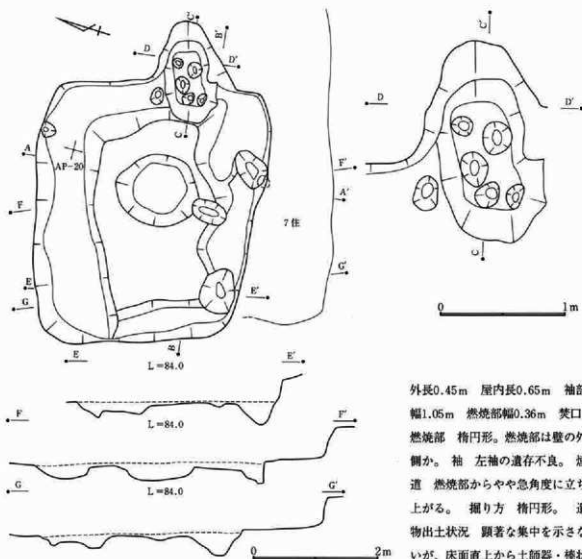


図28 1区6号住居遺構図(2)

外長0.45m 屋内長0.65m 袖部
幅1.05m 燃焼部幅0.36m 焚口・
燃焼部 楕円形。燃焼部は壁の外
側か。袖 左袖の遺存不良。煙
道 燃焼部からやや急角度に立ち
上がる。掘り方 楕円形。遺
物出土状況 顕著な集中を示さな
いが、床面直上から土師器・棒状
礫が出土した。 所見 1区7号
住居・12号住居を切る。出土した

土器から奈良時代後期に属すると考えられる。12号住居を切る地震による断層との関連は確認できなかった。

1区7号住居 図版番号 遺構図版6 遺物図版41

位置 AO-19 残存深度 40cm 平面形状 隅丸方形か。規模 東辺5.20m 南辺5.90m 主軸方位 N-70°-E 埋没土 自然埋没と考えられる。周壁 約62°の傾斜で立ち上がる。床面 遺存している範囲ではほぼ平坦である。約13.31㎡(復元値) 周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 積極的に柱穴と認められるピットは検出できなかった。掘り方 顕著な掘り方は認められなかった。遺物出土状況 古式土師器のS字口縁の台付甕や蓋・壺などが出土した。所見 1区6号住居・12号住居に切られる。出土土器から古墳時代前期に属すると考えられる。

1区8号住居 図版番号 遺構図版6・7 遺物図版42

位置 AM-20 残存深度 60cm 平面形状 隅丸方形。規模 東辺2.80m 北辺3.00m 主軸方位 N-

1. 竪穴住居

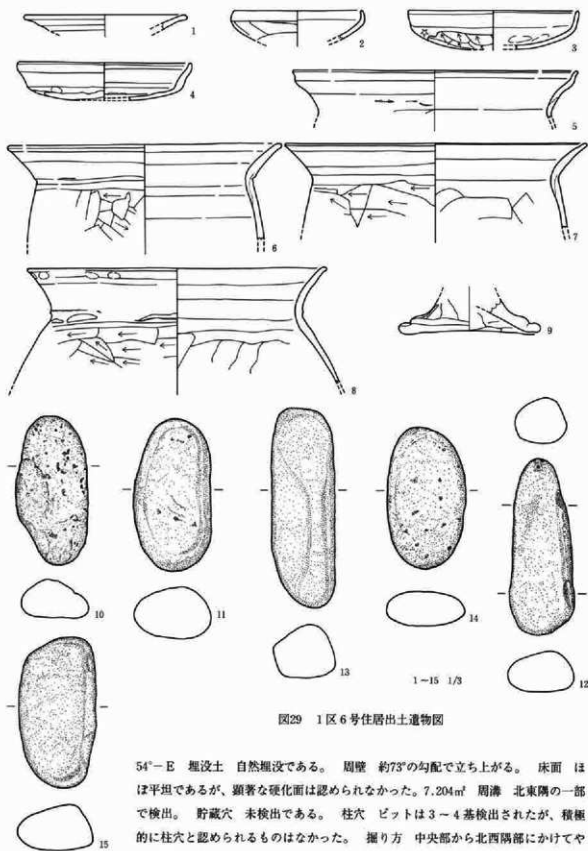


図29 1区6号住居出土物図

54-E 埋没土 自然埋没である。周壁 約73°の勾配で立ち上がる。床面 は平坦であるが、顕著な硬化面は認められなかった。7.204㎡ 周溝 北東隅の一部で検出。貯蔵穴 未検出である。柱穴 ビットは3-4基検出されたが、積極的に柱穴と認められるものはなかった。掘り方 中央部から北西隅部にかけてやや顕著な掘り方を検出した。竈 位置 東辺南端部。主軸方位 N-90°-E 形状 舌状。規模 全長1.10m 屋外長0.50m 屋内長0.60m 袖部幅0.90m

第4章 検出された遺構と出土遺物

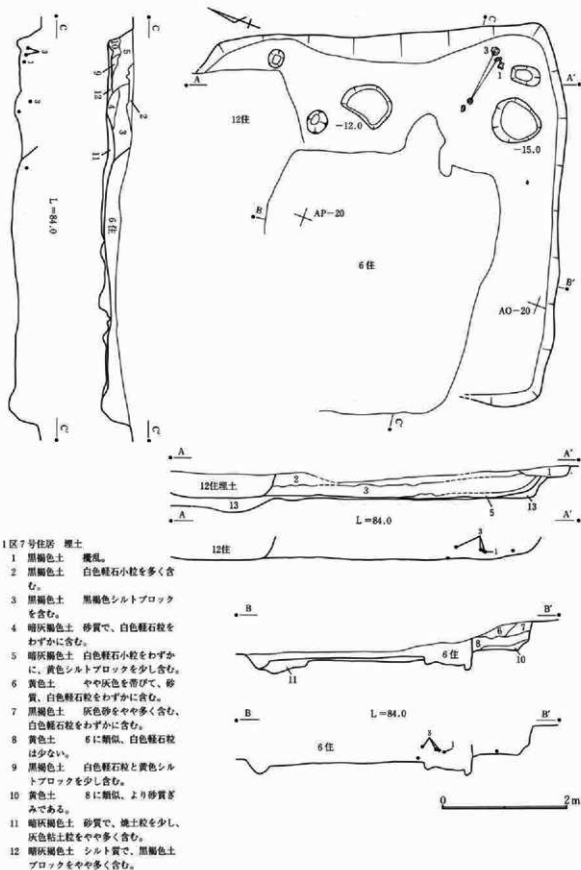
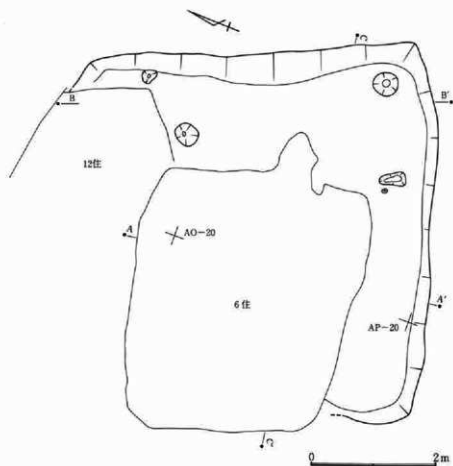
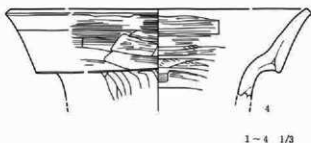
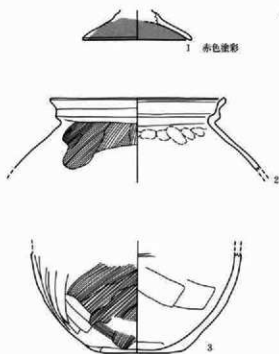


図30 1区7号住居遺構図

1. 竪穴住居



燃焼部幅0.25m 笑口
浅い皿状の落ち込み。
燃焼部 ほぼ壁の内
側。袖 内側にやや
すぼまる。煙道 燃
焼部からやや急角度に
立ち上がる。掘り方
三角形。遺物出土
状況 須恵器高台付
碗・杯、「コ」の字状
口縁の土師器甕、鉄
鍬、刀子片、釘などが
出土した。所見 埋
土中から後世の砥石が
2点出土し、埋土を切
る新しい遺構を見落と
していると考えられる
が、住居の時期は出土
土器から平安時代であ
ろう。



1-4 1/3

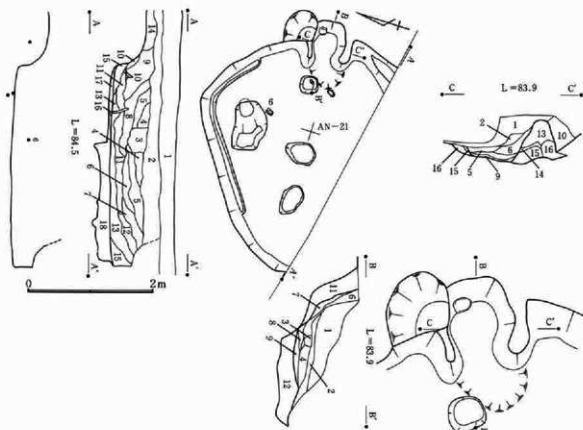
1区9号住居

図版番号 遺構図版7・8 遺物図版42・43

位置 AP-22 残存深度 50cm 平面形状 隅丸方形。
規模 東辺3.50m 西辺3.60m 南辺3.60m 北辺
3.70m 主軸方位 N-102°-E 埋没土 自然埋没で
ある。周壁 約78°の勾配で立ち上がる。床面 ほ
ぼ平坦であるが、顕著な硬化面は認められなかった。
15.51㎡ 周溝 部分的に認められるが、積極的に評価
できるか疑問が残る。貯蔵穴 南東隅部に認められ
る。平面 楕円形。長軸52cm×短軸40cm 深さ

図31 1区7号住居遺構・出土土器図

第4章 検出された遺構と出土遺物



1区8号住居 理土

- 1 暗褐色土 灰土。容土。
- 2 黒褐色土 粒子粗く、FP小粒、灰黄褐色シルトブロック、炭化物、焼土粒をわずかに含む。
- 3 黒褐色土 2に類似、黒色味が強く、より砂質である。
- 4 暗褐色土 2に類似、やや茶色味が強く、FP小粒、灰黄褐色シルトブロックをやや多く含む。
- 5 暗褐色土 4に類似、灰黄褐色シルトブロック、焼土粒を多く含む。
- 6 暗褐色土 4に類似、焼土粒、炭化物を多く含む。
- 7 暗褐色土 4に類似。
- 8 暗褐色土 粒子細かく褐色シルトブロック、FP小粒を多く、炭化物、焼土粒を少し含む。
- 9 黒褐色土 粒子やや粗く、FP小粒を多く、灰黄褐色シルトブロック、焼土粒を少し含む。
- 10 灰黄褐色土 シルト質のブロック。
- 11 黒褐色土 粒子細かく、灰褐色シルトブロックをやや多く、焼土粒を少し含む。
- 12 黒褐色土 11に類似、やや黒色味が強い。
- 13 暗褐色土 粒子細かく、灰黄褐色シルトブロック、焼土粒をわずかに含む。
- 14 黒褐色土 粒子やや粗く、砂質、締まりなし。灰黄褐色シルトブロックを多く含む。
- 15 灰黄褐色土 シルト質で、暗褐色土ブロックを含む。
- 16 暗褐色土 粒子細かく、締まりなし。木根による擾乱。
- 17 灰黄褐色土 シルト質で、黄色粘土ブロックをやや多く、灰を多く含む。
- 18 灰黄褐色土 シルト質で、黄色粘土ブロック、黒褐色土を多く含む。

1区8号住居 カマド 理土

- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1 暗褐色土 黄白色粘土小ブロック、焼土ブロックをやや多く含む。 2 黄白色土 粘土が主体で、焼土粒・焼土ブロックを含む。 3 黒褐色土 焼土粒・焼土ブロックをやや多く含む。 4 黄白色土 粘土が主体で、焼土粒・焼土ブロックをやや多く含む。 5 黒褐色土 焼土粒が多く、黄白色粘土ブロックをやや多く含む。 6 褐色土 焼土粒・焼土ブロック、黄白色粘土ブロックをやや多く含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 7 黒褐色土 5に類似。 8 灰土 砂質で、焼土粒をやや多く含む。 9 黒土 灰主体で、焼土粒を少し含む。 10 暗褐色土 黄色シルト小ブロック、焼土粒を少し含む。 11 褐色土 焼土粒を多く、黄白色シルト粒を少し含む。 12 暗灰褐色土 砂質で、黄白色シルトブロックを多く含む。 13 灰褐色土 砂質で、焼土を少し含む。 14 褐色土 焼土を多く含む。 15 黒褐色土 焼土粒、灰色シルトブロックをやや多く含む。 16 灰褐色土 砂質で、焼土を少し含む。 |
|--|---|

図32 1区8号住居遺構図

1. 竪穴住居

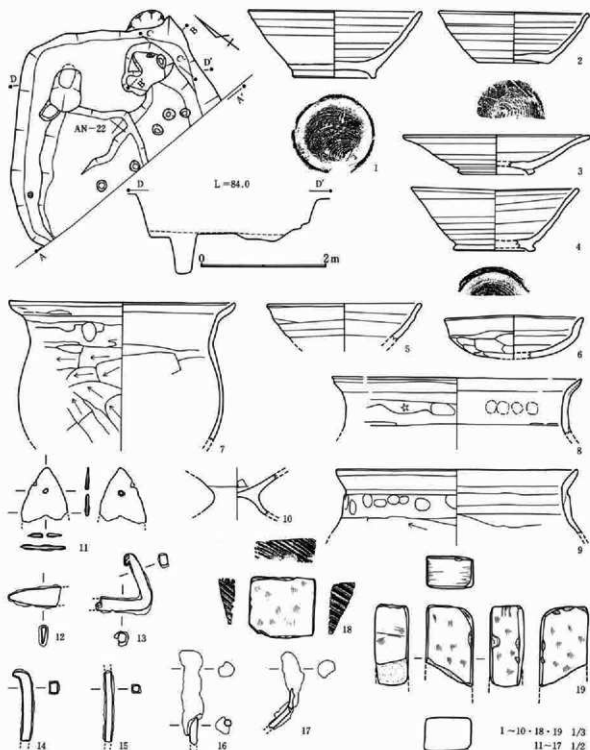
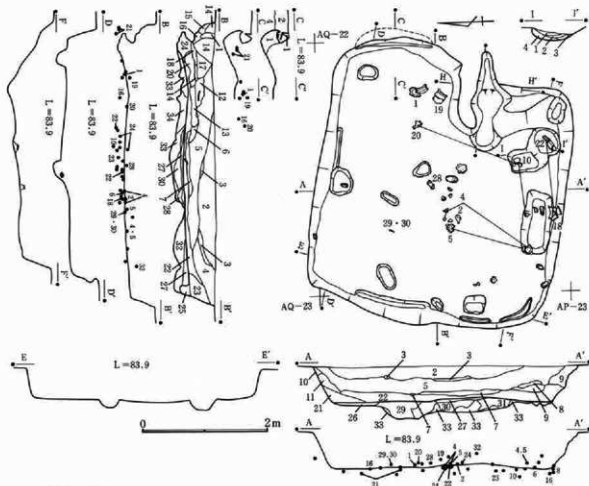


図33 1区8号住居遺構・出土遺物図

30cm。柱穴ピットは多数検出されたが、柱穴としての組み合わせは不詳である。掘り方での確認もできなかった。北32cm×25cm×13cm 西45cm×24cm×24cm 南西33cm×30cm×14cm 掘り方 中央部北寄りおよび四隅にピットを確認した。竈位置 東辺やや南寄りに付設されていた。主軸方位 N-97°-E 形状 瓢形。規模 全長1.55m 屋外長0.60m 屋内長0.95m 袖部幅1.60m 燃焼部幅0.15m 焚口 舌状。

第4章 検出された遺構と出土遺物



1区9号住居 埋土

- | | | | |
|----------|----------------------------------|----------|---------------------------------------|
| 1 黒色土 | 木根腐。 | 16 黄白色土 | シルト質。 |
| 2 暗褐色土 | 径2-4mmの黄白色軽石粒と、黄白色粘土小ブロックを少し含む。 | 19 黄白色土 | 粘性が有り。(14-19は地山の崩落土) |
| 3 黒色土 | 灰化物を多く、焼土粒を少し含む。 | 20 灰褐色土 | シルト質で、黄白色・白色粘土粒を少し含む。 |
| 4 暗灰褐色土 | 砂質で、黄白色粘土小ブロック、白色軽石粒、焼土粒を少し含む。 | 21 灰褐色土 | シルト質。(壁の崩落土) |
| 5 暗灰褐色土 | 砂質、黄白色粘土小ブロック、白色軽石粒、焼土粒をやや多く含む。 | 22 暗灰褐色土 | 砂質で、黄白色粘土小ブロック、白色軽石粒、焼土粒を少し含む。 |
| 6 暗灰褐色土 | シルト質で、焼土ブロック、白色粘土ブロックを多く含む。 | 23 暗灰褐色土 | 砂質で、黄白色粘土小ブロック、白色軽石粒、焼土粒を少し含む。 |
| 7 黄白色土 | 粘性があり、暗褐色土小ブロックを少し含む。 | 24 灰褐色土 | シルト質で、焼土粒をやや多く、黄白色・白色粘土粒を多く含む。 |
| 8 灰色土 | シルト質で、焼土粒をわずかに含む。 | 25 灰褐色土 | シルト質で、白色軽石粒をわずかに含む。 |
| 9 暗灰褐色土 | ほぼ5に同じ。 | 26 灰褐色土 | 砂質で、黒色土小ブロックをやや含む。 |
| 10 黄白色土 | 粘性がある。 | 27 暗褐色土 | 白色粘土小ブロック、焼土粒をわずかに含む。 |
| 11 暗灰褐色土 | 砂質で、黄白色粘土小ブロック、白色軽石粒、焼土粒を含む。 | 28 暗灰色土 | 砂質で、白色粘土小ブロック、焼土粒を少し含む。 |
| 12 灰褐色土 | シルト質で、焼土粒、白色粘土粒をやや多く含む。 | 29 暗灰色土 | 砂質で、白色粘土小ブロックをやや多く、焼土粒、黒色土小ブロックを少し含む。 |
| 13 黄白色土 | 粘性があり、焼土小ブロックを少し、白色粘土小ブロックを多く含む。 | 30 暗灰色土 | 黒色土ブロックをやや多く、白色粘土ブロック小ブロックを多く含む。 |
| 14 灰褐色土 | シルト質で、焼土粒を少し、黄白色・白色粘土を少し含む。 | 31 黒褐色土 | 砂質で、焼土粒をやや多く、灰色砂小ブロックをやや多く含む。 |
| 15 灰褐色土 | シルト質で、黄白色・白色粘土粒を少し含む。 | 32 灰褐色土 | 砂質で、焼土粒をやや多く、灰色砂小ブロックを少し含む。 |
| 16 灰褐色土 | シルト質。 | 33 灰色土 | 砂質で、白色粘土ブロックを少し含む。 |
| 17 灰褐色土 | シルト質で、焼土粒、黄白色・白色粘土粒を少し含む。 | 34 灰色土 | 砂質で、白色粘土ブロックを少し、焼土粒をわずかに含む。 |

図34 1区9号住居遺構図(1)

1区9号住居 カマド北部

- 1 暗褐色土 シルト質で、褐色シルトブロック、白色軽石粒、焼土粒、小礫を少し含む。
- 2 灰黄褐色土 シルト質。
- 3 にぶい黄褐色土 2の中の隙間を埋める光黄土。
- 4 褐色土 シルト質で、灰白色シルト小ブロックを含む。

1区9号住居 貯蔵穴

- 1 暗褐色土 灰白色シルト小ブロックを少し、焼土粒をわずかに含む。
- 2 黒色土 灰白色シルト小ブロック、灰をやや多く含む。灰色砂を多く含む。
- 3 暗褐色土 暗褐色土小ブロックをやや多く含む。

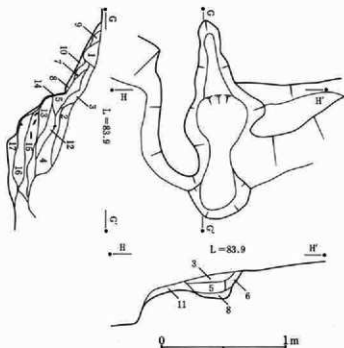


図35 1区9号住居遺構図(2)

1区9号住居 カマド 埋土

- 1 オリーブ灰色土 焼土粒をやや多く含む。
- 2 暗黄褐色土 粘性があり、黄灰色土ブロックを多く、焼土粒をやや多く含む。
- 3 オリーブ灰色土 焼土粒を少し含む。
- 4 暗黄褐色土 2に類似、焼土粒は少ない。
- 5 黄灰色土 粘性があり、焼土小ブロックをやや多く含む。
- 6 黄灰色土 5に類似、やや暗い色調。
- 7 赤褐色土 灰白色粘土の焼土化。
- 8 灰黒色土 灰主体。
- 9 黄白色土 粘性があり、焼土小ブロックをやや多く、黒色土小ブロックを少し含む。
- 10 灰褐色土 砂質で、焼土粒をわずかに含む。
- 11 オリーブ灰色土 焼土粒を少し含む。
- 12 暗灰色土 焼土粒、灰を多く含む。
- 13 黒色土 焼土、灰を非常に多く含む。
- 14 黒色土 灰主体。
- 15 黒色土 焼土、灰を少し含む。
- 16 暗灰褐色土 砂質で、灰白色粘土を多く、焼土をわずかに含む。
- 17 灰褐色土 砂質で、焼土をわずかに含む。

燃焼部 楕円形。壁の内側である。袖 左袖の遺存不良。煙道 燃焼部のやや上部から緩やかに立ち上がる。掘り方 楕円形。遺物出土状況 須恵器杯・高台付碗、「コ」の字状口縁の甕や鉄製品が、中央部の床面直上にやや集中して出土した。所見 竈の東の壁には浅い掘り込みが認められた。後世のものと思われる円筒状(?)の焼き物が出土しており、埋土中に新しい遺構の存在を見落としているものと考えられるが、住居の時期は平安時代であろう。古墳時代後期の1区19号住居を切っている。住居の掘り方調査時に、住居の南西隅に地震の液状化現象に伴う陥没の縁辺がかかっていることを確認したが、その影響は床面に及ばず、掘り方が陥没の縁辺を切っていると判断した。

1区10号住居 図版番号 遺構図版8 遺物図版43

位置 AP-27 残存深度 22cm 平面形状 隅丸方形。規模 東辺3.00m 西辺3.10m 南辺2.65m 北辺2.55m 主軸方位 N-154°-E 埋没土 自然埋没である。周壁 約68°の勾配で立ち上がる。床面 南西隅部を中心として、約半分の範囲に地山の礫が露出している。9.69㎡ 周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 未検出である。掘り方 顕著には認められなかった。遺物出土状況 埋土中より土師器壺が出土した。所見 出土した土師器壺は古墳時代中期と考えられるが、本住居は古墳時代後期の14・15号住居を切っており、本住居の所属時期は不明である。

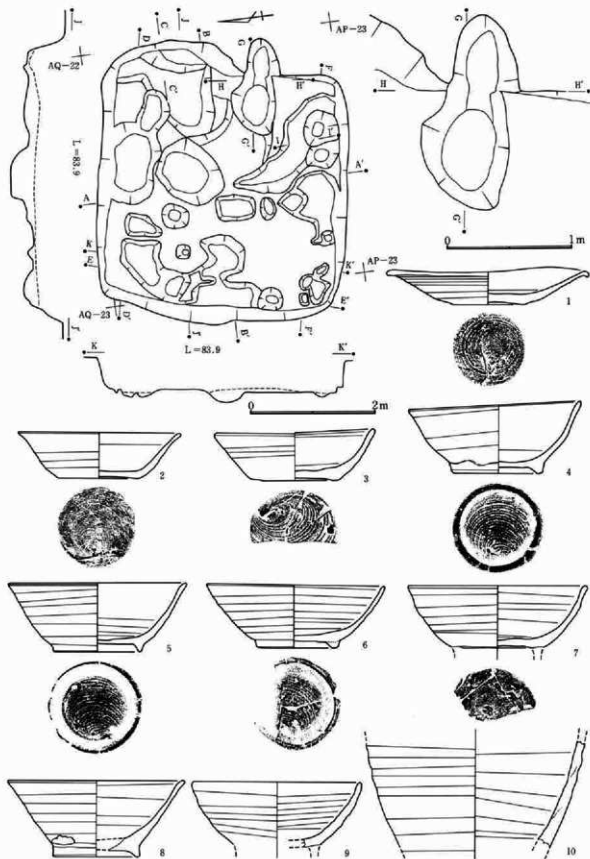


図36 1区9号住居遺構・出土土器図

1-10 1/3

1. 竖穴住居

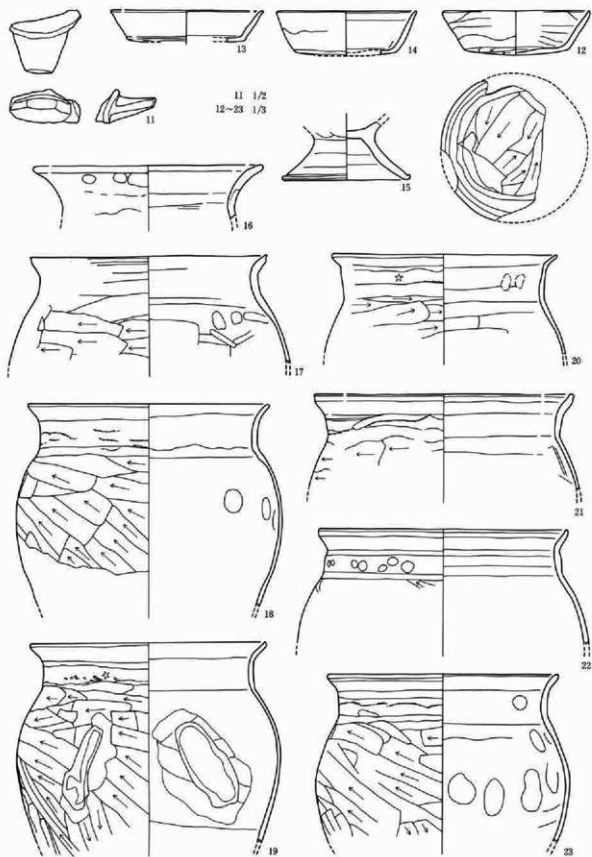


图37 1区9号住居出土土器图

第4章 検出された遺構と出土遺物

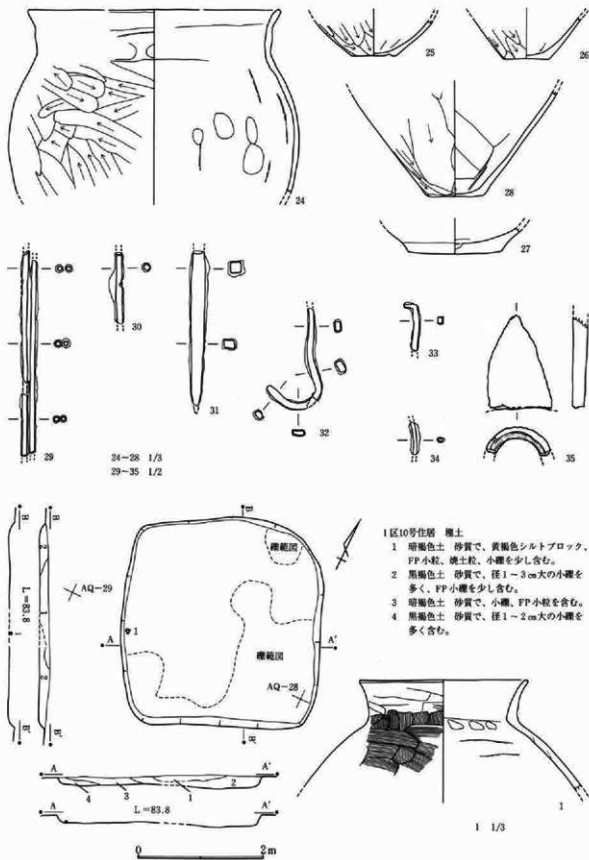


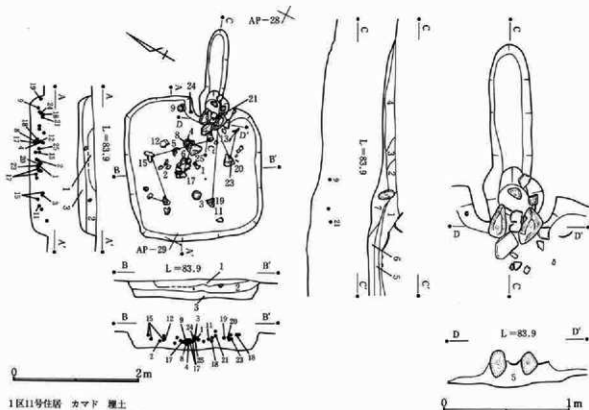
図38 1区9号住居出土遺物・10号住居遺構・出土土器図

1区11号住居 図版番号 遺構図版8 遺物図版43・44

位置 AO-28 残存深度 32cm 平面形状 隅丸方形。規模 東辺2.00m 西辺1.80m 南辺2.00m 北辺2.20m 主軸方位 N-65°-E 埋設土 自然埋設である。周壁 約66°の勾配で立ち上がる。床面は平坦であるが、顕著な床面は検出されなかった。4.76㎡ 周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 未検出である。掘り方 ほとんど認められなかった。竈 位置 東辺中央やや南寄りに付設されていた。主軸方位 N-71°-E 形状 馬蹄形である。規模 全長1.50m 屋外長0.95m 屋内長0.55m 袖部幅0.80m 燃焼部幅0.20m 焚口・燃焼部 楕円形。袖 両袖の端部を礫で補強。煙道 燃焼部から長く緩やかに立ち上がる。掘り方 楕円形。遺物出土状況 須恵器や土師器が竈周辺および中央部の埋土中位から集中して出土した。石製紡錘車(24)・金環(25)も出土した。所見 出土土器から古墳時代後期に属すると考えられる。

1区12号住居 図版番号 遺構図版8・9 遺物図版45

位置 AO-19 残存深度 38cm 平面形状 不明。規模 南辺約6mか。主軸方位 N-145°-E 埋



1区11号住居 カマド 埋土

- 1 暗褐色土 焼土粒を少し含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒を多く含む。
- 3 黒褐色土 焼土粒をやや多く、径3cm大の円礫を少し含む。
- 4 黒色土 径1-3cm大の円礫をやや多く含む。
- 5 暗褐色土 径1-2cm大の円礫を多く、炭化物、焼土粒、FP小礫を少し含む。
- 6 暗褐色土 褐色砂を多く径2-5cm大の円礫をやや多く含む。
- 7 暗褐色土 褐色砂を多く、焼土粒を少し含む。

1区11号住居 埋土

- 1 黒色土 粒子やや粗く、径1-2cm大の円礫を多く、焼土粒を少し含む。
- 2 暗褐色土 粒子やや粗く、径1-2cm大の円礫を多く、炭化物、焼土粒、FP小粒を少し含む。
- 3 暗褐色土 褐色砂を多く、径2-5cm大の円礫をやや多く含む。

図39 1区11号住居遺構図

第4章 検出された遺構と出土遺物

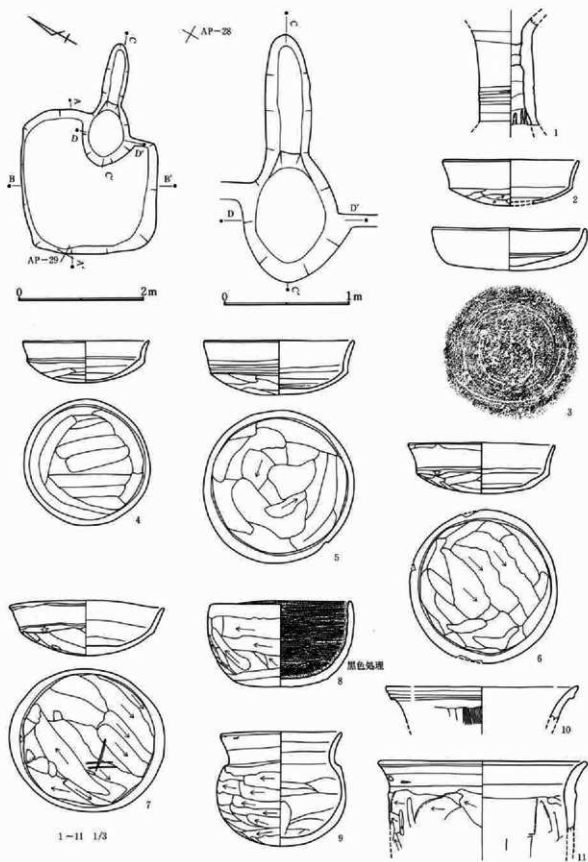


图40 1区11号住居遺構・出土土器図

1. 竖穴住居

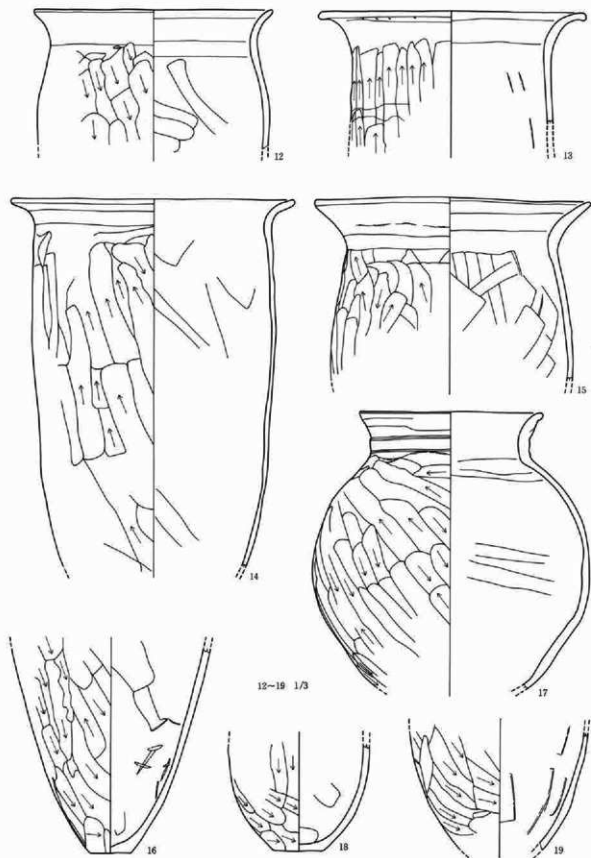


图41 1区11号住居出土土器图

第4章 検出された遺構と出土遺物

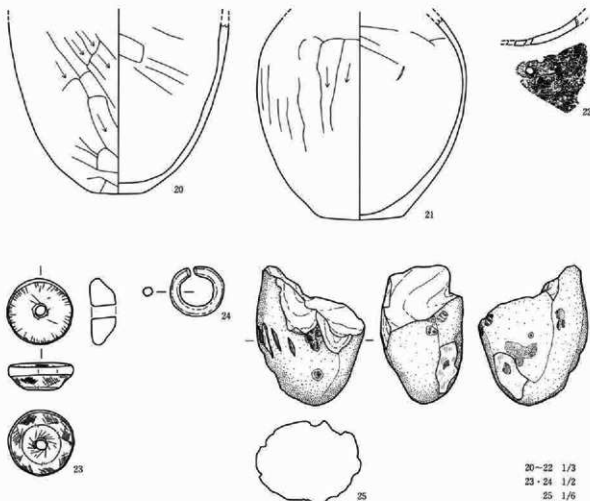


図42 1区11号住居出土遺物図

没土 自然埋没と考えられる。周壁 約72°の勾配で立ち上がる。床面 中央部から北西部にかけてやや凹凸がある。周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 積極的に柱穴と認められるピットは未検出である。掘り方 中央部から北西部にかけて検出された。遺物出土状況 須恵器・土師器・棒状礫・刀子片などが出土した。所見 北東部の埋土から焼土ブロックがやや多量に出土しており、竈は東辺に付設されていたものと想定される。常滑焼の壺口縁部や軟質陶器片が出土しており、埋土中に本住居を切る未検出の遺構が存在したと思われるが、住居の時期は古墳時代後期末から奈良時代初頭と考えられる。7号住居を切り、6号住居に切られる。また、住居の西辺に沿って断層が、またその断層に伴って住居の埋土中に噴砂が検出され、本住居の埋没後に起きた地震の結果と想定される。

1区13号住居 図版番号 遺構図版9・10 遺物図版46

位置 AM-21 残存深度 35cm 平面形状 隅丸長方形か。規模 北辺4.86m 主軸方位 N-96°-E 埋没土 自然埋没である。周壁 約70°の勾配で立ち上がる。床面 ほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は検出されなかった。周溝 北辺で検出された。貯蔵穴 不明である。柱穴 ピットが4基検出されたが、積極的に柱穴と認めることはできなかった。掘り方 中央部に顕著な掘り方を検出した。竈 位置

1. 竖穴住居

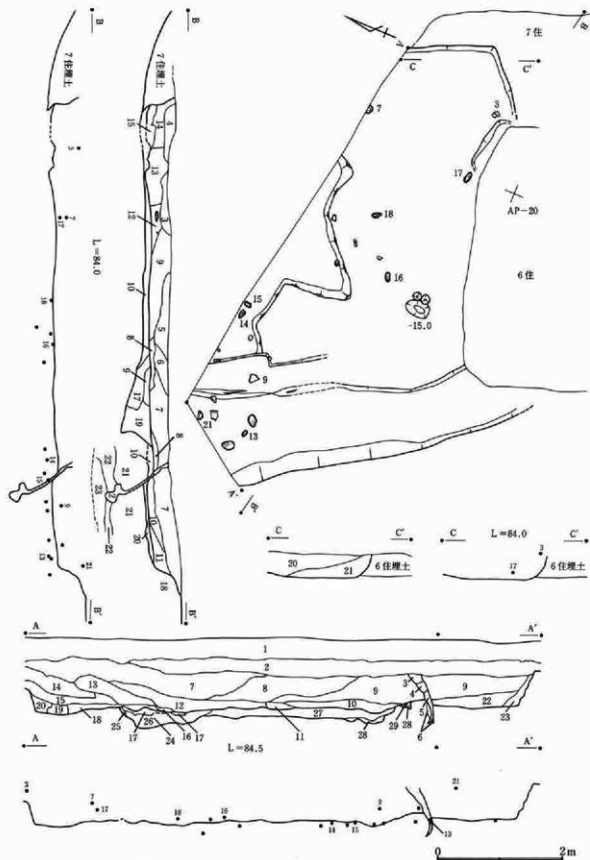
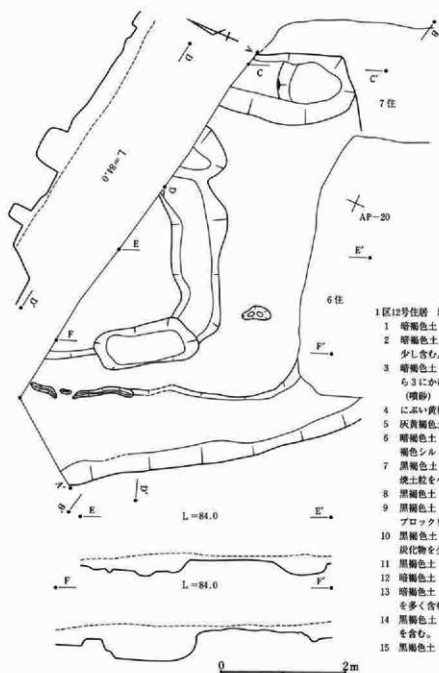


图43 1区12号住居遺構図(1)



1区12号住居 雑土 A-A'・C-C'

- 1 暗褐色土 耕作土。
- 2 暗褐色土 FP小粒をやや多く、焼土粒を少し含む。
- 3 暗褐色土 シルト質で、締まり弱い、5から3にかけて、漸移的に粒子が細くなる。(噴砂)
- 4 にぶい黄褐色土 3に類似、粒子がやや粗い。
- 5 灰黄褐色土 砂質で締まりなし。
- 6 暗褐色土 シルト質で、黒褐色、にぶい黄褐色シルトブロック、焼土粒を含む。
- 7 黒褐色土 シルト質で、FP小粒を少し、焼土粒をやや多く含む。
- 8 黒褐色土 7に類似、やや黒色味が強い。
- 9 黒褐色土 7に類似、にぶい黄褐色シルトブロックを含む。
- 10 黒褐色土 シルト質で、FP粒、焼土粒、炭化物を少し含む。
- 11 黒褐色土 10に類似、やや黒色味が強い。
- 12 暗褐色土 7に類似、やや黒色味が強い。
- 13 暗褐色土 12に類似、黄褐色粘土ブロックを多く含む。
- 14 黒褐色土 シルト質で、FP小粒、焼土粒を含む。
- 15 黒褐色土 14に類似、やや黒色味が強い。

- 16 黒褐色土 シルト質で、炭化物を多く、焼土粒を少し含む。
- 17 暗褐色土 シルト質で、灰黄褐色シルトブロックを多く含む。
- 18 にぶい黄褐色土 シルト質で、暗褐色シルトブロックを少し含む。
- 19 褐色土 シルト質で、黒褐色シルトブロック、FP小粒を少し含む。
- 20 にぶい黄褐色土 シルト質で、FP小粒、焼土粒を少し含む。
- 21 暗褐色土 灰黄褐色シルトブロック、FP小粒を少し含む。
- 22 暗褐色土 シルト質で、黒褐色、にぶい黄褐色シルトブロック、焼土粒を含む。
- 23 黒褐色土 シルト質で、にぶい黄褐色シルトブロック、炭化物、焼土粒を含む。
- 24 灰黄褐色土 粘性があり、締まりがある。
- 25 暗褐色土 シルト質で、FP小粒、焼土粒を少し含む。鉄分の還元あり。
- 26 黒褐色土 シルト質で、FP小粒、焼土粒を少し含む。
- 27 黒褐色土 シルト質で、灰黄褐色シルトブロック、焼土粒を少し含む。
- 28 黒褐色土 27に類似、灰黄褐色シルトブロックを多く含む。
- 29 黒褐色土 28に類似、鉄分の沈着が多い。

図44 1区12号住居遺構図(2)

1区12号住居 層土 B-B'

- 1 灰黄褐色土 シルト質で、黒褐色シルトブロック、明黄褐色ローム粒を含む。
- 2 灰黄褐色土 砂質さみ、22が流状化したものと推定される。(1, 2は共に填砂)
- 3 黒褐色土 砂質で締まりなし。
- 4 黒褐色土 3に類似、焼土粒を少し含む。
- 5 黒褐色土 シルト質で、FP小礫、焼土粒を少し含む。
- 6 黒褐色土 5に類似、褐色土ブロックを少し含む。
- 7 黒褐色土 6に類似、褐色土ブロックを多く含む。
- 8 黒褐色土 7に類似、灰黄褐色シルトブロック、焼土粒、炭化物を含む。
- 9 黒褐色土 7に類似。
- 10 黒褐色土 9に類似。
- 11 黒褐色土 7に類似、灰黄褐色シルトブロックを少し含む。
- 12 黒褐色土 5に類似、灰黄褐色シルトブロックを少し含む。
- 13 黒褐色土 FP小礫、焼土粒を多く、灰黄褐色シルトブロックを少し含む。(1区6号住居土)
- 14 黒褐色土 粒子やや粗く、FP粒を多く含む。
- 15 黒褐色土 粒子細かく、暗褐色シルトブロックを含む。
- 16 灰色土 シルト質で黄白色軽石粒を少し含む。
- 17 黒褐色土 シルト質で黄白色軽石粒、灰色シルトブロックを少し含む。
- 18 暗褐色土 シルト質で黒褐色土ブロックを少し含む。
- 19 灰黒色土 シルト質。
- 20 暗褐色土 粒子細かく、灰黄褐色シルトブロックを少し含む。
- 21 暗褐色土 シルト質。締まりややあり。鉄分が斑文状に沈着。
- 22 褐色色砂層とにぶい黄褐色シルト層の互層。
- 23 にぶい黄褐色土・シルト層。

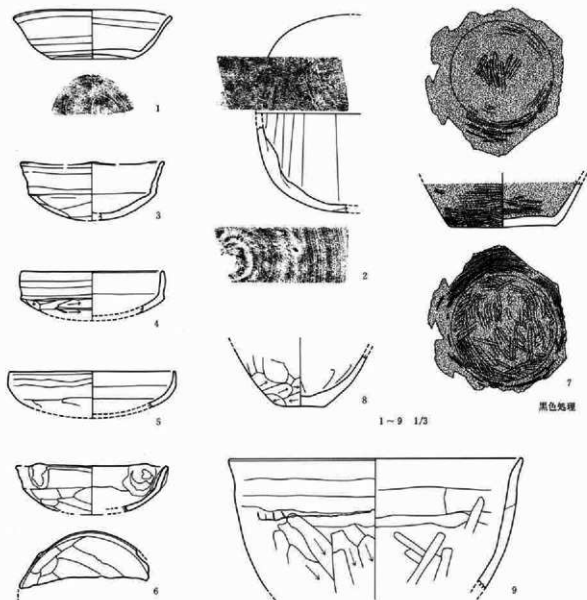


図45 1区12号住居出土土器圖

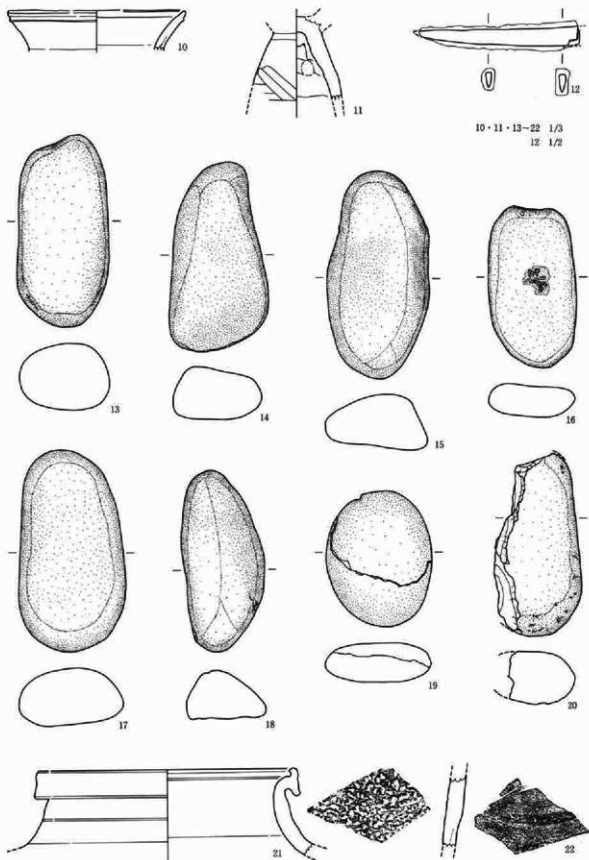


图46 1区12号住居出土遺物図

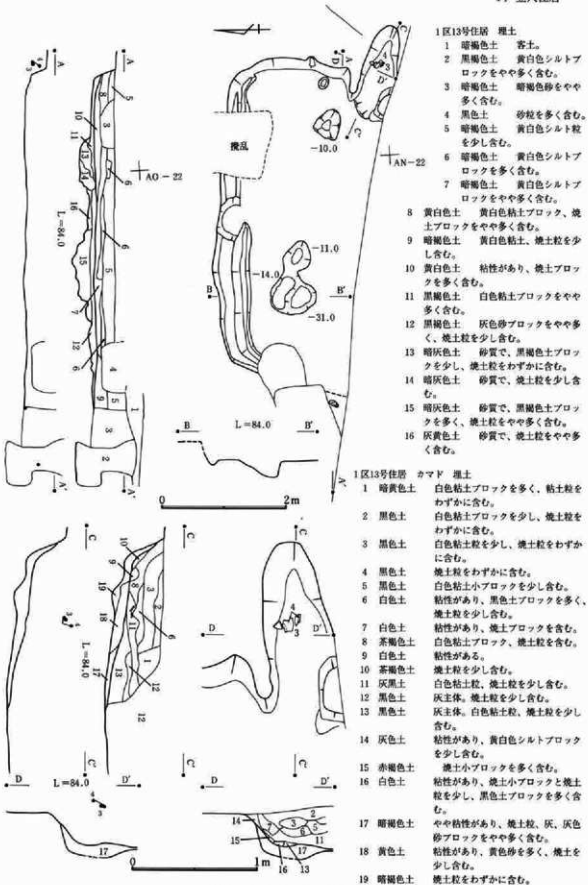


図47 1区13号住居遺構図(1)

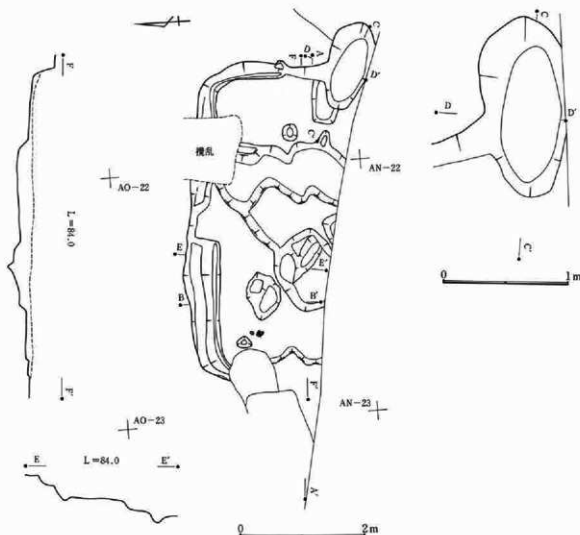


図48 1区13号住居遺構図(2)

東辺中央部か。主軸方位 N-118°-E 形状 舌状。規模 全長1.50m 屋外長0.80m 屋内長0.70m 燃焼部幅0.30m 焚口・燃焼部 楕円形の浅い皿状の落ち込み。燃焼部はほぼ壁の内側である。袖 左袖はやや長く、右袖は調査範囲外である。煙道 燃焼部から緩やかに立ち上がり、端部で急角度に立ち上がる。掘り方 楕円形。遺物出土状況 須恵器杯・「コ」の字状口縁の土師器壺・鉄鏝などが出土した。所見 古墳時代後期に属すると考えられる土師器杯が掘り方から出土しているが、住居の時期は平安時代であろう。

1区14号住居 図版番号 遺構図版10 遺物図版46・47

位置 AP-28 残存深度 32cm 平面形状 隅丸方形か。規模 東辺5.40m 南辺5.10m 主軸方位 N-77°-E 埋没土 自然埋没である。周壁 約55°の勾配で立ち上がる。床面 はほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は認められなかった。周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 床面検出時には未検出である。掘り方の調査時に各隅にピットを4基検出した。その一部は柱穴になる可能性がある。掘り方南東隅部と北西隅部で浅い掘り込みを検出した。遺物出土状況 須恵器杯や土師器、鉄製品、石製模造

1. 竪穴住居

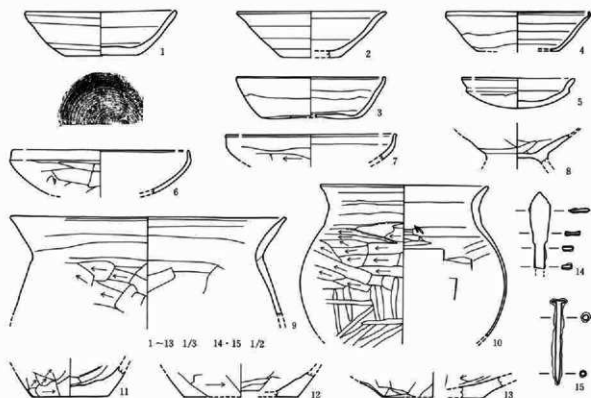


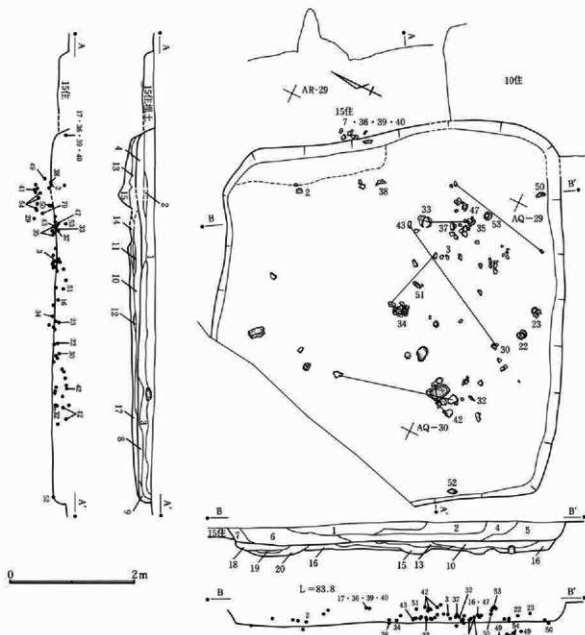
図49 1区13号住居出土遺物図

品 (46)、白玉 (47)、棒状礫、加工痕のある礫などが、住居中央部から南半部にかけての床面から埋土下部にかけてを中心に出土した。所見 10号住居に切られる。また、15号住居を切って構築されていると理解したが、本住居に付設する竈が未検出なこと、15号住居と床面のレベルがほぼ同一であること、出土土器に型式差がほとんど認められないことなどから、15号住居と同一の可能性もある。出土土器から古墳時代後期に属すると考えられる。

1区15号住居 図版番号 遺構図版10 遺物図版48・49

位置 AQ-28 残存深度 21cm 平面形状 不明。規模 東辺約6.3m 主軸方位 N-61°-E 埋没土自然埋没か。周壁 約63°の勾配で立ち上がる。床面 ほぼ平坦である。周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 未検出である。掘り方 北辺に沿ってピット列状の掘り方が存在した。竈位置 東辺ほぼ中央に付設されていた。主軸方位 N-62°-E 形状 舌状。規模 全長1.45m 屋外長0.70m 屋内長0.75m 袖部幅1.20m 燃焼部幅0.35m 焚口・燃焼部 楕円形。燃焼部はほぼ壁の内側である。袖 やや長く、両端部に土師器長甕を倒立させて据えている。煙道 燃焼部から緩やかに立ち上がる。掘り方 不正楕円形で燃焼部と焚口の前部が掘りくぼめられている。遺物出土状況 土師器を中心として竈の南部の埋土下位にやや集中して出土した。所見 14号住居・16号住居に切られる。埋土中からは古式土師器や軟質陶器が出土したが、住居の時期は古墳時代後期と考えられる。また、前述の通り、14号住居と同一の可能性がある。

第4章 検出された遺構と出土遺物



1区14号住居 埋土

- | | | | |
|---------|--|----------|-----------------------------|
| 1 黒褐色土 | FP小粒、焼土粒、にぶい黄褐色粘土粒をやや多く含む。 | 12 暗灰褐色土 | 灰黄色シルトブロックを多く含む。 |
| 2 黒褐色土 | 1に類似、やや黒色味が強く、含有物が少ない。 | 13 黒褐色土 | 黄褐色粘土ブロックを少し、焼土ブロックを多く含む。 |
| 3 黒褐色土 | 1に類似、黄褐色シルトブロックを含む。 | 14 黒色土 | 焼土ブロックを多く含む、灰と黄褐色粘土を互層に含む。 |
| 4 暗褐色土 | にぶい黄褐色粘土ブロックを中央部に多く含む。FP小粒、焼土粒をやや多く含む。 | 15 浅赤色土 | 黄褐色粘土ブロックをやや多く、焼土ブロックを多く含む。 |
| 5 黒褐色土 | FP小粒、焼土粒を少し含む。直径8-9cmの円礫を含む。 | 16 暗褐色土 | 焼土粒をわずかに、黄褐色粘土粒を少し含む。 |
| 6 黒褐色土 | FP小粒、焼土ブロック、焼土粒をやや多く含む。 | 17 黄褐色土 | 粘性があり、暗褐色土ブロックを多く含む。 |
| 7 暗褐色土 | FP小粒、黄褐色シルトブロックを少し含む。 | 18 暗褐色土 | 暗褐色砂を多く含む。 |
| 8 暗褐色土 | 3に類似、黄褐色シルトブロックを多く含む。 | 19 暗褐色土 | 直径5-20cm大の円礫を多く含む。 |
| 9 暗褐色土 | 黄褐色シルトブロックをやや多く含む。 | 20 菊灰色土 | シルト質で、黒色土ブロックを含む。 |
| 10 暗褐色土 | 焼土粒を少し、灰色砂をやや多く含む。 | | |
| 11 褐色土 | 焼土粒と灰色砂を互層に含む。 | | |

図50 1区14号住居遺構図

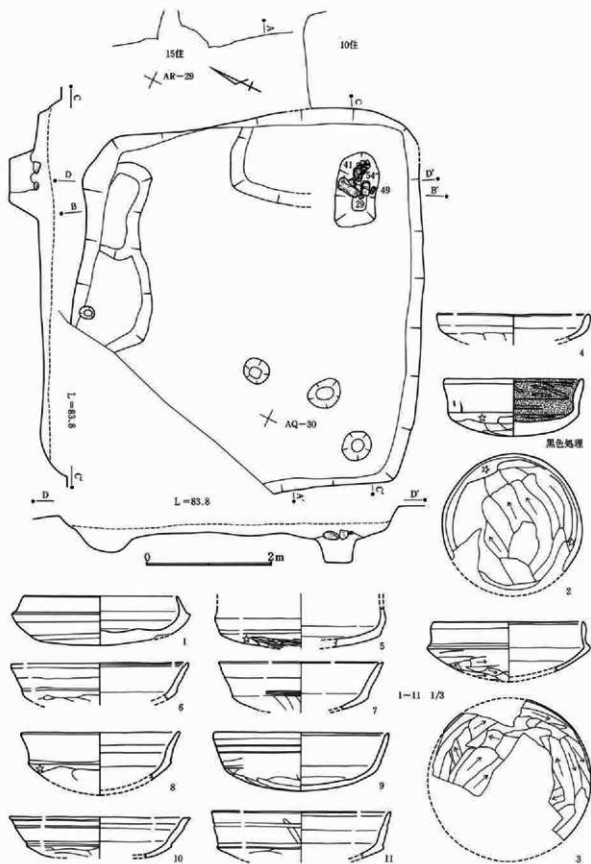


图51 1区14号住居遺構・出土土器図

第4章 検出された遺構と出土遺物

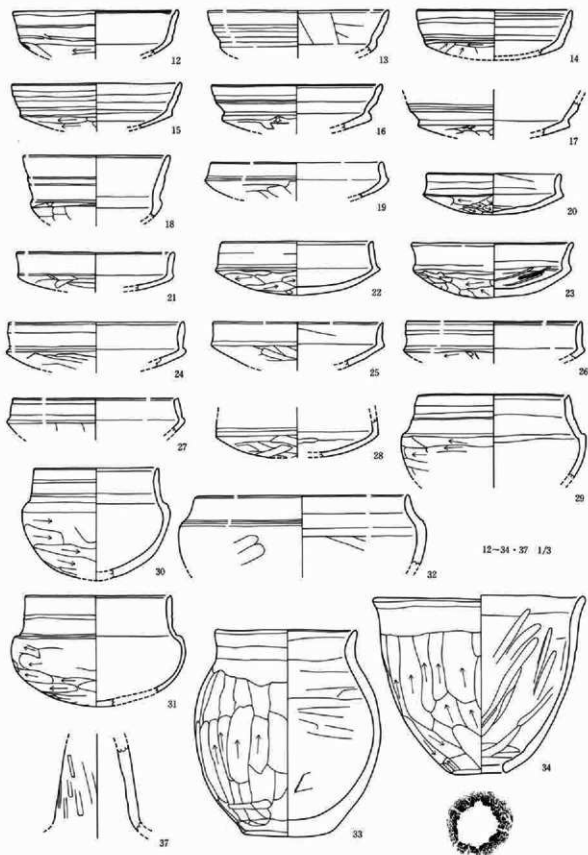


图52 1区14号住居出土土器图(1)

1. 整穴住居

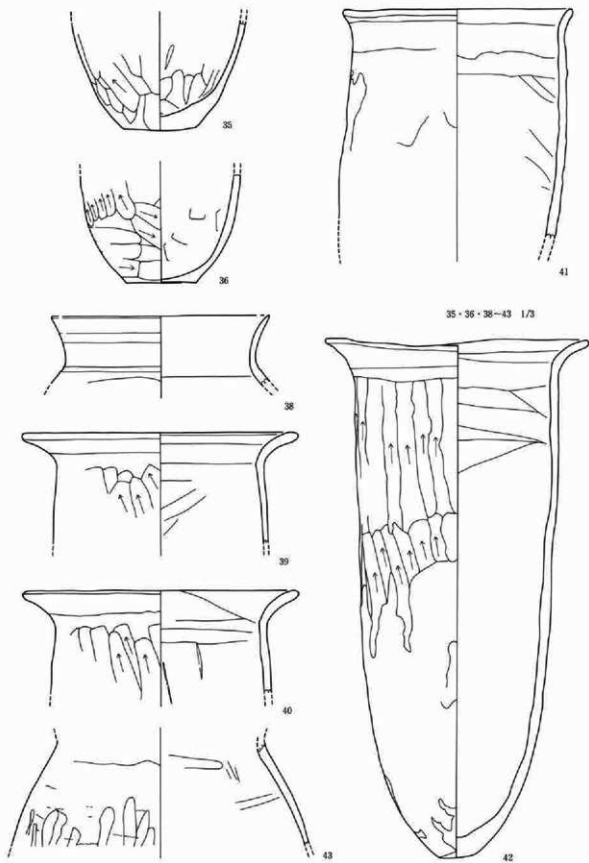


图53 1区14号住居出土土器图(2)

第4章 検出された遺構と出土遺物

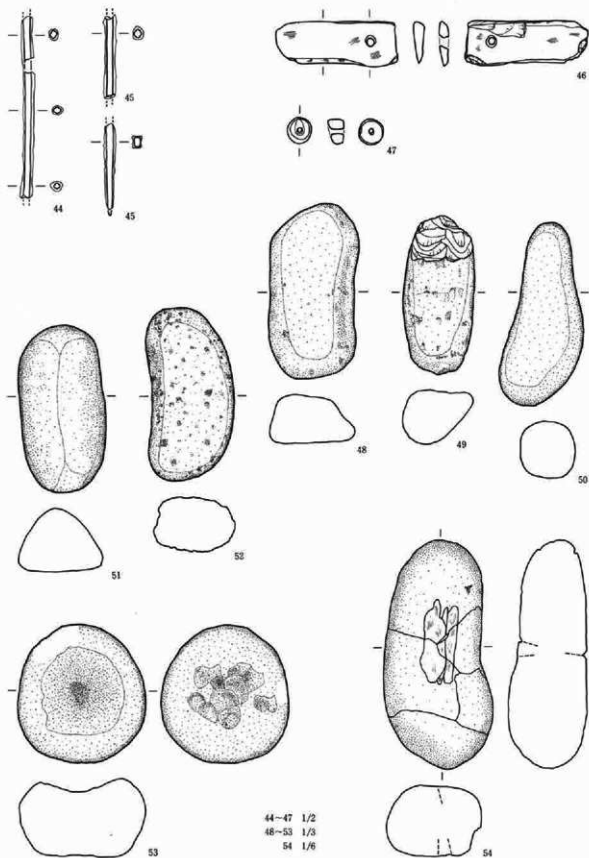


图54 1区14号住居出土遺物图

1. 竪穴住居

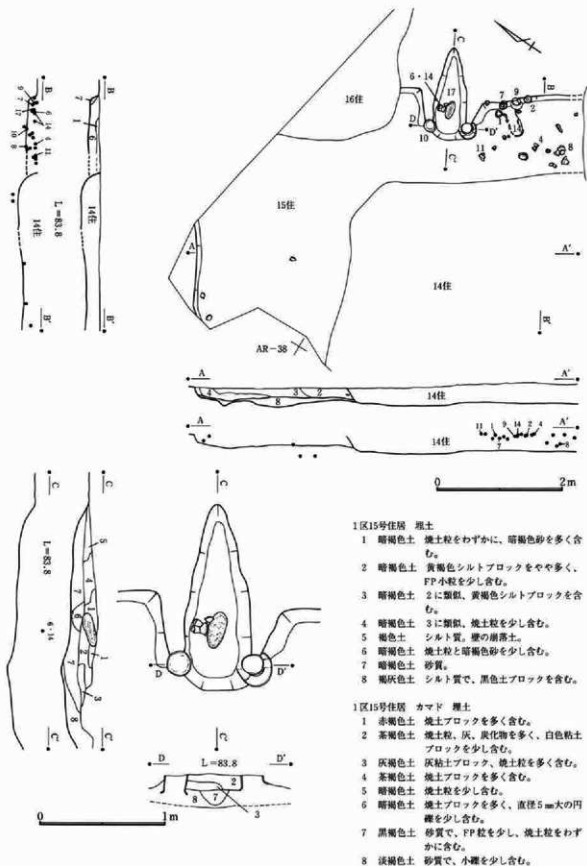


図55 1区15号住居遺構図

第4章 検出された遺構と出土遺物

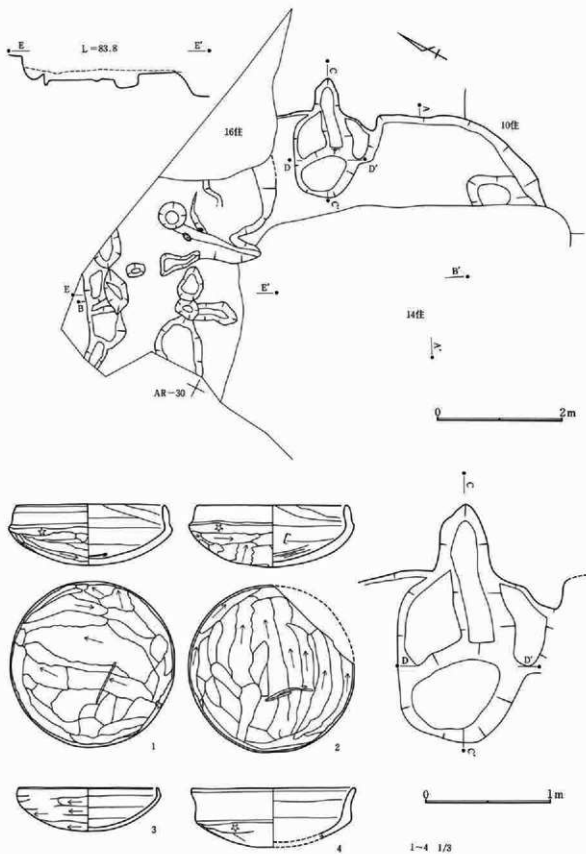


図56 1区15号住居遺構・出土器図

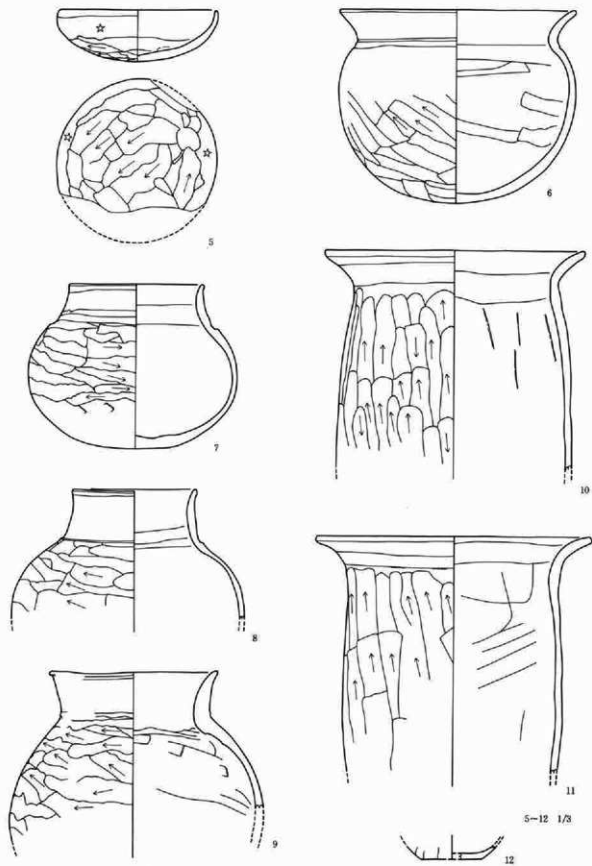


图57 1区15号住居出土土器图

第4章 検出された遺構と出土遺物

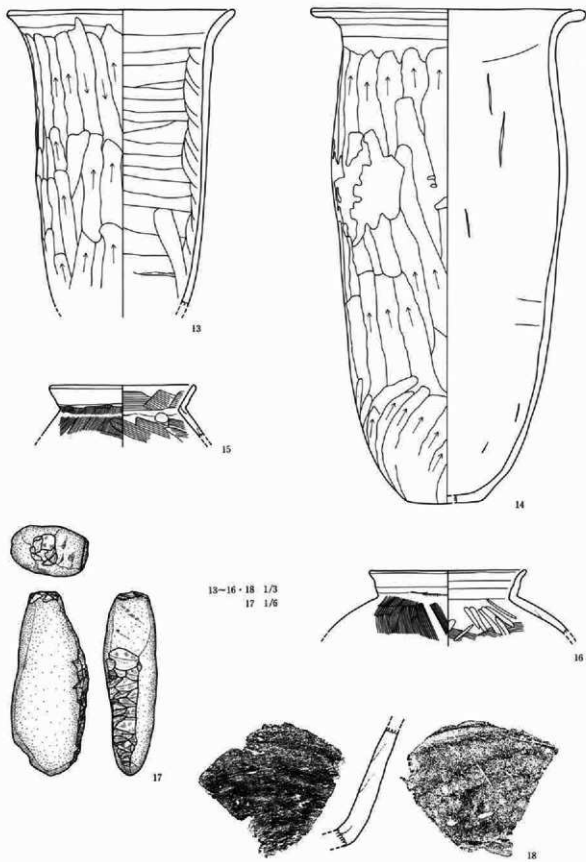
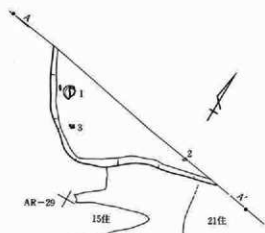


図58 1区15号住居出土遺物図

1. 竪穴住居



1区16号住居 埋土

- 1 褐色土 灰土。砂質。
- 2 褐色土 砂質で、径2~4cm大の円礫を少し含む。
- 3 暗褐色土 砂質で、軽石小粒、焼土粒、小円礫、橙色土粒を少し含む。(現代の土境埋土)
- 4 暗褐色土 砂質で、軽石小粒、焼土粒、小円礫を少し含む。
- 5 暗褐色土 やや灰色を帯び、軽石小粒、焼土粒、小円礫を少し含む。
- 6 暗褐色土 5に類似、色調がやや暗い。
- 7 暗褐色土 6に類似、焼土粒多く、灰褐色砂やや多く含む。
- 8 暗灰褐色土 砂質で、軽石粒、焼土粒をわずかに含む。
- 9 暗褐色土 5に類似、小円礫を多く含む。
- 10 暗褐色土 8に類似、小円礫を多く含む。
- 11 褐色土 砂質で、小円礫を多く含む。
- 12 暗褐色土 黄白色粘土小ブロックをやや多く含む。
- 13 黒褐色土 砂質で、シルト小ブロック、小円礫を含む。
- 14 黒褐色土 黒色土ブロック、小円礫、砂粒を含み、締まりがある。



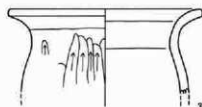
L=84.5



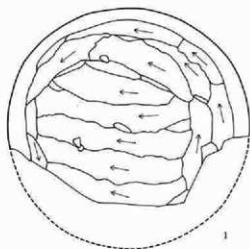
2



1-3 1/3



3



1

1区16号住居

図版番号 遺構図版11 遺物図版49

位置 AR-28 残存深度 50cm 平面形状 不明。
 規模 不明。 主軸方位 N-119°-Eか。 埋没土
 自然埋没である。 周壁 約70°の勾配で立ち上がる。
 床面 はほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は認められな
 かった。 周溝 未検出である。 貯蔵穴 未検出で
 ある。 柱穴 未検出である。 掘り方 顕著な掘り
 方は認められなかった。 遺物出土状況 埋土下部よ
 り土師器が少量出土した。 所見 15号住居を切る。
 出土土器から奈良時代に属するものと考えられる。

図59 1区16号住居遺構・出土土器図

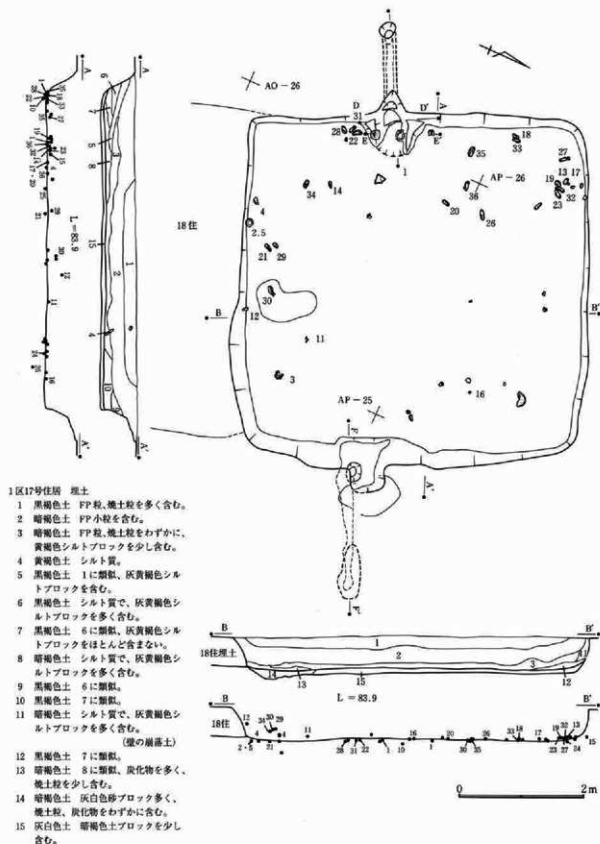
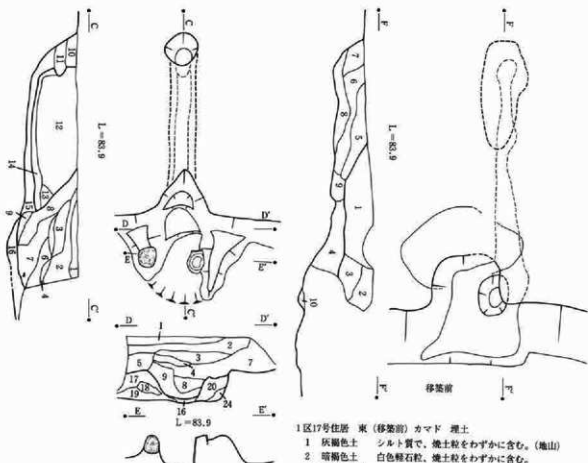


図60 1区17号住居遺構図



1区17号住居 東(移築前)カマド 埋土

- 1 灰褐色土 シルト質で、焼土粒をわずかに含む。(地山)
- 2 暗褐色土 白色軽石粒、焼土粒をわずかに含む。
- 3 暗灰褐色土 シルト質で、焼土粒をわずかに含む。
- 4 暗灰褐色土 シルト質で、焼土粒をやや多く含む。
- 5 暗灰褐色土 シルト質で、焼土粒、白色軽石粒をわずかに含む。
- 6 黒褐色土 焼土粒を多く含む。
- 7 浅黄色土 シルト質で、焼土粒を多く含む。
- 8 灰褐色土 シルト質で、焼土粒を多く含む。
- 9 暗灰褐色土 4に類似、色調がやや暗い。
- 10 黒色土 灰、焼土粒主体。

1区17号住居 西カマド 埋土

- 1 灰褐色土 やや砂質で、FP小粒をわずかに含む。
- 2 茶褐色土 1に類似、FP小粒は多い。
- 3 暗褐色土 やや砂質で、FP小粒、炭化物を少し含む。
- 4 灰黄褐色土 地山の崩落土。
- 5 灰褐色土 FP小粒をわずかに含む。
- 6 暗褐色土 FP小粒、焼土粒を少し含む。
- 7 茶褐色土 6に類似、焼土粒が少ない。炭化物をわずかに含む。
- 8 褐色土塊土 ブロック、炭化物、白色粘土ブロックを多く含む。
- 9 灰褐色土 FP小粒をわずかに含む。
- 10 暗褐色土 焼土ブロック、FP小粒、シルト小ブロックを含む。
- 11 赤褐色土 焼土ブロックを多く、シルト小ブロックをわずかに含む。
- 12 浅黄色土 シルト質。(地山)
- 13 灰白色土 地山のシルト層が火熱を受けている。
- 14 灰白色土 地山のシルト層が強く火熱を受けている。(煙道の天井部)
- 15 灰白色土 焼土ブロック、灰を多く含む。
- 16 黒褐色土 焼土ブロックを多く、灰を少し含む。
- 17 灰白色土 粘性があり、灰白色砂をやや多く、焼土粒を少し含む。
- 18 灰白色土 17に類似、焼土粒を多く、黒褐色土ブロックをやや多く含む。
- 19 暗褐色土 砂質で、焼土粒を多く含む。
- 20 灰白色土 焼土粒を多く、黒褐色土ブロックをやや多く含む。
- 21 灰白色土 焼土粒を少し含む。

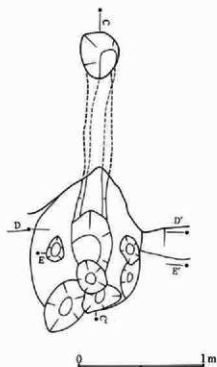


図61 1区17号住居遺構図

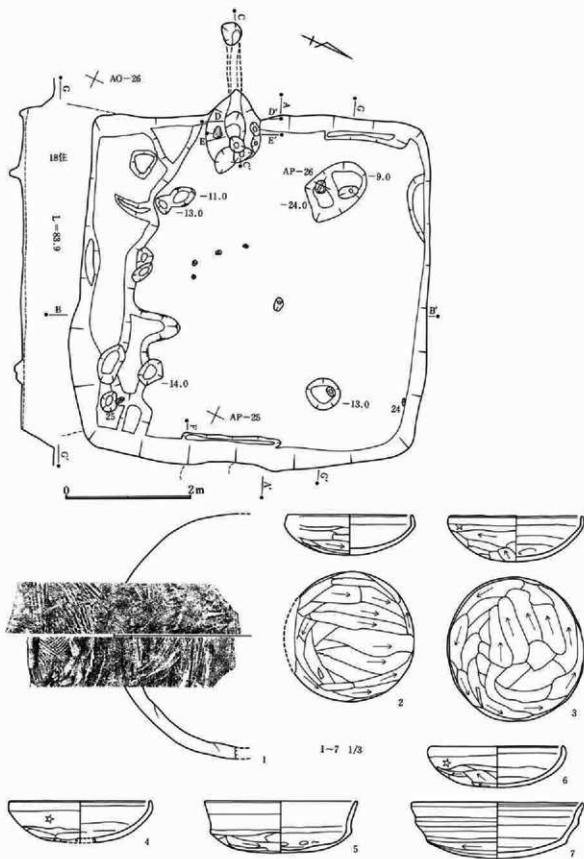


図62 1区17号住居遺構・出土土器図

1. 竖穴住居

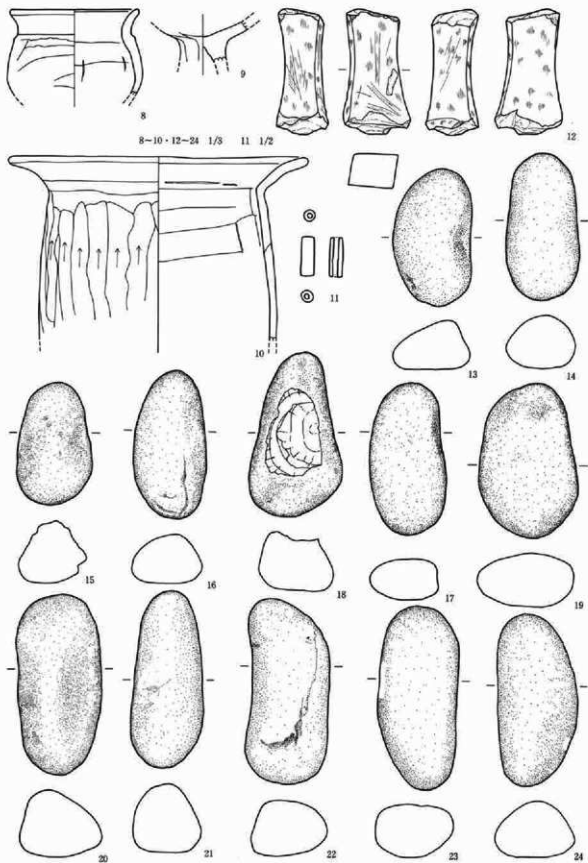


图63 1区17号住居出土遗物图(1)

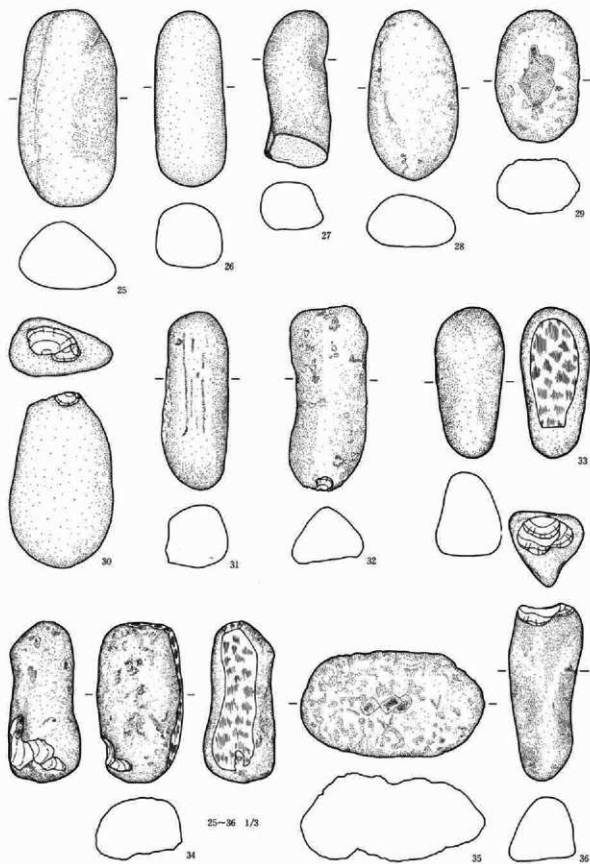
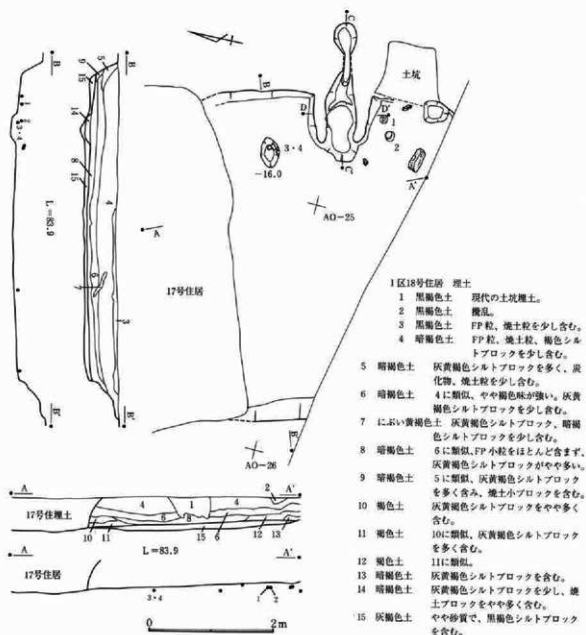


图64 1区17号住居出土遺物图(2)



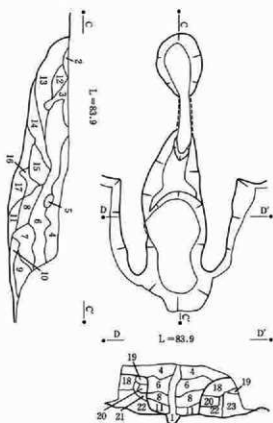
1区18号住居 カマド 埋土

- 1 黒褐色土 擾乱。
- 2 暗褐色土 FP小粒、焼土粒をわずかに含む。
- 3 黄白色土 砂質で焼土粒をわずかに含む。
- 4 暗褐色土 FP小粒、焼土粒をわずかに含む。粘土ブロックを少し含む。
- 5 灰白色土 粘土ブロック。
- 6 暗褐色土 4に類似、焼土粒、炭化物を多く含む。
- 7 褐灰色土 やや砂質で、下半部に焼土粒を含む。
- 8 褐灰色土 焼土粒、焼土ブロックを少し含む。
- 9 褐灰色土 灰黄褐色シルトブロックを含む。
- 10 茶褐色土 締まりなく、焼土粒、炭化物を多く含む。
- 11 黒褐色土 焼土粒、炭化物を多く含む。

- 12 暗褐色土 炭化物、焼土粒をやや多く含む。
- 13 暗褐色土 焼土ブロックを少し含む。
- 14 灰褐色土 灰白色粘土小ブロック、焼土粒を含む。
- 15 暗褐色土 粘性が強く、焼土粒を少し含む。
- 16 暗褐色土 焼土ブロック主体。
- 17 暗褐色土 やや砂質で、焼土粒をわずかに含む。
- 18 灰褐色土 粘性があり、焼土粒を少し含む。
- 19 暗褐色土 やや粘性があり、焼土粒を少し含む。
- 20 暗褐色土 焼土ブロック主体。
- 21 暗褐色土 18に類似、焼土粒を多く含む。
- 22 灰褐色土 やや粘性がある。
- 23 灰褐色土 粘性が強い。

図65 1区18号住居遺構図(1)

第4章 検出された遺構と出土遺物



1区17号住居

図版番号 遺構図版11 遺物図版49・50

位置 AO-24 残存深度 54cm 平面形状 隅丸方形。規模 東辺5.10m 西辺5.20m 南辺5.20m 北辺5.00m 主軸方位 N-65°-E 掘込土 自然埋没。周壁 約75°の勾配で立ち上がる。床面 はほぼ平坦。30.43㎡ 周溝 未検出。貯蔵穴 未検出。柱穴 床面調査時には未検出であったが、掘り方検出時に柱穴と考えられるピットを確認した。改築しているものと思われる。それは竈の東辺から西辺への移築と時を同じくするか。掘り方 南辺に沿ってやや顕著な掘り方が認められる。竈 東辺から西辺に移築されている。西カマド位置 西辺やや南寄りに付設。主軸方位 S-63°-W 形状

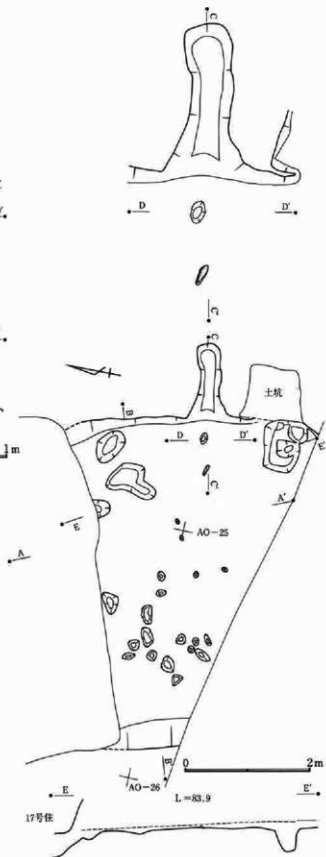


図66 1区18号住居遺構図(2)

1. 竪穴住居

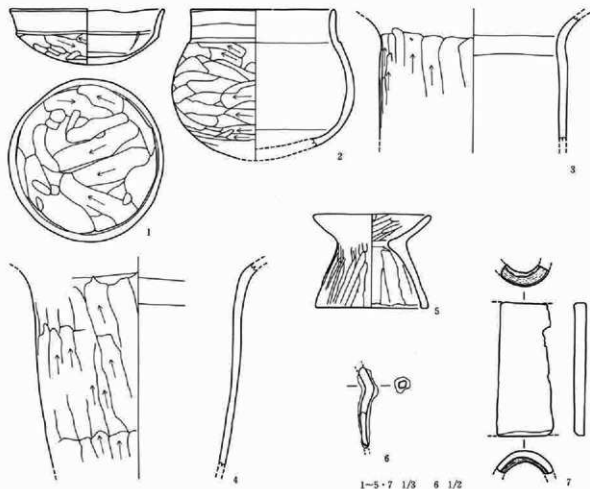


図67 1区18号住居出土遺物図

舌状。規模 全長2.10m 屋外長1.55m 屋内長0.55m 袖部幅1.00m 燃焼部幅0.25m 焚口・燃焼部は浅い皿状の落ち込み。袖 左袖には礫が、右袖には倒立させた土師器長甕が据えられていた。煙道燃焼部からトンネル状に長く緩やかに立ち上がり、端部で急角度に立ち上がる。掘り方 不正楕円形。東カマド（移築前）位置 東辺やや南寄り。主軸方位 N-65°-E 袖・焚口・燃焼部 撤去されている。規模 残存全長2.55m 屋外長2.05m 煙道 燃焼部からトンネル状に長く緩やかに立ち上がり、端部で急角度に立ち上がる。遺物出土状況 須恵器・土師器・砥石・菅玉・棒状礫などが床面直上を中心として出土した。所見 18号住居を切る。出土土器から古墳時代後期に属すると考えられる。

1区18号住居 図版番号 遺構図版11・12 遺物図版50

位置 AN-24 残存深度 46cm 平面形状 隅丸長方形か。規模 東・西辺約4mか。南・北辺約5mか。主軸方位 N-80°-E 埋没土 自然埋没である。周壁 約58°の勾配で立ち上がる。床面 ほぼ平坦である。周溝 未検出。貯蔵穴 不明。柱穴 ビットは検出したが、積極的に柱穴と考えるだけの根拠はない。掘り方 大小の不正形のビットが存在した。竈 位置 東辺のほぼ中央か。主軸方位 N-80°-E 形状 舌状。規模 全長2.22m 屋外長1.20m 屋内長1.02m 袖部幅1.11m 燃焼部 幅0.45m 焚口 舌状。燃焼部 楕円形。壁の内側。袖 やや長い。煙道 燃焼部から緩く立ち上が

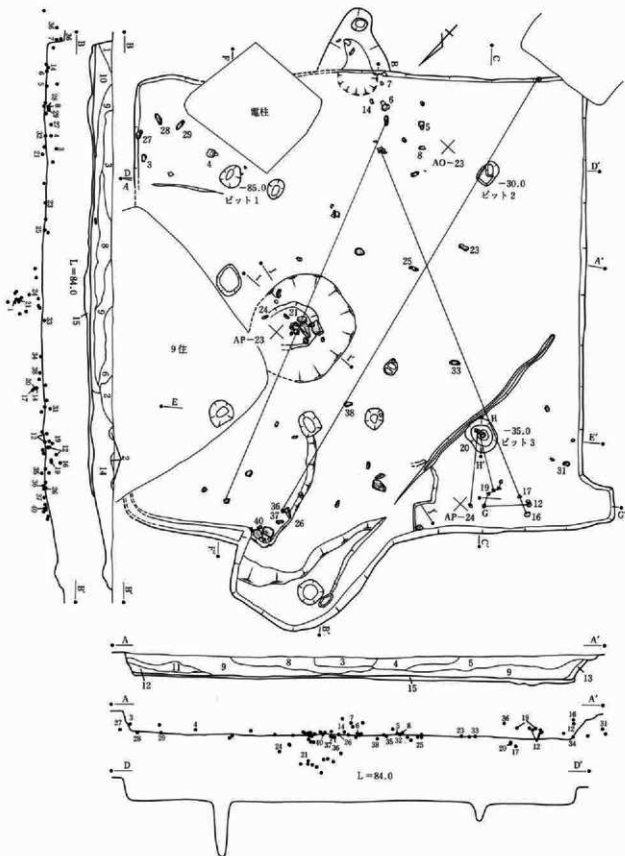
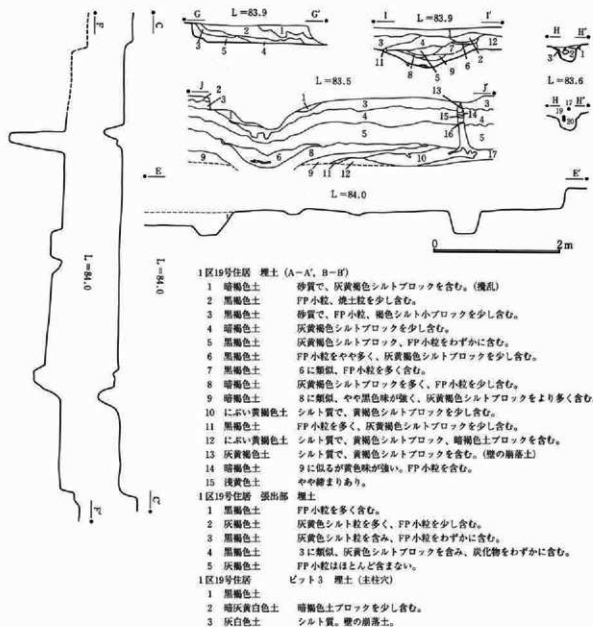


图68 1区19号住居遺構図(1)

1. 竪穴住居



1区19号住居 陥没 埋土

- | | | |
|---|------|------------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | FP小粒を多く、焼土粒を少し含む。 |
| 2 | 暗褐色土 | にぶい黄褐色シルトブロック、FP小粒を少し含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | FP小粒を少し含む。 |
| 4 | 黒褐色土 | FP小粒、焼土粒を少し含む。 |
| 5 | 黒褐色土 | にぶい黄褐色シルトブロック、FP小粒、焼土粒を少し含む。 |
| 6 | 暗褐色土 | 締まりなく、にぶい黄褐色シルトブロックを含む。 |

- | | | |
|----|---------|----------------------------------|
| 7 | 黒褐色土 | にぶい黄褐色シルトブロック、焼土粒を少し含む。 |
| 8 | 黒色土 | FP小粒を少し含む。 |
| 9 | 黒褐色土 | にぶい黄褐色シルトブロックを少し含む。 |
| 10 | 暗褐色土 | にぶい黄褐色シルトブロックを上部に、黒色土ブロックを下部に含む。 |
| 11 | にぶい黄褐色土 | 黄褐色シルトブロックを含む。床の盛り上がりか? |
| 12 | 暗褐色土 | にぶい黄褐色シルトブロック、焼土粒を少し含む。 |

1区19号住居 亀裂・陥没 下部

- | | | |
|---|---------|---------------------------------|
| 1 | 灰黄褐色土 | シルト質で、黄褐色シルトブロックを多く含む。(上面硬化、床面) |
| 2 | にぶい黄褐色土 | シルト質で、灰黄褐色シルトブロックを含む。 |
| 3 | にぶい黄褐色土 | シルト質で、黄褐色シルトブロックを含む。 |

- | | | |
|---|-------|----------------------------------|
| 4 | 暗灰色土 | シルト質で、黄褐色シルトブロックを含む。部分的に砂質。 |
| 5 | 灰黄褐色土 | 4に類似、黄色味がより強い。 |
| 6 | 暗褐色砂層 | 砂層で、灰黄褐色シルトブロックを含む。全体的に擁押を受けている。 |

図69 1区19号住居遺構図(2)

第4章 検出された遺構と出土遺物

- | | | | |
|----------|-----------------------------------|------------|--------------------------------------|
| 7 黒褐色土 | シルト質で、暗褐色シルトと織状を呈し、褶曲状を示す。 | 12 黒褐色砂礫層 | ほぼ9に類似。 |
| 8 黒褐色砂層 | 上部はほぼ均質な砂層であるが、陥没中央部に、向かって小礫がまじる。 | 13 暗褐色土 | シルト質で、にぶい黄褐色シルトブロックを含む。(19号住居土の落ち込み) |
| 9 黒褐色砂礫層 | 直径1mm前後の砂層中に径0.5-1cmの小礫が混じる。 | 14 暗褐色土 | 13に類似、やや黄色味が強く、粒子も細かい。 |
| 10 黒褐色砂層 | ほぼ8に類似。 | 15 褐色土 | シルト質で、16より細粒。 |
| 11 黒褐色砂層 | ほぼ8の下部に類似、細粒砂のフミナ状堆積。 | 16 にぶい黄褐色土 | 砂質で、15より粗く、17より細粒。 |
| | | 17 灰黄褐色砂層 | 砂層で、16より粗い。 |
| | | 18 黒褐色砂礫層 | ほぼ8に類似。 |

× AO-22

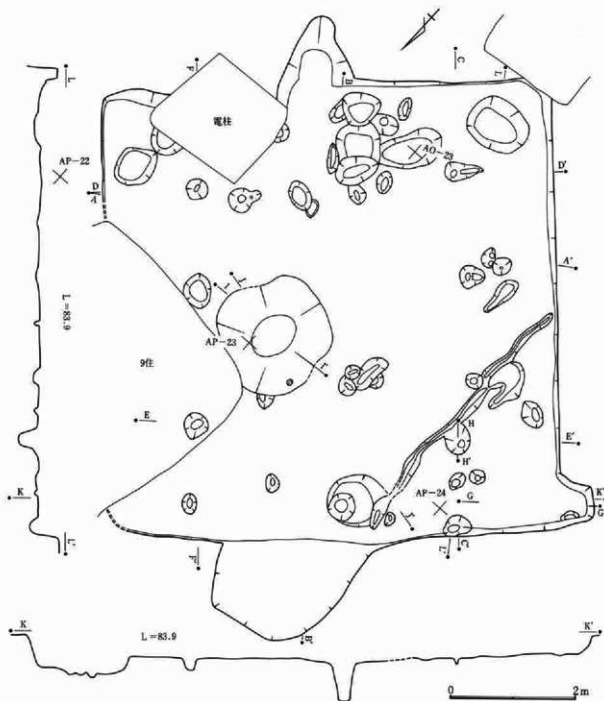


図70 1区19号住居遺構図(3)

1. 竖穴住居

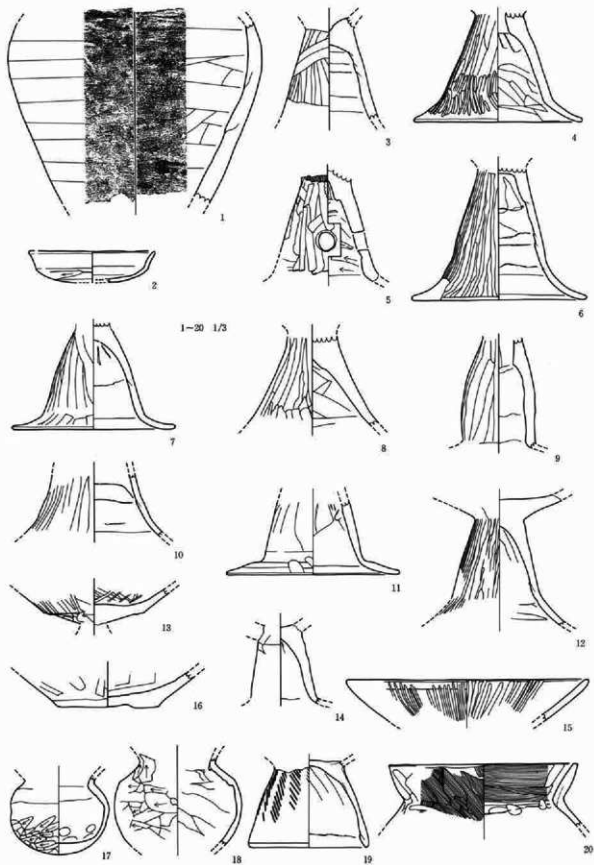


图71 1区19号住居出土土器图

第4章 検出された遺構と出土遺物

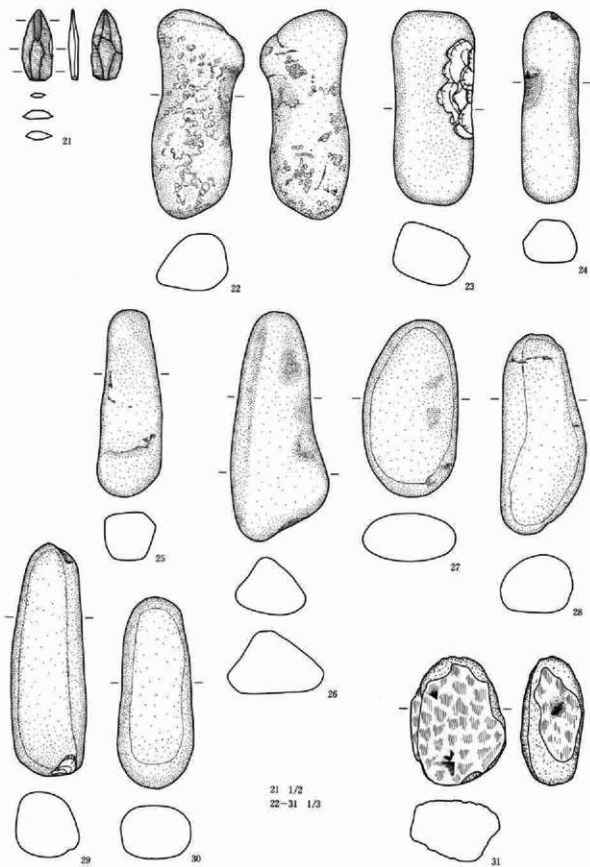


図72 1区19号住居出土遺物図(1)



図73 1区19号住居出土遺物図(2)

り、端部で急角度に立ち上る。掘り方 顕著には認められなかった。遺物出土状況 土師器が竈南部の埋土下位よりやや集中して出土。所見 埋土中より古式土師器の器台(5)や陶器(7)なども出土しているが、住居の時期は古墳時代後期と考えられる。

1区19号住居

図版番号 遺構図版12~14 遺物図版50・51

位置 AN-22 残存深度 35cm 平面形状 ほぼ方形。北西隅部に方形の張り出しが存在した。規模 東辺6.90m 西辺7.00m 南辺7.00m 北辺7.60m 主軸方位 S-57°-E 埋没土 自然埋没と考えられる。周壁 約77°の勾配で立ち上がる。床面 ほぼ平坦で、住居の中央

部には硬化面が認められた。約49㎡ 周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 P.1. 径37cm×33cm 深さ85cm P.2. 径39cm×27cm 深さ30cm P.3. 径53cm×45cm 深さ35cm 掘り方 顕著な

第4章 検出された遺構と出土遺物

掘り方は認められなかった。竈位置 南辺ほぼ中央。攪乱により遺存状況不良。主軸方位 S-57°-E 形状 不明。規模 不明。笑口・燃焼部 浅い皿状の落ち込み。袖 遺存せず。煙道 三角形形状の掘り方。遺物出土状況 須恵器・土師器・石製模造品剣(21)・棒状鏢・加工痕のある礫などが床面直上・埋土下部を中心に出土した。所見 北部の一部を9号住居で切られる。ほぼ中央部には床面の陥没、北西部には亀裂と隆起が認められ、陥没と亀裂の下部には液状化現象が認められた。地震の結果と考えられる。なお、陥没内の土層の堆積状況は、住居内に埋土が堆積した後に陥没が生じたことを示している。北辺中央部の張り出し状部位も地震の影響の結果の誤認による掘り過ぎの可能性もある。古式土師器や軟質陶器が埋土中から出土しているが、住居の時期は古墳時代中期と考えられる。

1区20号住居 図版番号 遺構図版15 遺物図版52

位置 AL-16 残存深度 63cm 平面形状 方形か。規模 西辺約2.7mか。北辺約2.7mか。主軸方位 S-45°-E 埋没土 自然埋没と考えられる。周壁 約65°の勾配で立ち上がる。床面 ほぼ平坦。約7.3㎡(複元値) 周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 未検出である。掘り方 顕著には認められなかった。竈位置 東・北辺隅部か。主軸方位 N-90°-E 形状 舌状。規模 全長1.40m 屋外長0.90m 屋内長0.50m 袖部幅約0.70m 燃焼部幅0.40m 笑口・燃焼部 楕円形。袖 両端部に礫が据えられている。煙道 燃焼部から急角度で立ち上がる。掘り方 三角形形状。遺物出土状況 須恵器・土師器が床面直上から埋土中位にかけて、および竈の埋土内を中心に出土した。竈出土の礫(19)には加工痕が認められる。所見 出土土器から古墳時代後期に属すると考えられる。

1区21号住居 図版番号 遺構図版15 遺物図版52

位置 AR-27 残存深度 19cm 平面形状 隅丸方形か。規模 南辺2.00m 主軸方位 S-88°-E 埋没土 自然埋没。周壁 約54°の勾配で立ち上がる。床面 東から西にやや傾斜している。顕著な硬化面は認められない。周溝 未検出。貯蔵穴 未検出。柱穴 未検出。掘り方 ほとんどなし。遺物出土状況 埋土中より土師器壺の口縁部破片が出土した。所見 新しい土境2基に切られる。北半部は調査対象地外であり、堅穴住居でない可能性もある。埋土中から土師器が出土しているが時期は特定できない。

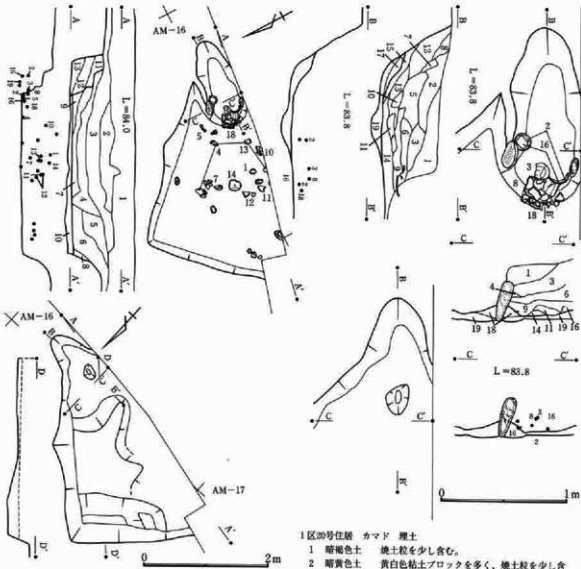
1区22号住居 図版番号 遺構図版15 遺物図版52

位置 AQ-24 残存深度 35cm 平面形状 隅丸方形か。規模 南辺2.20m 主軸方位 N-92°-E 埋没土 自然埋没。周壁 約54°の勾配で立ち上がる。床面 ほぼ平坦で、顕著な硬化面は認められない。周溝 未検出。貯蔵穴 未検出。柱穴 未検出。掘り方 ほとんど無し。遺物出土状況 埋土中より須恵器・土師器片が出土した。所見 21号住居と同様に、堅穴住居でない可能性があり、時期も特定できない。

2区1号住居 図版番号 遺構図版16 遺物図版53

位置 AV-30 残存深度 41cm 平面形状 不明。規模 西辺4.00m 主軸方位 N-77°-E 埋没土 自然埋没か。周壁 87°の傾斜で立ち上がる。床面 ほぼ平坦。周溝 未検出。貯蔵穴 未検出。柱穴 未検出。掘り方 認められず。遺物出土状況 南西隅部より長柄円礫が集中して出土した。他に土製紡錘車・鉄製品なども出土した。所見 奈良時代か。

1. 竪穴住居



1区20号住居 埋土

- 1 黒褐色土 耕作土。
- 2 黒褐色土 FP小粒、小礫、焼土粒を含む。
- 3 黒褐色土 小礫を多く含み、FP小粒は2と同様に含む。
- 4 黒褐色土 3よりやや黒色味が強く、FP小粒は少ない。
- 5 黒褐色土 4よりやや黒色味が強く、FP小粒を多く含む。
- 6 黒色土 やや粘性があり、FP小粒を多く含む。
- 7 黒色土 粒子細かく、やや粘性を有する。
- 8 黒褐色土 粒子細かく、FP小粒を少し含む。
- 9 暗褐色土 黄褐色粘土粒、焼土を多く、炭化物を少し含む。
- 10 黒褐色土 黒色土ブロック、小礫、シルトブロックを含む。
(20号住居周り方埋土)
- 11 黒褐色土 焼土粒、FP小粒、シルト粒を少し含む。
(20号住カマド周り方埋土)
- 12 黒褐色土 9に類似、焼土粒、FP小粒、シルト粒を多く含む。
(20号住居周り方埋土)
- 13 灰褐色土 シルト小ブロック、黄褐色粘質土、焼土粒を多く含む。
(20号住居周り方埋土)

1区20号住居 カマド 埋土

- 1 暗褐色土 焼土粒を少し含む。
- 2 暗黄色土 黄白色粘土ブロックを多く、焼土粒を少し含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒を少し、黄白色粘土粒を少し含む。
- 4 黒褐色土 黄白色粘土粒を少し含む。
- 5 灰黒色土 黄白色粘土粒をやや多く、焼土粒を少し含む。
- 6 黄白色土 粘性があり、黄色シルトブロックをやや多く含む。
- 7 黄白色土 6に類似。
- 8 黒褐色土 黄白色粘土粒を少し、焼土粒をやや多く含む。
- 9 黄白色土 粘性があり、黄白色シルトブロックをやや多く含む。
- 10 黄白色土 9に類似。
- 11 赤褐色土 焼土ブロック主体。
- 12 黒褐色土 焼土粒を多く含む。
- 13 黒褐色土 焼土粒をやや多く含む。
- 14 黒色土 灰主体。
- 15 黒色土 焼土粒、灰を多く含む。
- 16 黒色土 灰主体。
- 17 灰オリーブ土 シルト質。
- 18 暗褐色土 黄褐色粘土ブロックを多く含む。
- 19 暗黄褐色土 黄色砂粒をやや多く含む。

図74 1区20号住居遺構図

第4章 検出された遺構と出土遺物

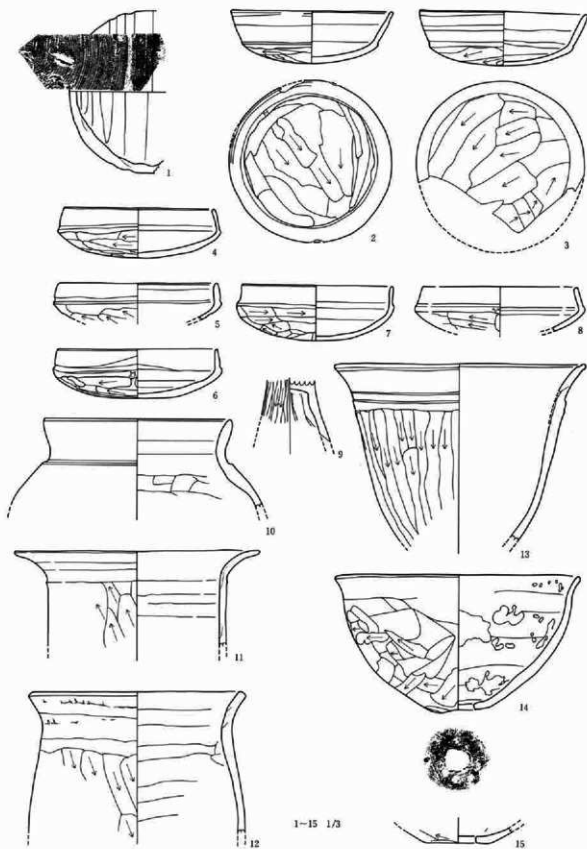
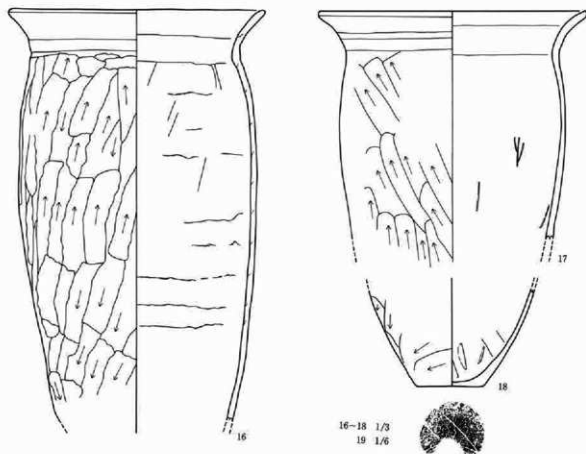


图75 1区20号住居出土土器图



2区2号住居

図版番号 遺構図版16 遺物図版53

位置 AV-30 残存深度 55cm 平面形状 隅丸
 方形か。規模 南辺3.10m 主軸方位 N-83°
 -E 埋没土 自然埋没。周壁 約72°で立ち上
 がる。床面 ほぼ平坦。周溝 未検出。貯
 蔵穴 未検出。柱穴 未検出。掘り方 楕円
 形状のピットを2基検出した。遺物出土状況内
 黒土器・「コ」の字状口縁の甕・刀子・加工痕のある
 礫などが出土している。所見 平安時代。

2区3号住居

図版番号 遺構図版16 遺物図版53

位置 AV-31 残存深度 58cm 平面形状 隅丸
 長方形か。規模 東辺約3.4m 北辺約2.5mか。
 主軸方位 N-67°-E 埋没土 自然埋没。周
 壁 約83°の傾斜で立ち上がる。床面 ほぼ平坦。

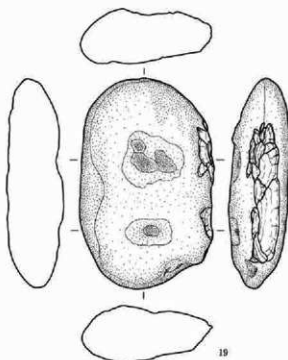
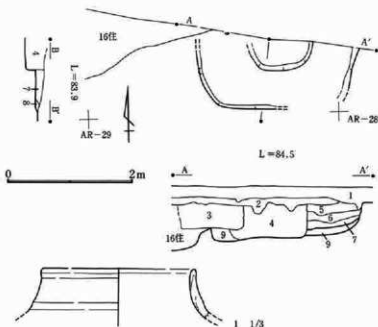


図76 1区20号住居出土遺物図

第4章 検出された遺構と出土遺物

1区21号住居 埋土

- 1 褐色土 表土、砂質。
- 2 褐色土 砂質で、径2~4cm大の円礫を少し含む。
- 3 暗褐色土 砂質で、軽石小粒、焼土粒、小円礫、橙色土粒を少し含む。(現代の土坑埋土)
- 4 暗褐色土 砂質で、焼土粒、小円礫を少し含む。(現代の土坑埋土)
- 5 暗褐色土 軽石小粒と焼土粒を少し含む。
- 6 黒褐色土 軽石小粒、小円礫をわずかに含む。
- 7 黒褐色土 軽石小粒をわずかに、小円礫を少し含む。
- 8 黒褐色土 軽石小粒をわずかに含む。
- 9 黒褐色土 小円礫、砂礫を多く含む。



1区22号住居 埋土

- 1 暗褐色土 表土。
- 2 黒褐色土 黄褐色土小ブロック、明黄褐色土小ブロックを少し含む。
- 3 黒褐色土 焼土粒を少し含む。
- 4 暗褐色土 灰黄褐色土小ブロックを多く、焼土粒を少し含む。(現代の土坑埋土)
- 5 黒褐色土 灰黄褐色土小ブロックをやや多く含む。
- 6 暗褐色土 灰黄褐色土小ブロックを含む。
- 7 黒褐色土 灰黄褐色土小ブロックを少し含む。
- 8 暗褐色土 灰黄褐色土小ブロックを多く、焼土粒を少し含む。

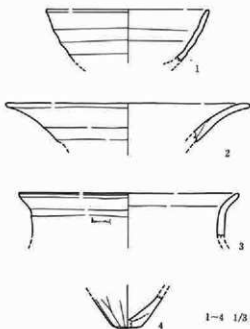
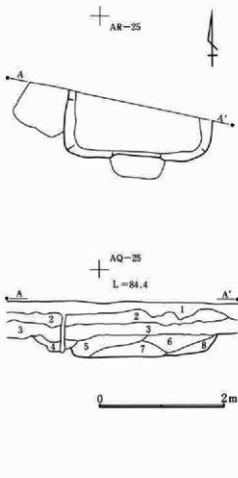


図77 1区21・22号住居遺構・出土土器図

1. 竪穴住居

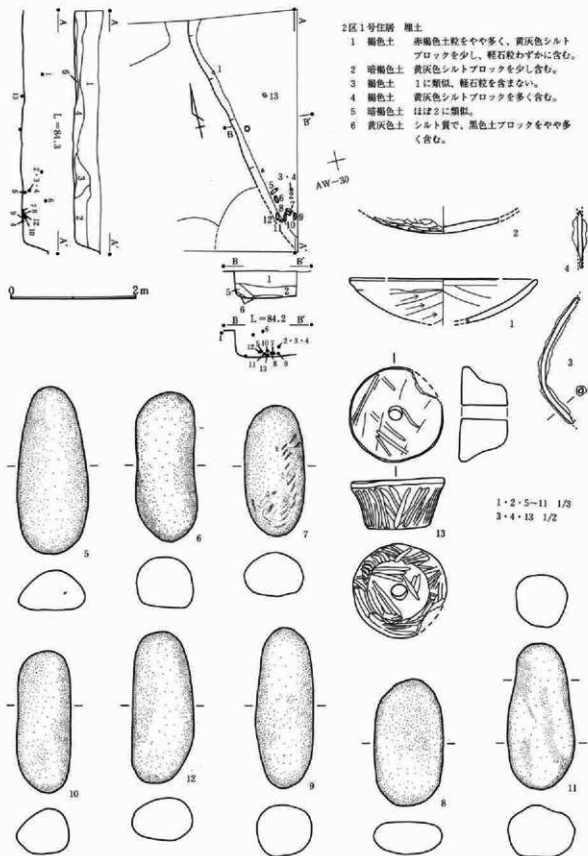


图78 2区1号住居遺構・出土物図

第4章 検出された遺構と出土遺物

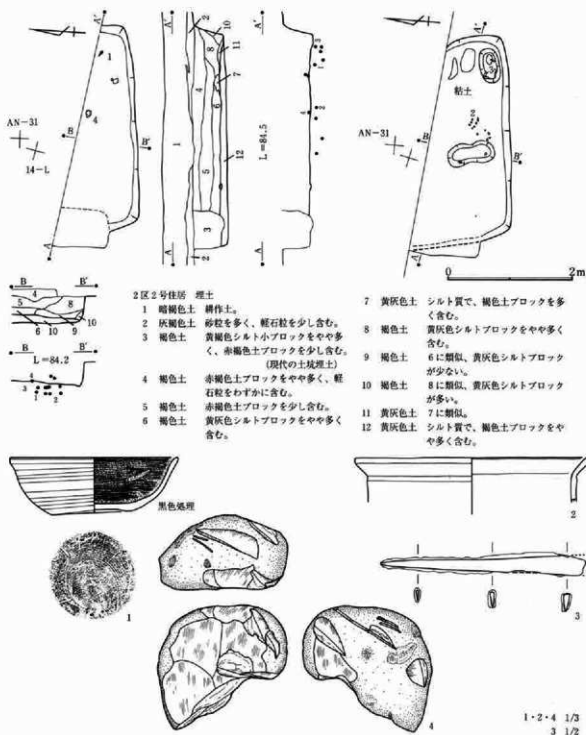


図79 2区2号住居遺構・出土遺物図

周溝 未検出。貯蔵穴 未検出。柱穴 未検出。掘り方 認められず。竈 位置 東辺南端部か。主軸方位 N-77°-E 形状 舌状。規模 全長1.65m 屋外長1.29m 屋内長3.60m 袖部幅 不明。燃烧部幅0.30m 焚口・燃烧部 楕円形。燃烧部は壁の外側。袖 やや短く、地山を削り出す。煙道燃烧部から緩やかに立ち上がる。掘り方 楕円形。燃烧部中央に検出された小ビットは支脚の据え痕か。

1. 竪穴住居

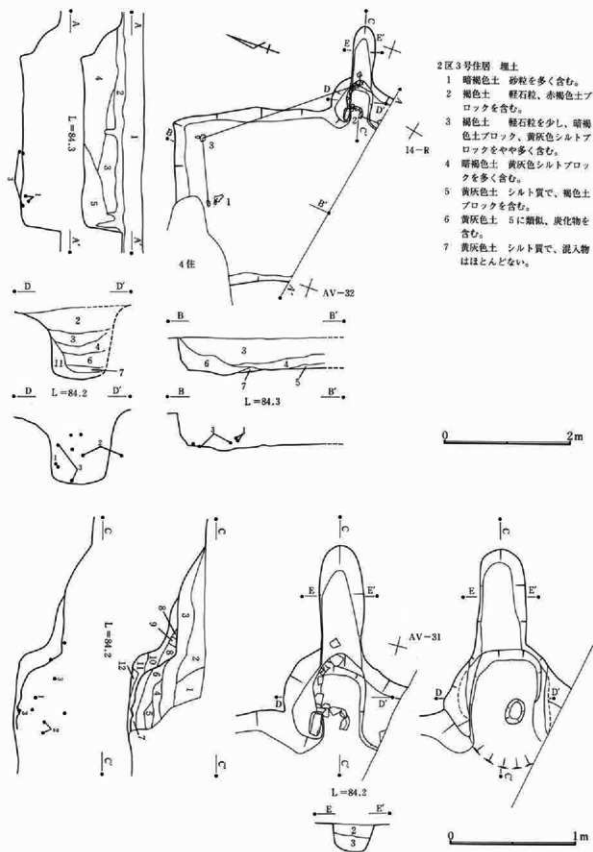


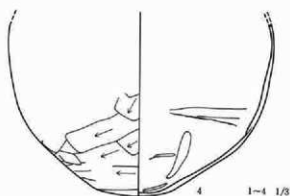
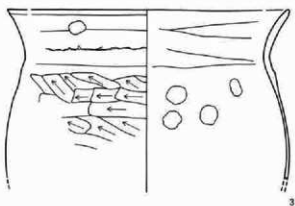
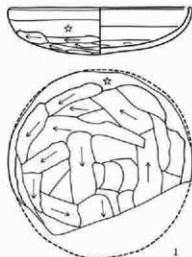
图80 2区3号住居遺構図

第4章 検出された遺構と出土遺物

2区3号住居 カマド 掘り方

- | | |
|-----------|------------------------|
| 1 褐色土 | 焼土粒をわずかに、シルトブロックを少し含む。 |
| 2 褐色土 | 軽石粒、焼土粒をわずかに含む。 |
| 3 褐色土 | 焼土粒を少し含む。 |
| 4 灰オリーブ色土 | シルト質で、焼土粒を少し含む。 |
| 5 灰オリーブ色土 | シルト質。 |
| 6 褐色土 | 焼土粒をわずかに含む。 |

- | | |
|------------|--------------------------------|
| 7 褐色土 | 焼土粒をわずかに含む。 |
| 8 灰オリーブ色土 | シルト質で、焼土化。 |
| 9 暗褐色土 | 焼土ブロックを多く含む。 |
| 10 灰オリーブ色土 | シルト質で、焼土ブロックを少し含む。 |
| 11 褐色土 | 灰オリーブシルトブロックをやや多く、焼土ブロックを少し含む。 |
| 12 灰オリーブ色土 | シルト質で、焼土ブロックを少し含む。 |



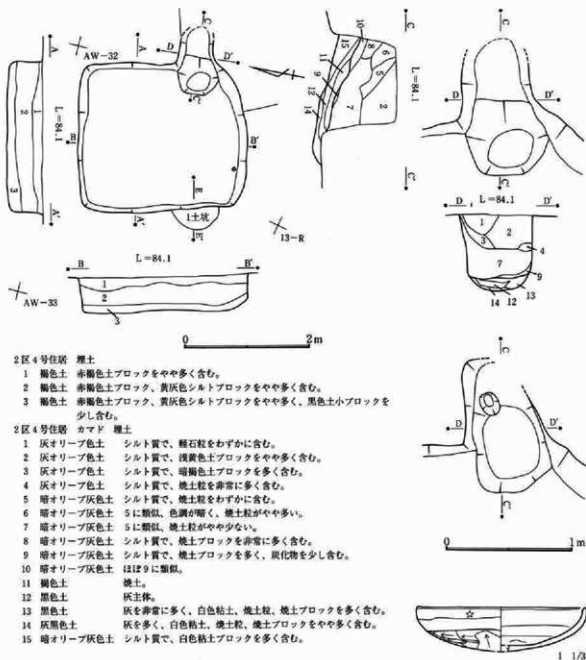
遺物出土状況 竈内や北部の床面直上から土師器が出土した。所見 4号住居に切られる。奈良時代か。

2区4号住居

図版番号 遺構図版17 遺物図版54

位置 AV-22 残存深度 57cm 平面形状 隅丸方形。規模 東辺2.30m 西辺2.40m 南辺2.00m 北辺2.20m 主軸方位 N-77°-E 埋没土 自然埋没か。周壁 約83°の傾斜で立ち上がる。床面 ほぼ平坦。6.252m² 周溝 未検出。貯蔵穴 未検出。柱穴 未検出。掘り方 認められず。竈位置 東辺南端部。主軸方位 N-85°-E 形状 舌状か。規模 全長1.10m 屋外長 0.50m 屋内長0.55m 燃焼部幅0.50m 焚口・燃焼部 楕円形。袖 遺存不良。煙道 燃焼部から緩やかに立ち上がる。掘り方 不正楕円形。遺物出土状況 埋土中から土師器坏が出土している。所見 奈良時代か。

図81 2区3号住居出土土器図



2区4号住居 埋土

- 1 褐色土ブロックをやや多く含む。
- 2 褐色土 赤褐色土ブロック、黄灰色シルトブロックをやや多く含む。
- 3 褐色土 赤褐色土ブロック、黄灰色シルトブロックをやや多く、黒色土小ブロックを少し含む。

2区4号住居 カマド 埋土

- 1 灰オリーブ色土 シルト質で、軽石粒をわずかに含む。
- 2 灰オリーブ色土 シルト質で、褐色土ブロックをやや多く含む。
- 3 灰オリーブ色土 シルト質で、暗褐色土ブロックを多く含む。
- 4 灰オリーブ色土 シルト質で、焼土粒を非常に多く含む。
- 5 暗オリーブ灰色土 シルト質で、焼土粒をわずかに含む。
- 6 暗オリーブ灰色土 5に類似、色調が暗く、焼土粒がやや多い。
- 7 暗オリーブ灰色土 5に類似、焼土粒がやや少ない。
- 8 暗オリーブ灰色土 シルト質で、焼土ブロックを非常に多く含む。
- 9 暗オリーブ灰色土 シルト質で、焼土ブロックを多く、炭化物を少し含む。
- 10 暗オリーブ灰色土 ほぼ9に類似。
- 11 褐色土 焼土。
- 12 黒色土 灰主体。
- 13 黒色土 灰を非常に多く、白色粘土、焼土粒、焼土ブロックを多く含む。
- 14 灰黒色土 灰を多く、白色粘土、焼土粒、焼土ブロックをやや多く含む。
- 15 暗オリーブ灰色土 シルト質で、白色粘土ブロックを多く含む。

図82 2区4号住居遺構・出土土器図

2区5号住居 図版番号 遺構図版17 遺物図版54

位置 AV-32 残存深度 60cm 平面形状 隅丸方形と考えられる。規模 東辺3.20m 北辺3.40m 主軸方位 N-64°-E 埋没土 自然埋没である。周壁 約74°で立ち上がる。床面 ほぼ平坦で、顕著な硬化面は認められなかった。周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 床面調査時に掘り方の調査時にも検出できなかった。掘り方 顕著には認められなかった。竈 位置 東辺中央部やや南寄りに付着されていた。主軸方位 N-52°-E 形状 馬蹄形。規模 全長1.40m 屋外長0.70m 屋内長0.70m 袖部幅1.15m 燃焼部幅0.40m 焚口・燃焼部 楕円形。燃焼部は壁の内側である。袖

第4章 検出された遺構と出土遺物

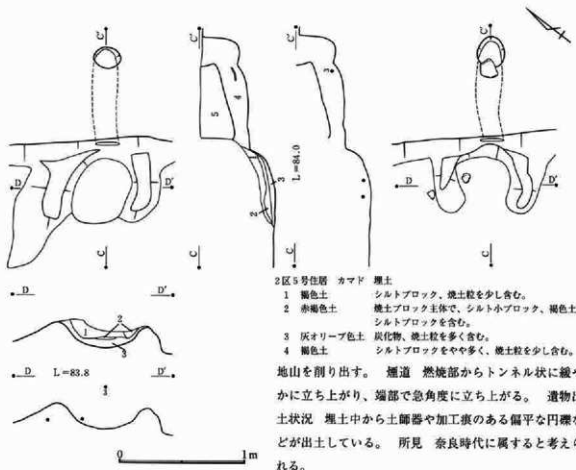
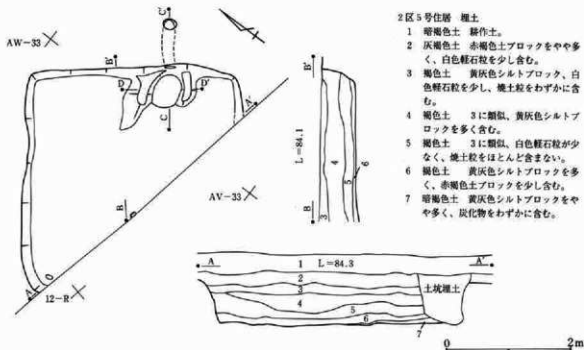
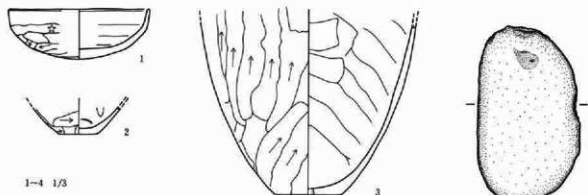


図83 2区5号住居遺構図

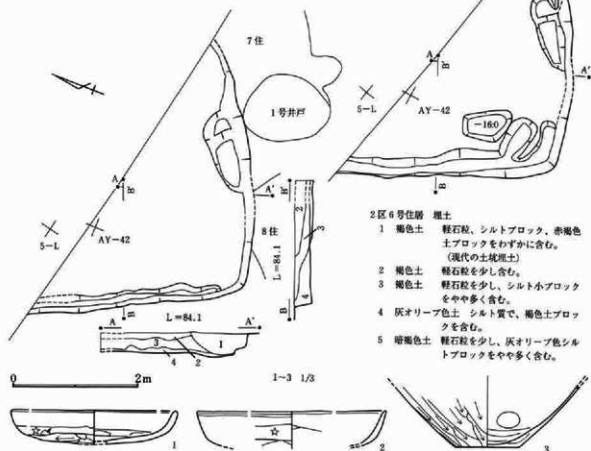
1. 竪穴住居



1-4 1/3

2区6号住居 図版番号 遺構図版17 遺物図版54

位置 AX-41 残存深度 37cm 平面形状 不明 規模 南辺4.00m
 主軸方位 N-63°-E 埋没土 自然埋没か。周壁 約80°の傾斜で立ち上がる。床面 はほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は確認できなかった。周溝 南辺に検出した。貯蔵穴 未検出。柱穴 床面調査時には未検出。掘り方 顕著には認められず。南東隅部と南西隅部に検出した楕円形状のピットは柱穴の可能性ある。遺物出土状況 埋土



2区6号住居 埋土

- 1 褐色土 軽石粒、シルトブロック、赤褐色土ブロックをわずかに含む。
(現代の土境埋土)
- 2 褐色土 軽石粒を少し含む。
- 3 褐色土 軽石粒を少し、シルト小ブロックをやや多く含む。
- 4 灰オリーブ色土 シルト質で、褐色土ブロックを含む。
- 5 暗褐色土 軽石粒を少し、灰オリーブ色シルトブロックをやや多く含む。

図84 2区5号住居出土遺物・6号住居遺構・出土土器図

第4章 検出された遺構と出土遺物

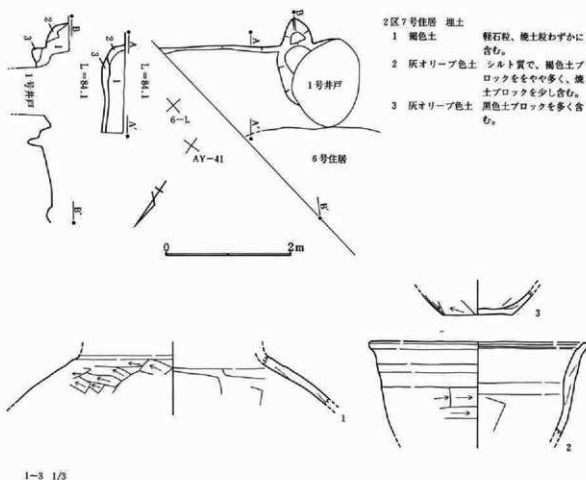


図85 2区7号住居遺構・出土土器図

中から土師器が出土。 所見 床面調査時に検出した南辺中央部のピットは入り口の構造に伴うかもしれない。7号住居を切る。奈良時代か。

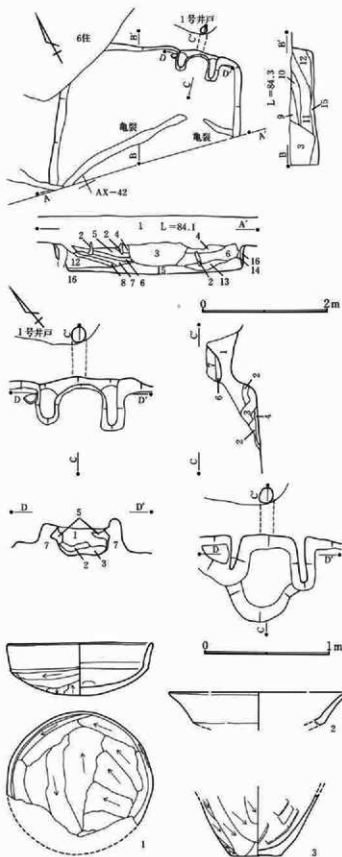
2区7号住居 図版番号 遺構図版17 遺物図版54

位置 AX-40 残存深度 22cm 平面形状 不明。 規模 不明。 主軸方位 N-127°-E 埋没土 自然埋没か。 周壁 約72°の傾斜で立ち上がる。 床面 ほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は確認出来なかった。 周溝 未検出である。 貯蔵穴 未検出である。 柱穴 未検出である。 掘り方 顕著には認められず。 竈 位置 東辺。 主軸方位 N-133°-E 形状 不明。 規模 全長0.70m 屋外長0.40m 屋内長0.30m 焚口・燃焼部 楕円形。燃焼部は壁の内側。 袖 遺存不良。 煙道 焚口から急角度で立ち上がる。 遺物出土状況 埋土中より土師器が出土した。 所見 6号住居と5号土坑に切られる。古墳時代後期か。

2区8号住居 図版番号 遺構図版17・18 遺物図版54

位置 AW-41 残存深度 45cm 平面形状 隅丸方形か。 規模 東辺2.10m 主軸方位 N-34°-E 埋没土 自然埋没。 周壁 約78°の傾斜で立ち上がる。 床面 ほぼ平坦。 周溝 未検出。 貯蔵穴 未

1. 竪穴住居



2区8号住居 埋土

- 1 灰褐色土 オリーブ灰色シルトブロックをやや多く、褐色粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 木の根跡。
- 3 暗褐色土 オリーブ灰色シルトブロック、灰色砂を少し含み、白色軽石粒をわずかに含む。
- 4 灰褐色土 オリーブ灰色シルトブロックを多く、白色軽石粒をわずかに含む。
- 5 灰褐色土 やや粘土があり、オリーブ灰色シルトブロックをやや多く、白色軽石粒を少し含む。
- 6 灰褐色土 5に類似、オリーブ灰色シルトブロックを少し、白色軽石粒をわずかに含む。
- 7 暗褐色土 オリーブ灰色シルトブロックを少し、白色軽石粒、焼土粒をわずかに含む。
- 8 暗褐色土 やや灰色を帯び、オリーブ灰色シルトブロックをやや多く含む。
- 9 暗褐色土 オリーブ灰色シルトブロックを少し含む。
- 10 暗褐色土 オリーブ灰色シルトブロックをやや多く含む。
- 11 暗褐色土 オリーブ灰色シルトブロックを少し、白色軽石粒、焼土粒をわずかに含む。
- 12 暗褐色土 8に類似、やや灰色の色調が強く、オリーブ灰色シルトブロックを少し含む。
- 13 黒褐色土 オリーブ灰色シルトブロックを非常に多く、灰褐色土ブロックを多く含む。
- 14 オリーブ灰色土 シルト質。
- 15 暗褐色土 12に類似、オリーブ灰色シルトブロックが少ない。
- 16 暗褐色土 地割れの埋土。

2区8号住居 カマド 埋土

- 1 褐色土 灰オリーブ色シルトブロック、焼土粒を少し含む。
- 2 灰オリーブ色土 下部が火熱を受け赤褐色化しており、崩落した天井部と推定される。
- 3 暗褐色土 焼土ブロックを多く含む。
- 4 褐色土 焼土粒を少し含む。
- 5 灰オリーブ色土 焼土ブロック、灰を多く含む。
- 6 灰オリーブ色土 下部が火熱により赤褐色化しており、煙道の天井部であろう。
- 7 灰オリーブ色土 シルト質の堆土で、カマドの補部である。

1-3 1/3

図86 2区8号住居遺構・出土土器図

第4章 検出された遺構と出土遺物

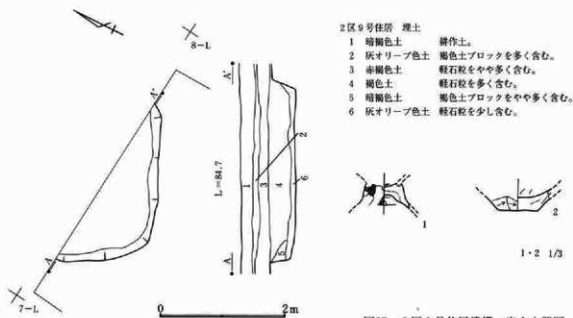


図87 2区9号住居遺構・出土土器図

検出。柱穴 未検出。掘り方 顕著には認められず。竈 位置 東辺南寄り。主軸方位 N-40°-E 形状 舌状。規模 全長0.80m 屋外長0.40m 屋内長0.40m 袖部幅0.70m 燃焼部幅0.35m 焚口・燃焼部 壁の内側。袖 地山を削り出している。煙道 燃焼部からトンネル状にやや急角度で立ち上がる。掘り方 不正楕円形。遺物出土状況 埋土中から土師器が出土している。所見 6号住居に切られる。床面に地震に伴うと考えられる地割れが東西方向に走る。古墳時代後期か。

2区9号住居 図版番号 遺構図版18 遺物図版54

位置 AX-38 残存深度 41cm 平面形状 隅丸方形か。規模 南辺2.20m 主軸方位 N-71°-E 埋没土 自然埋没。周壁 約82°の傾斜で立ち上がる。床面 ほぼ平坦。周溝 未検出。貯蔵穴 未検出。柱穴 未検出。掘り方 顕著には認められず。遺物出土状況 埋土中より土師器片が出土した。所見 古墳時代後期か。

2区10号住居 図版番号 遺構図版18 遺物図版54

位置 AX-42 残存深度 35cm 平面形状 隅丸方形か。規模 南辺3.90m 主軸方位 N-90°-E 埋没土 自然埋没。周壁 約71°の傾斜で立ち上がる。床面 ほぼ平坦。周溝 未検出。貯蔵穴 未検出。柱穴 未検出。掘り方 南辺中央部にやや大きいピットを検出した。竈 位置 東辺ほぼ中央部か。主軸方位 N-91°-E 形状 馬蹄形か。規模 遺存不良で不明。焚口・燃焼部 楕円形。燃焼部は壁の外側か。袖 遺存不良。櫓を据えていたか。煙道 燃焼部から緩やかに立ち上がるか。掘り方 不正楕円形か。遺物出土状況 竈内および床面直上より土師器と砥石が出土した。所見 古墳時代後期か。

2区11号住居 図版番号 遺構図版18 遺物図版55

位置 AY-44 残存深度 25cm 平面形状 発掘の結果は不正長方形であるが、地震に伴う亀裂と重複し

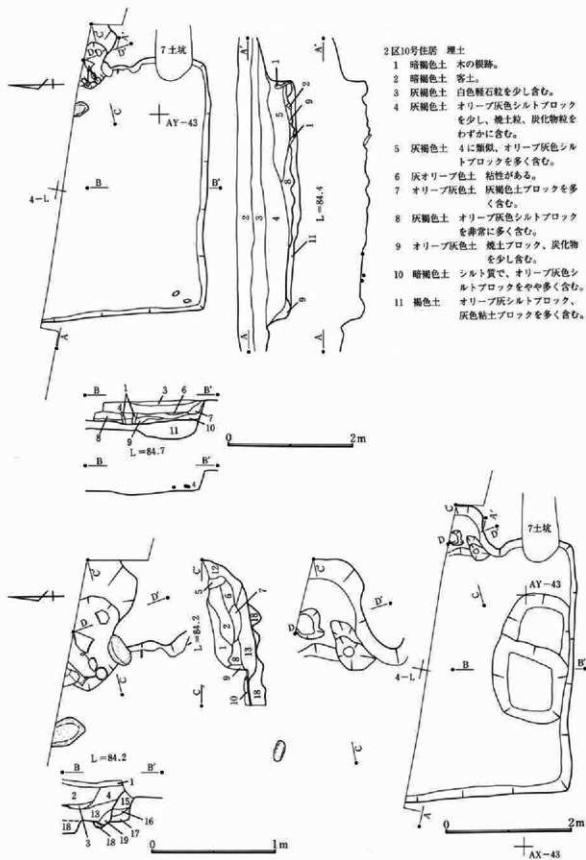
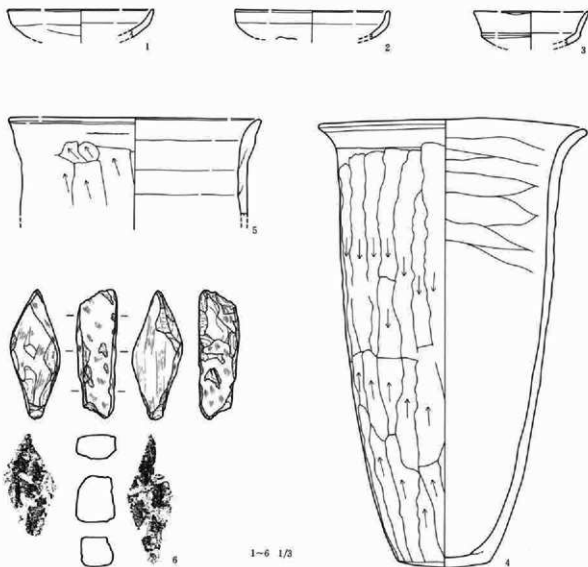


図88 2区10号住居遺構図

第4章 検出された遺構と出土遺物

2区10号住居 カマド 埋土

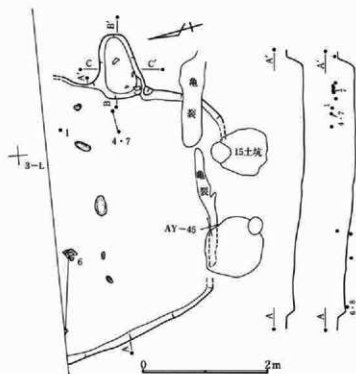
- | | |
|-----------|---|
| 1 暗褐色土 | オリブ灰色シルトブロックを多く、焼土ブロックをやや多く含む。 |
| 2 暗褐色土 | 1に類似、白色粘土ブロック、暗褐色土ブロックを少し含む。 |
| 3 黒褐色土 | オリブ灰色シルトブロック、白色粘土ブロックを少し、焼土ブロックをやや多く含む。 |
| 4 暗褐色土 | オリブ灰色シルトブロック、焼土小ブロックを少し含む。 |
| 5 白色土 | 粘性があり、焼土ブロック、オリブ灰色シルトブロックをやや多く含む。 |
| 6 暗褐色土 | 灰を多く、焼土ブロックをやや多く、白色粘土小ブロックを少し含む。 |
| 7 黒褐色土 | 焼土ブロックをやや多く、オリブ灰色シルトブロック、白色粘土ブロックを少し含む。 |
| 8 黒褐色土 | 焼土ブロック、白色粘土ブロックを少し含む。 |
| 9 白色土 | 粘性がある。 |
| 10 黒褐色土 | 焼土ブロックを多く含む。 |
| 11 黒褐色土 | 灰主体。 |
| 12 黒褐色土 | 焼土ブロック、灰をやや多く、白色粘土ブロックを少し含む。 |
| 13 暗褐色土 | 焼土小ブロック、白色粘土ブロックを少し含む。 |
| 14 黒褐色土 | 灰を非常に多く、焼土ブロックを少し含む。 |
| 15 灰オリブ色土 | やや黒色を帯び、白色粘土ブロックをやや多く、焼土ブロックを少し含む。 |
| 16 暗褐色土 | 焼土ブロックを多く、灰をやや多く含む。 |
| 17 黒褐色土 | 灰を非常に多く、灰オリブ土ブロックを多く、焼土ブロックをやや多く含む。 |
| 18 灰オリブ色土 | 焼土ブロックを少し含む。 |



1-6 1/3

図89 2区10号住居出土遺物図

1. 竪穴住居



- 2区11号住居 カマド 埋土
- 1 褐色土 焼土をやや少し含む。
 - 2 褐色土 灰色土ブロック、焼土ブロックをやや多く含む。
 - 3 暗褐色土 焼土をやや多く含む。
 - 4 褐色土 焼土をやや多く含む。
 - 5 灰色土 包含物がほとんどない。
 - 6 灰オリーブ色土 シルト質で、褐色土ブロックをやや多く含む。

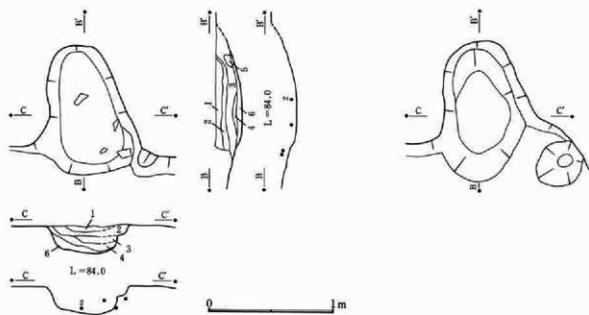


図90 2区11号住居遺構図

ており、本来の形状は不明である。規模 南辺3.00m 主軸方位 S-70°-Eか。埋没土 不明。周壁 約62°の傾斜で立ち上がる。床面 やや凹凸があり、顕著な硬化面は検出できなかった。周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 未検出である。掘り方 顕著には認められず。竈 位置東辺中央部か。主軸方位 S-80°-E 形状 遺存不良で不明。規模 全長1.02m 屋外長0.75m 屋内長0.27m 燃焼部幅0.48m 焚口・燃焼部 楕円形。燃焼部は壁の外側か。袖 遺存不良。煙道 燃

第4章 検出された遺構と出土遺物

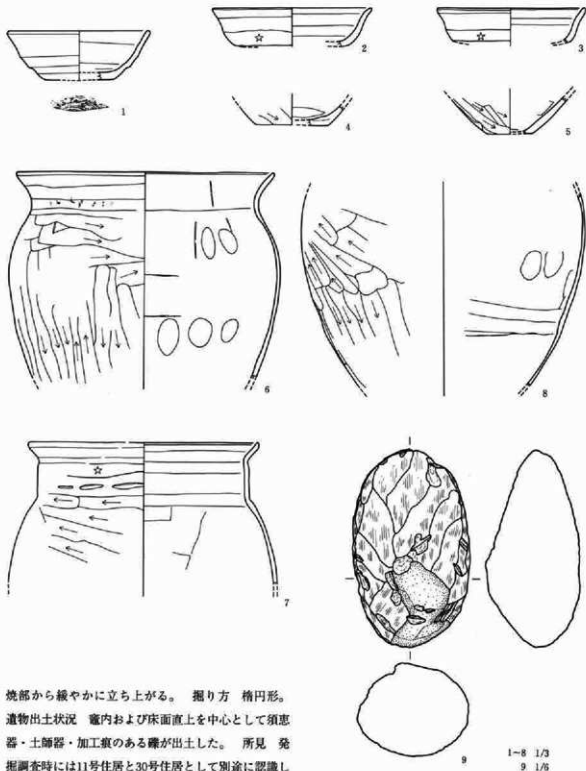
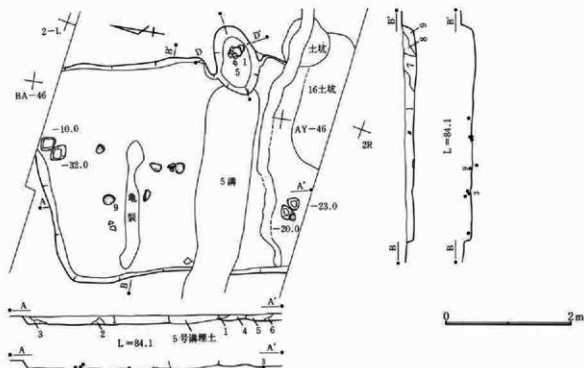


図91 2区11号住居出土遺物図

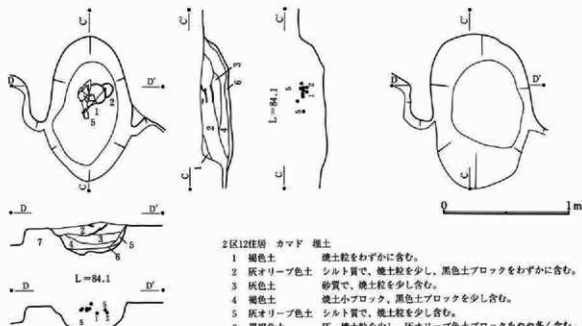
焼部から緩やかに立ち上がる。掘り方 楕円形。
 遺物出土状況 室内および床面直上を中心として須恵
 器・土師器・加工痕のある礫が出土した。所見 発
 掘調査時には11号住居と30号住居として別途に認識し
 ていたが、遺物の接合状況や住居の平面形・床面の連
 続性等から1つの住居と考えた。当初の認識では、住

居の南辺が地震に伴うと考えられる亀裂や新しい土坑に切られ、壁が連続しなかったため、平面形の確認が
 困難で、住居の切り合い関係の結果と考えたことによる。しかし、1つの住居だとしても東辺と西辺が平行
 せず、本来の形状の復元は困難である。出土土器から平安時代に属すると考えられるが、亀裂との前後関係



2区12号住居 埋土

- 1 暗褐色土 やや灰色を帯び、オリーブ灰色シルトブロック、白色軽石粒をわずかに含む。
- 2 オリーブ灰色土 シルト質。(亀裂の影響小?)
- 3 暗褐色土 やや灰色を帯び、オリーブ灰色シルトブロックを多く含む。
- 4 灰褐色土 砂質で、暗褐色土ブロックをやや多く含む。(亀裂の影響あり)
- 5 暗褐色土 オリーブ灰色シルトブロックをやや多く含む。(亀裂の影響あり)
- 6 暗褐色土 オリーブ灰色シルトブロックを多く含む。
- 7 暗褐色土 オリーブ灰色シルト粒を少し、焼土粒をわずかに含む。
- 8 暗褐色土 オリーブ灰色シルト粒、白色軽石粒をわずかに含む。
- 9 暗褐色土 オリーブ灰色シルト粒を少し含む。



2区12号住居 カマド 埋土

- 1 褐色土 焼土粒をわずかに含む。
- 2 灰オリーブ色土 シルト質で、焼土粒を少し、黒色土ブロックをわずかに含む。
- 3 灰色土 砂質で、焼土粒を少し含む。
- 4 褐色土 焼土小ブロック、黒色土ブロックを少し含む。
- 5 灰オリーブ色土 シルト質で、焼土粒を少し含む。
- 6 黒褐色土 灰、焼土粒を少し、灰オリーブ色土ブロックをやや多く含む。
- 7 白色土 粘性がややある。(地山)

図92 2区12号住居遺構図

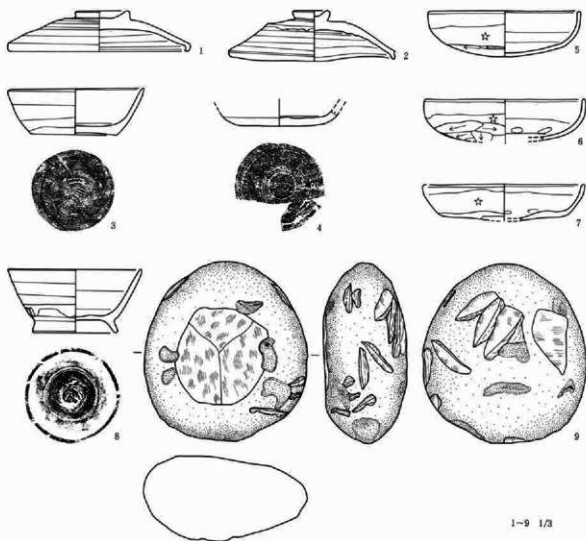


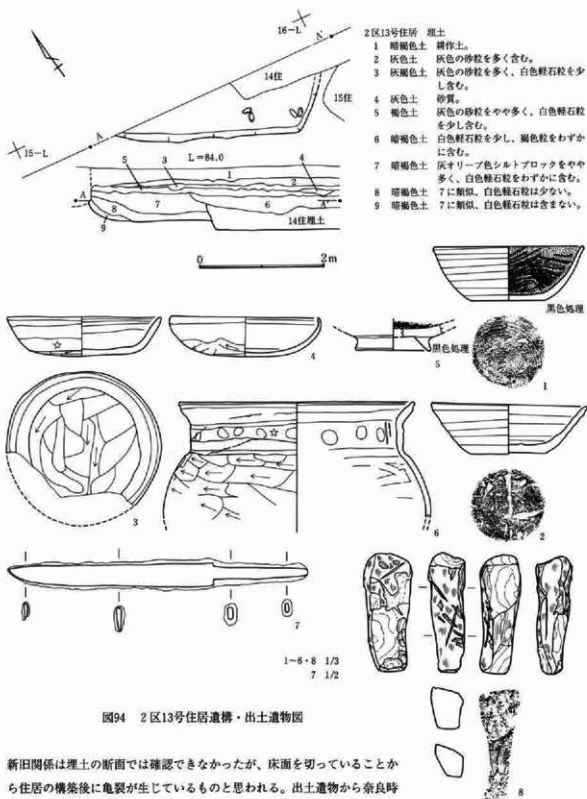
図93 2区12号住居出土遺物図

は不明である。

2区12号住居 図版番号 遺構図版19 遺物図版55

位置 AX-45 残存深度 21cm 平面形状 隅九長方形。規模 東辺約4.2mか。北辺約3.3mか。主軸方位 N-80°-E 埋設土 自然埋没か。周壁 約79°の傾斜で立ち上がる。床面 はほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は確認できなかった。周溝 未検出。貯蔵穴 未検出。柱穴 未検出。掘り方ほとんど認められず。竈 位置 東辺南端部。主軸方位 N-63°-E 形状 舌状 規模 全長1.14m 屋外長0.30m 屋内長0.84m 袖部幅1.02m 燃烧部幅0.51m 焚口・燃烧部 楕円形。燃烧部は壁の内側か。袖 地山を削り出す。煙道 短く、燃烧部からやや急角度で立ち上がる。掘り方 不正楕円形。遺物出土状況 竈内や床面直上から須恵器・土師器・加工痕のある礫が出土した。所見 住居中央部を5号溝が、南辺部を16号土坑が切る。また、2状の亀裂が東西に走り、この亀裂の下を下部文化層の調査時に確認したところ、噴砂の現象が認められ、この亀裂も地震に伴うものであることが判明した。亀裂と住居の

1. 竪穴住居



新旧関係は埋土の断面では確認できなかったが、床面を切っていることから住居の構築後に亀裂が生じているものと思われる。出土遺物から奈良時代に属するものと考えられる。

2区13号住居 図版番号 遺構図版19 遺物図版56

位置 AV-28 残存深度 37cm 平面形状 大半が調査対象地外で不明である。規模 南辺約2.9mか。

第4章 検出された遺構と出土遺物

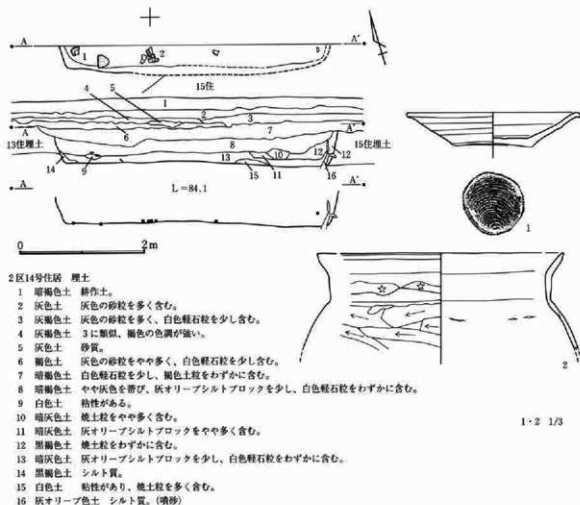


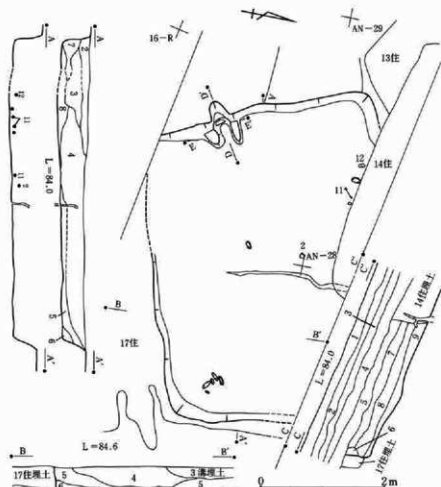
図95 2区14号住居遺構・出土土器図

主軸方位南壁の走行を基準とすると、 $S-35^{\circ}-E$ か。埋没土 自然埋没である。周壁 約 79° の傾斜で立ち上がる。床面 はほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は確認できなかった。周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 未検出である。掘り方 顕著には認められず。遺物出土状況 床面直上を中心に内黒土器・須恵器・土師器・刀子・砥石が出土した。8の砥石の3個面は使用時の磨痕があり、1個面には楕状の削り痕がある。この楕状の削り痕は整形時の痕跡と思われる。所見 14号住居に切られる。住居の時代は、出土遺物をもとると3・4の土師器杯が奈良時代後半に、1・2・6が平安時代に属し、明確ではない。

2区14号住居 図版番号 遺構図版19 遺物図版56

位置 AV-27 残存深度 50cm 平面形状 大半が調査対象地外で不明である。規模 南辺4.20m 主軸方位 南辺の走行を基準にすれば、 $S-14^{\circ}-E$ か。埋没土 自然埋没か。周壁 約 67° の傾斜で立ち上がる。床面 はほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は検出できなかった。周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 未検出である。掘り方 顕著には認められず。遺物出土状況 床面直上より須恵器・土師器が出土した。所見 13号住居・15号住居を切る。出土土器から平安時代に属するものと考えら

1. 竪穴住居



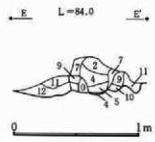
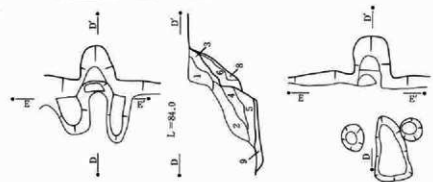
2区15号住居 埋土

(A-A', B-B')

- 1 灰オリーブ色土 シルト質。(噴砂)
- 2 暗褐色土 オリーブ灰色シルトブロックを多く含む。
- 3 灰褐色土 シルト質で、白色軽石粒、焼土粒をわずかに含む。
- 4 暗褐色土 白色軽石粒、焼土粒、炭化物を少し含む。
- 5 暗褐色土 4に類似、焼土粒をほとんど含まない。
- 6 暗褐色土 5に類似、色調がやや暗い。
- 7 灰色土 シルト質で、オリーブ灰色シルトブロックを多く含む。
- 8 灰色土 シルト質で、オリーブ灰色シルトブロックをやや多く含む。

(C-C')

- 1 暗褐色土 耕作土。
- 2 灰色土 灰色の砂粒を多く含む。
- 3 灰褐色土 灰色の砂粒を多く、白色軽石粒を少し含む。
- 4 暗褐色土 白色軽石粒を少し、褐色土粒をわずかに含む。
- 5 暗褐色土 白色軽石粒をやや多く含む。
- 6 黒褐色土 白色軽石粒をわずかに含む。
- 7 黒褐色土 白色軽石粒をやや多く含む。
- 8 黒褐色土 7に類似、色調がやや淡い。
- 9 黒褐色土 灰オリーブ色シルトブロックをやや多く含む。



2区15号住居 カマド 埋土

- 1 暗褐色土 焼土粒を多く、灰オリーブ色砂をやや多く含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒と灰オリーブ色シルトブロックを少し含む。
- 3 黒褐色土 焼土粒を多く、灰をやや多く含む。
- 4 暗褐色土 焼土粒を少し、灰を多く含む。
- 5 黒褐色土 灰を非常に多く、焼土粒をわずかに含む。
- 6 黒褐色土 焼土粒を多く含む。
- 7 暗灰褐色土 焼土粒をやや多く、灰オリーブ色砂を多く含む。
- 8 黒色土 灰、オリーブ色シルトブロックを多く含む。
- 9 黒褐色土 灰、オリーブ色シルトブロック、焼土粒をやや多く含む。
- 10 暗オリーブ灰色土 シルト質で、灰をやや多く、焼土粒を少し含む。
- 11 暗オリーブ灰色土 10に類似、色調がやや暗い。
- 12 暗オリーブ灰色土 10・11に類似、色調はそれの中間である。

図96 2区15号住居遺構図

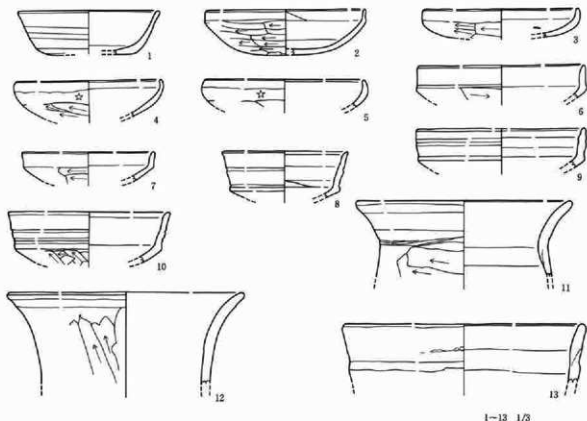


図97 2区15号住居出土土器図

れる。また、東西方向で確認した住居埋土の断面の東端部において、埋土を切る状態で下部から地震に伴う噴砂が亀裂状に上昇している状況が確認された。住居に埋土が堆積した後に地震が発生したことが確かめられる。

2区15号住居 図版番号 遺構図版19・20 遺物図版56

位置 AV-27 残存深度 50cm 平面形状 隅丸長方形 規模 西辺約3.7m 南辺約4.3m 主軸方位 N-82°-E 埋没土 自然埋没である。周壁 約79°の傾斜で立ち上がる。床面 はほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は確認できなかった。周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 未検出である。

掘り方 顕著には認められず。竈 位置 西辺中央部やや南寄り。主軸方位 N-71°-E 形状 馬蹄形 規模 全長0.75m 屋外長0.30m 屋内長0.45m 袖部幅0.65m 燃焼部幅0.15m 焚口・燃焼部 楕円形。燃焼部は壁の内側。袖 やや短い。煙道 燃焼部から急角度で立ち上がる。掘り方 両袖の端部の位置に小さな円形のピットと、その間に皿状で不正形の落ち込みを検出した。遺物出土状況 床面直上を中心として須恵器・土器が出土した。所見 14号住居に切られる。住居中央部で埋土を切っ

2区17号住居	カマド	埋土
1	黒色土	焼土小ブロック・灰オリーブシルト小ブロックを少し含む。
2	暗褐色土	焼土粒を少し含む。しまりなし。
3	灰オリーブ色土	シルト質で焼土を多く含む。 (天井部の崩落土)
4	灰オリーブ色土	シルト質で焼土。(天井部の崩落土)
5	褐色土	焼土粒をやや多く含む。
6	灰オリーブ色土	シルト質で焼土。(天井部の崩落土?)
7	白色土	粘土質で、焼土粒をやや多く含む。
8	白色土	粘土質で、焼土粒をわずかに含む。
9	黒褐色土	炭火物をやや多く含む。
10	黒褐色土	白色粘土を多く、灰オリーブシルトブロック、焼土をやや多く含む。
11	黒色土	焼土をやや多く、白色粘土を少し含む。

1. 竪穴住居

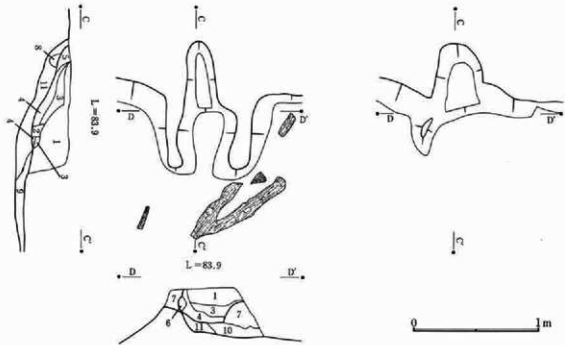
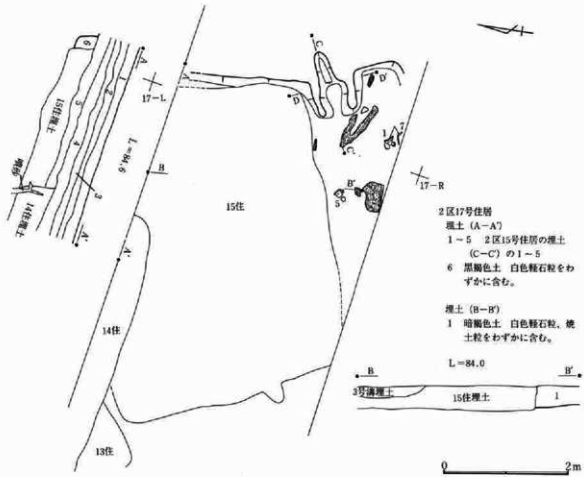


図98 2区17号住居遺構図

第4章 検出された遺構と出土遺物

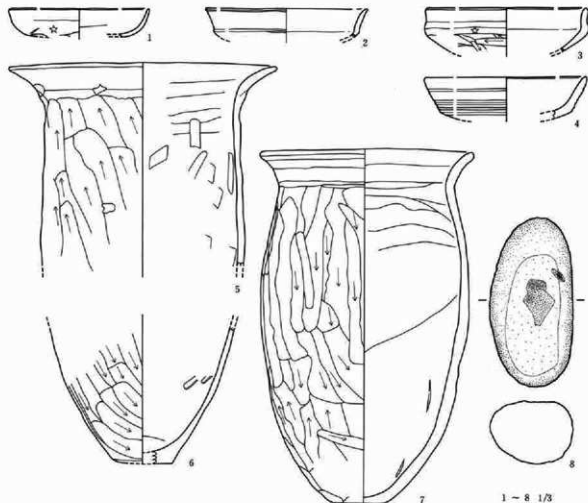


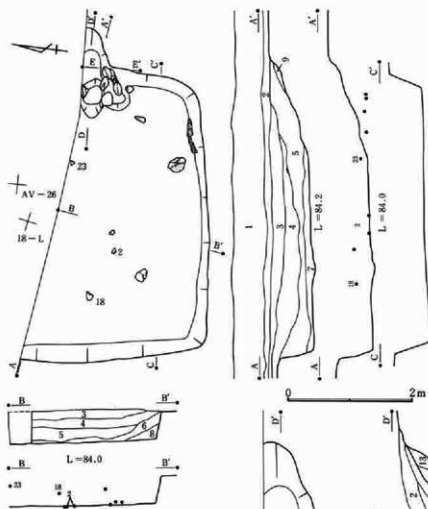
図99 2区17号住居出土遺物図

て、地震の結果と考えられる噴砂を検出した。当初、遺構確認まで立ち上がっていたこの噴砂の影響で、本住居を東半部と西半部の別々の住居として認識し、遺物も別々に取り上げていたが、中途から同一の住居と確認した。また、整理時の土器の接合状況からも、その認識は支持された。出土土器から古墳時代後期に属すると考えられる。

2区17号住居 図版番号 遺構図版20 遺物図版57

位置 AV-27 残存深度 34cm 平面形状 15号住居に切られ不明。規模 不明。主軸方位 N-80°-E 埋没土 自然埋没か。周壁 約62°の傾斜で立ち上がる。床面 ほほ平坦であるが、顕著な硬化面は確認できなかった。周溝 未検出。貯蔵穴 未検出。柱穴 未検出。掘り方 顕著には認められず。竈 位置 東辺南寄り。主軸方位 N-68°-E 形状 舌状。規模 全長1.05m 屋外長0.50m 屋内長0.55m 袖部幅1.00m 燃烧部幅0.15m 焚口・燃烧部 楕円形。燃烧部は壁の内側。袖 少なくとも左袖は地山の削り出しであることを確認した。煙道 燃烧部から急角度で立ち上がる。掘り方 舌状。遺物出土状況 竈内および竈の前部の床面直上を中心として土器と加工痕のある礫が出土した。所見 竈の前部からは、フナ科コナラ属クスギ節で、年輪数が最大で14年以上等の炭化材が数点出土した。パレ

1. 竪穴住居



- 2区18号住居 竪土
- 1 灰褐色土 灰砂を多く含む。耕作土。
 - 2 暗褐色土 焼土粒を少し、白色軽石粒をわずかに含む。
 - 3 暗褐色土 暗灰色砂を多く、白色軽石粒、焼土粒、小円礫を少し含む。
 - 4 暗褐色土 3に類似、小円礫が少ない。
 - 5 暗褐色土 3、4に類似、褐色が強、炭化物をわずかに含む。
 - 6 暗褐色土 5に類似、色調がやや暗く、焼土小ブロックを少し含む。
 - 7 暗褐色土 やや灰色を帯び、灰褐色砂をやや多く、橙色土粒、小円礫を少し含む。
 - 8 黒褐色土 暗褐色砂をやや多く、白色軽石粒、小円礫を少し含む。
 - 9 黄褐色土 やや粘性がある。

- 2区18号住居 カマド 埋土
- 1 暗オリーブ灰色土 シルト質で、白色粘土小ブロックを少し、焼土粒をわずかに含む。
 - 2 暗オリーブ灰色土 シルト質で、白色粘土ブロックをやや多く、焼土粒を少し含む。
 - 3 暗オリーブ灰色土 シルト質で、白色粘土小ブロック、焼土ブロックを多く含む。
 - 4 暗オリーブ灰色土 シルト質で、白色粘土ブロックを少し、焼土粒をわずかに含む。
 - 5 黒褐色土 焼土粒を少し含む。
 - 6 白色土 粘土。
 - 7 暗褐色土 暗褐色砂を多く、白色軽石粒、焼土粒、炭化物を少し含む。
 - 8 暗オリーブ灰色土 シルト質で、白色粘土ブロックを多く、焼土粒を少し含む。
 - 9 暗オリーブ灰色土 8に類似、焼土粒が多い。
 - 10 灰褐色土 灰主体で、灰砂を多く含む。
 - 11 黒褐色土 やや粘性があり、灰、焼土粒を少し含む。
 - 12 暗褐色土 灰オリーブ色シルトブロックをやや多く含む、焼土粒を少し含む。
 - 13 暗褐色土 灰オリーブ色シルトブロックを多く含む。

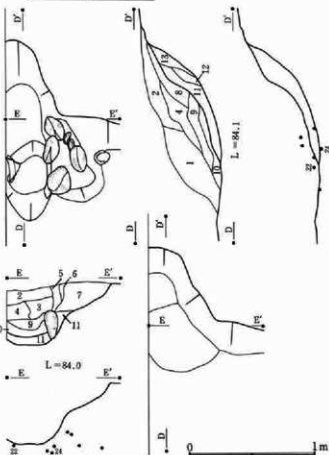


図100 2区18号住居遺構図

第4章 検出された遺構と出土遺物

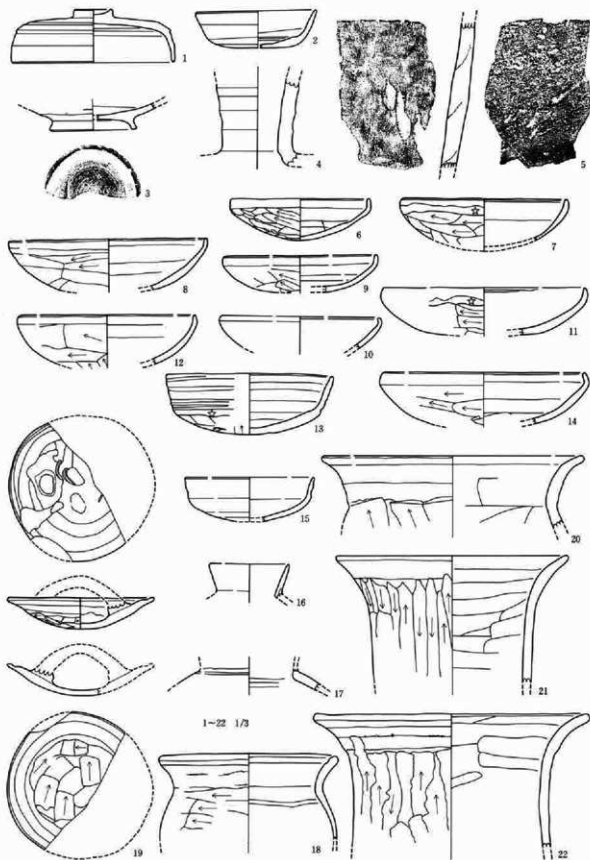


图101 2区18号住居出土土器図

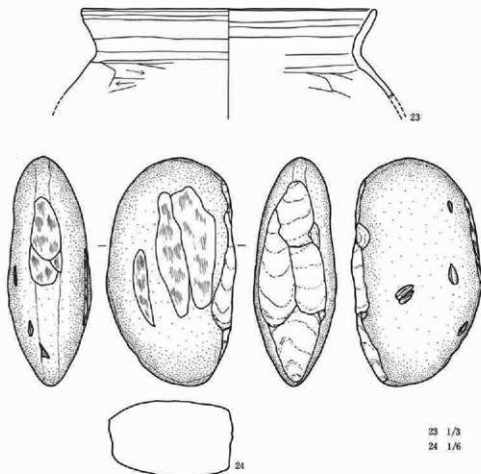


図102 2区18号住居出土遺物図

オ・ラボの分析によれば、その中に「割裂しているためその年輪数を確認できないが、年輪の曲率から推定すると比較的大きな、しかも年数のある材と思われる」とされる。出土土器から古墳時代後期に属すると考えられる。

2号18号住居 図版番号 遺構図版20 遺物図版57・58

位置 AV-25 残存深度 53cm 平面形状 約半分が調査対象地外であるが、方形か。規模 南辺4.10m 主軸方位 N-90°-E 埋没土 自然埋没である。周壁 約75°の傾斜で立ち上がる。床面 ほほ平坦であるが、顕著な硬化面は確認できなかった。周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 未検出である。掘り方 顕著には認められず。竈 位置 東辺中央部か。主軸方位 N-88°-E 形状 舌状。規模 全長1.40m 屋外長0.75m 屋内長0.65m 焚口・燃焼部 楕円形。燃焼部は壁の内側。袖 右袖には磔を据えている。煙道 燃焼部から急角度で立ち上がる。掘り方 舌状。遺物出土状況 竈内や床面直上を中心として須恵器・土師器・加工痕のある磔が出土した。土師器の中で19は、貼付した粘土紐の延長方向の推定と、反対側に微かにへら状工具のあたりが存在することから、取っ手付きの皿と理解した。しかし、皿とした場合、内面の調整が不十分とも思われ、蓋の可能性もある。また、24の偏平な楕円磔は竈の右袖部から出土したが、片面に研磨痕、側面に削り痕が顕著に認められる。さらに、南東部から

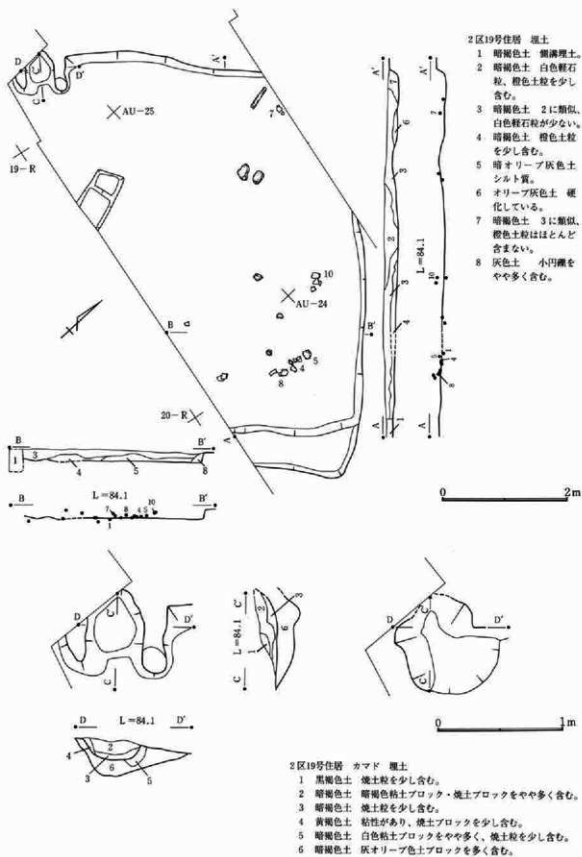


図103 2区19号住居遺構図

1. 竖穴住居

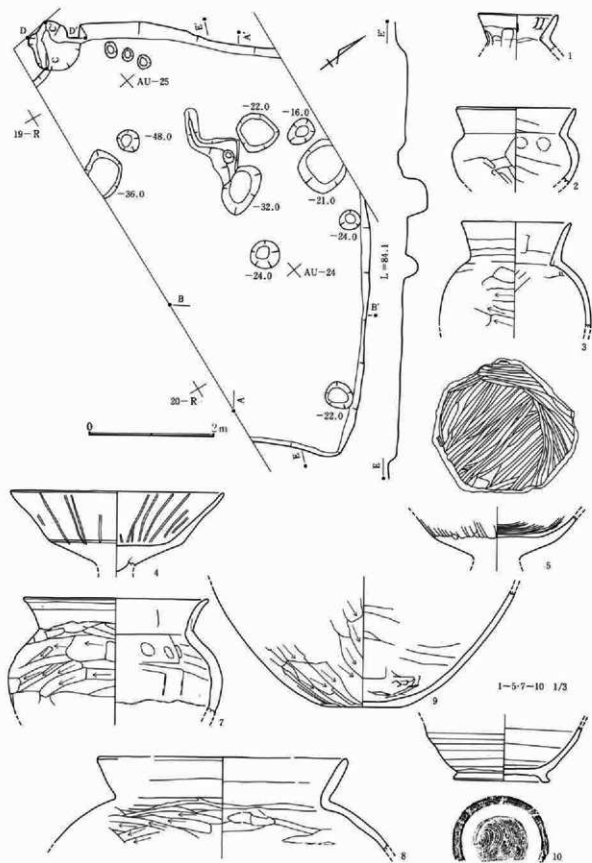
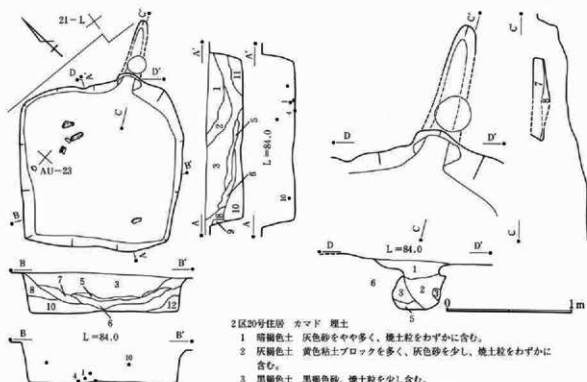


图104 2区19号住居遺構・出土土器図

第4章 検出された遺構と出土遺物



2区20号住居 カマド 埋土

- 1 暗褐色土 灰色砂をやや多く、焼土粒をわずかに含む。
- 2 灰褐色土 黄色粘土ブロックを多く、灰色砂を少し、焼土粒をわずかに含む。
- 3 黒褐色土 黒褐色砂、焼土粒を少し含む。
- 4 暗褐色土 やや粘性があり、焼土粒をやや多く含む。
- 5 黄褐色土 黄色粘土ブロックを多く、焼土ブロックをやや多く含む。
- 6 浅黄色土 シルト質。地山。
- 7 灰オリーブ色土 シルト質。地山。
- 8 暗灰オリーブ色土 7の焼土化。

2区20号住居 埋土

- 1 暗褐色土 オリーブ灰色シルトブロックを少し、白色軽石粒、焼土粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 オリーブ灰色シルトブロックを多く、焼土粒をわずかに含む。
- 3 灰褐色土 1に類似。灰褐色砂をやや多く含む。
- 4 暗オリーブ灰色土 灰色砂をやや多く、オリーブ灰色シルトブロックを多く含む。
- 5 オリーブ灰色土 シルト質で、灰色砂を多く含む。
- 6 灰褐色土 灰褐色土をやや多く、焼土粒をわずかに含む。
- 7 暗オリーブ灰色土 灰色砂を多く含む。上部に炭化物を含む。
- 8 オリーブ灰色土 シルト質で、灰色砂を多く含む。
- 9 オリーブ灰色土 壁の崩落土。
- 10 暗オリーブ灰色土 灰色砂を多く、焼土粒をわずかに含む。
- 11 オリーブ灰色土 灰色砂を多く含む。
- 12 灰褐色土 シルト質で、オリーブ灰色シルトブロック、灰褐色砂をやや多く含む。

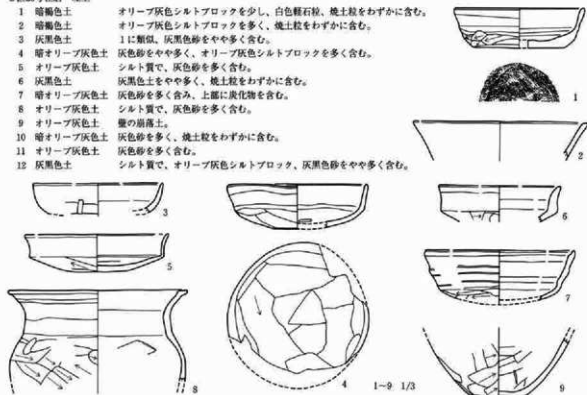


図105 2区20号住居遺構・出土土器図

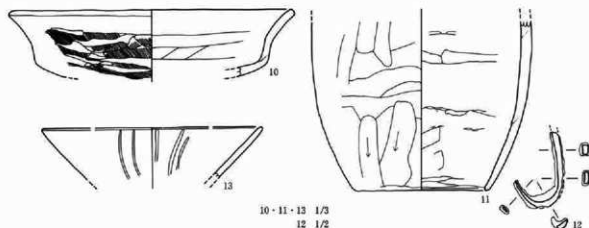


図106 2区20号住居出土遺物図

は、半径30～50cmで年輪数が11～15年以上のブナ科コナラ属クスギ節の炭化材が出土した。所見 炭化材が出土し、埋土中にも焼土ブロックや炭化物を含むことから、焼失家屋の可能性が高い。出土土器から奈良時代に属すると考えられる。

2区19号住居 図版番号 遺構図版20・21 遺物図版58

位置 AT-23 残存深度 23cm 平面形状 調査範囲が住居全体の約2/3であり、また南壁の立ち上がりが見えないため、不確定要素があるが、長方形であろうか。規模 東辺約6.2m 北辺約5.4mか。主軸方位 N-42°-W 埋没土 自然埋没か。周壁 約80°の傾斜で立ち上がる。床面 はほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は認められない。周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 床面調査時には未検出である。掘り方 大小のピットを確認し、柱穴の可能性のあるピットも存在するが、組み合わせが不明であり、積極的に柱穴と認定することはできなかった。竈 位置 北辺西端部。主軸方位 N-52°-W 形状 舌状。規模 全長0.70m 屋外長0.20m 屋内長0.50m 袖部幅0.95m 燃焼部幅0.30m 焚口・燃焼部 楕円形。燃焼部は壁の内側である。袖 短い。煙道 燃焼部から急角度に立ち上がる。掘り方 楕円形。遺物出土状況 床面直上を中心として土師器が出土した。また、北東部からはブナ科コナラ属クスギ節で、年輪数が15年以上の炭化材が出土した。所見 住居の使用時の調査では南辺の立ち上がり部の外側に幅約60cmで2～3cmの段差をもつ平坦面を確認し、掘り方の調査時にはその外側の部分まで掘り方と認めた。使用時の調査では掘り足らなかったものと思われる。炭化材が出土しており焼失家屋の可能性が高い。高台付碗も出土したが、主体は古墳時代中期と考えられる。

2区20号住居 図版番号 遺構図版21 遺物図版59

位置 AT-22 残存深度 62cm 平面形状 方形。規模 東辺2.20m 西辺2.20m 南辺2.40m 北辺2.10m 主軸方位 N-45°-E 埋没土 自然埋没である。周壁 約79°の傾斜で立ち上がる。床面 はほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は確認できなかった。周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 未検出である。掘り方 はほとんど認められず。竈 位置 東辺の南寄り。主軸方位 N-63°-E 形状 遺存不良で不明である。規模 全長1.15m 屋外長0.85m 屋内長0.30m 燃焼部 壁の内側である。袖 遺存不良である。煙道 燃焼部から緩やかに立ち上がり、端部で急角度に立ち上がる。

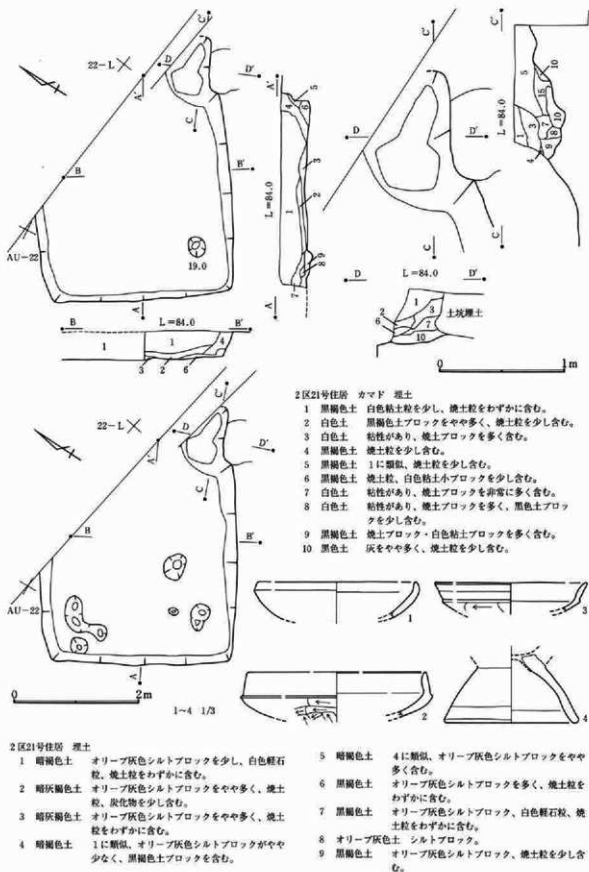


図107 2区21号住居遺構・出土土器図

1. 竪穴住居

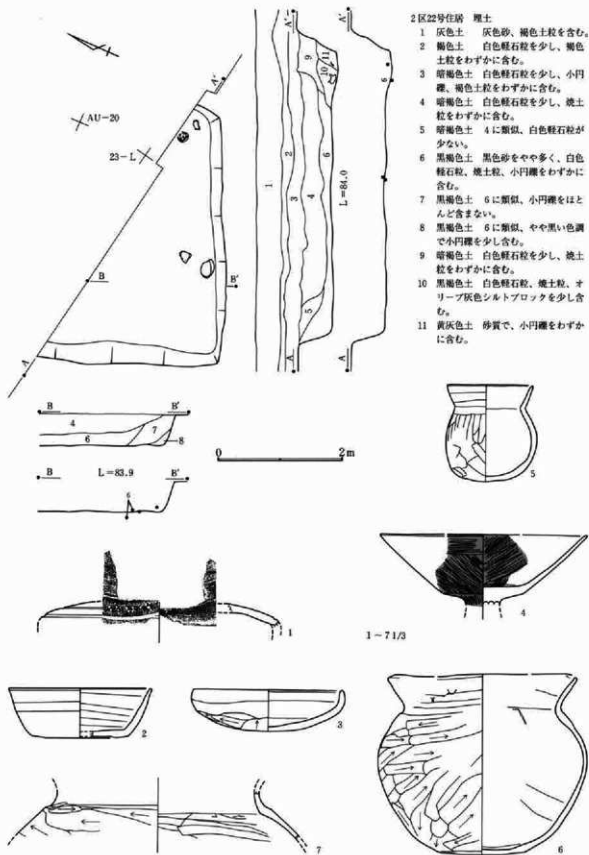


图108 2区22号住居遺構・出土土器図

第4章 検出された遺構と出土遺物

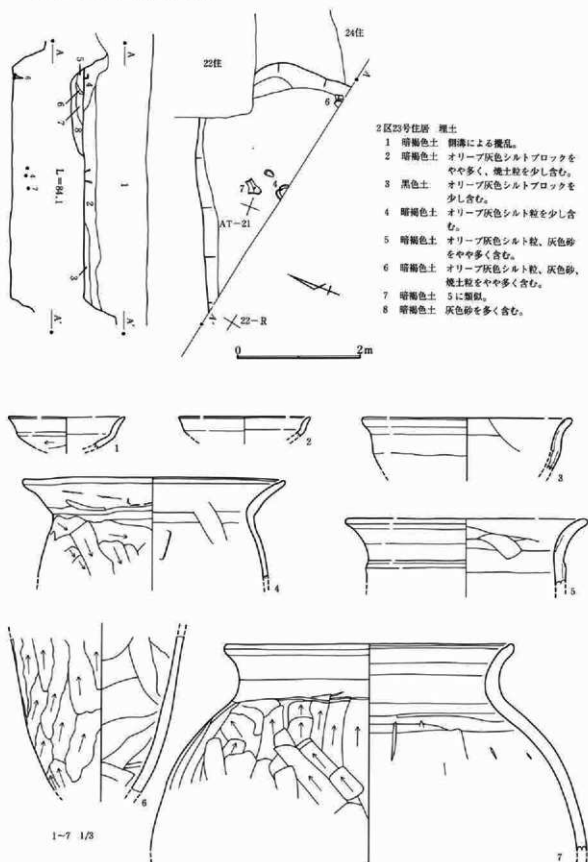


图109 2区23号住居遺構・出土土器図

1. 竪穴住居

遺物出土状況 埋土中から須恵器・土師器・鉄製品が出土した。釣り針状の鉄製品の先端部は細くなり、完結しているように見える。釘の湾曲したものと理解したが、別種の可能性もある。所見 床面直上からの異物出土がなく、埋土中からは「コ」の字口縁の土師器甕も出土したが、主体は古墳時代後期と考えられる。

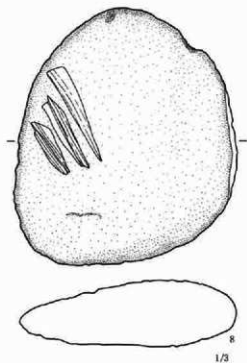


図110 2区23号住居出土遺物図

2区21号住居 図版番号 遺構図版21 遺物図版59

位置 AT-21 残存深度 45cm 平面形状 長方形。規模 西辺2.80m 南辺3.10m 主軸方位 N-60°-E 埋没土 自然埋没と考えられる。周壁 約75°の傾斜で立ち上がる。床面 ほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は確認できなかった。周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 床面調査時に南西部でピットを検出したが、対応するピットを検出できず、積極的に柱穴と認定するに至らなかった。掘り方 西部にピット群を検出し、柱穴の可能性も考えられたが、東部で検出できず、疑問が残る。竈 位置 東辺と南辺の隅部。主軸方位 N-90°-E 形状 舌状。規模 全長1.05m 屋外長0.55m 屋内長0.50m 燃焼部幅0.50m 焚口・燃焼部 楕円形。燃焼部は壁の内側である。袖 ほとんど遺存していない状況であった。煙道 燃焼部から緩やかに立ち上がる。遺物出土状況 埋土中より土師器が出土した。所見 古式土師器も出土しているが、出土した土師器坏から古墳時代後期と考えられる。

2区22号住居 図版番号 遺構図版21 遺物図版59

位置 AT-19 残存深度 49cm 平面形状 住居の約半分が調査対象地外のため、確定できないが、方形であろうか。規模 南辺3.90m 主軸方位 N-68°-E 埋没土 自然埋没と考えられる。周壁 約70°の傾斜で立ち上がる。床面 ほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は確認できなかった。周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 未検出である。掘り方 顕著には認められず。遺物出土状況 床面直上から須恵器・土師器が出土している。所見 出土土器から古墳時代中期に属すると考えられる。

2区23号住居 図版番号 遺構図版21・22 遺物図版60

位置 AS-20 残存深度 50cm 平面形状 住居の半分以上が調査対象地外のため、不明である。規模 一辺も完結して把握できず、不明である。主軸方位 北辺の走行を基準にすると、N-66°-E。埋没土 自然埋没と考えられる。周壁 約59°の傾斜で立ち上がる。床面 ほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は確認できなかった。周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 未検出である。掘り方 顕著には認められず。遺物出土状況 埋土中位から土師器が、床下から加工痕のある礫が出土した。所見 床面直上の土器がなく、不確定要素があるが、古墳時代後期に属すると考えられる。

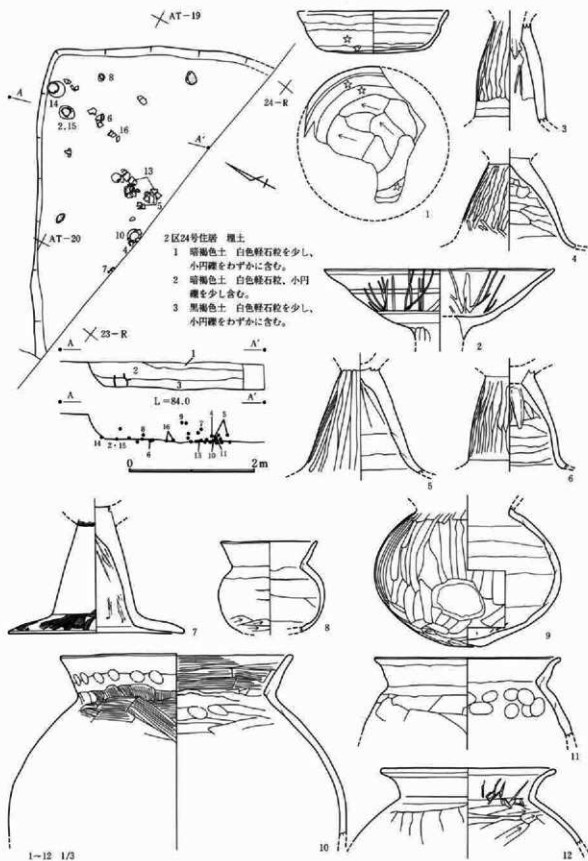


図111 2区24号住居遺構・出土土器図

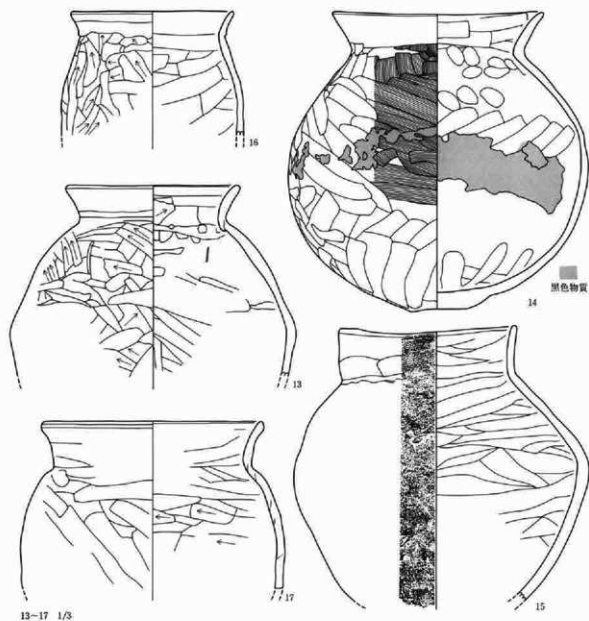


図112 2区24号住居出土土器図

2区24号住居 図版番号 遺構図版22 遺物図版60

位置 AS-18 残存深度 43cm 平面形状 不明。規模 不明。主軸方位 N-65°-E 埋没土 自然埋没。周壁 約53°の傾斜で立ち上がる。床面 ほぼ平坦。周溝 未検出。貯蔵穴 未検出。柱穴 未検出。掘り方 顕著には認められず。遺物出土状況 床面上を中心にして土師器が大量に出土した。所見 古墳時代中期。

2区25号住居 図版番号 遺構図版22 遺物図版61

位置 AS-16 残存深度 69cm 平面形状 方形か。規模 北辺3.15m 主軸方位 N-76°-E 埋没土 自然埋没。周壁 約73°の傾斜で立ち上がる。床面 ほぼ平坦。周溝 西壁に沿って検出。貯蔵穴

第4章 検出された遺構と出土遺物

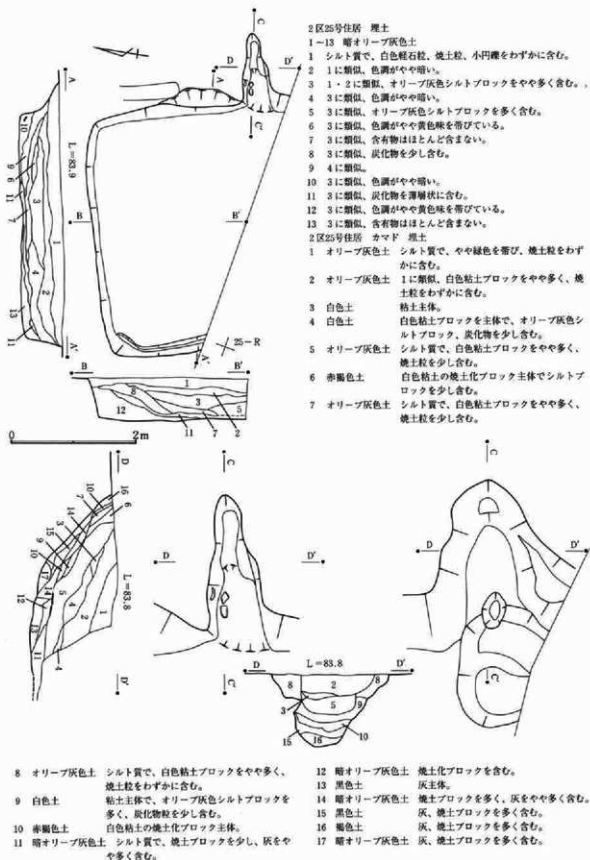


図113 2区25号住居遺構図

1. 竪穴住居

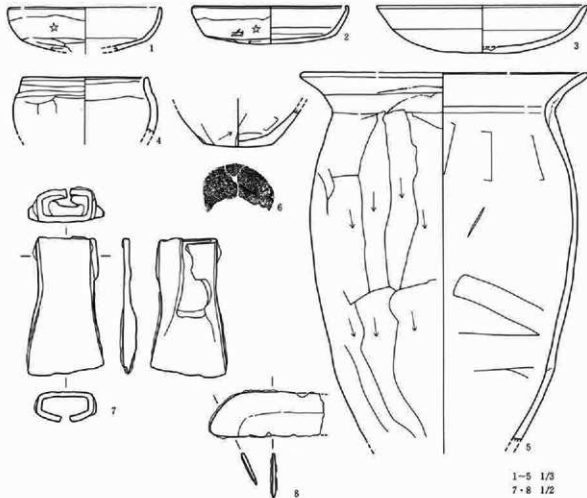


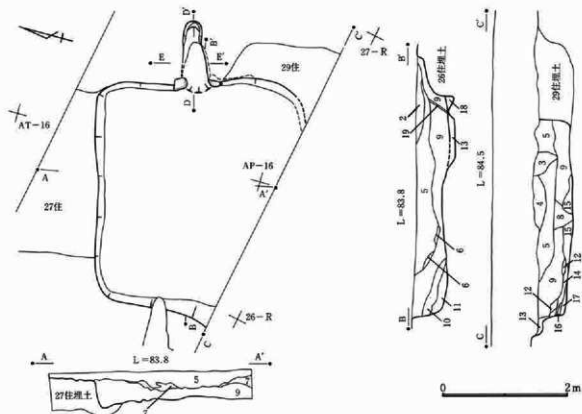
図114 2区25号住居出土遺物図

未検出。柱穴 未検出。掘り方 顕著には認められず。竈 位置 東辺南寄り。主軸方位 N-83°-E 形状 遺存不良で不明。規模 全長1.25m 屋外長0.80m 屋内長0.45m 燃烧部幅0.35m 焚口・燃烧部 楕円形か。袖 遺存不良。煙道 燃烧部から急角度で立ち上がる。掘り方 楕円形か。遺物出土状況 竈内と埋土中から土師器と鉄斧・右利き用の鎌が出土した。所見 奈良時代。

2区26号住居 図版番号 遺構図版22・23 遺物図版61

位置 AR-15 残存深度 54cm 平面形状 方形。規模 東辺3.20m 北辺3.20m 主軸方位 N-75°-E 埋没土 自然埋没。周壁 約82°の傾斜で立ち上がる。床面 やや凹凸がある。周溝 未検出。貯蔵穴 未検出。柱穴 未検出。掘り方 顕著には認められず。竈 位置 東辺中央部。主軸方位 N-74°-E 形状 遺存状況不良で不明。規模 全長1.15m 屋外長0.80m 屋内長0.35m 燃烧部幅0.35m 焚口・燃烧部 楕円形か。燃烧部は壁の外側か。袖 遺存不良。両袖に礫を据えている。煙道 燃烧部から緩やかに立ち上がり、竈部で急角度に立ち上がる。遺物出土状況 埋土中から須恵器・土師器・加工痕のある礫が出土した。所見 29号住居を切る。27号住居が乗る。埋土中から軟質陶器も出土しているが、主体は奈良時代である。

第4章 検出された遺構と出土遺物



2区26号住居 埋土

- 1 暗褐色土 耕作土。
- 2 褐色土 灰オリーブ色シルトブロックを多く、白色軽石粒、赤褐色土ブロックを少し含む。
- 3 褐色土 白色軽石粒、焼土粒をわずかに含む。
- 4 褐色土 灰オリーブ色シルトブロックをやや多く、白色軽石粒、焼土粒をわずかに含む。
- 5 褐色土 灰オリーブ色シルトブロックをやや多く、赤色粒子を少し、白色軽石粒をわずかに含む。
- 6 黒色土 焼土、炭化した木材を含む。
- 7 灰オリーブ色土 シルト質。
- 8 褐色土 灰オリーブ色シルト小ブロックを含む。擾乱か。
- 9 褐色土 5に類似、焼土粒を少し含む。
- 10 灰オリーブ色土 褐色土ブロックを多く含む。
- 11 暗褐色土 灰オリーブ色シルト小ブロックを少し含む。
- 12 灰オリーブ色土 シルト質で、焼土粒を含む。
- 13 灰オリーブ色土 シルト質。地山の崩落土。
- 14 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 15 褐色土 灰オリーブシルト小ブロックをやや多く含む。
- 16 灰オリーブ色土 シルト質。地山の崩落土。
- 17 暗褐色土 含有物はほとんどない。
- 18 褐色土 灰オリーブ色シルト小ブロックをやや多く、上面に炭化物を薄くのせる。
- 19 灰オリーブ色土 やや砂質の塊砂。

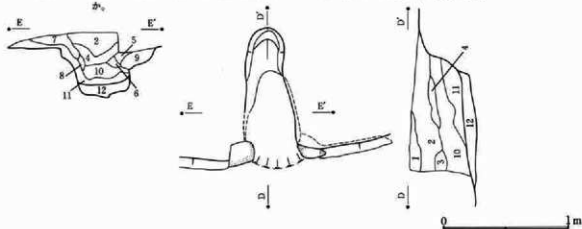
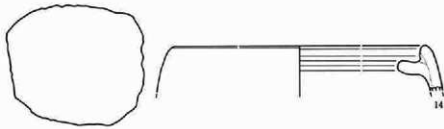
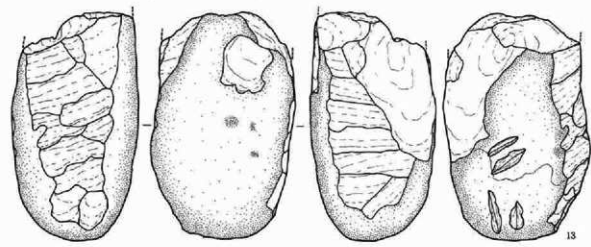
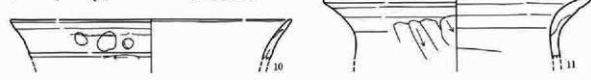
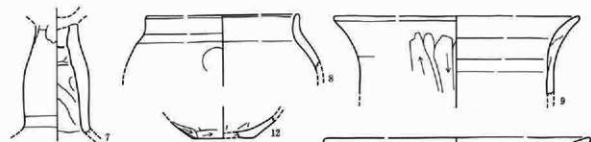
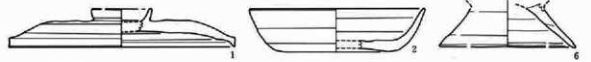
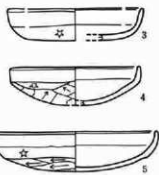


図115 2区26号住居遺構図

1. 竪穴住居

- 2区26号住居 カマド 埋土
- 1 褐色土 白色軽石粒、赤褐色土ブロックをわずかに含む。
 - 2 灰オリーブ色土 赤褐色土ブロックをやや多く含む。
 - 3 褐色土 灰オリーブ色シルトブロックを少し、赤褐色土ブロックをわずかに含む。
 - 4 褐色土 3にほぼ類似。
 - 5 褐色土 灰オリーブ色シルトブロックをやや多く、炭化物をわずかに含む。
 - 6 灰オリーブ色土 赤褐色土ブロックを少し含む。
 - 7 褐色土 白色軽石粒、焼土ブロックをわずかに含む。
 - 8 灰オリーブ色土 シルト質で、暗褐色土ブロックを含む。
 - 9 白色土 粘土。部分的に鉄分沈着による褐色部分あり。
 - 10 褐色土 灰オリーブ色シルトブロックをやや多く、炭化物を少し含む。
 - 11 灰オリーブ色土 赤褐色土ブロック、焼土粒を少し含む。
 - 12 黒褐色土 焼土をやや多く、灰を少し含む。



1~12・14 1/3
13 1/4

図116 2区26号住居出土遺物図

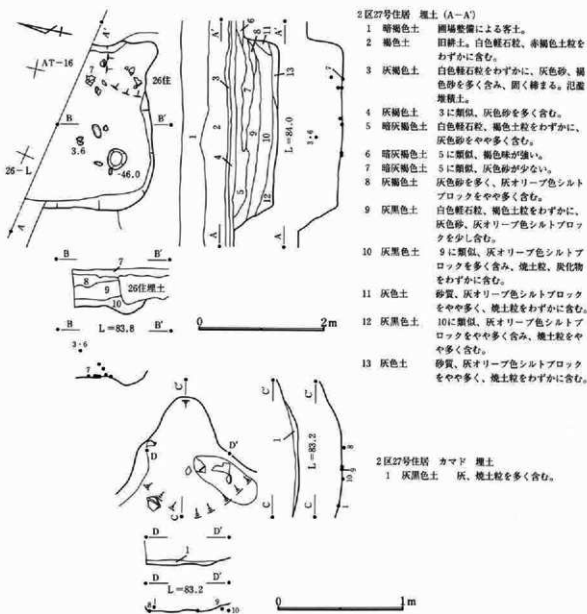
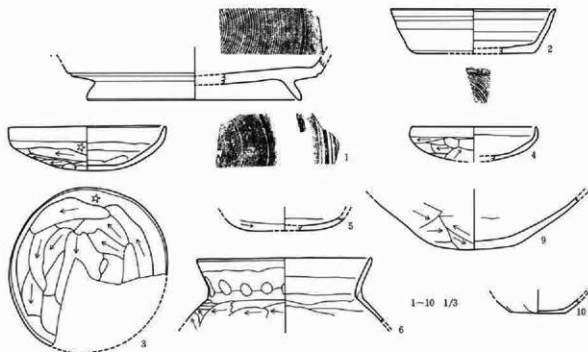


図117 2区27号住居遺構図

2区27号住居 図版番号 遺構図版23 遺物図版61

位置 AS-15 残存深度 76cm 平面形状 方形か。規模 南辺2.00m 主軸方位 N-11°-W 埋没土 自然埋没。周壁 約80°の傾斜で立ち上がる。床面 は平坦であるが、顕著な硬化面は確認できなかった。周溝 未検出。貯蔵穴 未検出。柱穴 南西部にピットを確認したが、他に対応するピットが確認できず、積極的に柱穴と認めるに至らなかった。掘り方 顕著には認められず。竈 位置 東辺と南辺の隅部。主軸方位 N-45°-W 形状 遺存不良で不明。規模 全長1.10m、屋外長0.40m 屋内長0.60m 焚口・燃焼部 楕円形状か。燃焼部は壁の内側。袖 遺存不良。煙道 燃焼部から緩やかに立ち上がる。遺物出土状況 竈内および竈の前部から、須恵器・土師器がややまとまって出土した。所見 出土土器から奈良時代に属すると考えられる。

1. 竪穴住居



2区28号住居

図版番号 遺構図版23

遺物図版62・65

位置 AS-17 残存深度 42cm
 平面形状 大半が調査対象地外であり不明。南辺に張り出し部を持つ。規模 不明。主軸方位 N-86°-E か。埋没土 自然埋没。周壁 約85°の傾斜で立ち上がる。床面 ほぼ平坦。周溝 未検出。貯蔵穴 未検出。柱穴 未検出。掘り方 顕著には認められず。遺物出土状況 南西部隅の床面直上を中心として、棒状礫や土師器・鉄製品・加工痕のある礫が出土した。所見 発掘時には南辺の張り出し部について土坑(11号土坑)として住居とは別個に扱っていたが、

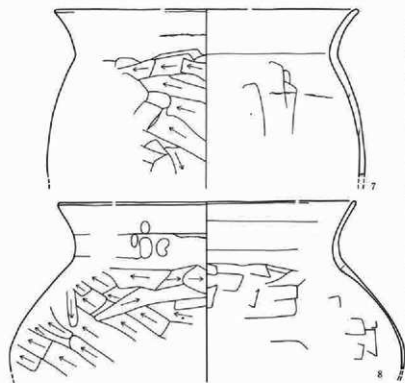


図118 2区27号住居出土土器図

埋土や床面の検討、そして土器の接合状況から住居の一部として認定した。奈良時代。

2区29号住居 図版番号 遺構図版23

位置 AR-15 残存深度 約30cm 平面形状 不明。主軸方位 N-74°-E か。埋没土 自然埋没か。

第4章 検出された遺構と出土遺物

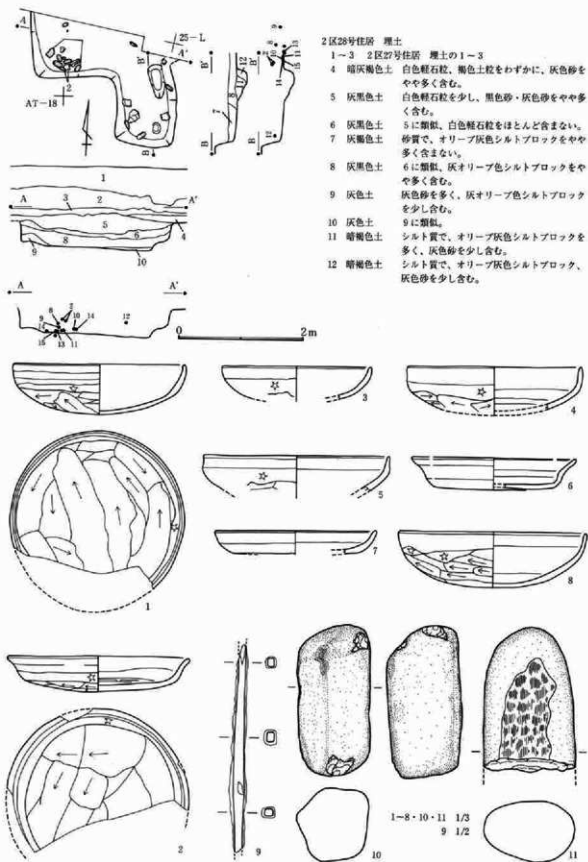
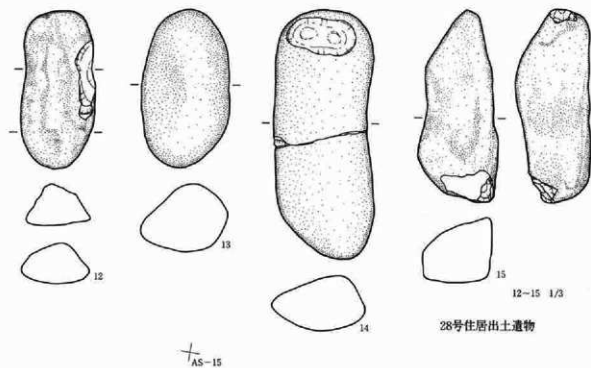
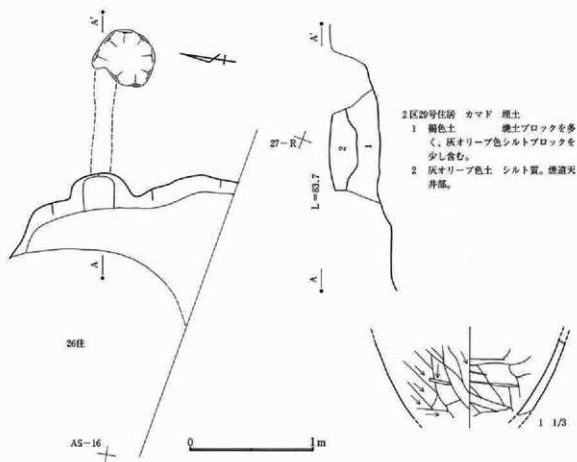


図119 2区28号住居遺構・出土遺物図

1. 竪穴住居

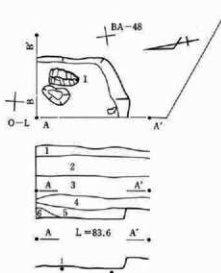


28号住居出土遺物



- 2区29号住居 カマド 燻土
 1 褐色土 燻土ブロックを多く、灰オリーブ色シルトブロックを少し含む。
 2 灰オリーブ色土 シルト質。燻道天井部。

図120 2区28号住居出土遺物・29号住居遺構・出土土器図



- 2区31号住居 埋土
- 1 暗褐色土 表土。
 - 2 暗褐色土 耕作土。
 - 3 褐色土 白色軽石粒、灰オリーブ色シルトブロック、砂粒、赤褐色土粒を少し含む。
 - 4 褐色土 砂粒を多く、赤褐色土粒を少し含む。
 - 5 褐色土 灰オリーブ色シルトブロックをやや多く、焼土粒を少し含む。
 - 6 褐色土 灰オリーブ色シルトブロックを多く含む。

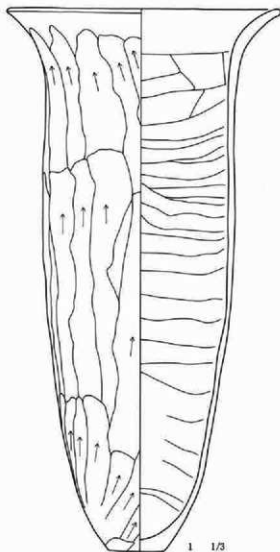


図121 2区31号住居遺構・出土遺物図

周壁 未検出である。床面 ほぼ平坦である。
 周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。
 柱穴 未検出である。掘り方 顕著には認められなかった。竈 位置 東辺北寄りか。主軸方位 $N-81^{\circ}-E$ か。形状 遺存不良で不明。規模 全長1.80m 屋外長1.20m 屋内長0.60m 燃焼部 壁の内側か。袖 遺存不良。煙道 燃焼部からトンネル状に縦く立ち上がり、端部で急角度に立ち上がる。遺物出土状況 埋土中から土師器片が出土している。所見 出土土器が体部破片であり、所属時期は不明である。

2区31号住居

図版番号 遺構図版23 遺物図版62

位置 AY-48 残存深度 約32cm 平面形状 大半が調査対象地外のため不明である。規模 不明。主軸方位 調査範囲が狭いため不確定要素が多いが、比較的確実に検出された車壁の走行を基準にすると、 $S-80^{\circ}-E$ である。埋没土 自然埋没と考えられる。周壁 約75°の傾斜で立ち上がる。床面 ほぼ平坦であるが、顕著な硬化面は確認できなかった。周溝 未検出である。貯蔵穴 未検出である。柱穴 東南隅部にあたる部分で、平面形が長軸約40cm、短軸約30cmの不正楕円形で深さ約22cmのピットが検出され、柱穴の可能性がある。掘り方 顕著には認められなかった。遺物出土状況 東南隅部の床面直上より、体部が約半分欠損した土師器甕が1点出土した。所見 出土した土師器から古墳時代後期に属すると考えられる。

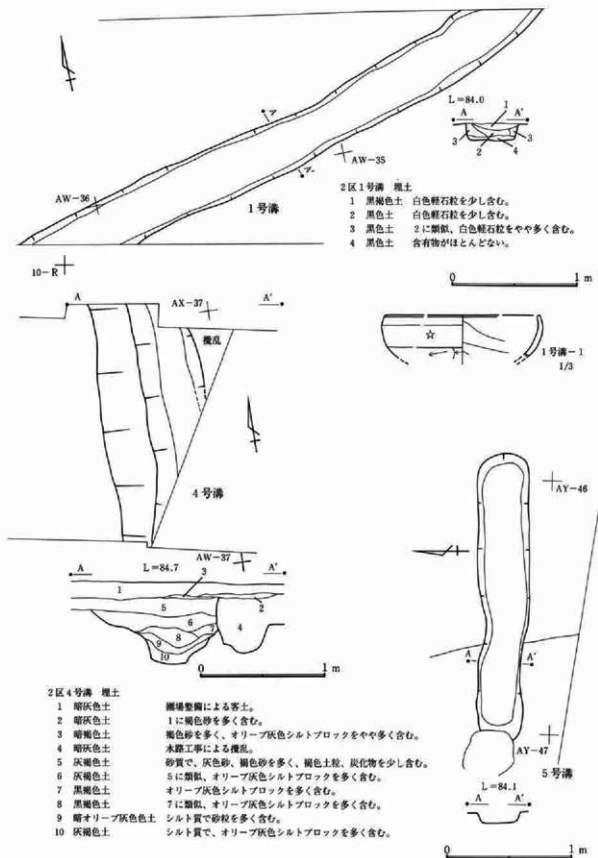


図122 2区1号溝遺構・出土土器・4・5号溝遺構図



2. 溝

2区1号溝

2区のAW-34からAW-36にかけて検出された。幅約45cmで深さ12cmの断面が「U」字状である。北東方向から南西方向への走行であり、主軸は $N-75^{\circ}-E$ である。土師器坏が出土したが、かならずしも所属時期を示すとは考えられず。時期は確定できない。

2区3号溝

2区のAU-28・29で検出された。幅約60cmで深さ12cm、断面が「U」字状である。ほぼ東西方向の走行であり、主軸は $N-88^{\circ}-E$ である。土師器と軟質陶器が出土しているが所属時期は不明である。

2区4号溝

2区のAW-37で検出された。ほぼ南北方向の走行であり、主軸は $N-2^{\circ}-E$ である。中央部は断面が「U」字状であるが、壁の立ち上がりは途中で緩くなり、上部は幅広となる。東側が攪乱を受け、規模が確定できないが、復元すると上幅は約250cmで、深さ42cmである。遺物は出土しておらず、所属時期は不明である。

2区5号溝

2区のAY-46で検出された。幅約33cmで深さ9cm、断面「U」字形である。ほぼ南北方向の走行であり、主軸は $N-89^{\circ}-E$ である。2区12号住居を切っているが、遺物は出土せず、所属時期は不明である。

2区3号溝 埋土

- 1 灰黒色土 オリーブ灰色シルトブロックをやや多く、灰黒色砂を多く含む。
- 2 灰黒色土 砂質で、褐色土粒、小角礫をわずかに含む。



図123 2区3号溝遺構・出土土器図

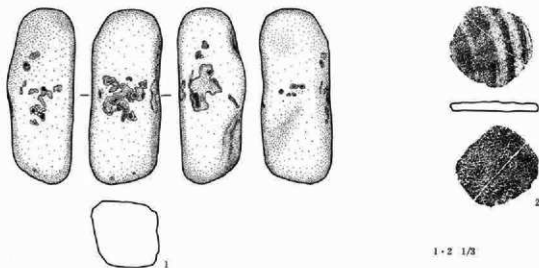
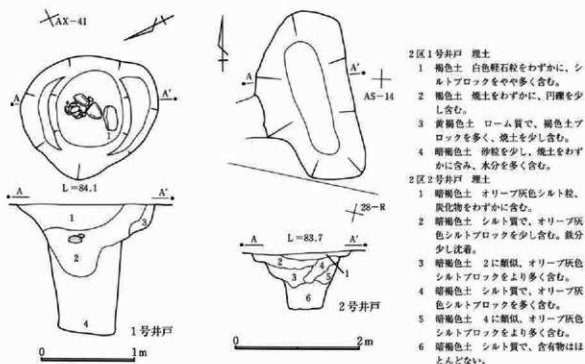


図124 2区1・2号井戸遺構・出土遺物図

3. 井戸

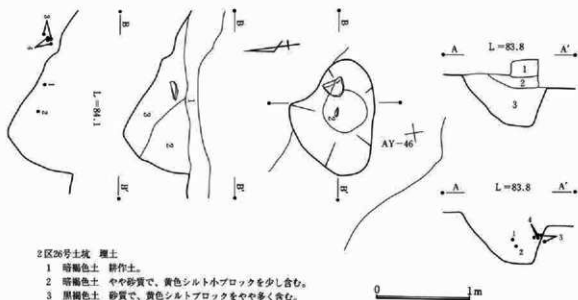
1号井戸 図124 遺構図版24 遺物図版62

2区 AX-41で検出された。中央部の径約80cmの円形で、上面の径約140cm、深さ約140cmである。上部は広がり、検出面では径約140cmの円形となる。埋土中から敲打痕のある礫と軟質陶器製円盤が出土した。

2号井戸

2区 AR-14で検出された。検出面で長軸約280cm、短軸約120cmの楕円形で、深さ約90cmである。

第4章 検出された遺構と出土遺物



2区26号土坑 埋土

- 1 暗褐色土 耕作土。
- 2 暗褐色土 やや砂質で、黄色シルト小ブロックを少し含む。
- 3 黒褐色土 砂質で、黄色シルトブロックをやや多く含む。

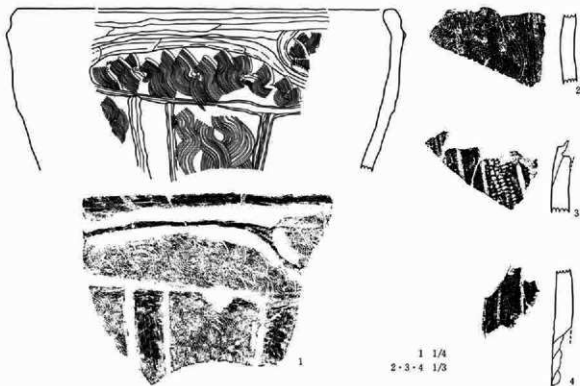


図125 2区26号土坑遺構・出土土器図

4. 土坑

1区で27基、2区で19基の合計46基の土坑が検出された。各土坑の規模、形状、出土遺物については、表1 (15ページ)、図136～148、図版24～27・62～65、遺物観察表 (225～229ページ) を参照されたい。

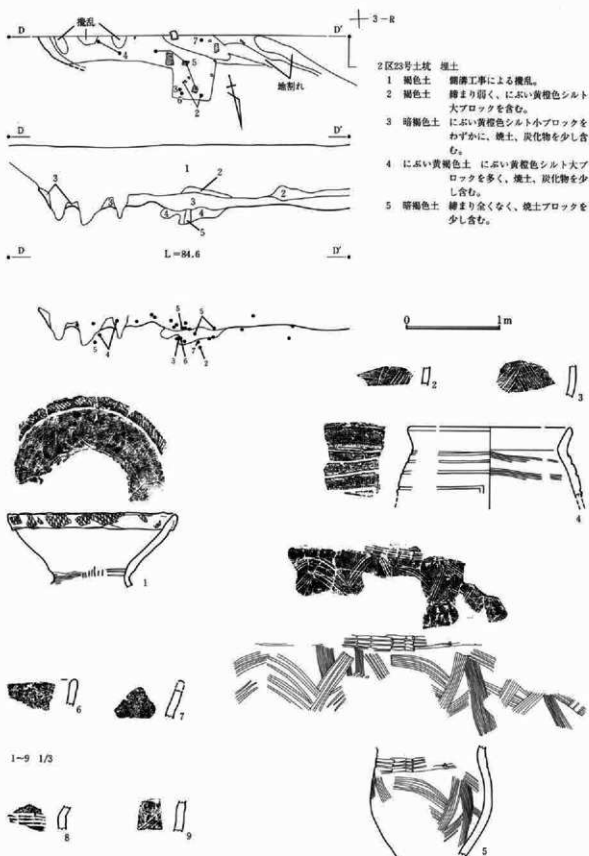


図126 2区23号土坑遺構・出土土器図

第4章 検出された遺構と出土遺物

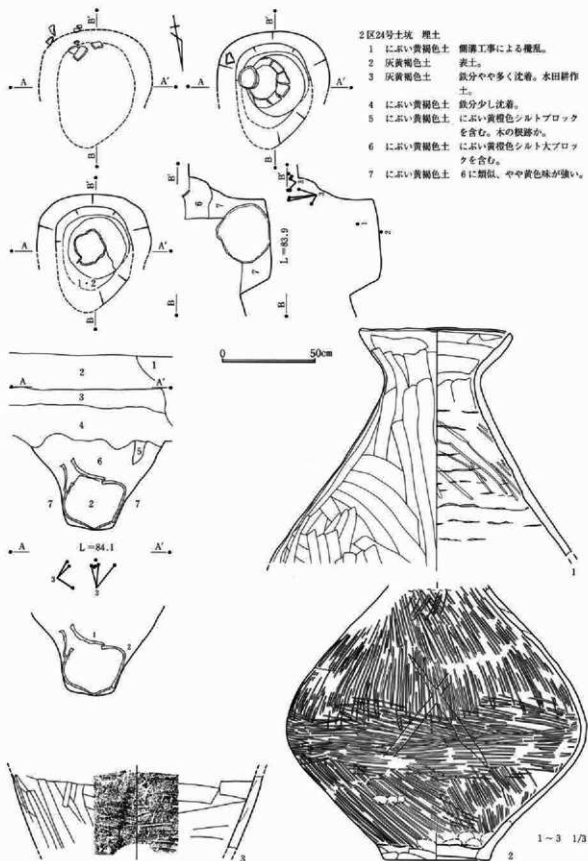


図127 2区24号土坑遺構・出土土器図

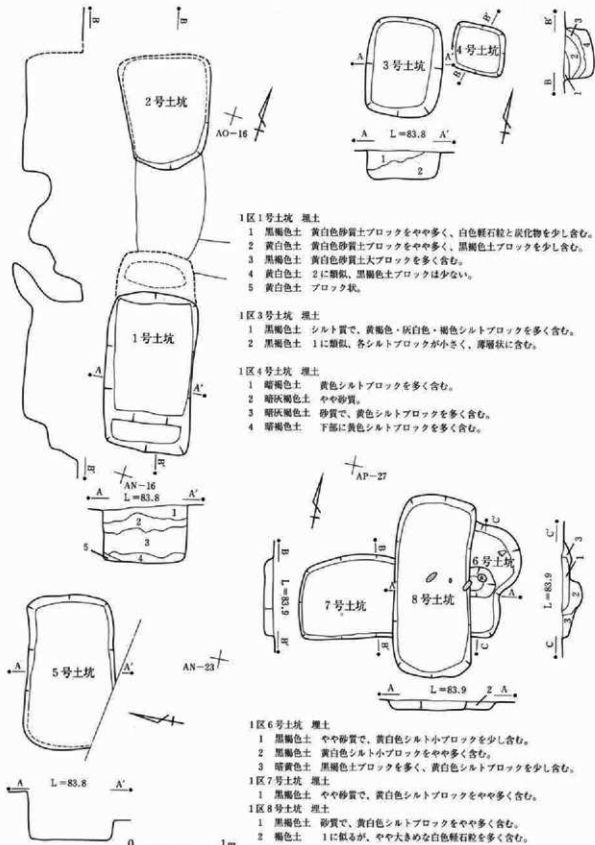


図128 1区1～8号土坑遺構図

第4章 検出された遺構と出土遺物

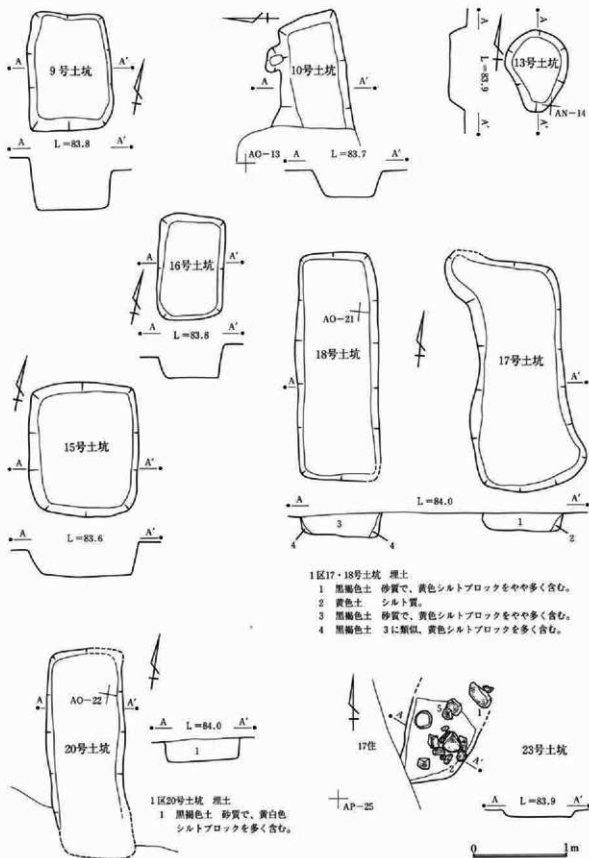


図129 1区9・10・13・15-18・20・23号土坑遺構図

4. 土坑

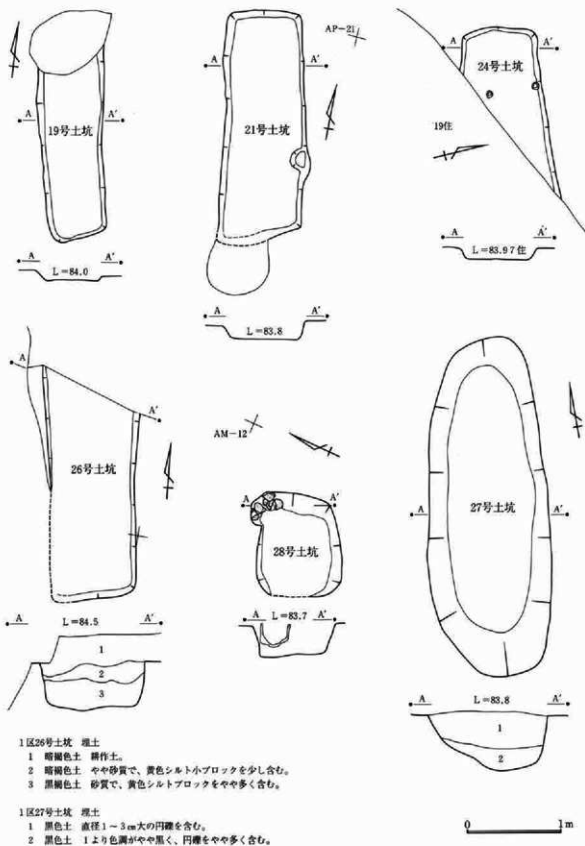


图130 1区19・21・24・26~28号土坑遺構図

第4章 検出された遺構と出土遺物

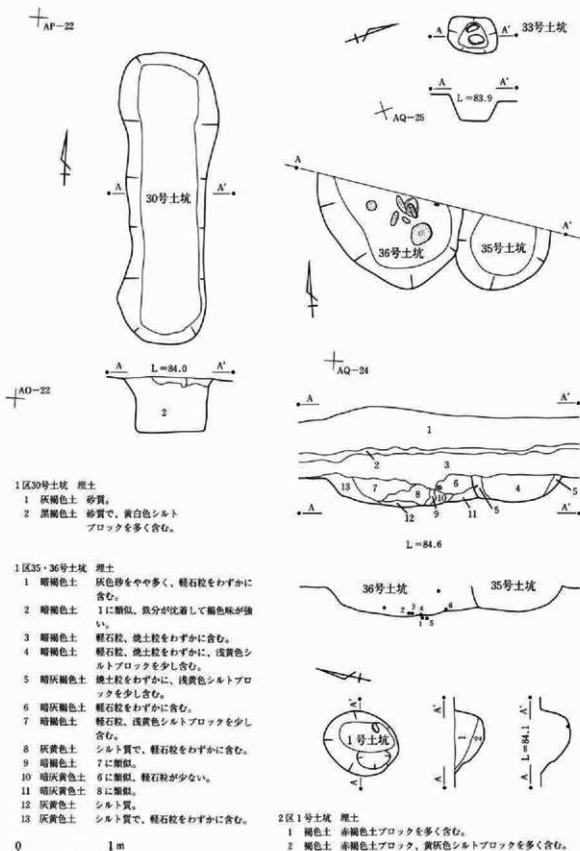
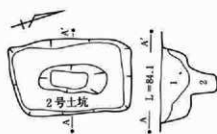


図131 1区30・33・35・36・2区1号土坑遺構図

4. 土坑



2区2号土坑 埋土

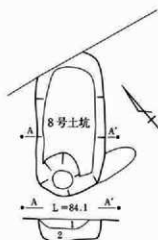
- 1 暗褐色土 黄灰色シルトブロックを多く含む。
- 2 暗褐色土 黄灰色シルトブロックをやや多く含む。



4号土坑 3号土坑

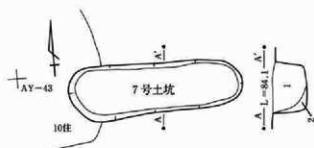
2区3号・4号土坑 埋土

- 1 黒褐色土 砂質、開場整備による客土。
- 2 暗オリーブ色土 シルト質で、灰オリーブ色シルト粒を少し含む。
- 3 暗オリーブ色土 シルト質で、灰オリーブ色シルトブロックをやや多く含む。
- 4 暗オリーブ色土 3に類似、灰オリーブ色シルトブロックが多い。
- 5 黒褐色土 シルト質で、灰オリーブ色シルト粒をやや多く含む。
- 6 灰オリーブ色土 シルトブロック。
- 7 灰褐色土 シルト質で、灰オリーブ色シルトブロックをやや多く含む。
- 8 暗オリーブ色土 シルト質で、灰オリーブ色シルトブロックを非常に多く含む。



2区8号土坑 埋土

- 1 褐色土 白色軽石粒をやや多く含む。
- 2 褐色土 1に類似、やや大きめの白色軽石粒を多く含む。



2区7号土坑 埋土 (6号土坑と重複か)

- 1 褐色土 灰オリーブ色シルトブロックをやや多く、
埋土を少し含む。
- 2 褐色土 灰オリーブ色シルトブロックをやや多く、
褐色土ブロックを含む。

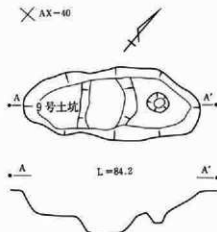


図132 2区2-4・7-9号土坑遺構図

第4章 検出された遺構と出土遺物

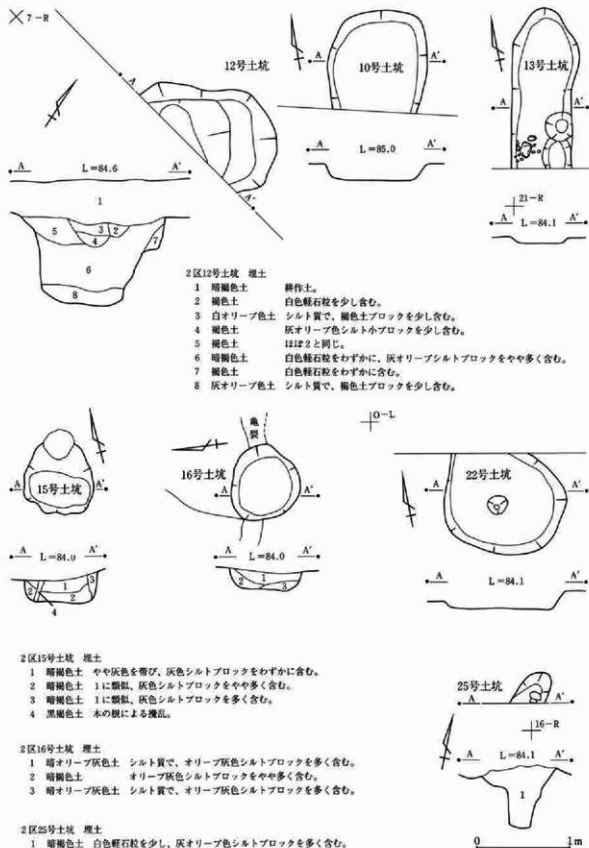


図133 2区10・12・13・15・16・22・25号土坑遺構図

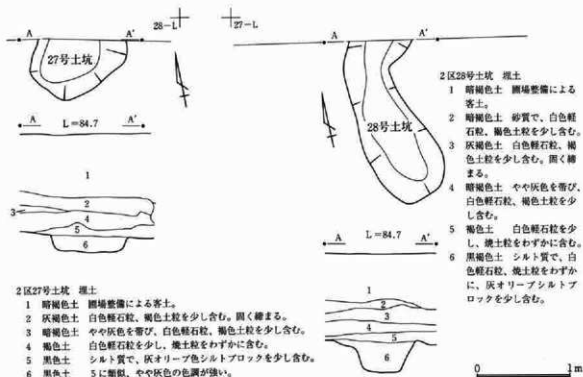


図134 2区27・28号土坑遺構図

ここでは、時期が特定できる土坑を中心として記載する。

なお、2区11土坑は、発掘時は単独の土坑として認識したが、整理の結果2区28号住居の一部と考えた。

2区26号土坑

下部文化層の調査中に砂層中で検出された。平面形・断面形とも不整形である。埋土の中心から縄文時代中期加曾利E3式の土器破片が4点出土した。

2区23号土坑

遺構の大半は道路下に延びる上に、掘削の工事の際に攪乱を受けており、規模・形状とも不明である。出土した土器はいずれも全形を知り得ない状況であるが、器形・体部文様から弥生時代中期後半の竜見町式に属するものである。埋土下部からは炭化材が多く出土し、樹種を同定した9点はすべてブナ科コナラ属クスギ節であった。

本遺構は土坑として扱ったが、硬化面は検出されなかつたものの、確認された範囲内でも幅約2.5m以上あり、竪穴住居の可能性も考えられる。

2区24号土坑

道路際の南壁にかかって、頸部の欠けた壺形土器に別個体の壺形土器の体部上半を被せた状態で検出された。埋土上部からは、土器片がややまとまって出土した。土器内・土坑埋土・周囲の土壌のリン・カルシウム分析の結果、土器内にはリン酸成分の高いものが存在したとされた。弥生時代中期後半の竜見町式期である。

2区25号土坑

道路際の南壁にかかって検出され、埋土上部から完形の土器器長頸壺が横倒しの状態で1点出土した。古墳時代後期である。

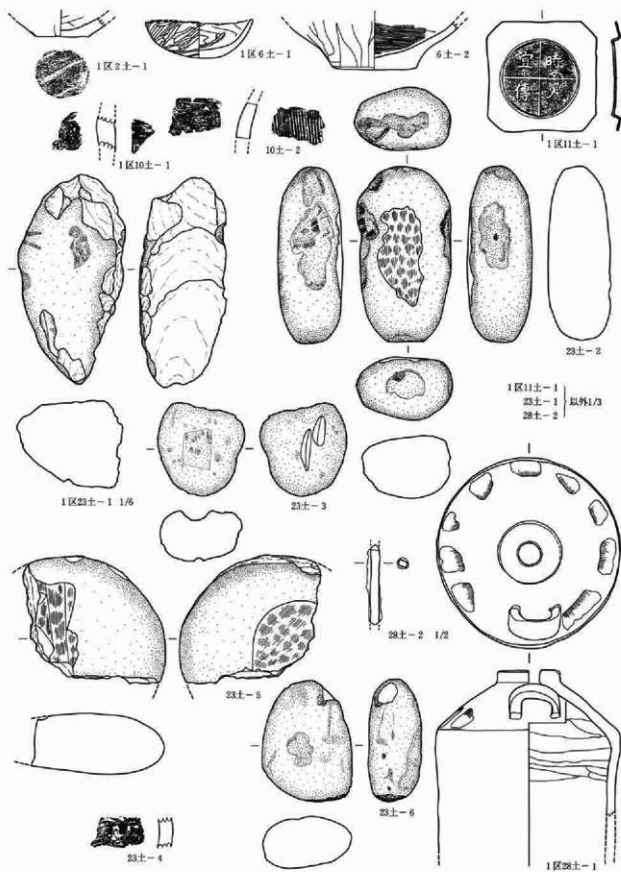


图135 1区2・6・10・11・23・28号土坑出土遺物図

4. 土坑

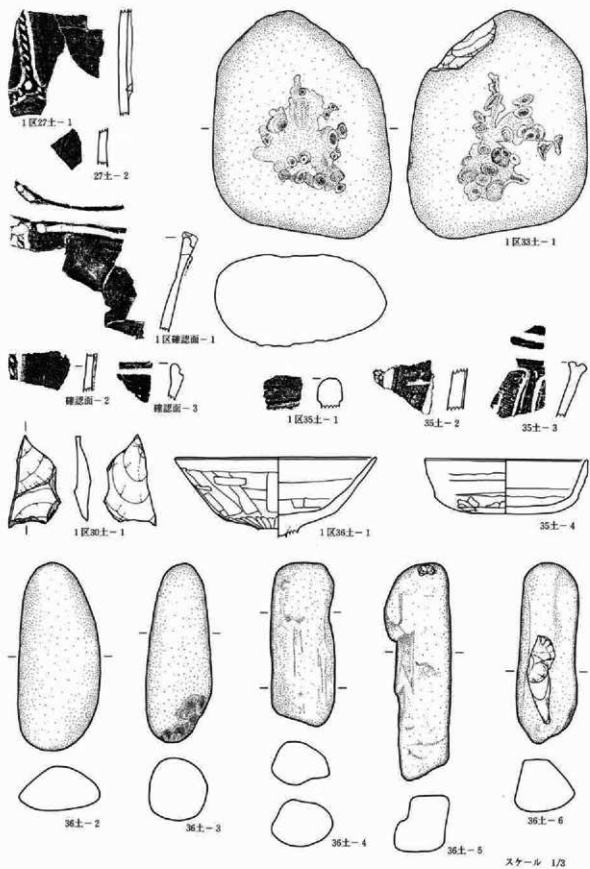


图136 1区27・30・33・35・36号土坑・1区確認面出土遺物図

第4章 検出された遺構と出土遺物

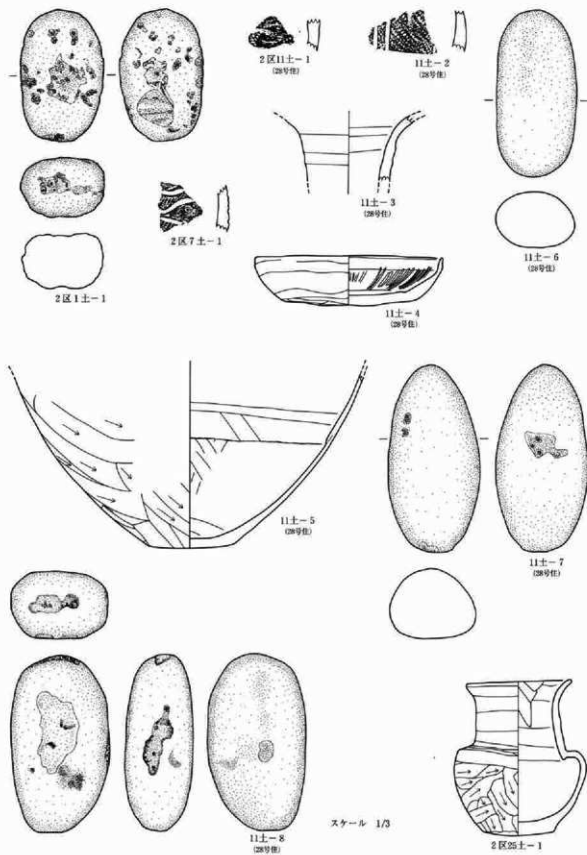


図137 2区1・7・11・25号土坑出土遺物図

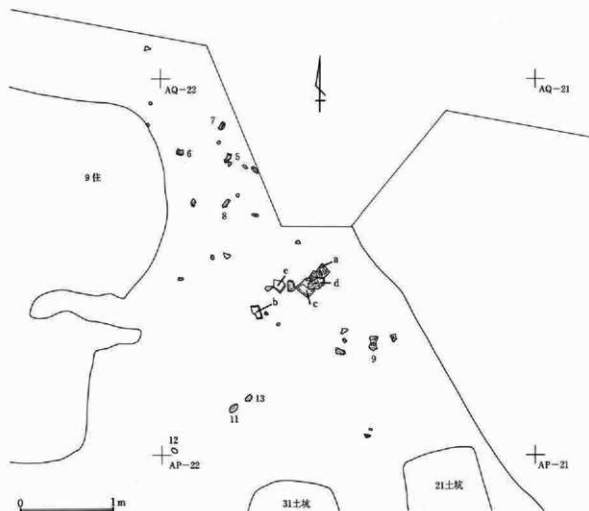


図138 第1遺物集中出土地点（1区）図

5. 遺物集中出土地点

下部のシルト層・砂礫層の中から、1区1箇所、2区2箇所縄文土器と石器が狭い範囲でやや集中して出土した。いずれも床面・柱穴等の遺構は伴わないが、有意の遺物群と考えられるので、遺物のまともりにここに記載する。

第1遺物集中出土地点 図138～140 図版26・66

1区 AP-21グリッドを中心として、下部のシルト層中より、約4m×3.5mの範囲で、縄文土器と石器が出土した。東側を1区12号住居で、西側を1区9号住居で切られ、北側は電柱が埋設されて調査できなかったが、遺物出土濃度を見ると遺物群のほぼ全体は調査しえたと考えられる。土器は破片であるがほぼ1個体と考えられ、石器は使用痕の顕著な打製石斧（9）や打製石斧の破片（8）、凹石（10～12）、楔形石器（7）などである。

土器が破片であることや、打製石斧も刃部の再生が進んでいたり破片であることなどから、遺物の廃棄の場所と考えたい。出土土器からして縄文時代中期加曾利E 3式の時期の一括資料であろう。

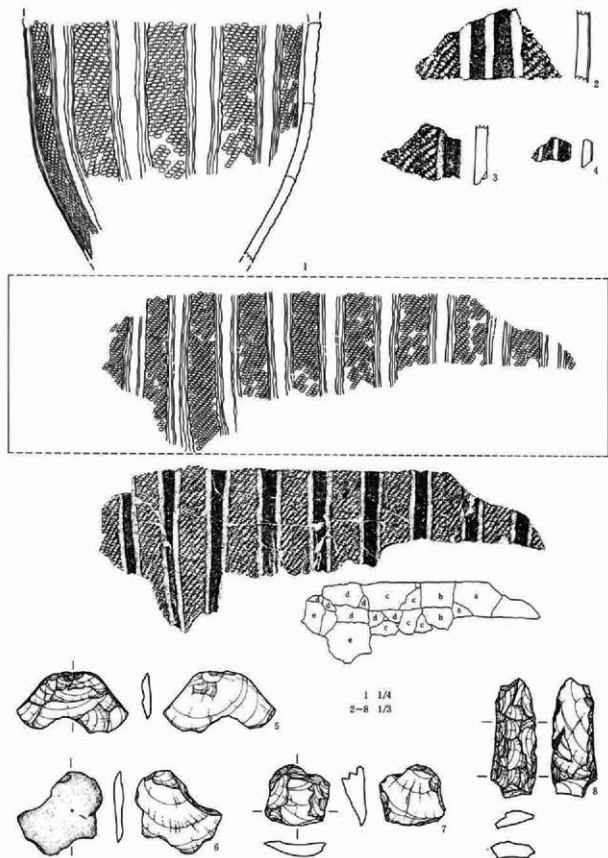


图139 第1遺物集中出土地点出土遺物図(1)

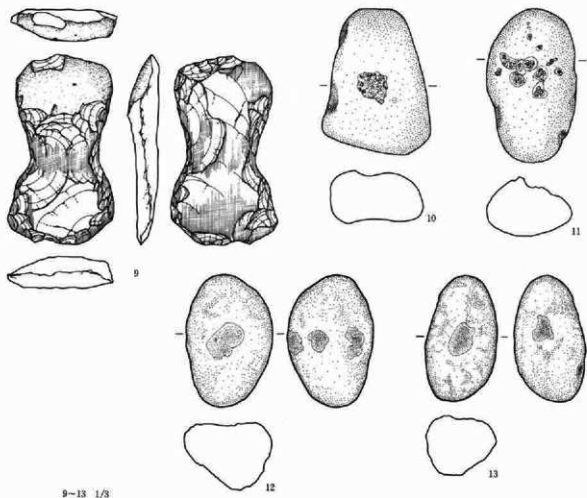


图140 第1遺物集中出土地点出土遺物図(2)

第2遺物集中出土地点 図141~143 図版28・29・67

2区 AX-44から AY-47グリッドにかけて、下部文化層の調査の最終時点で、砂礫層中からほぼ同一レベルで縄文土器と石器が出土した。遺物出土濃度はそれほど高くはなくやや散漫な出土状況を示す。

縄文土器は中期を主体とするが、前期に属するものと考えられるもの(1)が出土している。石器には楔形石器(28・31)や削器(32・34・36)が含まれ、他は剥片である。

1の土器片は内外面とも磨滅が著しく、他の土器に磨滅の痕跡がないのと対照的であり、河川により上流部からもたらされたものであろう。

出土地点が砂礫層中であり、堅穴住居の構築されうような環境にはなく、出土土器に完形品がなく、また土器片の間での接合頻度も低い。また遺物群の集中度も低く、総体的には遺物廃棄場の特徴を示しているものと考えられる。

1を除く出土遺物の総体は、土器の特徴から縄文時代中期加賀利E3式に属するものと考えてよいものであろう。

なお、4の深鉢は体部の約半分と底部が欠損している。底部は接合部からはずれたような状況であり、意識的に底部を穿孔しているかは疑問が残る。

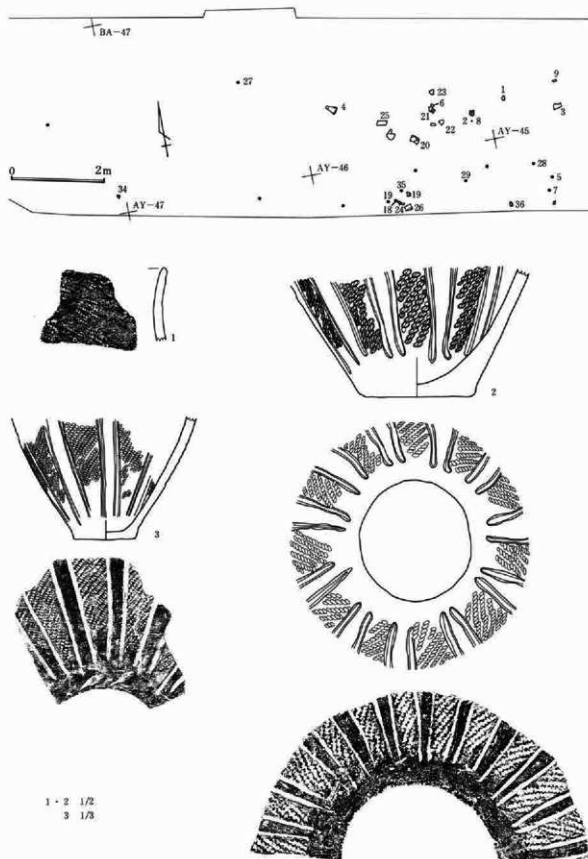
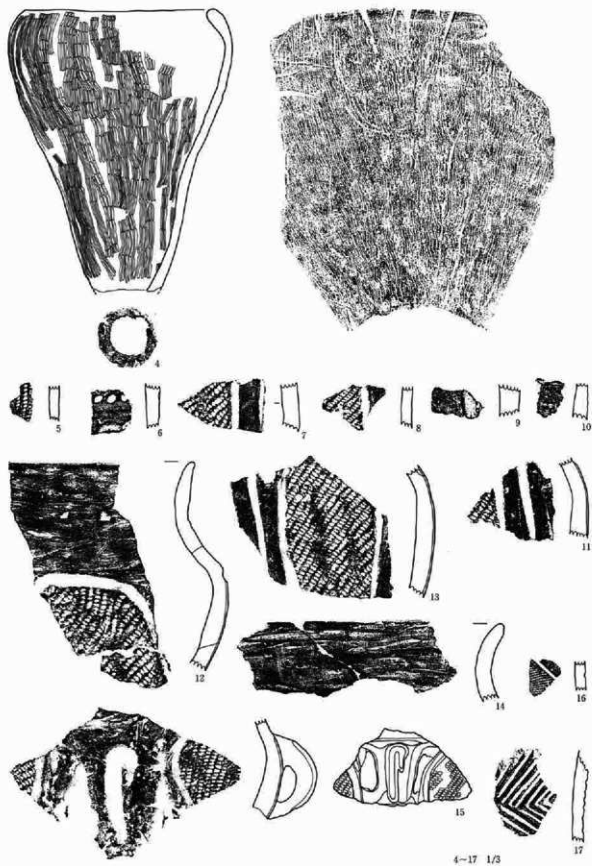


图141 第2遺物集中出土地点・出土土器図



4-17 1/3

图142 第2遺物集中出土地点出土土器图

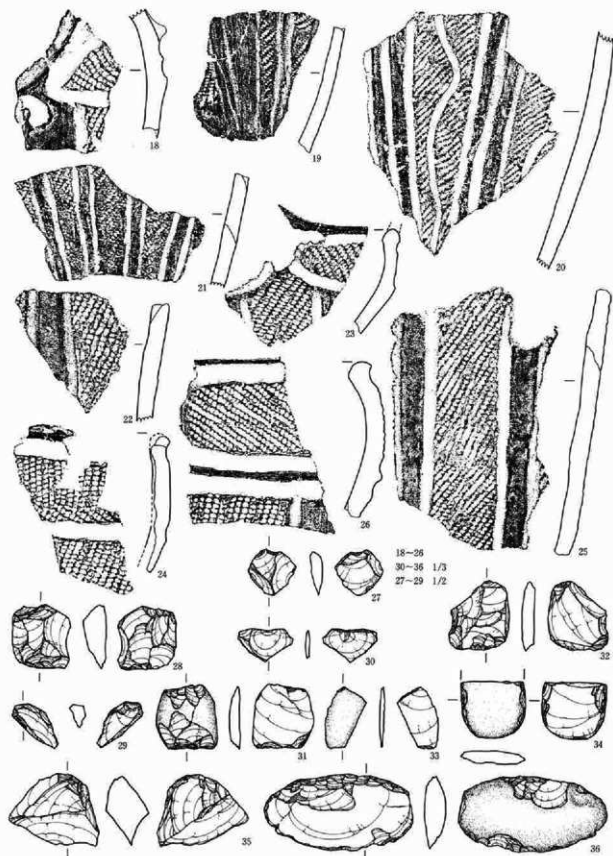


图143 第2遺物集中出土地点出土遺物図

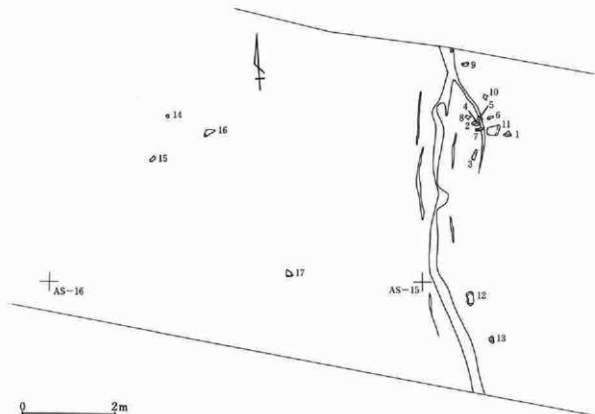


図144 第3遺物集中出土地点(2区)図

第3遺物集中出土地点 図144~147 図版29・68・69

2区27グリッド(AS-14-16)を中心として、下部の砂層中より、約4m×3.2mの範囲で、打製作石斧を含む石器が17点出土した。このうち、同一母岩に属する8点の石器が検出された。これらは、径1mに満たない範囲からまとまって出土し、出土レベルもほぼ同一である。以上のことから、これらの資料はほぼ同時期に一括して遺棄、もしくは廃棄されたものと思われる。この8点のうち5点が接合し、他の2点も接合するが、それぞれは接合しない。これらの接合資料について、その剥片剥離工程の復元を行なう。

接合資料1(図145-1・2)は、剥片2点が接合している。いずれも縦長の長さがほぼ等しく、背面に自然面を多く残す。調整加工や使用の痕跡は認められない。稜の一端に作り出された大きな剥離面(分割面の可能性もある)を打面とし、周囲の自然面を剥ぎ取るように剥片剥離を行なっている。打面調整は行なわれない。剥離は1→2の順に行なわれ、1の剥離以前に同一の打面から少なくとも一枚の剥片が剥離されている。以上のことから、これらの剥片は、剥片剥離工程の初期の段階のものと思われる。

接合資料2(図145-3-7)は、剥片5点が接合している。うち4点は縦長の剥片、1点は横長のものがあるが、比較的大きさの揃ったものである。接合資料1と同様、調整加工・使用痕ともに認められない。剥離は3→4→5→6→7の順に行なわれている。まず、3の剥離の前に打面を作出し、少なくとも2枚以上の剥片を剥離している。その後、打点近くに比較的小さな剥離を加え3を剥出している。それから複数の剥離によって打面再生を行なっている。一部に細かな調整が見られるが、いずれもその後剥離した剥片の打点とは関係のない部分にあり、打面調整の意味は持たないものと思われる。その後、4を剥離し、少なくとも1枚の剥片を剥離したのち5を剥離。再び打面再生を行なった後、6を剥離。小型の剥片を1枚剥離した

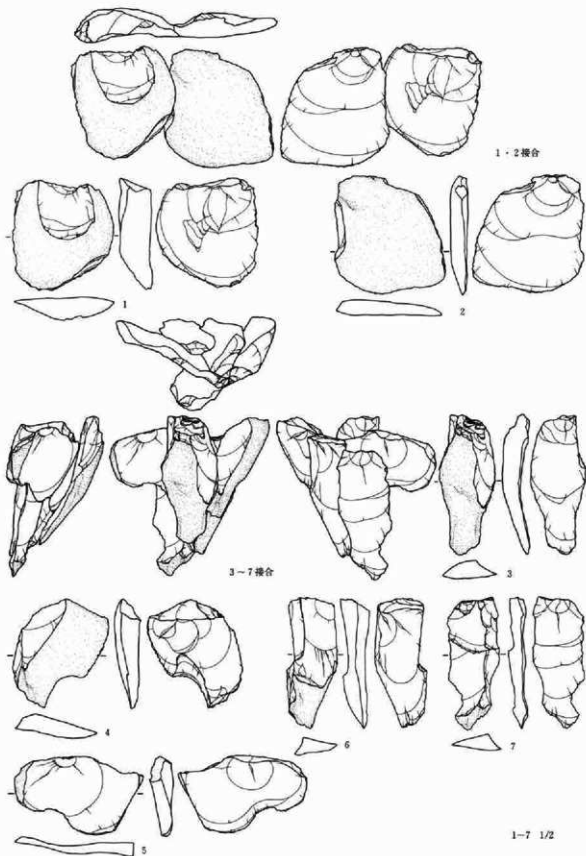
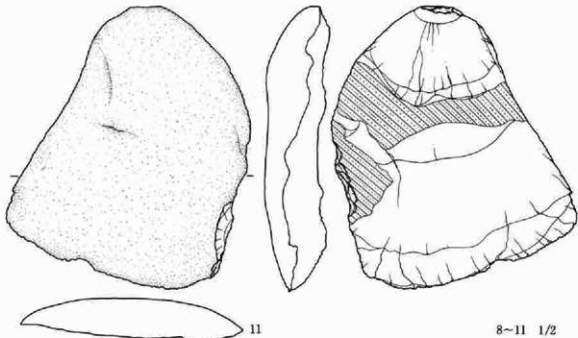
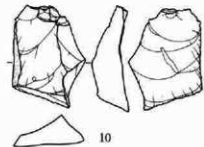
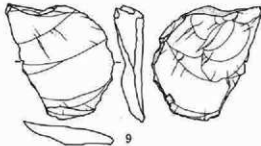
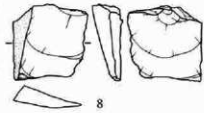


图145 第3遺物集中出土地点出土遺物圖(1)

後7を剥離している。以上の様に、この資料では打面と作業面を固定したまま、随時打面再生を行ないながら連続して剥片を剥離している。その間、頭部調整・打面調整などは施されない。5点の剥片全てに多かれ少なかれ自然面が残っていることから、石核調整はあまり行なわれなかったことがうかがえる。横長の剥片も含まれるが、基本的には縦長の剥片の剥離を意図していたものと思われる。

これらの接合資料の他に、図146-8が同一母岩に属する。先端が折れているが、背面と主要剥離面の剥離方向が同じで、背面の一部に自然面を残すなど、接合資料2の剥片と同様の特徴を示している。

前述した様に、これらの剥片はほぼ同じレベルからまとまって発見されている。しかし、剥片剥離にともなうチップや小型の剥片が見られないこと、接合資料2において繰り返し行なわれた打面再生に関する剥片がともなわないことなどから、出土した地点において剥片剥離が行なわれた可能性は少ない。むしろ形や大きさの似通った剥片ばかりであることから、特定の目的のために選択されたものと思われる。具体的には、利器の素材としての利用を目的として選択されたが、なんらかの理由で使用されないまま遺棄、もしくは廃棄されたものと考えられる。



8-11 1/2

図146 第3遺物集中出土地点出土遺物図(2)

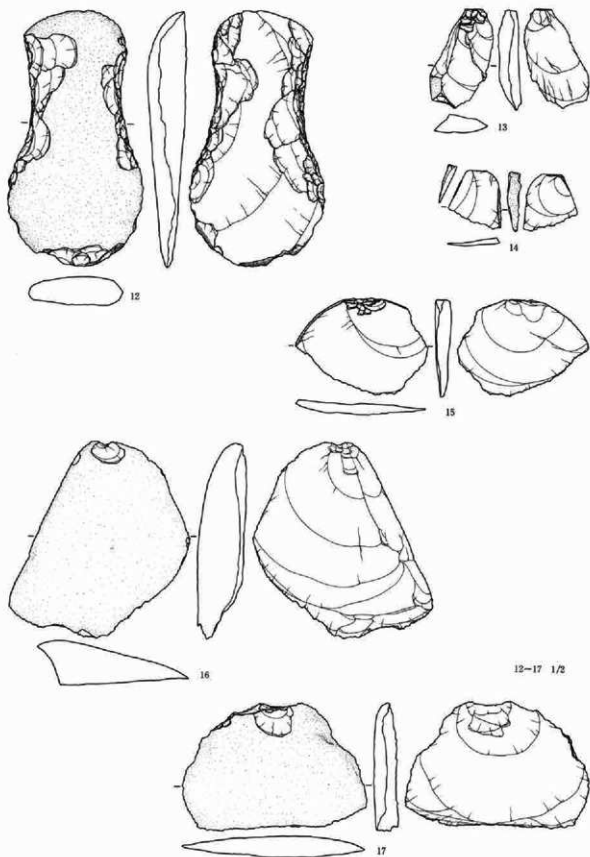
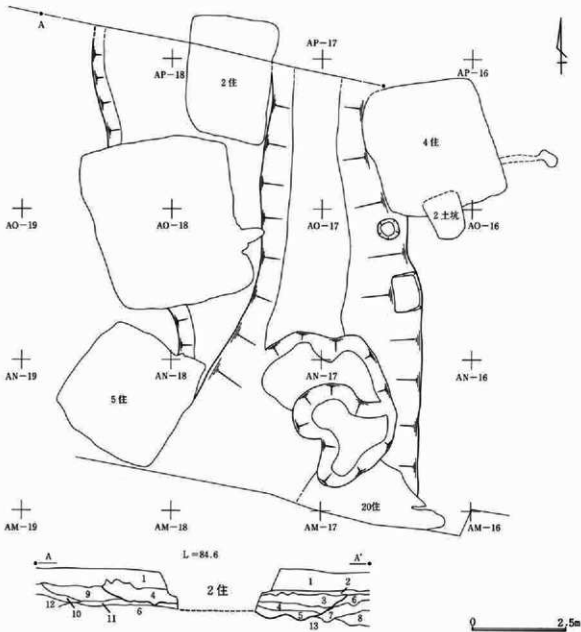


图147 第3遺物集中出土地点出土遺物图(3)



1区1号溝（伊）埋土

- 1 淡灰褐色土 砂質。
- 2 暗灰色土 FP小粒を少し含む。
- 3 黒褐色土 FP小粒を少し含む。
- 4 暗褐色土 FP小粒を少し、小円礫をやや多く含む。
- 5 暗褐色土 4に類似、FP粒の大きさが小さい。
- 6 暗褐色土 シルト質で、FP粒をわずかに、黄色シルトブロックを少し含む。
- 7 灰オリーブ土 シルト質。
- 8 オリーブ黄色土 シルト質。
- 9 暗褐色土 FP小粒を少し、小円礫をやや多く含む。
- 10 暗褐色土 7に類似。
- 11 暗褐色土 シルト質で、小円礫を多く含む。
- 12 明黄褐色土 シルト質で、小円礫を少し含む。
- 13 灰白色土 砂粒と小円礫が主体。

図148 1区1号沢遺構図

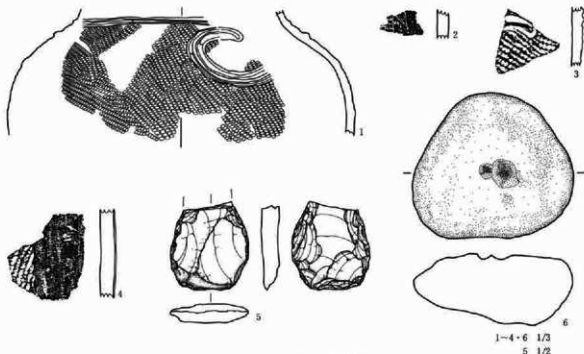


図149 1区1号沢出土遺物図

6. 沢

1区AL-16からAP-18にかけて、2～5号住居の下部で南北方向にやや蛇行する沢が検出された。規模は確認面での上幅が約3.2m、深さ約32cmである。東西の肩は緩やかに立ち上がる。埋土中からは縄文時代中期加曾利E3式の土器片や打製石斧の破片、凹石が出土した。自然の流路と考えられるが、遺物は磨滅しておらず、縄文時代中期の本遺跡の環境を知る上で重要と考え、本章で扱った。

7. 遺構外出土の遺物 図150～165 図版70～72

上述のように、本遺跡からは縄文時代中期以降の遺構が間に断絶を挟みながら検出されている。しかし、遺構に伴わない遺物は縄文時代前期から確認され、埴輪片や軟質陶器なども出土していることから、本遺跡の発掘対象地外に検出された種類・時代以外の遺構の存在が想定される。

以下に主な遺物の特徴と出土状況を記載する。

(1) 土器

図150、1～3は胎土中に繊維を含み縄文時代前期の土器で、4は縄文時代中期の阿玉台式土器と考えられる。この内、1・2・4は表面の磨滅が著しく河川の流下に伴うローリングの結果と想定され、上流域から運ばれたものと考えられる。この3点以外の土器片及び石器に顕著な磨滅痕は認められず、本遺跡の立地する扇状地の形成時期を検討する上で重要な資料である。

図150、5～14は縄文時代中期の土器で、主体は加曾利E3式と考えられる。該期の住居や土坑が検出されており、少なくともこの時期には本遺跡は居住空間として安定していたものと想定される。

図151は縄文時代後期の土器と考えられる。15～21は同一個体と想定され、称名寺式である。1区の西端部

で比較のまま出土しており、遺構が存在していた可能性もある。図22～36は堀之内2式であり、最低2個体は存在するものと思われる。2区の西部でややまとまって出土しており、やはり遺構の存在していた可能性がある。

図153、25～36は須恵器・土師器である。この内、34・35は古式土師器であるが、同種の土器片は出土頻度は低いものの発掘区内の広い範囲で認められる。

(2) 石器

図150、1～4は石鏃であり、3は凹基礎、他は有茎である。5は石錐であり、先端が欠損しているものと判断した。6～9は打製石斧であり、前二者は短冊形、後二者は分銅形であろう。10～22は削器・剥片であり、顕著なまとまりとしての出土状況は示さない。この内、10・11は横長の剥片を素材にしている。33は四側面に使用痕の残る角柱状の砥石の破片である。

石材をみると、石鏃の1・2は黒色頁岩、石鏃の3・4と石錐の5は黒色安山岩である。打製石斧の内、7は黒色安山岩で、他は黒色頁岩である。削器・剥片の内、11は細粒安山岩で、15・16・18は頁岩、他は黒色頁岩である。砥石の23は流紋岩である。

(3) その他

図154、37は埴輪の破片であり、顕著な磨滅痕は認められない。38は土錘である。39～43は鉄製品で、39・40は用途不明、41・42は釘、43は火打鎌である。火打鎌のつまみ部は欠損しているが、中央部に向かって薄くなるため孔の存在を推定した。

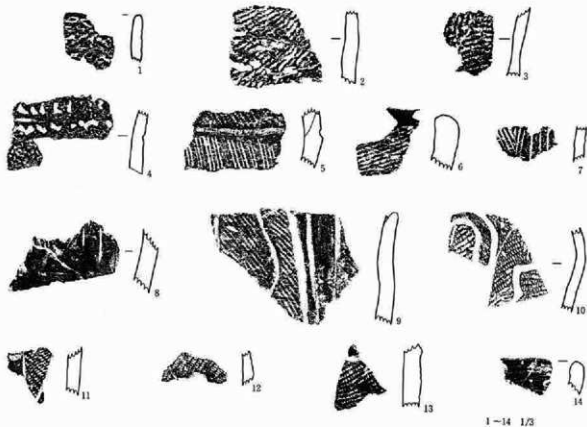


図150 遺構外出土土器図(1)

第4章 検出された遺構と出土遺物

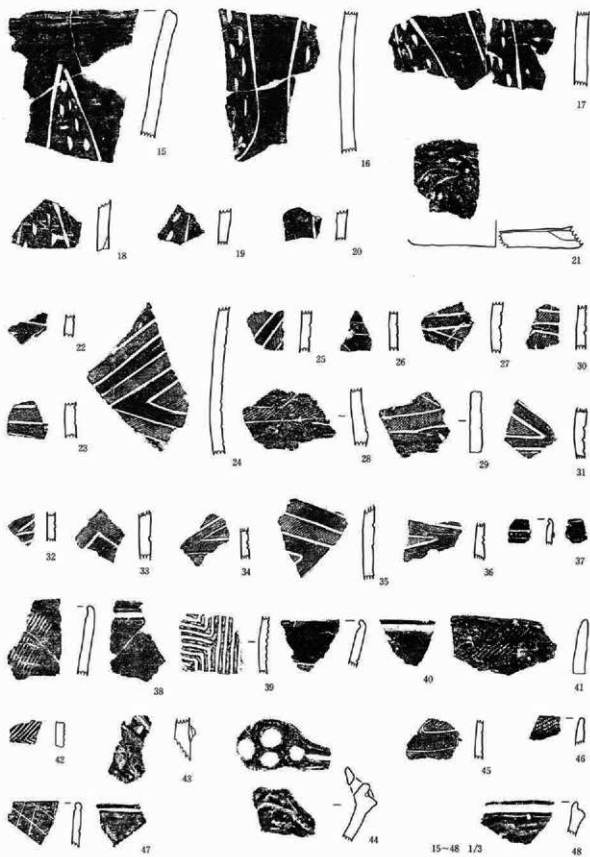


图151 遺構外出土土器図(2)

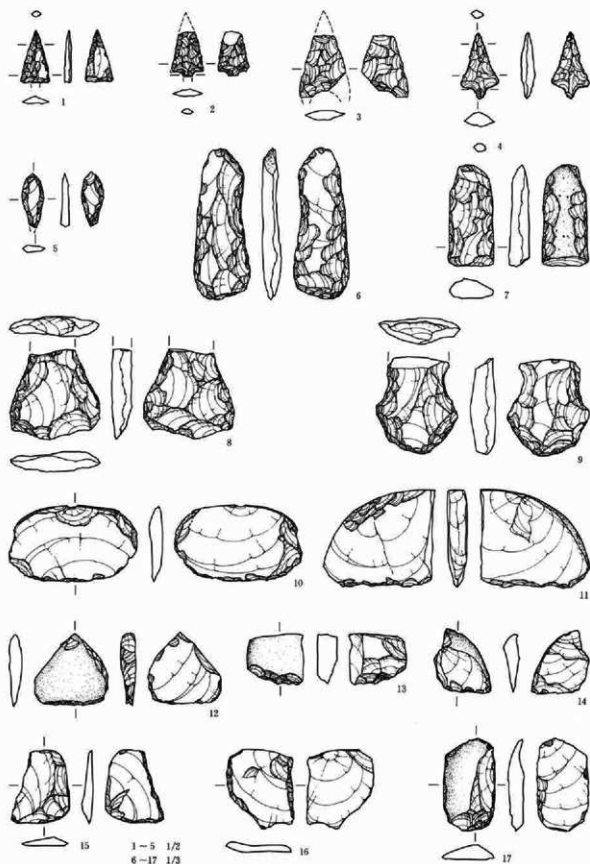


图152 遺構外出土遺物图(1)

第4章 検出された遺構と出土遺物

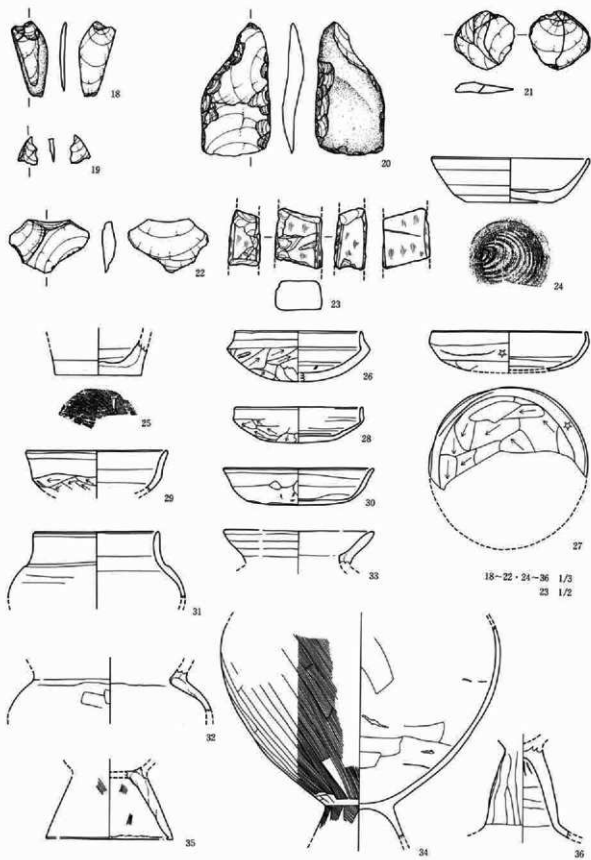


图153 遺構外出土遺物図 (2)

7. 遺構外出土の遺物

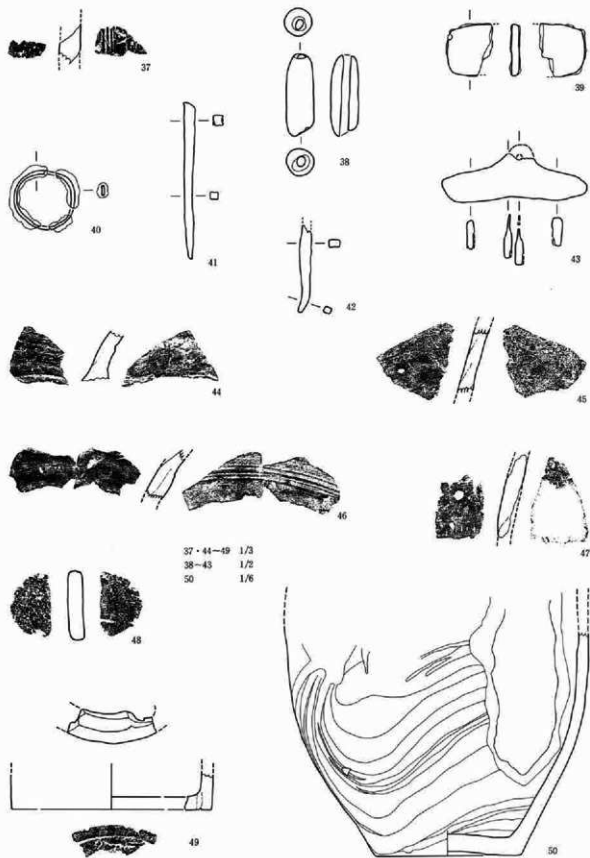


图154 遺構外出土遺物図(3)

第5章 特 論

1. 今井白山遺跡の岩石について

群馬地質研究会 飯島 静男

今井白山遺跡より出土した石器・礫について、岩石の同定をした。また同遺跡の基底層中の礫についても同定した。さらに、これに関連して、笈井八日市遺跡ならびに野中天神遺跡の礫層についても検討した。以上の結果について概説する。

1. 出土石器類について

出土した石器・礫は約40種類に分類された。そのうち約半数は礫層中の岩石と同種である。残り半数が石材調達面で、採取地あるいは原産地等が問題になるとみられる。

(1) 安山岩類

粗粒安山岩

粗粒安山岩は粗粒の輝石安山岩の略称である。かつて「輝石安山岩（粗粒）」としていたこともある。安山岩は多種多様であって、石材としての性質にも差がある。おもに石鏃などに使用されることのある、ごく細粒、緻密の、無斑品～斑品の少ないものを細粒安山岩（細粒の輝石安山岩の意）として区別した。それ以外が粗粒安山岩である。

粗粒安山岩は出土した石器類中、最大数量ある。地元で通称「赤城のバカ石」と呼んでいるように、安山岩類は赤城山のいたるところにみられる。山麓の崖、河原、流れ山周辺等において採取可能である。多くは粗粒で、表面がざらざらしている。出土遺物中、粗粒であっても、緻密で、よく円磨された礫の一部は、利根川系の河床礫であろう。

細粒安山岩

名称は上述の通り。意味を広くとれば、後述の黒色安山岩や灰色安山岩も含まれるが、それらは特徴的であるので、分け、残りを細粒安山岩とした。利根川の礫にある。詳細は未検討である。

黒色安山岩

黒色緻密、細粒、ガラス質の安山岩である。中東・飯島（1984）以後、筆者ら自身はあまり研究を進めていない。概査したところでは、石器に適したものは、武尊山東面よりも、むしろ北面に多産するようである。一方、各地の遺跡から出土する黒色安山岩のうち、どの程度が武尊山産のものに同定し得るかは、詳しく検討されていない。鍋川流域にも黒色安山岩はみられ、とくに荒船山はじめ群馬・長野県境に多産するので、それらの中にも石器材料になるものがあるだろう。近年八風山近辺に製作跡が発見されたとのことである²⁾。今井白山遺跡の出土品は、剥片がおもである。

灰色安山岩

灰色の地に暗色の不規則な縞模様（流理縞）のみられる、細粒、やや緻密の、斑品に乏しい安山岩である。利根川の礫にわずかではあるが、つねにみられる。原産地は武尊山で、その北面に多い。

角閃石安山岩

角閃石を含む安山岩は珍しくないが、県央地域周辺、ことに河川の礫としては意外に少ない。筆者の行なっている石材同定作業のように、多量の岩石を短時間にみる場合、ごく少量、または微細な角閃石はほと

んど無視する。したがって肉眼的に有意な量の角閃石を有する安山岩のみを角閃石安山岩とした。

今井白山遺跡出土の角閃石安山岩は、灰色多孔質で、粗粒の角閃石、輝石、斜長石等の斑晶を有する。以上の特徴ならびに当遺跡の地理的位置より考えて、この角閃石安山岩は榛名山産のものに同定される。二ツ岳ははじめ同火山の中央火口丘、側火山等の角閃石安山岩³⁾である。とくに多孔質のものは浮石質角閃石安山岩などとも呼ばれ、古墳の石材などに用いられることなどから、古くより論じられている。利根川を流れたものを拾い集めた可能性が指摘されている。出土品の中には円盤形でなく、角ばった岩塊があるので、そのようなものは、原産地付近で採取された可能性がある。

二ツ岳軽石

上述の角閃石安山岩と同じ岩質で、さらに発泡のよいものである。二ツ岳一榛名山周辺、および二ツ岳降下軽石層の堆積する地域に特徴的なものである。他地域の角閃石を含まない軽石に比べ、新鮮でほとんど風化していない。淡黄白色—一部淡いピンク—オレンジ色がかったもの等がある。

軽石

二ツ岳軽石以外の当遺跡の軽石は白色—黄白色、ごく粗く発泡している。有色鉱物として輝石を含むが、斑晶はやや少ない。いわゆる大胡火砕流中に似たものが含まれる。いずれにせよ赤城山産のものであろう。

未固結凝灰岩

少量の軽石を含む泥流堆積物である。淡灰褐色土状で、軟らかく、軽い打撃で割れる。土を練り固めたものかのようであるが、なかば粘土化した軽石などがつぶれておらず、空隙もあることなどから、天然の堆積物とみた。遺跡周辺には産しない。他の遺跡にも似たものが出土している。前橋台地の一部に、同様の堆積物が産する⁴⁾とのことであるが、確かめていない。

(2) 火成岩 (安山岩以外)

蛇紋岩

黒色—暗緑色、細粒緻密な岩石である。自然面は無光沢—弱い真珠光沢のみられることが多いが、出土品は整形加工され、一部樹脂状光沢があり、また擦痕が多い。やや硬いものはかんらん岩的である。前橋付近の利根川の礫にかんらん岩はまれにみられるが、蛇紋岩はほとんどない。

砥沢石

県内各遺跡から出土する砥石の中で、淡黄褐色の変質流紋岩—変質アイサイト質の一群がある。ごく細粒斑状で、石莖・斑晶ともに著しく変質して、やや軟岩化している。斑晶として長石(カリ長石?)、まれに角閃石斑晶がみられるが、角閃石のほうはほとんど中味のないぬけがらである。以上の特徴から、南牧村砥沢産の砥沢砥にはほぼ同定される。地質学の古い文献⁵⁾に砥沢石という岩石名が提唱されたことにちなみ、砥沢石と呼ぶことにした。砥沢砥は古くは平安時代頃の遺跡より出土していて、岩質は一定している。

ほぼ同種の石で、微細な黒色鉱物粒を少量有するものがあり、これも砥沢石としてきたが、下仁田町上小坂産のものが、ほぼ該当する。少なくとも1950年代には南牧産も上小坂産も、まとめて出荷していたとのことであるので、話がややこしい。いずれ、詳しく検討する必要があるが、それまではともに砥沢石でさしつかえないと思う。

当遺跡の出土品も、おおまかに砥沢石である。

(3) 堆積岩類

黒色頁岩

黒色緻密、しかしひどく硬質ではない。風化面はまことにつかみどころがなく、灰色ないし淡褐色、風

化殻の厚い場合、土様の質感がある。名称の由来等では中東・飯島（1984）が詳しく述べた。その後利根川の上・中流の河床を調べたところ、黒色頁岩は比較的古くまでないことがわかった。しかしほかに堅硬であり、石器の原石は前橋とか沼田あたりの河床礫ではあり得ない。

一方東北部の赤谷層分布地の頁岩は、軟らかいか、反対に相当硬いかで、ちょうど良いものが少ない。今のところ露頭またはその近傍で、石材に適した質のものは、谷川連峰の後線とその南面の川原ほか、その他2、3地点で確認したにすぎない。

珪質頁岩

珪質頁岩という岩石名は、成因的に異なるいくつかの岩石に用いられている。ひとつは古期岩層中のチャートと粘板岩との中間的なものである（たとえば京都の鳴滝岩など）。もうひとつはいわゆる硬質頁岩で、多分に凝灰質で、初生的（？）に珪質の第三紀層の頁岩である。また、初生的には軟かい頁岩であったものが、貫入岩等の影響で珪化変質したのも、珪質頁岩と呼ばれる。これらは外観が似ていて、同じ名を用いるのは無理からぬことであるが、ばあいによっては不都合である。識別が困難なこともあり、筆者も今のところとくに分けていない。

筆者らのいう黒色頁岩も多分に珪質で、もし一般的な岩石名を用いるとすれば、頁岩とするよりはむしろ珪質頁岩に近いものが少なくない。今回みた当遺跡の珪質頁岩は黒色頁岩に近い岩質であり、珪化変質した頁岩である。

石灰岩

出土品は小円礫状で、明らかに河床礫である。前橋より上流にはまずみられない。利根川ならば伊勢崎より下流、他は多野方面の可能性はある。足尾山地にもなくはない。

(4) 結晶片岩類

緑色片岩と雲母石英片岩はともに多野方面の結晶片岩である。上越地方の結晶片岩ではない。珪質準片岩も多野のものかと思われる。しかし利根川筋に全くないとは断定できない。

(5) その他

赤色珪質岩

赤色・緻密な岩石である。いわゆる碧玉・鉄石英にほぼ相当する。しかし最近の石器石材関係の文献⁴⁾でも、碧玉を鉱物扱いしていたり、用語法に一部混乱がみられるので、筆者は赤色珪質岩としている。原産地として特定できるところは群馬県内には知られていない。河床礫としてはまれにみられる。

珪化木

白色緻密な破片である。年輪が認められる。水上地方のグリーンタフ層中ではじめ、県内各地でまれに産する。河床礫としてはまずみられない。

2. 今井白山遺跡、基底層中の礫種

発掘調査終了際に観察した結果は次の通りである。

第10グリッド 12層 32/32 粗粒安山岩 含礫砂層

第12グリッド 9層 50/50 粗粒安山岩 含礫砂層

12層 14/14 ◦ ◦

4層 44/44 ◦

第18グリッド 南面東側 砂層の上の礫層帯 厚さ20cm 直径3cm以下の小礫 100/100 粗粒安山岩

第20グリッド ラミナの発達した砂層を挟む含礫砂層 高さ30cm×長さ1.5mくらいの範囲

	直径5 cm以下の円礫大きいほうから100個	100/100	粗粒安山岩
第22グリッド	試掘坑底	100/100	粗粒安山岩
第24グリッド	試掘坑		
	大きいほうから	100個	98/100 粗粒安山岩
		2/100	角閃石安山岩(赤城山産?)
			角閃石は比較的少ない。(岩石名左の数字は岩石種/ 観察総数)

すべて灰色～灰白色、中～細粒、やや粗鬆な輝石安山岩で赤城山産と考えられる。24グリッドの“角閃石安山岩”はごく少量の角閃石が認められる。このようなものはふつうは粗粒安山岩としているのであるが、多少岩種の異なるものが、ありはしないかと、あえて探した結果である。そのような岩質であるので、粗粒の角閃石を特徴とする榛名山系の角閃石安山岩とは異なる。赤城山のものであろう。

これに関連して荒砥川の礫を概査した。結果はやはり100%粗粒安山岩であるが、灰色～灰白色のもののほか、黒、赤褐色、やや緻密のものなど、多様な安山岩がみられた。当遺跡基底層のものは、荒砥川よりははるかに単純な構成である。

3. 隣接遺跡地下の礫層について

笈井八日市遺跡・野中天神遺跡における観察結果は表の通りである。概観すると粗粒安山岩、変質安山岩、石英閃緑岩が多く、溶結凝灰岩、ひん岩、珪質変質岩、変質玄武岩等がこれらに次ぐ。これに砂岩、流紋岩が伴う。前橋付近の利根川の河床礫の礫種構成にはほぼ一致するが、変質安山岩の量比がやや多いので、構成比の点では全く一致するとはいえない。この理由については吾妻川の河床礫等について、詳しく調査したうえで、論じたい。

礫層中の岩石の同定における、筆者の規準等を述べる必要も感じる⁷⁾が、煩瑣になるので、またの機会をまちたい。おおむね一般的な記載岩石学的方法に従っている。

今井白山遺跡から産出した石器類の一部は、岩石の種類点では、これらの礫層のものと同じである。

註

- 1) 中東勝志・飯島勝男(1984)群馬県立歴史博物館年報5号、P.28-36。
- 2) 近藤尚典・小林秀行(1990)大型阿南加工石器の典型的な製作跡—長野県下茂内遺跡—、考古学ジャーナルNo.32A、P.18-22。この文献などに予想的に述べられている。本報告は近々刊行されるようである。
- 3) 化学分析値にもとづいた分類ではデイサイトである。しかし肉眼的には安山岩と大差なく、従来の名称に従う。
- 4) (附)群馬県埋蔵文化財調査事業団(1990)鳥羽遺跡、L・M・N・O区、一関越自動車道(新海線)地埋蔵文化財発掘調査報告書第31集—<本文編>、P.354-357
- 5) 筆者不詳(1893)富士石(雑報)、地質学雑誌 vol.1、P.91-92。ただしDachte(デイサイト)の訳語として提唱されたのであって、新岩石名としてではない。筆者(飯島)は同文献の主旨にとらわれずに、岩石名のみを借りた。
- 6) 山本薫(1989)縄文時代の石器に使われた岩石および鉱物について—石器製作における石材の選択とその背景—、地質雑誌 vol.98-7、P.911-933。などがあげられるが、これはほんの一例である。
- 7) 筆者は「三後沢遺跡・十二原遺跡」群報文(1986)の中で「石材の同定にあたって」と題して、少しく述べたが、その文には多少のミスがあるので、注意されたい。

2. 今井白山遺跡における地震跡

通商産業省工業技術院地質調査所近畿・中部地域地質センター 来川 旭
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 神谷 佳明・飯島 義雄

今井白山遺跡における2つの調査区で多くの地震跡が検出された(図155)。各調査区について地震跡の形態を述べる。

1. 今井白山遺跡1区の地震跡

ここでは、北北西-南南東方向にのびる5条の断層・地割れが検出され、a-eと名付けた(図115)。

aは1区12号住居の床面を食い違わせる断層で、概ねN18°W方向にのびており、少なくとも4.4mの長さを持っている(図156)。分布の北端は発掘区外へのび、南端では1区6号住居跡と重複するが、前後関係は確認できなかった。1区12号住居における床面の変位量は最大14cmで、西側が低下している。また、部分的に幅5cm以内の地割れを伴っている。

図157のように、aに直交する補助トレンチを掘削して断面形を観察した。ここでは、1区12号住居の床面が14cm変位しており、断層面の傾斜は60°W(正断層)である。また、断層面に沿って幅2cmの割れ目が生じ、そこから砂(噴砂)が上昇している。

噴砂を供給した砂層は、図157に示した厚さ10cmの砂層で、層の内部は粗粒砂と中-細粒砂の互層である。そして、断層に沿った部分だけで液状化現象に伴う流動が生じ、様々な粒度の砂が激しく混じり合いながら噴砂が発生している¹⁾

図158は図157中の①-③地点の粒度

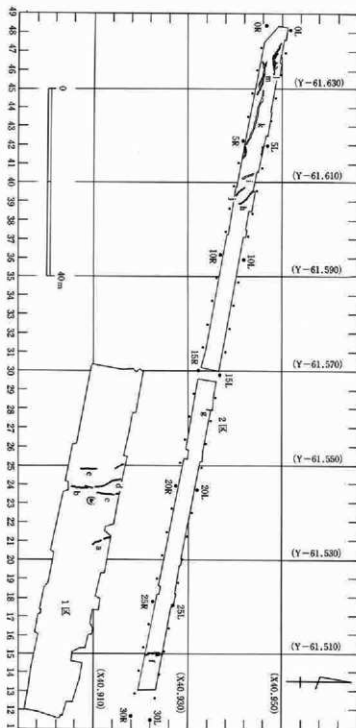


図155 地震跡の分布図

組成を示したものである。これによると、最下部の③では中～粗粒砂が卓越しており、平均粒径は0.28mm（中粒砂）、分級度 σI は（悪い）となる。②では、平均粒径は0.19mm（細粒砂）、分級度 σI は0.77（普通）となる。最上部の①では平均粒径は0.14mm（細粒砂）、分級度 σI は1.10（悪い）となる²⁾全体として下部ほど粗い粒子が多く、上部に行くに従って細かい粒子が卓越するようになる。

図159は調査地域北端の壁面である。ここでもI区12号住居の床面が約10cm西下りに食い違っており、断層面に沿って砂が上昇している。

図160のように粒径加積曲線を描いた。砂脈（砂のつまった割れ目）下部の⑥では、平均粒径が0.28mm（中粒砂）で、分級度 σI は0.89（普通）となる。中部の⑤では、平均粒径が0.19mm（細粒砂）で分級度 σI は0.94（普通）となる。上部の④では、平均粒径0.10mm（極細粒砂）で分級度 σI は0.82（普通）となる。砂脈内では、図158同様に、上位ほど細かい粒子が卓越している。

bは、2区19号住居の床面を引き裂きながら、概ねN6°W方向に5.6mの長さまでびる地割れ（最大幅約10cm）である。地割れ内には、当時の地表付近を覆っていて、まだ流動性の強かった濃褐色の粘土～シルトが流れ込んでいる（図161）。

図162にbの断面形を示した。ここでは、地割れに沿って濃褐色の粘土～シルトが流れ込んでいる。さらに、下位に堆積していた細粒砂層が液状化し、地割れ内を噴砂が上昇している。地割れ内で、上からの粘土と下からの噴砂が接した状態である。

噴砂（ここでは液状化層から60cm上昇した段階で止まっている）の最上部には特に細かい粒子が集まっていることがはっきりと認められる。

図163のように粒径加積曲線を描いた。ここでは、⑧と⑨が極めて類似した曲線になるが、⑦では細かい粒子が卓越することが明瞭に表現されている。⑦は平均粒径が0.13mm（細粒砂と極細粒砂の境界付近）で分級度 σI は0.62（やや良い）となる。⑧は平均粒径が0.21mm（細粒砂）で分級度 σI が0.80（普通）となる。⑨は平均粒径が0.19mm（細粒砂）で、分級度 σI が0.82（普通）となる。

図161・164に示したように、液状化層より上位の地層が最大40cm程度沈降している。液状化現象が発生した場合、液状化層が流動的になり、上位の地層の沈降をもたらせることがよくある。沈降部には住居の床の硬化面が認められ、沈降の年代も地震の年代と矛盾しない（少なくとも地層の前後関係から）ので、液状化に伴う地変の可能性もある。

2. 今井白山遺跡2区の地震跡

この調査区の東部では南北走向の地割れf・gが、西部では北西～南東、および、西

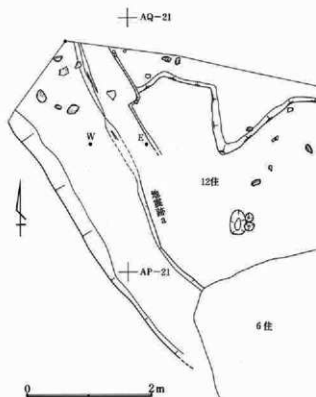


図156 地震跡aの平面形

北西—東南東走向の地割れh～mが発達している。

図165は地割れfに関する断面図である。ここでは、幅約15cmの割れ目に沿って、地震当時の地表を覆っていた未固結の黒褐色砂が、地割れの壁面から供給された細粒砂と混じりながら、約50cm下方へ流入している。逆に、当時の地表面下1.5m以深に堆積していた中～粗粒砂が割れ目（最大幅25cm）内を上昇している。

図162と同様に割れ目の途中で地表付近から流下した物質と、噴砂として上昇した砂が接する状態が認められる。噴砂の最上端には、特に細かい粒子（細粒砂）が集まっている。

図166は、液状化した砂層から上方38cmの部分で作成した平面図である。最大幅18cmの砂脈（砂のつまった割れ目）が南北およびN20°W方向に少なくとも3.3m以上の長さで伸びている。

図167はgにおいて、地割れ内を上昇した砂脈の中～下部に関する断面図である。図では、上部に厚さ15cmの褐色シルト層、中部に厚さ70cmの砂礫層（最大粒径5cm）、下部に厚さ20cm以上の細粒砂層が認められる。そして、砂脈（幅2cm）は砂礫層の途中（砂の含有量が10

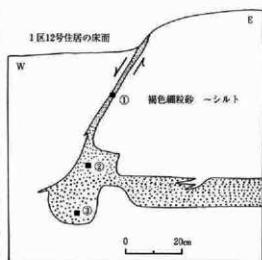


図157 地震跡aの断面形（その1）

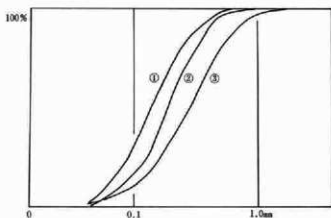


図158 地震跡aの粒径加積曲線（その1）
（試料採取位置は図157に示す）

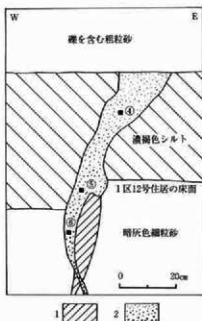


図159 地震跡aの断面形（その2）

- 1 地割れ内にたまった濃褐色粘土 -シルト
- 2 噴砂
（点の大きさは粒径の大きさの変化を示す）

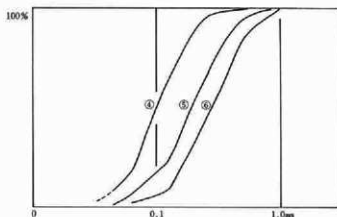


図160 地震跡aの粒径加積曲線（その2）
（試料採取位置は図159に示す）

%以下で礫が多い部分) から上昇しており、砂脈内を砂のみが上昇している。

3. 今井白山遺跡の地震跡

の諸特徴と形成時期

当遺跡の地震跡について、興味深い現象が5つ観察された。

i 図157のように、断層のごく周辺の砂層のみが激しく流動しながら上昇している例は、他の遺跡では認められない。地震に伴う沖積地盤の食い違いと噴砂の発生について考える上で興味深い現象である。

ii 図162・165のように、地割れ内で、地表付近から落下してきた物質と、地下

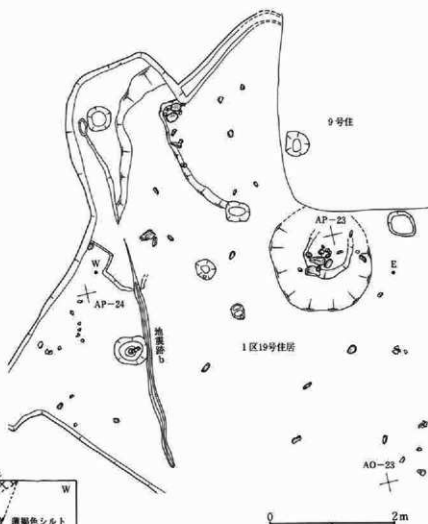


図161 地震跡bの平面形



図162 地震跡bの断面形

- 1 地割れ内にたまった濃褐色粘土シルト
- 2 凝状化層と噴砂 (点の大きさは粒径の大きさの変化を示す)

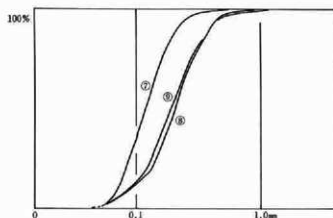


図163 地震跡bの粒径加積曲線
(試料採取位置は図162に示す)

から上昇して来た噴砂が対峙している例も、この遺跡で初めて検出されたものである。液状化現象に伴って地下の砂層が側方へ流動し、それによって上位の地層に引張力が加わり地割れが発生したと考えられる。この段階で、液状化層を覆う地層を貫いて噴砂が地表に流出するまで水圧が上昇しなかったであろう。

iii 図162～165では、噴砂が上昇して、地表まで達せずに途中で止まった場合、噴砂の中で特に細かい粒子のみが砂脈の最上端に集まる現象が明瞭に示されている。³⁾ 噴砂の先端部で水圧が減少になるので、上昇し易い細かい粒子のみが選択されて先端に集まったものと思われる。

図163の⑧・⑨を比較すると、⑧の方が平均粒径が少し大きく、分級度が小さくなっている現象は興味深い。本来の液状化層⑨に含まれていた様々な粒子が、砂脈内で特に細かい粒子⑦とそれ以外の粒子⑧に選別されたことを示す。

iv 図157～160には、噴砂が上昇する過程で上部ほど細かい粒子の比率が増加する傾向が認められた。これは、細かい粒子が上昇し易いことを示す⁴⁾

地震が発生して噴砂が地表に流出した場合、「地表の噴砂」イコール「液状化した元の砂」と考えがちである。しかし、地表の噴砂の粒度組成は、液状化した砂層の砂にくらべて、細かい粒子が卓越する場合があるので、今後の防災研究において留意する必要がある。

v 図167では、砂礫層で液状化が発生して、砂礫層に含まれる砂のみが噴砂として上昇している。⁵⁾ 通



図164 地震跡bおよび陥没部の断面形
(図162の位置よりやや後退している)

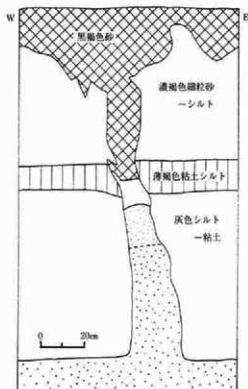


図165 地震跡fの断面形

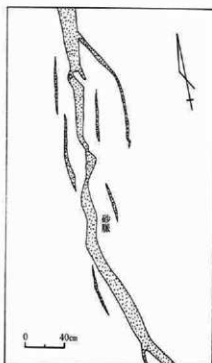


図166 地震跡fの平面形

常、液状化現象は中～細粒の砂層で容易に発生し、砂礫層では発生し難いと考えられているが、当遺跡では、砂礫層中で液状化が発生した貴重な事例が得られた。

図168は今回発生した調査区と地形の関係を示したものである。調査区東部では南北方向の、西部では東西方向の地割れ、砂脈が卓越する。これは、周辺地域の微地形の傾斜方向に直交する地割れ・砂脈が多いことを示している。通常、激しい地震動に伴って地下の砂層が液状化した場合、水平方向に流動し易くなる。これに伴って上位の地層が傾斜方向へ移動して多くの割れ目が発達する。当遺跡の事例はこれとよく対応するので、今後の発掘において留意する必要がある。

本遺跡の中において地震跡の影響を受けている竪穴住居跡は、前述のように1区12号住居と19号住居がある。19号住居は、9号住居と重複しており、その新旧関係は9号住居が新しく19号住居が古い関係にある。また、9号住居は、19号住居の受けた地震跡の一部を掘り込んで構築されており地震より後出の住居である。このことから、本遺跡での地震跡を考古学の面から年代観を見ると、19号住居と9号住居の間に位置するものである。この2軒の住居の年代観は、出土している土器から見ると次のような時期が与えられる。

19号住居は、土師器高坏、埴、甕、台付甕が出土しているが、器形全体が残存しているものは見られない。

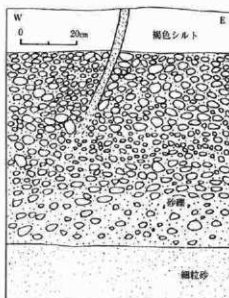


図167 地震跡Bの断面形

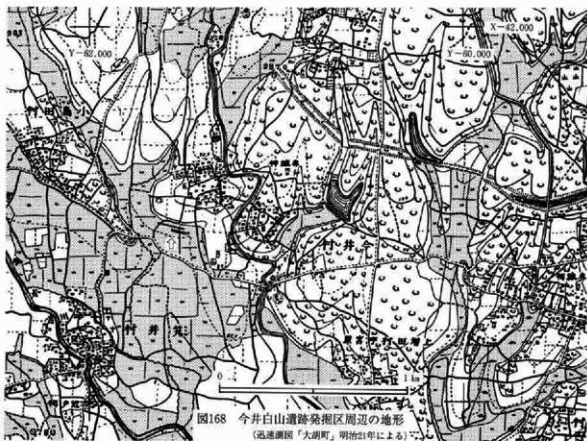


図168 今井白山遺跡発掘区周辺の地形
(高速測図「大湖町」明治21年による)

そのような中で、高坪は、外面にも鏡研磨がみられ、坏部下位の稜も明瞭である。このような点を本遺跡の東約1kmに位置する薮低北三木堂遺跡出土の土師器・須恵器をもとに坂口(1991)が行っている編年にあてはめるとI期に相当し、I期は5世紀第1四半期に比定されている。9号住居は、土師器坏、甕、台付甕や須恵器坏、皿、長頸壺等が出土している。これらの土器のうち集落遺跡での編年軸に使用されている土師器を見てみると9号住居では坏の出土より甕の出土が圧倒的に多く、その甕も「コ」の字状口縁を呈するものであるが、口縁部の状態が最盛期のものよりやや退化している点や須恵器坏の形態を考慮すると9世紀後半の年代観が与えられる。

当遺跡に顕著な液状化現象をもたらした地震として、遺跡の地震跡から認められている古墳時代後期、古文書より認められている818(弘仁9)年の大地震、および、1931(昭和21)年9月21日の西埼玉地震があげられる⁶⁾

この中で、考古学的に求められた年代幅に合致するものは、古墳時代後期と818年の大地震である。

818年の地震は、類聚国史に「弘仁9年7月、相模・武蔵・下総・常陸・上野・下野等の国地震す。山は崩れ谷の壘まること数里。枉死する百姓勝に計る可からず(中略)聞くが如くんば上野国等の境、地震い災を為し、水潦相仍り、人物凋損す」との記述がある。埼玉県下では、深谷バイパス遺跡において堀口他(1985)・堀口(1986)が、この地震による可能性の強い多くの液状化跡を検出している。また、能登他(1990)・能登(1991)は、赤城山地南麓において、多くの山崩れ堆積物・地割れ跡、泥流跡を見出し、818年の地震に伴う一連の地変として意義づけしている⁷⁾ 関(1991)は三ツ寺Ⅱ遺跡において、この地震による可能性の強い地割れや液状化跡を検出している。

古墳時代後期の地震跡は関(1991)が三ツ寺Ⅱ遺跡で検出したものである。6世紀中頃、および6世紀後半〜7世紀前半の2時期にわたり、榛名山の噴火に伴う火山性地震の可能性がある。

当遺跡の地震跡は、顕著な内陸地震である818年の大地震による可能性が強いが、古墳時代後期の地震も考えに入れる必要がある。今後、周辺地域で多くの地震跡を検出し、地震による地変の状況をより詳しく把握することが重要である。

注

- 1) 液状化現象は、地下水で満たされたゆる詰まりの砂(礫)層で発生する。激しい地震動を受けると、砂(礫)層を構成するそれぞれの粒子がばらばらになって、お互いのすき間を小さくするように動く。粒子の間を満たしていた地下水は激しく圧迫されて水圧が急上昇し、地層全体が流動状になる(液状化)。さらに、高圧状態の水が砂とともに地表へ噴出する(噴砂)。この現象は震度Ⅴ以上(特に液状化し易い地盤条件ではⅤ以上)で発生するので、噴砂の跡が見つると、そこで人が立っておけないような激しい地震動があった証拠になる。
- 2) FOLK and WARD (1957) の式を用いた。
平均粒径: $M_r = \frac{\phi 16 + \phi 50 + \phi 84}{3}$
分級度: $I = \frac{1}{4}(\phi 84 - \phi 16) + \frac{1}{6}(\phi 95 - \phi 5)$
- 3) 東川他(1990)にも同様な現象が紹介されている。
- 4) 東川他(1987)・東川(1990・1992a・b)にもこの現象が示されている。
- 5) 東川(1992a・b)にも同様な事例が示されている。
- 6) 文部省震災予防評議会編(1941)・宇佐美(1975・1987)・萩原他(1982)・関(1991)・松田(1991)による。他にも、関東地方に大きな被害をもたらしたことが推定される878(天慶2)年の大地震がある。これは、松田他(1988)によって神奈川県伊勢原層の活動によると考えられているので、当地域は震源からかなり遠くなる。
- 7) 群馬県新里村教育委員会(1991)にもこの地震に関する資料が多く紹介されている。

文 献

- FOLK, R.L. and WARD, W. (1957) Brazos river bar; a study in the significance of grain size parameters. J.Sed. Petrol. 27, 3-26.
- 群馬県新里村教育委員会 (1991) 赤城山麓の歴史地震—弘仁九年に発生した地震とその災害—, 86P.
- 新原尊徳編著・藤田和夫・山本武夫・松田時彦・大長昭雄 (1982) 古地震—歴史資料と活断層からさぐる。東大出版会, 312P.
- 堀口万吉 (1986) 埼玉県北部でみられる古代の“噴砂”について。歴史地震, 2, 9-14.
- 堀口万吉・角田史雄・町田明夫・益岡 明 (1985) 埼玉県深谷バイパス遺跡で見られた古代の“噴砂”について。埼玉大学紀要自然科学 編, 21, 243-251.
- 松田 猛 (1991) 平安時代初期の地震—「類聚国史」弘仁九年の記事を中心に—。群馬県史研究, 34, 51-63.
- 松田時彦・由井将雄・松島義章・今水 勇・平田大二・東郷正美・鹿島 薫・松原彰子・中井信之・中村俊夫・松岡敦光 (1988) 伊勢原断層 (神奈川県) の試掘による地下調査。地震研査報, 63, 145-182.
- 文部省震災予防評議会編 (1941), 増訂・大日本地震史料, 第一巻, 鳴鳳社, 945P.
- 鹿登 健 (1991) 弘仁九年地震災害についての覚書。群馬県史研究, 34, 38-50.
- 鹿登 健・内田憲治・早田 勉 (1990) 赤城南麓の歴史地震—弘仁九年の地震に伴う地形変化の調査と分析—。信濃, 42, 755-772.
- 坂口 一 (1991) 荒砥三木堂遺跡出土の土師器と須恵器の編年—農耕集落分析の基礎的作業—。『荒砥三木堂遺跡Ⅰ』, 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書, 110, 322-330.
- 寒川 旭 (1990) 遺跡から得られた過去の地震情報。地学雑誌, 99, 471-482.
- 寒川 旭 (1992 a) 遺跡の地震跡。土と基礎, 40, 13-18.
- 寒川 旭 (1992 b) 地震考古学—遺跡が語る地震の歴史—。中央公論社, 251P.
- 寒川 旭・畑 栄吉・真原秀雄 (1987) 沼賀早高郡今津町の北仰西海道遺跡において認められた地震跡。地質ニュース, 390, 13-17.
- 寒川 旭・大草重康・岩松 保 (1990) 木津川河床遺跡の発掘調査 (1988年度) において検出された地震の状況記録。考古学と自然科学, 22, 103-111.
- 岡 晴彦 (1991) 三ツ寺Ⅱ遺跡の地震跡。『三ツ寺Ⅱ遺跡』本文編, 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書, 93, 205-238.
- 宇佐美豊夫 (1975) 資料・日本被害地震総覧。東京大学出版会, 335P.
- 宇佐美豊夫 (1987) 新編・日本被害地震総覧。東京大学出版会, 434P.

3. 今井白山遺跡出土の土器片の鉱物学的研究

群馬大学 吉川 和男

I. はじめに

II. 研究試料

III. 研究方法および結果

III-1. 試料の外観の特徴

III-2. 偏光顕微鏡観察

III-3. X線回折法による検討

IV. 考察

IV-1. 今井白山遺跡出土の土器片の特徴

IV-2. 今井白山遺跡出土の土器片中の角閃石について

V. おわりに

謝 辞

参考文献

I. はじめに

かつて遺跡出土土器および埴輪について鉱物学的研究を行い、その結果の一部を報告した(吉川、1987; 1992)。そこではいずれも土器ないし埴輪を人工的に作られた岩石とみなし、その特徴を鉱物学的に記載することが試みられた。

今回、同一遺跡より出土の製作時代を異にする土器片3片を研究する機会を与えられた。現在、それらの外観の観察、偏光顕微鏡観察およびX線回折法による検討を行っているが、ここにこれまでの研究結果の概要を報告し、合わせて、鉱物学および岩石学において基本的なこれらの研究方法の考古学分野における有効性についても議論する。

II. 研究試料

本研究で用いた試料は、前橋市今井町、今井白山遺跡出土の製作時代を異にする土器片3片である。出土地点等、研究試料の考古学的資料を表3に記す。

表3 研究試料の出土地点

試 料	出 土 地 点	時代・時期	備 考
IH-051	1区 AP21G	縄文中期	加曾利E3式深鉢
IH-052	1区14住埋土	縄文前期	黒浜式、深鉢 (住居には伴わず)
IH-054	2区24号土坑 No.10下	弥生中期	竜見町式、壺

Ⅲ. 研究方法および結果

土器片3片(IH-051, IH-052, IH-054)を、まず、肉眼および実体顕微鏡にて外観の特徴を観察し、次に、土器片の一部をダイヤモンドカッターにて切断し、薄片(厚さ約30 μ m)を作成して偏光顕微鏡観察を行った。さらに、土器片切断時に生じた切断面を用いて粉末X線回折法による検討を試みた。以下にその結果を記す。

Ⅲ-1. 試料の外観的特徴

土器片IH-051, IH-052およびIH-054を実体顕微鏡で観察した。これらの土器片は肉眼または実体顕微鏡で識別できる大きさの構成物とそれらの間をうめる微細な物質からなり、土器片の色、内部の空孔の状態などにそれぞれの特徴がみられる。構成物の大きさはいずれも径2mm以下の岩石片および鉱物片である。以下に各土器片ごとに主な構成物の特徴を記す。

(1) IH-051

本土器片は縄文時代中期とされる、最大径約30cm、高さ約26cm、土器壁の厚みが平均12mmの深鉢の上部の一部である。外観の色は土器の外壁面と内壁面とで異なり、また、それぞれ色むらがみられる。外壁面は淡灰褐色を呈し、一部暗灰色を示すところもある。内壁面は淡赤褐色を呈し、一部灰褐色を示すところもある。土器壁の断面の色は、外壁面から内壁面へ漸移的に変化するが、一部では、両端が淡赤褐色で中央部が灰褐色を呈する部分もある。

壁断面には壁面にはほぼ平行する細長い空隙が多数みられる。比較的大きな柱状鉱物はこの空隙または壁面とはほぼ平行に配列するものが多いが、そうでないものもみられる。

本土器片は比較的大きな構成物とそれらの間をうめる淡灰褐色から淡赤褐色の細粒物質からなる。粗粒構成物は岩石片および鉱物片である。岩石片は比較的小粒を帯び、灰白色、暗灰色、淡灰褐色および赤褐色を呈するものなどがみられる。鉱物片としては、石英(無色透明、劈開なし、亜角～亜円形)、長石(無色～乳白色・透明、劈開発達、亜角～亜円形)の他に、黒色長柱状で劈開のみられる鉱物、黒色柱状で劈開のはっきりしない鉱物および黒色不透明鉱物が多くみられる。

(2) IH-052

本土器片は縄文時代前期と考えられているもので、底面約75mmおよび50mm、高さ約60mmのほぼ台形の土器片で厚さは約9mmである。表面にはほぼ一方に平行な模様が見られる。外壁面、内壁面とも、模様以外の凹みも多く存在している。

本土器片の表面にみられる粗粒な鉱物片は土器の表面に面した部分が二次的に丸く円磨された様相を呈しており、本土器片全体が流水中等で二次的に円磨されたことを物語っている。

外壁面、内壁面および器壁の中心部で色が異なり、断面をみると、外壁付近1～2mmは暗褐色、内壁付近の1～2mmは褐色で、その中間部6～7mmは暗灰色を呈し、それぞれの方向に漸移的に変化する。

壁断面には空隙が多くみられ、空隙の大きさも全般に他の土器片よりも大きい。細長く連続性のよい細孔は器壁にはほぼ平行しているが、この他に径約1mm程度の不規則な形をした空隙もかなりみられる。

本土器片の基質部は黄褐色から暗褐色で、微細な物質からなる。粗粒構成物として岩石片と鉱物片がみられる。岩石片は亜円形のものが多く、乳白色、暗灰色、淡褐色、灰緑色および赤褐色を呈するものがある。鉱物片としては、石英(無色透明、劈開なし)、長石(無色透明～白色、劈開発達)、黒色長柱状結晶(劈開不明瞭なもの、一方に弱い劈開のみられるもの)とがあり、表面は赤褐色粉状物質が付着、および

黒色不透明鉱物（亜金属光沢）などがみられる。いずれも自形およびその破砕結晶である。

(3) IH-054

本土器片は、底部、上口部とも直径約11cmで中央部に最大30cmのふくらみがある高さ約30cmの弥生時代の壺の一部である。IH-051、IH-052に比して全体的に淡色で、肉厚も約5mmとうすくなっている。外壁面は灰褐色（一部暗灰色）、内壁面は淡褐色である。器壁断面の色変化は小さく、外壁から内壁に向かって新移的に淡色になる。

壁断面には壁面にほぼ平行に細長くひきのばされた細孔がみられ、また、長柱状の構成物は壁面に平行配列していることが多い。

本土器片の基質部は淡褐色で、微細な物質からなる。粗粒構成物は岩石片および鉱物片よりなり、多くは1.5mm以下である。岩石片は一般に丸味をおびたものが多く、白色～暗灰色緻密岩石片、白色岩石片（多孔質？）および暗赤褐色岩石片などがみられる。その他、褐色透明な卵形のガラス質物質で内部が多孔質なものも1個（径0.5mm）みられた。鉱物片は一般に0.5mm以下のものが多い。鉱物片としては石英（無色透明、劈開なし）、長石（無色透明～白色、劈開発達）、角閃石（黒色長柱状～暗赤褐色、2方向の劈開発達）、輝石（黄褐色～黒褐色柱状、1～2方向に弱い劈開）および黒色不透明鉱物（周囲に赤褐色粉状物質が付着）などがみられる。その他、黄緑色粒状で0.2mm以下の鉱物片もみられる。

III-2. 偏光顕微鏡観察

土器片、IH-051、IH-052およびIH-054の一部をダイヤモンドカッターで切断し、それぞれ連続的に2枚ずつ作成した薄片を偏光顕微鏡にて観察した。土器片はいずれも比較的粗粒な岩石片、鉱物片および、時に、植物片とそれらの間をうめる微細な基質とからなる。以下、各土器片ごとにその構成物の特徴を記す。

(1) IH-051

本試料は、比較的粗粒な岩石片、鉱物片およびごくまれに植物片とその間をうめる微細な基質からなる。図版73-1に本薄片の一部を示す。

(i) 基質部

黄褐色から褐色を呈し、鉱物の微細な破砕片とそれよりさらに微細な物質とからなる。時に、基質中にやや干渉色の高い微細な葉片状(?) 鉱物が見られ、それらが粗粒の岩石片や鉱物片の周囲を流理状にとりかこんでいることもある。

(ii) 岩石片

大きさは1.2mm以下で、一般に丸味を帯びているが、時に角ばったものもみられる。火山岩起源の岩石片が多く、他にチャート様岩石片およびまれに砂岩片もみられる。また、黒褐色を呈する岩石片もある。

(i) 火山岩片：亜角～円形で、一部変質(?) しているものおよび変質のみられない完晶質のものなどがみられ、いずれも斜長石および不透明鉱物の微細結晶を主とし、これに普通輝石の微晶を含むものもある。また、斜長石産晶の一部に細粒の石基が付着した岩石片もみられる（図版73-2）。また、内部に斜長石を含む軽石質岩石片もまれにみられる（図版73-2、図版73-3）。さらに、この軽石質岩石片とは異なる形態を示すガラス質岩石片もみられる。これは亜角～亜円形を示し、内部に針状から細柱状の微細鉱物と円形の気泡を多く含んでおり、ガラスは無色透明である（図版73-4）。

(ii) 黒褐色岩石片：0.5mm以下の亜円形～円形の岩石片が薄片中に散在している。内部に亜角～亜円形の鉱物の破砕片を含むが、変質のためか全体に黒褐色不透明である（図版73-4）。

(イ) チャート様岩石片：0.6mm以下の亜角～亜円形で、5 μ m以下の微細な他形の石英様結晶からなり、しばしば粗粒(15 μ m)な石英の細脈を伴う岩石片である(図版74-1)。この岩石片中の石英は波動消光する。

(ロ) 砂岩岩石片(?)：亜角状の石英、アルカリ長石、斜長石などの間を微細な基質がうめっている岩石片が1個みられた(図版74-2)。

(iii) 鉱物片

単独の鉱物片として、石英、斜長石、普通角閃石、斜方輝石、普通輝石がみられる。石英と斜長石は量的に最も多く、次いで角閃石が多く、普通輝石はきわめて少ない。この他に不透明鉱物も多くみられる。

(イ) 石英：無色透明、低屈折率、低干渉色の鉱物で、0.6mm以下の破砕片がほとんどであるが、一部に高温型石英の形態を残す破砕片もみられる。包有物は一般にみられないが、時に、空晶(ネガティブクリスタル)のみられるものもある(図版74-3)。

(ロ) 斜長石：無色透明、低屈折率、低干渉色の鉱物で、1.2mm以下の自形結晶およびその破砕片として存在する。1ないし2方向の劈開が発達し、双晶や累帯構造もよくみられる。全般に包有物は少ないが、時に、微細な高屈折率細柱状鉱物および不透明鉱物を含むものもみられる。まれに、内部に微細な雲母様鉱物の集合体を包有するものもある。また、無色透明の火山ガラス片の付着した斜長石破砕片も存在する。

(ハ) 角閃石：黄緑色から褐緑色の顕著な多色性を示す、高屈折率、高干渉色の鉱物で、普通角閃石であろう。自形結晶およびその破砕片として存在するが、0.3mm以下の破砕片が多く、自形結晶はまれである(図版74-4)。1ないし2方向の劈開が発達し、また、時に、双晶もみられる。

(ニ) 斜方輝石：淡灰色から黄緑色の弱い多色性を示し、高屈折率、低干渉色の直消光する鉱物である。0.7mm以下の自形結晶およびその破砕片として存在するが、0.4mm以下のものが多く、また、劈開もよく発達している。斜長石および不透明鉱物を包有するものもある。角閃石に比べると、比較的大きな結晶が多く、また、自形結晶も多い(図版73-4)。

(ホ) 普通輝石：淡灰緑色、高屈折率、高干渉色の鉱物で、劈開も認められ、斜消光する。一般には0.35mm以下の自形結晶およびその破砕片として存在し、不透明鉱物を包有するものもある(図版73-1右上端)。時に、双晶もみられる。比較的大きな破砕片として存在することが多いが、量的には少ない。斜方輝石とひとつのかたまりをなすものもみられる。

(ヘ) 不透明鉱物：長方形、三角形、不定形などを示し、0.5mm以下のものが多い。薄片全体に散在している。

(iv) その他

(イ) 植物片：薄片中に植物片一片が見い出された(図版74-1)。大きさは0.25 \times 0.9mmで暗褐色を呈し、縦にはほぼ平行に繊維状のものが並び、一部に規則正しく並んだ細胞壁様のものがみられる。直交ニコル下で暗黒になる。

(ロ) ガラス様物質：無色透明で屈折率がきわめて低く、光学的等方体もしくはそれに近い性質を示す物質が薄片の基質中全体に散在している。大きさは最大0.1mm程度で、20～40 μ mのものが多い。形態は種々あり、円形、楕円形、方形、扇形、不定形などがみられる。図版73-3および図版75-11に一例を示す。中央部に空孔をもつものも多く、バブルウォール型とうの火山ガラスとは明らかに異なり、生物起源の珪酸体のようなものである可能性がある。

(2) IH-052

本試料には植物片が多数みられ、それらはうねりながらもほぼ一定方向に配列している。また、これと類

似の形態を示す空孔も多数みられる。この他に比較的粗粒な岩石片および鉱物片が全体に散在し、それらの間を微細な基質がうめっている。図版75-2に本薄片の一部を示す。本薄片中にはIH-051およびIH-054にみられる生物起源の珪酸体様物質がみられない。

(i) 基質部

黄褐色から黒褐色で、薄片全体がやや暗くみえる。基質部は微細な鉱物片からなり、直交ニコル下で比較的高い干渉色を示す微細な葉片状鉱物も多くみられる(図版75-2)。また、赤褐色を呈する部分も一部にみられる。

(ii) 岩石片

大きさは約0.8mm以下で、一般に丸味を帯びている。火山岩片と思われる岩石片はあまりみられず、チャート様岩石片や深成岩起源と考えられる岩石片などがみられ、また、内部に少量の鉱物破砕片を含み、赤褐色で、円形ないし楕円形の岩石片もみられる。変成岩の可能性も考えられる岩石片も一部にみられる。

(イ) チャート様岩石片：数 μm 以下の他形の微細な石英様鉱物からなり、内部にやや粗粒な石英の細脈もみられる岩石片で、亜角～亜円形のものが多く、石英は波動消光する(図版75-3)。チャートあるいはシルト岩のようなものかもしれない。また、比較的粗粒(平均50 μm 程度)な他形の石英のみからなる岩石片もある。

(ロ) 火山岩片(?)：微細な無色透明の長柱状結晶が不規則に配列した岩石片や高温型石英の破砕片に微細な石英(?)の付着した岩石片などがまれにみられる。最大0.8mmであるが、0.1mm以下の微細なものが多い。多くは亜円形で、淡褐色から赤褐色に着色されている。図版75-4に一例がみられる。

(ハ) 深成岩片(花崗岩片?)：他形を示す石英および斜長石からなる岩石片やアルカリ長石と斜長石からなる岩石片がときにみられる。

(ニ) 赤褐色岩石片：赤褐色の円～亜円形岩石片が薄片中に散在している。大きさは0.5mm以下で、内部に少量の鉱物の破砕片らしきものがみられる。

(ホ) 変成岩片(?) (ホルンフェルス様岩石片)：他形石英の粒間に薄板状の黒雲母がほぼ平行に配列している岩石片がときにみられる。円形または楕円形で、0.08～0.7mmの大きさである。

(iii) 鉱物片

単独の鉱物片として、主に石英、斜長石、斜方輝石、アルカリ長石および不透明鉱物がみられ、他に少量の普通角閃石および普通輝石、また、ごくまれにジルコンがみられる。石英と斜長石が最も多く、次いで、斜方輝石とアルカリ長石がほぼ等量みられる。

(イ) 石英：無色透明、低屈折率、低干渉色の鉱物で、0.6mm以下の破砕片がほとんどであるが、中には高温型石英の形態を残す破砕片もみられる。時に、内部に空晶(ネガティブクリスタル)のみられることもある。

(ロ) 斜長石：無色透明、低屈折率、低干渉色の鉱物で、亜円～亜角形の破砕片がほとんどであり、双晶および累帯構造もよくみられる。包有物をほとんど含まないものと、雲母様微細鉱物を多く含むものとがみられる。火山岩起源のものと深成岩起源のものが混在しているのかもしれない。

(ハ) アルカリ長石：無色透明、低屈折率、低干渉色の鉱物で、塵状包有物を多数含み、難溶ラメラのみられるパーサイトとして存在する。0.3mm以下で、やや丸味を帯びた四角形のものが多い(図版75-3、図版75-4)。

(ニ) 斜方輝石：淡黄緑色から黄緑色の弱い多色性を示し、高屈折率、低干渉色の直消光する鉱物である。

一般に不規則な破砕片が多く、また、劈開も発達し、その劈開線に沿って難溶ラメラのみられるものもある。双晶もみられることがある。内部に不透明鉱物や褐色ガラスを包有するものもみられる（図版76-1）。

(ii) 角閃石：淡灰緑色から濃褐緑色の顕著な多色性を示し、高屈折率、高干渉色の斜消光する鉱物である。普通角閃石であろう。一般に1ないし2方向の劈開がみられ、最大 $0.5 \times 0.2 \text{mm}$ であるが、 0.1mm 以下の破砕片がほとんどである。内部に不透明鉱物を包有するものもある。産出はきわめてまれである。

(iv) 普通輝石(?)：淡緑色で、高屈折率、高干渉色の楕円形鉱物片がまれにみられる。大きさは $80 \mu\text{m}$ 以下で、多くは $30 \sim 50 \mu\text{m}$ 程度であり、劈開もみられない。

(v) ジルコン：無色透明で、非常に高い屈折率および干渉色を示し、直消光する自形性の強い鉱物がまれにみられる。大きさは $80 \sim 30 \mu\text{m}$ である。

(vi) 不透明鉱物：四角形から不定形の不透明鉱物が薄片全体に散在している。

(iv) その他

植物片：幅 $0.2 \sim 0.05 \text{mm}$ 、長さ $数 \mu\text{m}$ 以下の植物片が薄片全体にかなり多くみられる。それらはほぼ一定方向に配列し、細胞壁のみられるものもある（図版75-2、図版76-2）。

(3) IH-054

本試料も、比較的粗粒な岩石片および鉱物片と、その間をうめる微細な基質からなる。図版76-3に本薄片の一部を示す。

(i) 基質部

淡黄褐色を呈し、鉱物の微細な破砕片とそれよりさらに微細な物質とからなり、生物起源の柱状体様物質もみられる。

(ii) 岩石片

火山岩片およびチャート様岩石片が主で、他に黄褐色岩石片がみられる。

(i) 火山岩片：変質(?)のためほとんど暗褐色を呈するものと、完晶質で変質のみられないものがあり、他に、角閃石、斜長石、斜方輝石などの斑晶に石基が付着している岩石片がしばしばみられる。図版76-3、図版76-4および図版77-1、図版77-3にそれぞれの例を示す。この他にも、ガラス質岩石片もみられ、亜角～亜円形で、内部に微細な斜長石、輝石および円形の気泡を包有している（図版77-2）。

(ii) チャート様岩石片： $5 \mu\text{m}$ 以下の微細な他形の石英様鉱物からなり、部分的に $20 \mu\text{m}$ 程度の他形の石英が脈状に存在する岩石片と、数十 μm の比較的粗粒な他形の石英のみからなる岩石片などがある。石英は波動消光する。図版77-3に一例を示す。

(iii) 黄褐色岩石片：大きさ 0.35mm 以下で黄褐色を呈する岩石片であるが、変質しているためか詳細は不明である。

(iii) 鉱物片

単独に存在する鉱物片は、石英、斜長石、角閃石、斜方輝石、アルカリ長石、普通輝石および不透明鉱物である。石英と斜長石が最も多く、次いで、角閃石と斜方輝石がほぼ等量みられ、アルカリ長石および普通輝石はまれである。

(i) 石英：無色透明、低屈折率、低干渉色の鉱物で、 1mm 以下の破砕片が多いが、中には高温型石英の形態の一部に残す破砕片もみられる。また、内部に空晶（ネカティブクリスタル）を包有するものもある。

(ii) 斜長石：無色透明、低屈折率、低干渉色の鉱物で、多くは 0.6mm 以下の自形結晶およびその破砕片として存在する。斜長石の多くは黒帯構造を示し、双晶している。これらの斜長石には内部を褐色ガラスが充

壊した空晶（ネガティブクリスタル）を包有するものもある（図版77-4）。また、累帯構造や双晶の全くみられない破砕片もある。

(イ) アルカリ長石：無色透明、低屈折率、低干渉色の鉱物で、内部に微細な塵状包有物を有し、難溶ラメラがみられるパーサイトである。最大1.2mmで、0.5mm程度ものが多い。亜角状を呈する破砕片が多く、まれに、石英を伴う破砕片やミルメカイト様組織をもつものなどもみられる（図版77-4、図版77-5）。

(ロ) 角閃石：黄褐色から暗褐色の顕著な多色性を示し、高屈折率、低干渉色の鉱物である。斜消光するが消光角もきわめて小さい（図版76-3）。緑褐色を呈する角閃石もごくまれにみられる。長径0.1mm程度の自形の角閃石が多くみられる。図版76-3、図版77-1および図版77-4に角閃石がみられ、本角閃石の特徴は酸化角閃石（玄武角閃石）のものに類似している。

(ハ) 斜方輝石：淡黄緑色から黄緑色の弱い多色性を示し、高屈折率、低干渉色の直消光する鉱物である。1ないし2方向の劈開がよくみられ、0.6mm以下の自形結晶およびその破砕片として存在する（図版76-3）。内部に不透明鉱物や褐色ガラスを包有するものもみられる。

(ニ) 普通輝石：灰緑色で、高屈折率、高干渉色を示す鉱物で、0.05mm以下の角ばった破砕片としてみられることが多い。

(ホ) 不透明鉱物：四角形から不定形で、0.2mm以下のものが多く、薄片全体に散在している（図版76-3）。0.03mm以下の小さなものでは赤褐色を呈するものもある。

(イ) その他

生物起源の珪酸体と考えられるガラス様物質が基質中によくみられる。屈折率はきわめて低く、光学的に等方体もしくはそれに近い性質を示す。形は、四角形、三角形、扇形、円形などさまざまである。内部に円一楕円形の空孔をもつものがほとんどである。直径20～40 μ m程度のものが多い。これらはバブルウォール型等の火山ガラスとは明らかに異なる。

III-3. X線回折法による検討

偏光顕微鏡で観察できないような微細な構成物の同定と、各土器片の平均的鉱物構成を調べるために、粉末X線回折法による検討を行った。

X線回折用試料には薄片作成時の切断粉末を用いた。この切断粉末を利用することで、貴重な試料の有効活用ができ、さらにまた、顕微鏡観察部周辺の鉱物構成も明らかにでき、顕微鏡とX線との両方法によるそれぞれの情報の対応が可能となる。

X線回折実験にはディフラクトメーター（リガク社製RAD-2VC）を使用し、モノクロメータにて単色化されたCuK α 線を用いた。粉末試料は浅型のガラス試料板に埋め込んで測定を行った。測定条件は、スリット系1°DS-0.15RS-1°SS、スキャンングスピード2°(2 θ /min)、サンプリング間隔0.02°(2 θ)である。回折線の測定範囲は1.5°～70°(2 θ)である。

IH-051、IH-052およびIH-054の粉末X線回折パターンをそれぞれ図169、図170および図171に示す。これより、IH-051およびIH-054はほぼ同じ構成鉱物からなり、ただ、それらの量比が異なることがわかる。主構成鉱物は、石英、斜長石、角閃石、クリストバル石(?)である。斜方輝石の主要回折線は上述の鉱物のものと重複するものが多く、このパターンだけからではその存在の判定は難しい。IH-052も、石英、長石、クリストバル石(?)を主要構成鉱物とするが、角閃石の回折線がみられない点異なる。また、IH-051およびIH-052ではいずれも2 θ = 19.6°(d = 4.5Å)付近に上記鉱物のいずれとも対応しない回折線がみられる。現

段階ではこの回折線の特定はできていない。

これら3試料のパターンを比較すると、角閃石および 19.6° (2θ) 付近の回折線の有無と、長石の回折線の強度とに大きな差異がみられる。

IV. 考察

IV-1. 今井白山遺跡出土の土器片の特徴

今井白山遺跡出土の製作時代の異なる土器片3片(IH-051, IH-052, IH-054)について、試料の外観の観察、偏光顕微鏡観察および粉末X線回折法による検討を行った。以下、各検討方法ごとにそれらの結果を考察する。

(1) 試料の外観的特徴

研究試料すべてについて、2~3mm以下の岩石片および鉱物片とその間をうめる基質とからなること、および岩石片は一般に丸味を帯びていることは共通している。しかし、基質の色および土器器壁断面にみられる細孔の特徴に大きな相違がみられる。

細孔の特徴では、IH-052が他2片と大きく異なる。IH-052中の細孔は量も多く、大きさも大きく、またその形もより細長い。この特徴は土器製作時に混じたとされる植物繊維によるものであろう。

岩石片および鉱物片については、実体顕微鏡観察では、大きな差異は見い出せていない。今後、さらに詳細に観察すれば、土器片ごとの特徴付けもある程度可能であろう。しかし、それよりは、次に述べる偏光顕微鏡による観察を試みた方が、より有効・確実な特徴付けが可能と考える。

また、IH-052では、表面上の粗粒鉱物片が二次的に円磨されたような様相を呈しており、本土器片が流水等で運搬されてきた可能性を示している。このことは本土器片が異地性のものであるとする発掘調査結果をうらづけるものである。

(2) 偏光顕微鏡観察

研究試料3片の偏光顕微鏡観察結果をもとに、基質、岩石片、鉱物片およびその他の構成物にわけて、それぞれの特徴を比較検討する。

(i) 基質部

図版73-1、図版75-2、および図版76-3にそれぞれの試料の基質の特徴がみられる。3試料を比較すると、それらの特徴は主に次の3点にまとめられる。

(イ) 3試料間で基質の色が異なる。IH-052では全体に淡色で、光の透過率も低く、IH-054では全体に淡色である。IH-051はその中間的な色を示す。

(ロ) IH-052の基質中には、直交ニコル下でやや高い干渉色を示す葉片状鉱物が多数みられる(図版75-2、図版75-4)が、IH-054にはそのようなものはみられない。IH-051には、類似のものが少量みられる。

(ハ) IH-051およびIH-054中には生物起源の珪酸体と考えられるガラス様物質がみられるが、IH-052中にはそのようなものが確認できていない。

(ii) 岩石片

いずれの試料にも数種類の岩石片がみられる。各土器の特徴を比較すると次のようになる。

(イ) IH-051とIH-054は火山岩起源の岩石片を多く含む。それに対し、IH-052ではそれがあまりみられない。

(ロ) IH-052には深成岩起源と考えられる岩石片および変成岩起源とも考えられる岩石片が含まれるが、

IH-051およびIH-054にはそれらの種類のもののみつかっていない。

(イ) チャート様岩石片と、岩石種および起源とも不明の濃褐色岩石片は3試料すべてにみられる。

(ii) 鉱物片

薄片中にみられる主要鉱物をおおよその量比の順に並べると次のようになる。

IH-051：石英、斜長石、普通角閃石、斜方輝石、普通輝石

IH-052：石英、斜長石、斜方輝石、アルカリ長石、普通角閃石、普通輝石

IH-054：石英、斜長石、角閃石、斜方輝石、アルカリ長石、普通輝石

この他に、不透明鉱物がどの薄片中にもよくみられる。一般に石英と斜長石は量的に最も多くみられ、角閃石、斜方輝石およびアルカリ長石の量比は試料により異なる。普通輝石はどの薄片中にもまれにみられる。

以下、各鉱物ごとに特徴を比較する。

(イ) 石英：すべての試料中に、多くは破砕片としてみられるが、中には高温型石英の形態を一部に残す破砕片もみられる（図版74-3）。

(ii) 斜長石：すべての試料中によくみられる。IH-052中の斜長石はアルカリ長石を伴ったり、内部に微細な葉片状鉱物を多く包有するものがあるなど、深成岩起源と考えられるものが多くみられる。IH-051中にもこの種のものがまれにみられる。また、それらの微細葉片状鉱物を含まないものには、時に、内部に褐色ガラスを包有するものがある（図版77-4）。

(iii) アルカリ長石：IH-051にはみられないが、IH-052およびIH-054中ではよくみられる。アルカリ長石は離溶ラメラをもつパーサイトであり（図版75-3、図版75-4、図版77-4、図版77-5）、また、IH-054中にはミルメカイト様組織もみられる（図版77-5）ことなどから、深成岩起源と考えられる。

(iv) 角閃石：光学的特徴より、一般に普通角閃石と思われる（図版74-4、図版76-3、図版77-1、図版77-3、図版77-4）。土器片中の鉱物の中で、とくに、土器片間の相違が顕著な鉱物である。IH-051およびIH-054中に多くみられる。IH-052中ではごくまれである。また、IH-051およびIH-052中の角閃石が黄緑色から緑褐色を呈するのに対し、IH-054中の角閃石は黄褐色から暗褐色を呈するなど、両者の間に色について大きな相違がみられる。この点については別に論じる。

(v) 斜方輝石：いずれの土器片中にも一般によくみられる鉱物であり、どれも類似の特徴を示している。土器間での差異を論ずるにはさらに詳細な観察・測定が必要である。また、中には内部に褐色ガラスを包有するものもみられる（図版76-1）が、この種のものは火山岩起源であることを示唆しているのかもしれない。

(vi) 単斜輝石：いずれの土器片中にもみられるが、量は少ない。

(vii) 不透明鉱物：いずれの土器片中にもよくみられる。土器間での差異を論じるためには、今後、反射光での観察が必要である。

(viii) その他

薄片中には、以上の岩石片および鉱物片の他に、植物片および生物起源の珪酸体様物質（？）がみられる。

(イ) 植物片：IH-052中にとくに多量にみられる（図版75-2、図版76-2）。IH-051中にも1片のみみられた（図版74-1）。IH-054中にはみられなかった。

(ii) 生物珪酸体様物質（？）：IH-051およびIH-054中には生物起源の珪酸体と考えられるガラス様物質が数多くみられる。IH-052中からはみつからない。この物質は、形、大きさとも種々あり、また、火山ガラスとは明らかに異なるものである。今後の検討が必要である。

(3) X線回折法による検討

図169、図170および図171に土器片3片のそれぞれの粉末X線回折パターンを示した。各試料中の構成鉱物の種類および量比について、3試料間での差異は明らかである。特に、角閃石および19.6°(2θ)付近の回折線の有無と、長石の回折線の強度とに大きな差異がみられる。また、すべての土器片中にクリストバル石と思われる回折線を見出した。土器片中のクリストバル石の同定問題およびその存在と焼成温度との問題については別に論じた(吉川, 1992)。その中で、もし土器の原土中に生物起源の珪酸体が存在すれば、それが高温焼成でクリストバル石に変化する可能性があるという考えにふれた。今回の3試料中、

IH-052からは他にみられるような生物珪酸体様物質が見出されていない。それにもかかわらず、その粉末X線回折パターン中には少なくとも他と同程度のクリストバル石が含まれていることが示されている。今回、生物珪酸体と考えたものが別の物質であったのか、あるいは、クリストバル石はそれとは異なる物質中に別の存在形態をとり、しかも超顕微鏡的な大きさで存在するのか、この点についても今後の検討課題である。

さらに、今回のように土器片の一部全体を粉末にしてX線回折法で検討する方法では、土器の平均的鉱物構成を知ることができるが、一般に複数鉱物からの回折線が相互に重複するため、すべての回折線を説明しつくすとはかなり難しい。また、この方法では回折パターン中より同定された鉱物の、土器中での存在状態、すなわち、その鉱物が岩石片中に存在するのか、比較的粗粒な単独の鉱物片として存在するのか、あるいは基質中に存在するのか、これらのいずれであるのか区別はできない。従って、今後、粒

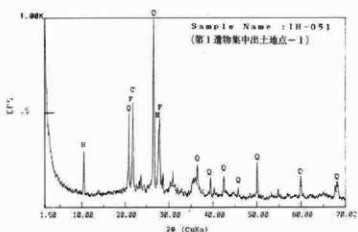


図169 土器片1 (第1遺物集中出土地点-1)の粉末X線回折パターン Q:石英, C:クリストバル石, F:長石, H:角閃石

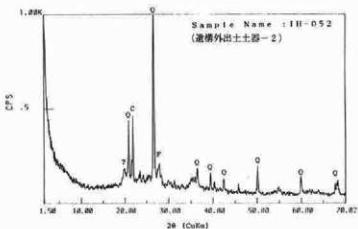


図170 土器片2 (遺構外出土土器-2)の粉末X線回折パターン Q:石英, C:クリストバル石, F:長石

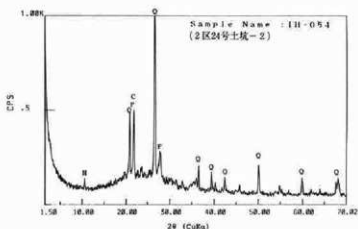


図171 土器片3 (2区24号土坑-2)の粉末X線回折パターン Q:石英, C:クリストバル石, F:長石, H:角閃石

度別および鉱物片ごとに粉末X線回折パターンを測定し、検討を重ねていくことで、各試料のいっそうの特徴づけを行っていくことが必要である。

IV-2. 今井白山遺跡出土の土器片中の角閃石について

本研究試料3片中すべてに、量の多少はあるが、角閃石が見い出された。これらの角閃石はその色より緑色系統のもの (IH-051, IH-052) と褐色系統のもの (IH-054) とに2分される。緑色系統のものにも、褐緑色を示すものと緑褐色を示すものとがみられ、ひとつの薄片中にこれら両者がみられる場合もある。また、褐色系統のIH-054中にもごくまれに緑褐色を呈するものもみられる。このように、本研究試料中の角閃石はその色に大きな特徴がある。この角閃石の色の相違の原因には、原土の相違、あるいは焼成温度の相違などが考えられる。今回の場合、原土の相違も十分考えられるが、緑色系統のものも全般に褐緑味を帯びていること、および、ひとつの試料中でも若干ではあるが色の相違がみられることなどから、焼成温度の相違の可能性がたよいのではないだろうか。

一般に、火山岩中からも、緑色を呈する角閃石 (普通角閃石) と褐色ないし赤褐色を呈する角閃石 (酸化角閃石または玄武角閃石) の存在が知られている。また、緑色を呈する普通角閃石を加熱していくと、約800℃で酸化角閃石 (玄武角閃石) 様の赤褐色を呈する角閃石に変化し、さらに高温状態で輝石の形成がみられることが報告されている (山口, 1969)。

もし、今回の研究試料中の角閃石が原土中ではもともと緑色を呈していたと仮定すると、高温での焼成に応じて、その角閃石に変化が生じたことが十分に想像でき、IH-054の焼成温度が他の2試料よりもかなり高かったことが推測される。しかし、角閃石のみを取り出して行った実験室での加熱実験結果を、ただちに、実際の土器焼成時の角閃石の変化にあてはめることに問題がないわけでもない。今後、両者の条件を十分に検討し、さらに、新たにこの観点からの実験的研究を行っていくことで、土器の焼成温度推定のひとつの手がかりが提供されるのではなかろうか。この点について現在検討中である。

V. おわりに

前橋市今井町の今井白山遺跡より出土の製作時代の異なる土器片3片について、主に、実体顕微鏡、偏光顕微鏡およびX線回折法を用いて、それぞれの土器片の特徴の記述と比較を試みた。

本報告にみられるように、それぞれの方法がそれぞれに特徴をもち、時に、異なる側面からの情報を提供しうることがわかる。特に後二者の提供する情報の質についてはすでに述べた (吉川, 1987, 1992)。各方法の情報の質を十分理解の上で、考古学的試料へ適用していくことが重要である。なかでも、偏光顕微鏡による観察は、個々の土器片の特徴付けにきわめて有効であり、今後、十分活用すべき方法と考える。なお、その時、各構成物の起源を考えながら観察をすすめていくことが重要であり、そのためには、単に構成物の種類や量比のみだけでなく、大きさ、色、形、割れ方、包有物の種類、二次的变化 (破砕、変質など) などについても細かに観察していくことが必要である。偏光顕微鏡によるこのような観察を通して、原土の産地の推定や土器製作法 (とくに焼成温度など) などの問題に有力な情報が提供されるものと思う。さらに、今後は、土器等の研磨薄片を作成し、透過光・反射光の両方で観察をすすめていけば、たとえば、不透明鉱物の特徴づけも可能となり、いっそう多くの情報が提供されることになる。

しかし、偏光顕微鏡観察を実際にすすめていく上で、いくつかの困難もある。偏光顕微鏡観察の第一目標は鉱物種の同定や岩石種の同定である。土器等が焼成という過程および日常生活での使用という過程を経る

ために、然に比較的安定と考えられる粗粒な混和材も、当然、原土中にある時と異なり、何らかの変化をこうむる可能性があり、これが鉱物種や岩石種の同定を困難にする。また、現在認められる二次的变化が、原土中ですでに存在していたものであるのか、あるいは、その後の変化によるものかの判定の難しい場合も多い。さらに、特に、岩石種の同定における困難もある。顕微鏡で観察される岩石片の大きさはせいぜい3mm以下であり、径0.1mmの岩石片も珍しくない。この程度の微小な大きさのもののみで原岩の種類を推定することにはかなり無理がある。従って、今後、遺跡出土土器の偏光顕微鏡観察結果を積み重ねていくと同時に、それらの原土となりうる粘土や混和材についても同様な研究を行っていく必要がある。

これらの研究結果をふまえて、さらにX線回折法その他の理化学的研究方法を目的に応じてとり入れていくことで、考古学的試料そのものへの理解が一層深まり、その結果の考古学的解釈もより適切に行えるようになるであろう。

最後に、研究に用いた土器片はいずれも飯島義雄氏（群馬県埋蔵文化財調査事業団）より提供されたものである。興味あるそして貴重な試料を提供し、研究の機会を与えていただいた同氏に深く感謝いたします。なお、本報告中では関連研究論文の多くはその引用を省略してある。今回の研究をすすめるにあたり、主に下記文献を参考にした。

- 天野哲也・大場孝信（1984）岩石学的方法による土器の分類と製作地推定の試み。北方文化研究、16、125-163。
 上條研宏（1983）粘土分析Ⅰ。縄文文化の研究、雄山閣、5、縄文土器Ⅲ、47-67
 大沢真澄・二宮伸治（1983）粘土の組成と焼成温度。縄文文化の研究、雄山閣、5、縄文土器Ⅲ、20-46
 清水芳術（1973）縄文時代の集団領域について—土器の顕微鏡観察から—。考古学研究第19巻4号、90-102
 清水芳術（1982）縄文土器の自然科学的研究。縄文土器大成1、講談社、152-158
 清水芳術（1983）粘土分析Ⅱ。縄文文化の研究、雄山閣、5、縄文土器Ⅲ、68-86
 WILDIG, L.P., SMECK, N.E. and DREES, L.R. (1977) Silica in soils: Quartz, Cristobalite, Tridymite, and Opal. In: ed. DIXON, J.R. and WEED, S.B., Minerals in soil Environments, SoilSci. Soc. America, 471-552.
 山口徳昭（1969）角閃石の加熱実験に関する実験的研究。岩石鉱物鉱床学会誌、61巻4号、158-168。
 吉川和男（1987）出土土器の鉱物学的研究。行幸白山遺跡。澁川市教育委員会・群馬県企業局・日本道路公団、544-559。
 吉川和男（1992）埋蔵の鉱物学的研究。神保下線遺跡。群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本道路公団、287-294。

第6章 まとめ

これまで、今井白山遺跡で検出された縄文時代以降の遺構と出土遺物について記載して来た。本章では、今井白山遺跡を発掘調査し、整理する過程で気づいた事項と前章で触れることのできなかった内容について記し、まとめに代えたい。

1 遺跡の立地する扇状地の形成

今井白山遺跡は荒砥川の扇状地上に立地しており、地山となっているのは砂礫層およびシルト層である。発掘調査の結果、シルト層の上部に、問題は残しながらも縄文時代加曾利E3式期の敷石住居と推定される遺構が存在した。また、南北に走る沢が検出され、ローリングを受けていない加曾利E3式の比較的大きな土器片が出土している。また、比較的下部の砂礫層およびシルト層中からはやはりローリングを受けていない加曾利E3式土器の遺物集中出土地点と、打製石斧を含む遺棄された石器の集中出土地点が検出されている。そして、縄文時代前期の土器片は加曾利E3式の土器と対照的に顕著なローリング痕を示している。

これらのことを総合して考えると、本遺跡において、少なくとも縄文時代中期加曾利E3式期には人間の生活が営まれていたことが確かめられ、遺物の出土レベルから荒砥川の河道の変化による地山の凹凸に沿って土器や石器が遺存されているものと推定される。そして、本遺跡の地山を構成する砂礫層およびシルト層の上部は、縄文時代中期加曾利E3式期からそれほど潮らない時期に形成されているのではないかと考えられる。

赤城山南麓においては、黒ボク土に存在する「二次堆積ローム」から「縄文時代のある時期に山崩れや扇状地の拡大が行われるような環境の変化が起こったのかも知れない」（早田1990）とされる。また、荒砥川上流の粕川村安通・洞遺跡は扇状地の上に立地しているが、縄文時代中期後半の土坑の上に扇状地堆積物が覆っていることから、扇状地の形成はそれ以降とされる。

今井白山遺跡の立地する扇状地の形成時期を考える上では、赤城山南麓の扇状地およびその堆積層の下部に存在する遺跡が総合的に検討されなければならないであろう。

2 地震の痕跡

本遺跡で検出された地震の痕跡については、第5章でやや詳細に検討したように、弘仁九（818）年に発生した地震の結果と推定される。

この地震に関して関連する遺跡について検討してみたい。

最近、伊勢崎市の上植木庵寺の「塔の修繕、再建を考える際に想起されるのは、『類聚国史』弘仁九年（818）に上野国を中心に起きた、大規模な地震のことである」（松田 1990）と注意され、「上野国分寺などの寺院の堂塔や国衙・郡衙の倉屋などにも倒壊等の被害があった可能性も考えられる」（松田 1991）と指摘されている。

上野国分寺の報告書（群馬県教育委員会 1989）の図面と写真を見ると、南辺築垣西半分において築垣をやや斜め切って少し屈曲しながら東西にはしる「溝」が認められる。この「溝」は、平面図によれば上幅が50~100cmと大きく変位し、下端の形状も一定していない。また、断面図によればその下部は築垣の下部の地

山にさらに延びる様子が窺える。つまり、底部まで達していないのである。また、写真によれば、「溝」の両辺がよく平行しながら屈曲しているように見える。以上の状況は、この「溝」が人為的に掘削されたのではなく、自然現象によって生じた亀裂であることを示しているものと考えられる。自然現象の中で地山に亀裂が生じる原因としては、まず急傾斜地における地滑りが考えられる。しかし、上野国分寺は急傾斜地に立地しておらず、地滑りは想定できない。他に原因を求めるとすれば、それは地震である。上野国分寺は今井白山遺跡と同様に扇状地の上に立地しており、地山の下部には砂層が堆積している。おそらく、地震により下部の砂層が液状化現象を起こして、上部の堆積層が南方向にずれ亀裂が生じたものと推定される。亀裂の下部には、今井白山遺跡で検出されたような砂層の液状化に伴う噴砂が認められるものと思われる。

地震による液状化現象は、「気象庁の震度階級のⅥ（烈震）・Ⅶ（激震）で発生する。特に液状化し易い地盤条件ではⅤ（強震）でも発生しうる」とされる（寒川 1992）。強震は「壁に割れ目が入り、墓石・石どうろが倒れたり、煙突・石垣などが破損する程度の地震」であり、烈震は「家屋の倒壊は30%以下で、山くずれが起き、地割れを生じ、多くの人々が立っていることができない程度の地震」である（同前）。南辺築垣の下部で地震に伴う砂層の液状化現象が生じているとするならば、上野国分寺の堂塔への影響は必至と言わざるを得ない。

ところで、南大門基壇の東縁には方位を異にする石列があり、南大門の改修の可能性もある。さらに、金堂の「基壇の版築土の中と底部には創建期の軒瓦や文字が押印されたものを含む瓦の破片が多数入って」おり、「金堂の建立が始まった時点では、それに先行して瓦を使う工事が進められて」おり、「それが塔であった可能性が高い」とされる。「七重の塔の建立が開始されたのは8世紀前期ないし中期」とされ、弘仁九（818）年には塔は完成していたものと考えられる。つまり、金堂の基壇中に創建期の瓦が入れられ背景には、地震による塔に聳かっていた瓦の崩落があったのではなかろうか。

そして、上野国分寺の南辺築垣は、西部で北側に屈曲している。この南辺築垣が改修されているとするならば、その契機は上記の地震による影響が想定されるのである。

上野国分寺の建立にあたっては、勢多郡の豪族が寄進を行い大きな役割を果たしていることが知られている。一方、弘仁九年の地震に由来する泥流によって、赤城山南麓の勢多郡域は大災害を被ったことが明らかにされた（能登・内田・早田 1990）。上野国分寺が地震により被害を受け、その後改修がなされたとするならば、勢多郡の豪族の係わり方も創建時とは異ならざるを得なかったであろう。

このように、弘仁九年の地震が上野国分寺に与えた影響は小さくなかったものと思われる。今後の発掘調査により、南辺築垣を切る「溝」の実態を把握する必要がある。

地震は確かに自然現象ではあるが、歴史に大きな影響を与える現象でもあるのである。

3 灰釉陶器の磨痕

1区2号住居からは、ほぼ完形の灰釉陶器が4点出土している。これらの内3点の内面中央部と高台端部には研磨痕が認められる。研磨痕の範囲に規則性があり、使用の結果というよりは、意識的にかつ組織的に研磨された結果と考えるべきであろう。

灰釉陶器と言う大量生産および広域流通が前提となる陶器の性格からして、こうした組織的な研磨が生産から消費までのどの段階で行われたかは、灰釉陶器を考える上で重要な要素であろう。今後の追及課題である。

4 土器の胎土分析

これまで、各種の土器の胎土について、その生産地と移動を推定すべく様々な自然科学的分析方法が採られて来た。それは、蛍光X線分析による元素の定量分析であったり、X線回折試験による粘土鉱物および造岩鉱物の同定であったり、砂粒の重鉱物組成であったりした。

それらの方法を概観してみると、各資料間の一般性を求めるためにいくつかの元素・鉱物を抽出し、資料間で比較を行うが、なぜその元素・鉱物を選ぶかの自然科学的かつ人文科学的意味付けがなされておらず、だされた結果を判断する基準がないか、不十分である。

また、明らかにすべき課題に対しいかなるバックデータが必要かの検討がなく、出されたデータの解析は可能性の指摘に止まっている。

つまり、考古学的に胎土分析になにを求めるのかを明確にし、自然科学的な条件を理解あるいは管理・制御した上で、データを抽出し、解析する必要があると言える。

本遺跡で行った土器の胎土分析は、上記の問題意識に基づく基礎的な作業の一つである。今後、様々な試行を行いながら、土器の胎土の自然科学的分析方法により考古学的に意味のあるデータを抽出する努力を継続して行きたい。

本遺跡の出土資料については、出来る限りの資料化に努めたが、それらの提議する問題は多岐にわたる。編者の力量不足により十分に追及できなかった。この責任は今後の課題として負って行きたい。

引用・参考文献（年代順）

- 新井房雄 1962 関東盆地北西部地域の第四紀編年 『群馬大学紀要自然科学編』 10 pp.1-79
尾崎喜左衛門 1971 第二編古代上 『前橋市史』 第1巻 pp.105-508
群馬県教育委員会 1974 『群馬県遺跡地図』
新井房雄 1979 関東平野北西部の縄文時代以降の指標テフラ層 『考古学ジャーナル』 No.157 pp.41-52
柏川村教育委員会 1981 『福寿山K1・安濃、割A3昭和54年度別荘開発整備事業による発掘調査概報』柏川村文化財庁第1集
設楽博己 1984 前橋市上沖町西新井遺跡の表面探査資料（上） 『群馬考古通信』 第9号 pp.1-22
坂口 一 1986 榛名二ヶ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器 『筑前北原遺跡・今井神社古墳群・筑前青柳遺跡』 pp.103-119
石川正之助・井上唯雄・堀沢重昭・松本浩一編 1979 火山堆積物と遺跡 I <関東地方北西部> 『考古学ジャーナル』 No.157 pp.3-40
早田勉 1989 6世紀における榛名山の2回の噴火とその災害 『第四紀研究』 27 pp.297-312
群馬県教育委員会 1989 『史跡上野国分寺跡』
熊登 健・早田勉 1990 二完新世の地形変化 『群馬県史』 通史編1 第1章 群馬県の自然と風土 第四節 赤城山山麓の地形発達史 pp.88-97
熊登 健・内田憲治・早田勉 1990 赤城南麓の歴史地質-弘仁九年の地震に伴う地形変化の調査と分析- 『信濃』 第42巻第2号 pp.1-18
松田 猛 1990 地方定額寺についての一考察-「上野国交替実録」と古代寺院跡- 『群馬県史研究』 第32号 pp.1-27
新井村教育委員会 1991 『資料集 赤城山麓の歴史地質-弘仁九年に発生した地震とその災害-』
熊登 健 1991 弘仁九年地震災害についての覚書 『群馬県史研究』 第34号 pp.38-50
松田 猛 1991 平安時代初期の地震-「順天國史」弘仁九年の記事を中心に- 『群馬県史研究』 第34号 pp.51-63
前橋市教育委員会 1991 『前橋市埋蔵文化財調査地区図』
前橋市教育委員会 1992 『前橋市埋蔵文化財調査地一覽表』
栗川 旭 1992 『地質考古学 遺跡が語る地質の歴史』

1区23号住居

棟号	図版番号	種別	器種	出土位置	法	量	胎土	焼成	色調	製作技法等の特徴	備考
図版-7	1	縄文土器	深鉢	床面直上	口径(42.5)	底径	砂粒をやや多く含む	—	—	口縁内傾、口縁部文様帯、単筋R.L縄文横位施文。体部区画文、R.L縦位施文。磨消縄文。内面横撫で、二次加熱で赤褐色化。	
図版-34	2	縄文土器	深鉢	1区19住	口径	底径	砂粒をやや多く含む	8.4	—	縦位沈線2～3条単位で施文。周に単筋L.R縄文横位施文か。内外面横撫で。	
図版-34	3	縄文土器	小形鉢	床面直上	口径	底径	砂粒をやや多く含む	6.3	5.0	口縁やや内傾。外面横撫で。内面横撫で。	
図版-34	4	縄文土器	深鉢	床面直上	口径	底径	細砂粒をやや多く含む	—	—	単筋R.L縄文施文。磨消縄文。幅広沈線による区画文。内面横撫で。	5と同一個体か。
図版-34	5	縄文土器	深鉢	床面直上	口径	底径	細砂粒をやや多く含む	—	—	単筋R.L縄文横位一斜位施文。幅広沈線。内面横撫で。	4と同一個体か。
図版-34	6	縄文土器	深鉢	1区18住	口径	底径	細砂粒を少し含む	—	—	口縁内傾。口縁上端部に楕円形の刻み目列、その下部に横位幅広沈線。体部単筋R.L施文後幅広沈線による曲線文。内面横撫で。	7と同一個体。
図版-34	7	縄文土器	深鉢	1区18住	口径	底径	細砂粒を少し含む	—	—	6と同じ	6と同一個体。
図版-34	8	縄文土器	深鉢	1区17住	口径	底径	細砂粒を少し含む	—	—	単筋R.L縄文縦位施文後、縦位幅広沈線による区画文。沈線文。内面横撫で。	9と同一個体か。
図版-34	9	縄文土器	深鉢	1区17住	口径	底径	細砂粒を少し含む	—	—	8と同じ	8と同一個体か。
図版-34	10	縄文土器	深鉢	床面直上	口径	底径	砂粒をやや多く含む	—	—	単筋R.L縦位施文。縦位沈線による区画文。内面撫で。	
図版-34	11	縄文土器	深鉢	床面直上	口径	底径	砂粒を多く含む	—	—	単筋R.L縄文縦位施文。内面撫で。	
図版-34	12	縄文土器	深鉢	埋土	口径	底径	砂粒をやや多く含む	—	—	沈線による縦位区画文。外面横撫で。内面撫で。	
図版-34	13	縄文土器	深鉢	埋土	口径	底径	砂粒を多く含む	—	—	沈線による縦位区画文。縦撫で。内面撫で。	
図版-34	14	縄文土器	前器	床面直上	黒色頁岩	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴	
図版-34	15	縄文土器	前器	床面直上	黒色安山岩	4.2	3.6	0.8	11.93	折られた割片素材	
図版-34	16	縄文土器	前器	床面直上	黒色頁岩	5.2	3.6	0.5	9.14	割片素材	
図版-34	17	縄文土器	使用前のある割片	床面直上	黒色頁岩	9.6	5.4	1.3	59.79	割片素材	
図版-34	18	縄文土器	前器	床面直上	黒色頁岩	4.0	2.4	0.5	7.12	折られた割片素材	
図版-34	19	縄文土器	使用前のある割片	床面直上	黒色頁岩	7.0	2.4	0.9	13.57	割片素材	
図版-34	20	縄文土器	前器	床面直上	黒色安山岩	5.9	4.6	1.7	45.07	割片素材。被熱痕あり	
図版-34	21	縄文土器	使用前のある割片	床面直上	黒色頁岩	7.4	7.5	1.0	44.71	折られた割片素材	
図版-34	22	縄文土器	前器	床面直上	黒色頁岩	5.45	9.7	1.3	59.75	割片素材	
図版-34	23	縄文土器	前器	床面直上	黒色頁岩	5.7	8.25	0.75	43.31	割片素材	
図版-34	24	縄文土器	前器	床面直上	黒色頁岩	7.8	8.0	2.4	123.90	割片素材	
図版-34	25	縄文土器	前器	床面直上	黒色頁岩	8.2	6.35	2.5	116.09	割片素材	
図版-34	26	縄文土器	前器	床面直上	黒色頁岩	8.9	9.5	1.7	118.73	割片素材	
図版-34	27	縄文土器	前器	床面直上	黒色頁岩	8.15	6.5	1.55	92.15	節理で折れた割片素材	
図版-35	28	縄文土器	前器	床面直上	黒色頁岩	10.45	7.5	2.3	225.05	折られた割片素材	
図版-35	29	縄文土器	磨石	床面直上	粗粒安山岩	11.8	7.3	5.8	752.20	楕円礫素材。研磨痕・敲打痕	
図版-35	30	縄文土器	磨石	床面直上	粗粒安山岩	15.4	9.2	6.0	811.40	楕円礫素材。煎熱後凹部形成	
図版-35	31	縄文土器	磨石	床面直上	粗粒安山岩	7.9	6.8	3.8	255.30	円礫素材。両面・側部敲打痕	

遺物観察表

神田番号	図版番号	器 種	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図8-32	図版-35	磨石	床面直上	横粒安山岩	13.7	12.0	3.6	938.30	扁平な円礫素材、両面研磨痕
図8-33	図版-35	磨石	床面直上	横粒安山岩	19.9	16.6	4.6	2200.0	扁平な円礫素材、両面に凹部
図8-34	図版-35	円礫破片接合	床面直上等	横粒安山岩	18.2	16.0	1.2	403.00	煎熱によりはじけた円礫破片

1区1号住居

神田番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 埋存状況	法 量	粘土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備 考			
図-10 図版-35	土師器 1 杯	カマド埋 土 口縁 ~底部1/2	口径(9.3) 底径 - 器高(3.2)	細粒砂 酸化焰 棕色	口縁部と体部の間に弱い稜をもち、底部は丸底である。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。				
図-10 図版-35	土師器 2 杯	埋 土 口縁1/4 ~体部少	口径(12.8) 底径 - 器高(3.9)	微粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部は外反し、体部の間に稜をもち、底部は丸底である。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。				
図-10 図版-35	土師器 3 杯	埋 土 口縁~体 部1/4	口径(14.7) 底径 - 器高(4.8)	微粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部は内彎する。口縁部は横撫で、体部はへら削り、口縁部と体部の間に無調整部分がある。				
図-10 図版-35	土師器 4 杯	埋 土	口径11.0 底径3.8 器高4.8	細粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部は僅かに外反し、体部の間に稜をもつ。体部は直線的に開き、底部は平底である。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。				
図-11 図版-35	土師器 5 高 杯	埋 土 脚部上半	口径 - 底径 - 器高(5.5)	水磁土か 酸化焰 棕色	杯身と脚部で成型接合、杯身底部はへら削り、脚部は面取り状にへら削り。				
図-11 図版-35	土師器 6 高 杯	埋 土 脚部片	口径 - 底径 - 器高(4.1)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	外面はへら削り。				
図-11 図版-35	土師器 7 盃	埋 土 口縁部1/2	口径(16.0) 底径 - 器高(5.3)	夾雑物 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部から頸部にかけては横撫で、胴部はへら削り。				
図-11 図版-35	土師器 8 盃	埋 土 口縁~体 部1/2	口径(17.4) 底径 - 器高(11.5)	夾雑物 酸化焰 にぶい褐色	口縁部から頸部にかけては横撫で、胴部はへら削り、内面胴部はへら撫で。				
図-11 図版-35	土師器 9 甌	埋 土 口縁~体 部1/2	口径(12.1) 底径 - 器高(13.2)	夾雑物 酸化焰 明赤褐色	口縁部は横撫で、胴部はへら削り。内面胴部はへら撫で。				
図-11 図版-36	土師器 10 甌	埋 土 口縁~底 部1/2	口径(17.3) 底径(5.7) 器高10.3	夾雑物 酸化焰 浅黄色	口縁部は横撫で、体部・底部はへら削りで底部には小孔あり、内面体部はへら撫で。				
図-11 図版-36	土師器 11 埴 埴部~底 部定形	埋 土 埴部~底 部定形	口径 - 底径 - 器高(8.6)	夾雑物 酸化焰 赤褐色	胴部は横撫で、胴部・底部はへら削り、内面胴部はへら撫で。				
図-11 図版-36	土師器 12 鉢?	埋 土 口縁~体 部1/5	口径(18.5) 底径 - 器高(11.3)	夾雑物 酸化焰 にぶい褐色	口縁部は横撫で、胴部はへら削り。内面胴部はへら撫で。				
図-11 図版-36	土師器 13 盞	埋 土 口縁~胴 部	口径19.5 底径 - 器高(18.5)	夾雑物 酸化焰 明黄褐色	口縁部から頸部にかけては横撫で、胴部はへら削り、内面胴部はへら撫で。				
図-11 図版-36	土師器 14 盞	埋 土 底部3/4~ 体部1/4	口径 - 底径6.6 器高(6.5)	夾雑物 酸化焰 にぶい黄褐色	胴部はへら削り、底部は無調整、内面は刷毛整形後へら撫で。				
図-11 図版-36	土師器 15 盞	埋 土 底部一 欠	口径 - 底径8.4 器高(3.3)	夾雑物 酸化焰 暗灰黄色	外面は体部・底部ともへら削り、内面はへら撫で。				
図-11 図版-36	土師器 16 盞	埋 土 底部完一 体部1/3	口径 - 底径4.1 器高(8.1)	夾雑物 酸化焰 にぶい黄褐色	外面は体部・底部ともへら削り、内面はへら撫で。				
神田番号	図版番号	器 種	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図11-17	図版-36	石製管玉	埋土	粒紋岩	2.25	0.6	0.2	1.00	一方向からの穿孔
図12-18	図版-36	加工痕のある礫	埋土下位	二フ希軽石	18.2	9.1	7.8	846.80	一面中央部に楕円状削り痕
図12-19	図版-36	礫石	埋土	角閃石安山岩	17.4	8.0	7.3	906.90	棒状円礫素材、端部に敲打痕

棟目番号	図版番号	部 種	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図12-20	図版-35	門	床面直上	粗粒安山岩	10.0	7.6	4.1	297.70	円縁素材、両面に凹部各1
図12-21	図版-36	加工重のある礎	カマド	角四石安山岩	41.5	21.6	16.6	11300	彫片割離痕、片面削り痕

1区2号住居

棟目番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状況	法 量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備 考			
図1-14 図版-37	灰釉陶器 皿	埋 土	口径 13.2 底径 6.3 器高 2.8	微粒砂 還元焰焼め 灰白色	轆轤成形、回転方向右廻り。高台は貼付。底部は回転へら調整。内面見込み部・高台裏付けに重ね焼き痕あり、施釉方法は漬け掛け、釉調は透明な淡緑色。	大原2号窯式 期			
図1-14 図版-37	灰釉陶器 2 皿	埋 土	口径 13.0 底径 7.0 器高 3.0	微粒砂 酸化焰焼め 灰白色	轆轤成形、回転方向右廻り。高台は貼付。底部は回転へら調整。内面見込み部に重ね焼き痕あり、施釉方法は漬け掛け、釉調は不透明な灰白色。	大原2号窯式 期			
図1-15 図版-37	灰釉陶器 皿	埋 土	口径 13.0 底径 6.4 器高 2.9	微粒砂 還元焰焼め 灰白色	轆轤成形、回転方向右廻り。高台は貼付。底部は回転へら調整。内面見込み部に重ね焼き痕あり、施釉方法は漬け掛け、釉調は透明な淡緑色。	大原2号窯式 期			
図1-15 図版-37	灰釉陶器 椀	埋 土	口径 13.8 底径 7.7 器高 4.6	微粒砂 還元焰焼め 灰白色	轆轤成形、回転方向右廻り。高台は貼付。底部は回転へら調整。内面底部に、不定方向の指痕で、高台裏付けに乾燥時の付着を防ぐためのあて具痕あり、施釉方法は漬け掛け、釉調は不透明な灰白色。	大原2号窯式 期			
棟目番号	図版番号	製品名	出土位置	遺 存 状 態 ・ 特 徴	長さ	幅	厚さ	備 考	
図15-5	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は中央部正方形で上端部は長方形。完形。	8.9	0.9	0.8		
図15-6	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は上端・中央・下端とも正方形。ほぼ完形。	8.6	0.8	0.6		
図15-7	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は上端長方形で中央・下端は正方形。完形。	8.7	0.7	0.6		
図15-8	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は上端部長方形で中央部は正方形。完形。	7.8	0.6	0.7	湾曲している	
図15-9	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は正方形。先端部を少し欠く。欠損は調査前	(8.2)	0.4	0.4		
図15-10	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は正方形。先端部を少し欠く。欠損は調査前	(6.4)	0.6	0.6		
図15-11	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は正方形。先端部を欠損する。欠損は調査前	(5.7)	0.8	0.6		
図15-12	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は上端部長方形で中央部正方形。先端部欠損	(5.7)	0.8	0.5		
図15-13	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は正方形。先端部を欠損する。欠損は調査後	(6.2)	1.1	0.4	身は錆で空洞	
図15-14	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は正方形。先端部を欠損する。欠損は調査前	(5.6)	0.7	0.6		
図15-15	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は正方形。下半部を欠損する。欠損は調査後	(5.0)	0.6	0.7		
図15-16	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は正方形。下半部を欠損する。欠損は調査前	(4.5)	0.9	0.5		
図15-17	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は正方形。下半部を欠損する。欠損は調査後	(4.2)	0.8	0.5		
図15-18	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は正方形。下半部を欠損する。欠損は調査前	(3.5)	0.8	0.5		
図15-19	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は正方形。下半部を欠損する。欠損は調査後	(2.7)	0.9	0.5		
図15-20	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は上部長方形で下端部正方形。欠損は調査前	(4.9)	0.6	0.4	身は錆で空洞	
図15-21	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は正方形。先端部を欠損する。欠損は調査前	(5.5)	0.6	0.4		
図15-22	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は長方形。頭・先端部を欠損。欠損は調査後	(3.9)	0.6	0.4	身は錆で空洞	
図15-23	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は正方形。下半・先端部欠損。欠損は調査前	(3.5)	0.5	0.4		
図15-24	図版-37	鉄器・釘	埋土中位	断面は長方形。下半部を欠損する。欠損は調査後	(2.5)	0.7	0.5	身は錆で空洞	
図16-25	図版-38	加工材	埋土中位	直径約 6cm の丸木素材。先端部を削って尖らす。	(8.7)	(4.7)	(2.8)	コナラ	
図16-26	図版-38	加工材	埋土中位	直径約 8cm の丸木素材。先端部を削って尖らす。	(5.6)	(4.2)	(3.7)	コナラ	
棟目番号 図版番号	部 種	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴	
図16-27	図版-38	加工重のある礎	埋土中位	二ツ巻石	18.2	9.2	7.8	846.80	円縁素材、端部に割離痕
図16-28	図版-38	加工重のある礎	埋土中位	粗粒安山岩	14.5	18.2	11.4	3500.0	円縁素材、縁状加工痕あり
図16-29	図版-38	加工重のある礎	埋土中位	粗石	23.0	14.2	10.2	1500.0	積り割離素材、削り痕と割離痕
図16-30	図版-38	加工重のある礎	埋土中位	粗粒安山岩	17.4	11.2	10.7	1900.0	円縁素材、縁状加工痕
図17-31	図版-38	加工重のある礎	埋土中位	粗粒安山岩	26.1	17.0	13.9	5500.0	積り割離素材、削り痕
図17-32	図版-38	加工重のある礎	埋土中位	粗粒安山岩	41.2	27.4	15.1	20400	厚円縁素材、削り痕、被熱痕
図17-33	図版-38	加工重のある礎	埋土中位	粗粒安山岩	22.2	14.9	13.5	4000.0	長積り割離素材、縁状削り痕
図17-34	図版-38	被熱痕のある礎	埋土中位	安山岩	21.5	18.4	7.7	4150.0	被熱により割離、接合

1区3号住居

棟目番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状況	法 量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備 考
図1-19 図版-39	土師器 1 杯	埋 土	口径(10.9) 口径-底径 器高(3.3)	細砂粒 酸化焰 褐色	口径部は直立し、底部はほぼ平底。口径部は轆轤で、体部は無調整。底部はへら削り。	

遺物観察表

神宮番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考		
図一 19 2 図版一39	土師器 杯	埋土 口縁一底 部1/8	口径(12.2) 底径一 器高(3.2)	微細粒 酸化焰 褐色	口縁部は外反し、体部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。			
図一 19 3 図版一39	土師器 杯	埋土 ほぼ定形	口径(12.7) 底径一 器高 3.8	細砂粒 酸化焰 にぶい褐色	口唇部は内雙し、底部はほぼ平底。口縁部は横撫で、体部は無調整。底部はへら削り。			
図一 19 4 図版一39	土師器 杯	埋土 口縁一体 部1/4	口径(15.9) 底径一 器高(6.5)	細砂粒 酸化焰 にぶい赤褐色	口縁部は直立し、底部は丸底。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。			
図一 19 5 図版一	土師器 杯	埋土 口縁部よ り1/8	口径(9.2) 底径一 器高(4.2)	微細粒 酸化焰 褐色	口縁部は外反し、底部は高い丸底。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。			
図一 19 6 図版一39	土師器 高杯	埋土 脚部片	口径一 底径一 器高(3.5)	夾雑物 酸化焰 明赤褐色	杯身底部中央に突起を設け脚部に差し込んでいる。外面は刷毛目。			
図一 20 7 図版一39	土師器 罍	埋土 口縁一頸 部1/3	口径(21.6) 底径一 器高(7.8)	微細粒 酸化焰 明赤褐色	口縁部に輪積み痕。口縁部は横撫で、胴部はへら削り、内面胴部はへら撫で。			
図一 20 8 図版一39	土師器 罍	埋土 口縁一胴 部1/4	口径(23.2) 底径一 器高(22.4)	夾雑物 酸化焰 明赤褐色	口縁部に輪積み痕。口縁部は横撫で、胴部はへら削り、内面胴部はへら撫で。			
図一 20 9 図版一39	土師器 罍	埋土 口縁一胴 部1/3	口径(26.6) 底径一 器高(31.1)	細砂粒 酸化焰、やや堅緻 にぶい赤褐色	口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は横撫で、胴部上位は横方向、中位以下は斜め方向へら削り、内面胴部はへら撫で。			
図一 21 10 図版一39	土師器 長埴	埋土 口縁一底 部2/3残	口径 22.1 底径 5.4 器高 34.0	細砂粒 酸化焰 にぶい赤褐色	口縁部は直線的に開き、胴部は緩い膨らみをもつ。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へら削り、底部もへら削り、内面胴部はへら撫で。			
図一 20 11 図版一39	土師器 罍	埋土 底部一胴 部1/8	口径一 底径(4.3) 器高(5.2)	微細粒 酸化焰 にぶい褐色	外面は体部・底部ともへら削り、内面はへら撫で。			
図一 20 12 図版一39	土師器 罍	埋土 底部一胴 部1/2	口径一 底径(4.6) 器高(8.0)	微細粒 酸化焰 にぶい赤褐色	外面は体部・底部ともへら削り、内面はへら撫で。			
神宮番号 図版番号	製品名	出土位置	遺存状態	特徴	長さ	幅	厚さ	備考
図20-13	図版一38 鉄器・鏝	埋土	刃部の形状と基部の湾曲から左利き用と推定		(15.5)	3.4	0.2	
図20-14	図版一38 鉄器・不明	埋土	断面は長方形。両端部欠損		(3.5)	0.7	0.2	基部に布目直
神宮番号 図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図20-15	図版一39 加工痕のある礫	埋土	粗粒安山岩	10.7	5.7	6.6	444.0	精円礫素材、側面端部に凹部
図21-16	図版一39 凹石	埋土	粗粒安山岩	11.0	6.5	5.2	378.1	やや深い凹部と敲打痕
図21-17	図版一39 加工痕のある礫	床面下	粗粒安山岩	14.8	14.1	4.8	1000.7	扁平円礫素材、両面に敲打痕
図21-18	図版一39 加工痕のある礫	埋土中位	粗粒安山岩	12.0	10.7	5.4	787.4	扁平円礫素材、端部に敲打痕

1区4号住居

神宮番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図一 24 1 図版一40	土師器 杯	埋土 口縁一底 部1/2	口径(10.2) 底径一 器高 3.4	細砂粒 酸化焰 褐色	口縁部は僅かに外反し、体部との間に稜をもち、底部は平底。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。	
図一 24 2 図版一40	土師器 杯	埋土 口縁一底 部2/3	口径(12.2) 底径一 器高 4.7	微細粒 酸化焰 褐色	口縁部は僅かに外反し、体部との間に稜をもち、底部は平底。口縁部は横撫で、体部の後直下に無調整部分、体部・底部はへら削り。	
図一 24 3 図版一40	土師器 壺	埋土 口縁一 体部上半	口径 9.9 底径一 器高(10.8)	微細粒 酸化焰 褐色	口縁部は直立し、胴部は球状。口縁部は横撫で、胴部はへら削り、内面胴部はへら撫で。	
図一 24 4 図版一40	土師器 鉢	埋土 口縁一底 部2/3	口径(22.2) 底径一 器高 10.3	微細粒 酸化焰 にぶい褐色	口縁部は外反し、体部との間に稜をもち、底部は丸底さみである。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。	

遺物観察表

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考			
図一 29 3 図版-41	土師器 壺	埋土 口径-底 部1/3残	口径(13.6) 底径 - 器高 3.1	細粒砂 酸化焰 棕色	口縁部は直立どみ、底部は平底。口縁部は横撫で、 口縁部直下に無調整部分あり、体部・底部はへら削り。				
図一 29 4 図版-41	土師器 鉢	埋土 口径-底 部1/3	口径(14.0) 底径 - 器高(3.0)	細粒砂 酸化焰 にぶい棕色	口縁部は外反し、口唇部で直立する。底部は平底。 口縁部は横撫で、口縁部直下に無調整部分あり、底 部はへら削り。				
図一 29 5 図版-41	土師器 甕	埋土 口径部1/8 口径	口径(11.4) 底径 - 器高(3.7)	灰雑物 酸化焰 棕色	「コ」の字状口縁變。口縁部に輪積み痕あり、横撫 で。				
図一 29 6 図版-41	土師器 甕	埋土 口径部- 頸部1/6	口径 11.0 底径 - 器高(7.8)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部は直線的に閉き、胴部は僅かに膨らみをもつ。 口縁部は横撫で、胴部はへら削り。				
図一 29 7 図版-41	土師器 甕	埋土 口径部1/3	口径(12.1) 底径 - 器高(7.0)	細粒砂 酸化焰 にぶい棕色	口縁部は直線的に閉き、胴部は僅かに膨らみをもつ。 口縁部は横撫で、胴部はへら削り、内面胴部はへら 撫で。				
図一 29 8 図版-41	土師器 甕	埋土-頸 口径-頸 部1/2	口径(23.8) 底径 - 器高(9.0)	灰雑物 酸化焰 明赤褐色	口縁部はやや外反し、胴部は大きく膨らむ。口縁部 は横撫で、胴部はへら削り。内面胴部はへら撫で。				
図一 29 9 図版-41	土師器 台付甕	埋土 口径-底 径	口径 - 底径 - 器高(3.2)	灰雑物 酸化焰 明赤褐色	胴部はへら削り、短部は横撫で。				
採回番号	図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図29-10	図版-41	棒状礫	埋土下位	石英閃緑岩	11.8	5.85	3.1	307.0	楕円礫
図29-11	図版-41	棒状礫	埋土下位	粗粒安山岩	12.0	6.2	4.1	495.8	楕円礫
図29-12	図版-41	棒状礫	埋土	石英閃緑岩	14.0	5.2	3.6	387.9	楕円礫
図29-13	図版-41	棒状礫	埋土	ひん岩	15.8	5.1	4.2	578.8	楕円礫、放射状
図29-14	図版-41	棒状礫	埋土	粗粒安山岩	11.2	6.2	2.7	304.5	扁平な楕円礫
図29-15	図版-41	棒状礫	床面直上	游移凝灰岩	12.0	6.2	3.6	399.2	楕円礫

1区7号住居

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図一 31 1 図版-41	土師器 蓋	埋土 口径部- 体部2/3	口径 - 底径 8.6 器高 2.2	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	内外面ともへら研磨で赤色塗彩。	
図一 31 2 図版-41	土師器 甕	埋土 口径-底 部1/3	口径(14.0) 底径 - 器高(5.7)	細粒砂 酸化焰 にぶい棕色	「S」字口縁台付變。口縁部は横撫で、胴部は研毛 目(1単位10条)、内面胴部に指痕あり。	
図一 31 3 図版-41	土師器 甕	埋土 口径部- 頸部2/3	口径 - 底径 6.3 器高(8.0)	灰雑物 酸化焰 棕色	胴部は研毛目(1単位10条)、胴底部付近・底部は へら削り。内面はへら撫で。	
図一 31 4 図版-41	土師器 甕	埋土 口径部片	口径(12.2) 底径 - 器高(7.2)	細粒砂 酸化焰 にぶい棕色	有段口縁。口縁部は研毛整形後横方向へら削り。頸 部は縦方向へら削り。内面はへら削りで黒色処理。	

1区8号住居

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図一 33 1 図版-42	須恵器 椀	カマド風 土 口径 1/8-底部	口径(13.8) 底径 6.7 器高 5.8	灰雑物 還元焰 灰色	轆轤成形、回転方向右廻り。高台は貼付。底部は回 転糸切り。	
図一 33 2 図版-42	須恵器 椀	埋土 口径-底 部1/4	口径(13.2) 底径 6.1 器高 5.0	灰雑物 還元焰 灰色	轆轤成形、回転方向右廻りか。高台は貼付。底部は 回転糸切り。	
図一 33 3 図版-42	須恵器 椀	埋土 口径-底 部1/3	口径(14.8) 底径(6.0) 器高(3.1)	細粒砂 酸化焰 にぶい黄棕色	轆轤成形、回転方向右廻り。高台は貼付。底部切り 難し技法不明。	

種別番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法 量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備 考			
図一-33 4 図版-42	須恵器 杯	埋 土 口径(11.4) 口径-底 部1/2 底径(5.1) 器高(4.0)	口径(11.4) 底径(5.1) 器高(4.0)	細粒砂 還元焰 灰色	轆轤成形、回転方向右廻り。底部は回転糸切り。				
図一-33 5 図版-42	須恵器 杯	埋 土 口径11/4 口径(12.3) 底径 - 器高(3.0)	口径(12.3) 底径 - 器高(3.0)	細粒砂 還元焰 浅黄色	轆轤成形、回転方向不明。				
図一-33 6 図版-42	土師器 杯	埋 土 口径-底 部1/3 口径(11.0) 底径 - 器高(3.4)	口径(11.0) 底径 - 器高(3.4)	細粒砂 還元焰 褐色	口縁部はやや外傾、体部・底部は丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。				
図一-33 7 図版-42	土師器 壺	埋 土 口径-体 部1/5 口径(18.0) 底径 - 器高(11.0)	口径(18.0) 底径 - 器高(11.0)	細粒砂 還元焰 にぶい褐色	「コ」の字状口縁変、口縁部は横撫で、頸部はへら撫で、胴部はへら削り、内面胴部はへら撫で。				
図一-33 8 図版-42	土師器 罍	埋 土 口縁部片 口径(19.8) 底径 - 器高(4.5)	口径(19.8) 底径 - 器高(4.5)	細粒砂 還元焰 褐色	「コ」の字状口縁変、口縁部は横撫で、頸部はへら撫でであるが一部無調整部分が残る。				
図一-33 9 図版-42	土師器 壺	埋 土 口縁部1/4 口径(19.2) 底径 - 器高(5.2)	口径(19.2) 底径 - 器高(5.2)	細粒砂 還元焰 にぶい赤褐色	「コ」の字状口縁変、口縁部は横撫で、頸部はへら撫で、胴部はへら削り、内面胴部はへら撫で。				
図一-33 10 図版-42	土師器 台付壺	埋 土 底部-台 部小片 口径 - 底径 3.5 器高(3.4)	口径 - 底径 3.5 器高(3.4)	細粒砂 還元焰 褐色	胴部はへら削り、底部・脚部は横撫で、内面胴部はへら撫で。				
種別番号	図版番号	製品名	出土位置	遺 存 状 態 ・ 特 徴	長さ	幅	厚さ	備 考	
図33-11	図版-42	鉄器・鏃	埋土	基部に挟りのある三角形状。身は薄く、一孔あり。	(3.0)	(2.5)	0.2		
図33-12	図版-42	鉄器・刀子	埋土	切っ先部のみ遺存。欠損は調査後。	(2.9)	1.0	0.2		
図33-13	図版-42	鉄器・釘	埋土	「く」の字に屈曲。先端部欠損。断面長方形。	(5.3)	0.8	0.6		
図33-14	図版-42	鉄器・釘	埋土	断面長方形。下部部欠損。欠損は調査後。	(3.6)	0.5	0.6		
図33-15	図版-42	鉄器・釘	埋土	断面正方形。上半部・先端部欠損。	(4.7)	0.4	0.4		
図33-16	図版-42	鉄器・釘	埋土	鏃が進み断面形不明。先端部欠損。	(5.0)	0.3	0.3	17と同一か	
図33-17	図版-42	鉄器・釘	埋土	鏃が進み断面形不明。	(5.5)	0.3	0.3	16と同一か	
種別番号	図版番号	器 種	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図33-18	図版-42	砥石	埋土	頁岩	4.75	5.2	2.15	48.16	側面・端面に丸ノコギリ痕
図33-19	図版-42	砥石	埋土	頁状石	6.4	3.7	2.7	99.93	側面・端面に研ぎ痕

1区9号住居

種別番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法 量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備 考
図一-36 1 図版-42	須恵器 皿	カマド 口径1/2- 底部完 口径 16.1 底径 5.8 器高 2.8	口径 16.1 底径 5.8 器高 2.8	夾雑物 還元焰 灰白色	轆轤成形、回転方向右廻り。底部は回転糸切り無調整。	
図一-36 2 図版-42	須恵器 鉢	埋 土 口径2/3- 底部完 口径 12.9 底径 6.3 器高 3.7	口径 12.9 底径 6.3 器高 3.7	夾雑物 還元焰 灰色	轆轤成形、回転方向右廻り。底部は回転糸切り無調整。	
図一-36 3 図版-42	須恵器 杯	埋 土 口径-底 部1/2 口径 12.8 底径 7.0 器高 4.1	口径 12.8 底径 7.0 器高 4.1	夾雑物 還元焰 灰黄色	轆轤成形、回転方向右廻り。底部は回転糸切り無調整。	
図一-36 4 図版-42	須恵器 椀	埋 土 口径2/3- 底部完 口径 13.7 底径 7.5 器高 5.8	口径 13.7 底径 7.5 器高 5.8	夾雑物 還元焰 灰色	轆轤成形、回転方向右廻り。高台は貼付。底部は回転糸切り無調整。	
図一-36 5 図版-42	須恵器 椀	埋 土 口径-体 部1部欠 口径(14.1) 底径 7.2 器高 5.4	口径(14.1) 底径 7.2 器高 5.4	夾雑物 還元焰焼 灰黄色	轆轤成形、回転方向右廻り。高台は貼付。底部は回転糸切り無調整。	
図一-36 6 図版-42	須恵器 椀	埋 土 口径1/5- 底部2/3 口径(14.1) 底径 6.7 器高 5.1	口径(14.1) 底径 6.7 器高 5.1	夾雑物 還元焰 にぶい黄褐色	轆轤成形、回転方向右廻り。高台は貼付。底部は回転糸切り無調整。	
図一-36 7 図版-42	須恵器 椀	埋り方 口径1部 -底部1/3 口径(14.2) 底径 7.3 器高 4.6	口径(14.2) 底径 7.3 器高 4.6	夾雑物 還元焰 灰白色	轆轤成形、回転方向右廻りか。高台は刺刺。底部は回転糸切り無調整。	

遺物観察表

種別番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-36 図版-42	須恵器 8 椀	カマド掘り方 口径1/A	口径 14.1 底径 6.9 器高 6.0	灰雑物 還元焰 にぶい黄褐色	轆轤成形、回転方向不明。高台は貼付。底部切り抜き技法不明。	
図-36 図版-42	須恵器 9 椀	カマド掘り方 口径1/A	口径(13.5) 底径 - 器高(5.2)	灰雑物 還元焰 灰白色	轆轤成形、回転方向不明。高台は割離。底部切り抜き技法不明。	
図-36 図版-42	須恵器 10 長頸壺	掘り方 胴部片底部分付近	口径 - 底径 - 器高(8.2)	灰雑物 還元焰 灰色	轆轤成形、回転方向不明。	
図-37 図版-42	須恵器 11 鉢	埋土	口径 - 底径 - 器高 -	微粒砂 還元焰 灰色	へら削り。	
図-37 図版-42	土師器 12 杯	貯蔵穴 口径-底 部1/2	口径(11.7) 底径 8.2 器高 3.6	微粒砂 酸化焰 にぶい赤褐色	体部から口縁部にかけては直線的、底部は平底。口縁部は横撫で、体部は強い撫でとへら撫で、底部はへら削り。	
図-37 図版-42	土師器 13 杯	埋土 口径-底 部1/6	口径(12.2) 底径(9.5) 器高(2.5)	微粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は直線的で底部との間に接もつ。底部は平底。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図-37 図版-42	土師器 14 杯	掘り方 口径-底 部1/4	口径 11.2 底径 8.0 器高 3.6	微粒砂 酸化焰 褐色	体部から口縁部にかけては直線的、底部は平底。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。	
図-37 図版-42	土師器 15 台付壺	埋土 台部1/2	口径 - 底径 4.8 器高(4.6)	微粒砂 酸化焰 灰褐色	胴部は横撫で、胴部底部はへら撫で。	
図-37 図版-42	土師器 16 壺	埋土 口縁部片	口径 9.2 底径 - 器高(5.2)	微粒砂 酸化焰 にぶい褐色	口縁部から頸部にかけては横撫でで指頭痕がみられる。	
図-37 図版-42	土師器 17 壺	カマド床 下口径 埋土1/2	口径(18.8) 底径 - 器高(9.9)	微粒砂 酸化焰 にぶい赤褐色	「コ」の字状口縁変。口唇部に凹縁が1束めぐる。口縁部から頸部にかけては横撫で、胴部は横方向へら削り、内面胴部はへら撫で。	
図-37 図版-43	土師器 18 壺	埋土 口径3/4- 体部2/3	口径 19.2 底径 - 器高(16.3)	微粒砂 酸化焰 褐色	「コ」の字状口縁変。頸部に輪積み痕が残る。口縁部から口唇部にかけては横撫でで一部無調整部分が残る。胴部は上位が横方向、中位がへら削り。	
図-37 図版-43	土師器 19 壺	埋土 口径-体 部1/3	口径(18.8) 底径 - 器高(17.5)	微粒砂 酸化焰 褐色	「コ」の字状口縁変。頸部に輪積み痕が胴部に圧痕残る。口縁部は横撫で、頸部はへら撫で、胴部は上位が横方向、中位がへら削り、内面胴部はへら撫で。	
図-37 図版-43	土師器 20 壺	埋土 口径-頸 部1/4	口径(17.0) 底径 - 器高(8.0)	微粒砂 酸化焰 褐色	「コ」の字状口縁変。口縁部から頸部にかけては横撫で一部は無調整部分が残る。胴部は横方向へら削り、内面胴部はへら撫で。	
図-37 図版-43	土師器 21 壺	カマド床 下口径 胴部一部	口径(20.7) 底径 - 器高(7.5)	微粒砂 酸化焰 褐色	「コ」の字状口縁変。口唇部に凹縁が1束めぐる。口縁部から頸部にかけては横撫でで胴部の一部は無調整部分が残る。胴部は横方向へら削り。	
図-37 図版-43	土師器 22 壺	埋土 口径3/4- 頸部一部	口径(19.8) 底径 - 器高(9.5)	微粒砂 酸化焰 明赤褐色	「コ」の字状口縁変。口縁部から頸部にかけては横撫でで胴部に圧痕がみられる。胴部は横方向へら削り、内面胴部はへら撫で。	
図-37 図版-43	土師器 23 壺	カマド床 下口径 -体部1/4	口径(18.3) 底径 - 器高(12.7)	微粒砂 酸化焰 明赤褐色	「コ」の字状口縁変。口唇部に凹縁が1束めぐる。頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部にかけては横撫で、胴部はへら削り、内面胴部はへら撫で。	
図-38 図版-43	土師器 24 壺	掘り方 口径-体 部1/4	口径(20.0) 底径 - 器高(14.5)	微粒砂 酸化焰 褐色	「コ」の字状口縁変。口縁部から頸部にかけては横撫でで胴部に圧痕が残る。胴部はへら削り、内面胴部はへら撫で。	
図-38 図版-43	土師器 25 壺	埋土 底部1/2- 体部小片	口径 - 底径(3.6) 器高(4.0)	微粒砂 酸化焰 黒色	体部・底部はへら削り、内面はへら撫で。	
図-38 図版-43	土師器 26 壺	カマド床 下 底部3/4	口径 - 底径 3.6 器高(3.3)	微粒砂 酸化焰 暗灰黄色	体部・底部はへら削り、内面はへら撫で。	
図-38 図版-43	土師器 27 壺	埋土 底部1/4	口径 - 底径(7.4) 器高(2.1)	灰雑物 酸化焰 にぶい黄褐色	外面の整形は不鮮明、内面はへら撫で。	

押印番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土・焼成・色調	製作技法等の特徴	備考				
図一-38 28 図版-43	土師器 甕	埋土 底部1/2~ 胴部1/4	口径 - 底径(4.4) 器高(8.0)	細粒砂 酸化焰 ぶい褐色	体部・底部はへら削り、内面はへら撫で。					
図一-38 35 図版-43	土製品 土管	埋土	径 3.5	細粒砂 酸化焰 浅黄褐色	成型技法は不明。					
押印番号 図版番号	製品名	出土位置	遺存状況・特徴			長さ	幅	厚さ	備考	
図38-29	図版-43	鉄器・不明	埋土下位	断面円形の針金状の鉄製品が2本跡により接着。			(10.9)	0.3	0.3	30と同一か。
図38-30	図版-43	鉄器・不明	埋土下位	断面円形か。			(3.7)	0.3	0.3	29と同一か。
図38-31	図版-43	鉄器・釘	埋土	断面正方形。頭部欠損。釘としたが他の基部か。			(8.2)	0.7	0.6	
図38-32	図版-43	鉄器・不明	埋土下位	鉤針状に屈曲。断面長方形。上端部欠損。			(7.2)	0.3	0.6	
図38-33	図版-43	鉄器・釘	埋土	断面正方形。下幹部欠損は調査前。			(2.5)	0.8	0.3	
図38-34	図版-43	鉄器・不明	埋土	断面正方形か。両端欠損。欠損は調査前。			(1.5)	0.2	0.2	

1区10号住居

押印番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土・焼成・色調	製作技法等の特徴	備考
図一-38 1 図版-43	土師器 壺	埋土 口縁-胴 部1/5	口径(13.4) 口径 - 器高(7.3)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	内面に輪積み痕残る。口縁部は横撫で、胴部は縦方向の刷毛目(1単位20+ε)、胴部は横方向刷毛目、内面胴部はへら撫で。	

1区11号住居

押印番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土・焼成・色調	製作技法等の特徴	備考
図一-40 1 図版-43	須恵器 長頸壺	埋土 底部片	口径 - 底径 - 器高(8.5)	夾雑物 還元焰焼締め 灰色	轆轤整形。内面に輪積み痕が残る。頸部下位に2~4本の凹線がある。	
図一-40 2 図版-43	土師器 杯	埋土 底部欠損	口径 11.0 底径 - 器高(3.4)	微粒砂 酸化焰 褐色	口縁部はやや外反し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図一-40 3 図版-43	須恵器 杯	埋土 完形	口径 12.3 底径 - 器高 3.4	夾雑物 酸化焰 明赤褐色	轆轤成形。回転方向右廻り。底部は回転へら削り。	
図一-40 4 図版-43	土師器 杯	埋土 完形	口径 10.0 底径 - 器高 3.3	微粒砂水羅土か 酸化焰 褐色	口縁部はやや外反し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図一-40 5 図版-43	土師器 杯	埋土 完形	口径 12.0 底径 - 器高 4.3	微粒砂 酸化焰 浅黄褐色	口縁部はやや外反し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図一-40 6 図版-44	土師器 杯	埋土 完形	口径 11.7 底径 - 器高 4.0	微粒砂 酸化焰 浅黄褐色	口縁部はやや外反し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図一-40 7 図版-44	土師器 杯	埋土 完形	口径 12.3 底径 - 器高 4.4	微粒砂 酸化焰 浅黄褐色	口縁部はやや外反し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図一-40 8 図版-44	土師器 胸	埋土 完形	口径 11.2 底径 - 器高 6.8	夾雑物 酸化焰 褐色	体部・底部に縦いれをもつ。口縁部は横撫で、体部はへら削り、底部の整形は不明。内面は全面的にへら研ぎが施され、黒色処理。	
図一-40 9 図版-43	土師器 小型口 壺	埋土 完形	口径 9.7 底径 - 器高 9.1	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部はやや外反し、体部・底部は丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り、内面はへら撫で。	
図一-40 10 図版-1	土師器 壺	埋土 口縁部小 片	口径(15.4) 底径 - 器高(2.9)	夾雑物 酸化焰 ぶい褐色	複合口縁。口唇部は横撫で、口縁部は縦方向刷毛目(1単位10+ε)。	
図一-40 11 図版-43	土師器 壺	埋土 口縁-胴 部1/3	口径(16.6) 底径 - 器高(8.0)	夾雑物 酸化焰 明赤褐色	口縁部はやや外反し、胴部は脚みをもたない。口縁部は横撫で、胴部はへら削り、内面胴部はへら撫で。	

遺物観察表

押図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考			
図一 41 12 図版一43	土師器 甕	埋土 口縁-胴 部1/6	口径(19.0) 底径— 器高(11.2)	夾雑物 酸化焰 明赤褐色	口縁部は外反し、胴部は僅かに膨らむ。口縁部は横 溝で、胴部はへら削り、内面胴部はへら撫で。				
図一 41 13 図版一44	土師器 甕	埋土 口縁-胴 部1/6	口径(21.3) 底径— 器高—	夾雑物 酸化焰 褐色	長胴甕。口縁部は外反し、胴部は直線的である。口 縁部は横溝で、胴部は縦方向へら削り。内面胴部は へら撫で。				
図一 41 14 図版一44	土師器 甕	埋土 口縁-胴 部1/2	口径(22.5) 底径— 器高(29.0)	細粒砂 酸化焰 棕色	長胴甕。口縁部は外反し、胴部は直線的である。 口縁部は横溝で、胴部は縦方向へら削り、内面胴部 はへら撫で。				
図一 41 15 図版一44	土師器 甕	埋土 口縁-胴 部1/3	口径(21.9) 底径— 器高(14.7)	夾雑物 酸化焰 灰褐色	口縁部は外反し、胴部は僅かに膨らむ。口縁部は横 溝で、胴部はへら削り、内面胴部はへら撫で。				
図一 41 16 図版一44	土師器 甕	カマド 底部-下 胴部1/4	口径— 底径(3.3) 器高(17.4)	夾雑物 酸化焰 明赤褐色	長胴甕。胴部はへら削り。底部は木葉痕が残る。内 面胴部はへら撫で。				
図一 41 17 18 図版一44	土師器 甕	埋土 口縁-胴 部3/4	口径14.5 底径— 器高(22.2)	夾雑物 酸化焰 明赤褐色	口縁部は外反し、胴部は球状に膨らむ。口縁部には 2本の凹線が施され、横溝で、胴部は斜めのへら削 り、内面胴部はへら撫で。				
図一 41 18 19 図版一44	土師器 甕	埋土 底部-胴 部1/2	口径— 底径 4.2 器高(9.9)	夾雑物 酸化焰 明赤褐色	胴部中位は縦方向のへら削り、下位は斜めへら削り。 底部はへら削り。内面胴部はへら撫で。				
図一 41 19 20 図版一44	土師器 甕	埋土 胴部下位 1/2	口径— 底径— 器高(9.3)	夾雑物 酸化焰 にぶい褐色	胴部はへら削り、内面胴部はへら撫で。				
図一 42 20 21 図版一44	土師器 甕	埋土 胴部-底 部2/3	口径— 底径(4.3) 器高(14.1)	細粒砂 酸化焰 灰褐色	胴部・底部はへら削り、内面はへら撫で。				
図一 42 21 22 図版一44	土師器 甕	埋土 底部-胴 部3/4	口径— 底径 7.0 器高(15.5)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	胴部下位に僅かの付着が見られる。胴部は縦方向へら 削り、内面はへら撫で。				
図一 42 22 23 図版一44	土師器 甕	カマド 底部片	口径— 底径— 器高—	細粒砂 酸化焰 褐色	底部に約5mmの小孔が5カ所、外面はへら削りか。				
押図番号 図版一24	図版一44	製品名 金 環	出土位置 カマド	遺存状態・特徴 平面形はやや楕円形。ほぼ全面調漆に覆れる。		長さ 2.9	幅 2.7	厚さ 0.5	備考
押図番号 図版一23	図版一44	器種 紡錘車	出土位置 埋土	石材 蛇紋岩	長さ 3.5	幅 3.5	厚さ 1.5	重量 23.89	製作技術、形態等の特徴 穿孔一方向、表裏面に縦刻文
押図番号 図版一25	図版一44	加工職のある種	出土位置 埋土上位	二ツ巻軒石	20.9	18.0	13.7	2800.0	長捲円薄素材、削り痕

1区12号住居

押図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図一 45 1 図版一45	須恵器 杯	埋土 口縁-底 部2/3	口径 12.5 底径 6.4 器高(3.9)	夾雑物 還元焰 灰白色	楕圓形、回転方向右回り。底部は回転へら調整、 体部の最下位にも回転へら削りが僅かに及んでいる。	
図一 45 2 図版一45	須恵器 横板	埋土 胴部片	口径— 底径— 器高(7.4)	夾雑物 還元焰 灰色	楕圓形。外面はへら撫で、内面 端部には指痕が残る。	
図一 45 3 図版一45	土師器 杯	埋土 口縁-底 部1/3	口径(11.4) 底径— 器高 4.1	微粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	口唇部は外反し、底部との間に縫をもつ、底部は丸 底。口唇部は横溝で、口縁部の整形は不明、底部は へら削り。	
図一 45 4 図版一45	土師器 杯	埋土 口縁-底 部1/4	口径(11.4) 底径— 器高(3.3)	微粒砂 酸化焰 灰褐色	口唇部は直立し、底部との間に縫をもつ、底部は楕 圓丸底。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 45 5 図版一45	土師器 杯	埋土 口縁部片	口径(13.2) 底径— 器高(2.8)	微粒砂 酸化焰 褐色	口唇部はやや内傾し、底部は楕圓丸底。口縁部は横 溝で、体部は無調整、底部はへら削り。	

押印番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考				
図-45 6 図版-45	土師器 杯	埋土 1/3	口径(12.0) 底径— 器高(3.8)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は外反し、体部との間に弱い稜をもつ。口縁部に粘土塊付着。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。					
図-45 7 図版-45	土師器 杯	埋土 体部1/3～ 底部	口径— 底径 8.5 器高(3.6)	細粒砂 還元焰 青褐色	轆轤成形、回転方向不明。内外面ともへら研磨で黒色処理。					
図-45 8 図版-45	土師器 甕	埋土 底部-割 部片	口径— 底径 4.1 器高(4.2)	夾雑物 酸化焰 灰色	体部・底部はへら削り、内面はへら撫で。					
図-45 9 図版-45	土師器 鉢	埋土 口縁-割 部1/4	口径(23.4) 底径— 器高(10.3)	細粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部は僅かに外反する。口縁部は横撫で、体部はへら削り、内面体部はへら撫で。					
図-45 10 図版-45	須恵器 壺	埋土 口縁片	口径 7.1 底径— 器高(3.1)	細粒砂 還元焰 灰白色	口唇部に細い突帯が1条めぐる。轆轤成形、回転方向不明。					
図-45 11 図版-45	土師器 高杯	埋土 脚部割欠	口径— 底径— 器高(5.2)	細粒砂 酸化焰 灰黄色	脚部・杯身底部を成形後、杯身体部を取り付け。脚部はへら撫で、内面下半はへら撫で。					
図-45 21 図版-45	陶器 甕	埋土 口縁部片	口径(20.4) 底径— 器高(6.9)	細粒砂 還元焰 暗褐色	轆轤成形。口縁部貼付。褐釉。					
図-45 22 図版-45	軟質陶器 火鉢	埋土 破片	口径— 底径— 器高—	細粒砂 酸化焰 黒色	外面へら撫で、内面叩き。					
押印番号 図版-12	図版番号 図版-45	製品名 鉄器・刀子	出土位置 埋土	遺存状態・特徴 寒部欠損。身は鏝により空洞。			長さ (8.5)	幅 1.0	厚さ 0.3	備考
押印番号 図版番号	図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴	
図46-13	図版-45	棒状礎	床面下	粗粒安山岩	15.2	7.4	5.2	977.5	楕円礎、熱風炭	
図46-14	図版-45	棒状礎	床面下	輝緑岩	15.1	8.0	4.2	853.5	楕円礎	
図46-15	図版-45	棒状礎	床面下	粗粒安山岩	16.5	8.2	4.4	861.2	楕円礎	
図46-16	図版-45	加工痕のある礎	床面下	粗粒安山岩	12.8	7.2	2.7	264.1	扁平な楕円礎、敲打痕	
図46-17	図版-45	棒状礎	床面直上	石英閃緑岩	15.9	8.5	4.5	956.0	扁平な楕円礎	
図46-18	図版-45	棒状礎	床面下	粗粒安山岩	14.4	6.7	3.9	425.6	楕円礎	
図46-19	図版-45	加工痕のある礎	埋土	粗粒安山岩	10.7	8.5	3.1	424.9	扁平楕円礎素材、半削後熱風	
図46-20	図版-45	加工痕のある礎	埋土	粗粒安山岩	14.5	7.0	4.2	500.9	楕円礎素材、無面削摩成	

1区13号住居

押印番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-49 1 図版-46	須恵器 杯	掘り方 口縁1/6～ 底部1/2	口径(12.1) 底径 5.7 器高 3.5	細粒砂 還元焰 灰色	轆轤成形、回転方向右廻り。底部は回転糸切り。	
図-49 2 図版-46	須恵器 杯	埋土 口縁～底 部1/4	口径(11.9) 底径(4.4) 器高 3.6	細粒砂 還元焰 灰色	轆轤成形、回転方向不明。底部は回転糸切り。	
図-49 3 図版-46	土師器 杯	カマド? 口縁部～ 体部1/4	口径(11.4) 底径— 器高(3.1)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	口唇部は内傾し、底部は平底。口縁部は横撫で、体部は無調整。底部はへら削り。	
図-49 4 図版-46	土師器 杯	埋土 口縁～底 部1/3	口径(11.9) 底径(8.0) 器高 3.3	細粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部は直線的にやや開き、底部は平底。口縁部は横撫で、体部は無調整。底部はへら削り。	
図-49 5 図版-49	土師器 杯	掘り方 口縁～底 部1/5	口径(9.0) 底径— 器高(2.4)	夾雑物 酸化焰 にぶい褐色	口縁部は直線的に開き、底部との間に稜をもち、底部は丸底。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図版-49 6 図版-49	土師器 杯	掘り方 口縁～体 部1/5	口径(14.1) 底径— 器高(3.4)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は内傾し、体部は丸みをもち開く。口縁部は横撫で、体部はへら削り。	

遺物観察表

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考		
図一 49 7	土師器 杯	掘り方 口縁一体 部片	口径(13.5) 底径 — 器高(2.1)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部は内傾し、体部は丸みをもち開く。口縁部は横撫で、体部は上半が無調整、下半がへら削り。			
図一 49 8	土師器 台付甕	埋土 底部片	口径 — 底径 4.8 器高 —	微粒砂 酸化焰 明赤褐色	胴部外面はへら削り、内面はへら撫で。			
図一 49 9	土師器 甕	埋土 口縁一割 部片	口径(21.9) 底径 — 器高(7.3)	微粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部は直線的に開き、胴部は緩い膨らみをもつ。口縁部は横撫で、胴部はへら削り。内面胴部はへら撫で。			
図一 49 10	土師器 甕	埋土 口縁一割 部片	口径 13.4 底径 — 器高(12.7)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	右付甕か。崩れた「コ」の字状口縁、口縁部は横撫で、胴部上半は横方向へら削り、下半は腹方向へら削り、内面胴部はへら撫で。			
図一 49 11	土師器 甕	埋土 底部1/4	口径 — 底径(6.0) 器高(2.4)	夾雑物 酸化焰 黄色	体部・底部はへら削り、内面はへら撫で。			
図一 49 12	土師器 甕	埋土 底部片	口径 — 底径(8.0) 器高(1.7)	夾雑物 酸化焰 浅黄色	内外面ともへら削り。			
図一 49 13	土師器 甕	埋土 底部片	口径 — 底径(9.1) 器高(2.0)	細粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	体部・底部はへら削り、内面はへら撫で。			
神田番号 図版番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備考
図49-14	図版-46	鉄器・鏃	埋土	先端部は長い五角形で有蓋。身は薄く断面長方形	(4.0)	1.0	0.2	
図49-15	図版-46	鉄器・釘	埋土	断面は円形か。完形。	4.4	0.7	0.3	

1区14号住居

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図一 51 1	須恵器 杯	埋土床下 口縁一部 ~底部2/3	口径(12.3) 底径 — 器高(3.9)	夾雑物 還元焰 灰色	轆轤成形、回転方向右廻り。口縁部は内傾し、蓋受けをもつ。底部から体部下平にかけては回転へら削り。	
図一 51 2	土師器 杯	埋土 口縁1/3欠	口径 11.1 底径 — 器高 4.8	夾雑物 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部は僅かに外反し、底部との間に弱い稜をもつ。口縁部は横撫で、稜の直下は無調整、底部はへら削り。内面はへら研磨で黒色処理。	内面黒色処理
図一 51 3	土師器 杯	埋土 口縁一底 部1/3	口径(11.9) 底径 — 器高(3.9)	細粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部は直立し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら研磨。	
図一 51 4	土師器 杯	掘り方 口縁部1/6	口径(12.1) 底径 — 器高(2.1)	微粒砂 酸化焰 黒褐色	口縁部は横撫で、体部上半は無調整、下半はへら削り。	
図一 51 5	土師器 杯	埋土 底部1/8	口径 — 底径 — 器高(3.2)	夾雑物 酸化焰 灰黄色	口縁部は弱い「く」の字状を呈し、底部との間に弱い稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削りであるが、稜の周辺には無調整部分が残る。	
図一 51 6	土師器 杯	埋土 口縁部1/8	口径(14.1) 底径 — 器高(2.8)	微粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部は僅かに外反し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図一 51 7	土師器 杯	埋土 口縁部1/8	口径(13.1) 底径 — 器高(3.8)	微粒砂 酸化焰 黒褐色	口唇部端部に凹線がめぐる。口縁部と底部の間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図一 51 8	土師器 杯	埋土 口縁1/4~ 体部	口径(12.6) 底径 — 器高(3.7)	微粒砂 酸化焰 橙色	口縁部はやや外反し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、稜の直下は無調整、底部はへら削り。	
図一 51 9	土師器 杯	埋土 口縁一部 ~底部1/4	口径(13.9) 底径 — 器高 4.6	微粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部は直線的にやや開き、底部は緩い丸みをもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。内面底部の一部にへら研磨。	
図一 51 10	土師器 杯	床下 口縁部1/8	口径(14.4) 底径 — 器高(3.1)	微粒砂 酸化焰 橙色	口唇部端部に凹線がめぐる。口縁部中位に1本の凹線がめぐる。底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	

種別 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図一 51 11 図版一	土師器 杯	埋土 口縁部1/8	口径(14.3) 底径— 器高(3.6)	微粒砂 酸化焰 黒褐色	口縁部中位に1条の凹線がめぐり、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 12 46 図版一	土師器 杯	埋土 口縁部1/4 -体部	口径(13.2) 底径— 器高(3.4)	微粒砂 酸化焰 に赤褐色	口縁部中位に1条の凹線がめぐり、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 13 46 図版一	土師器 杯	埋土 口縁部1/8	口径(14.5) 底径— 器高(3.3)	微粒砂 酸化焰 黒褐色	口縁部中位に1条の凹線がめぐり、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 14 46 図版一	土師器 杯	埋土 口縁部1/4 -底部片	口径(12.4) 底径— 器高(4.0)	微粒砂 酸化焰 黒色	口縁部中位と下位に各1条の凹線がめぐり、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 15 46 図版一	土師器 杯	埋土 口縁-底 部片	口径(13.5) 底径— 器高(3.4)	微粒砂 酸化焰 黒色	口縁部中位と下位に各1条の凹線がめぐり、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 16 46 図版一	土師器 杯	埋土 口縁部- 底部1/6	口径(13.6) 底径— 器高(3.5)	微粒砂 酸化焰 灰青褐色	口縁部中位に1条の凹線がめぐり、底部との間に明瞭な稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 17 46 図版一	土師器 杯	埋土 口縁- 底部片	口径— 底径— 器高(2.6)	微粒砂 酸化焰 灰青褐色	口縁部中位に2条の凹線がめぐり、底部との間に明瞭な稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 18 46 図版一	土師器 杯	埋土 口縁部1/5	口径(10.7) 底径— 器高(5.0)	微粒砂 酸化焰 褐灰色	口縁部は直立きみで、中位に2条の凹線がめぐり、底部との間に明瞭な稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 19 46 図版一	土師器 杯	覆り方	口径(13.7) 底径— 器高(2.8)	微粒砂 酸化焰 黒褐色	口縁部はやや内傾し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 20 46 図版一	土師器 杯	埋土 口縁-底 部1/4	口径(10.7) 底径— 器高3.2	夾雑物 酸化焰 黒褐色	口縁部は僅かに外反し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 21 46 図版一	土師器 杯	埋土 口縁-体 部1/6	口径(12.6) 底径— 器高(2.9)	微粒砂 酸化焰 黒褐色	口縁部は直立きみで、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 22 46 図版一	土師器 杯	埋土 口縁一部 欠	口径(12.0) 底径— 器高(4.4)	微粒砂 酸化焰 褐色	口縁部はやや内傾し、口唇部端部に凹線がめぐり、底部との間に明瞭な稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 23 46 図版一	土師器 杯	埋土 口縁1/3- 底部3/4	口径(12.9) 底径— 器高(4.5)	夾雑物 酸化焰 明赤褐色	口縁部はやや外反し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り、内面底部には部分的にへら研ぎがみられる。	
図一 52 24 46 図版一	土師器 杯	埋土 口縁1/8 -底部一部	口径(14.0) 底径— 器高(3.7)	微粒砂 酸化焰 灰青褐色	口縁部は直立きみで、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 25 46 図版一	土師器 杯	埋土 口縁-体 部1/8	口径(13.6) 底径— 器高(3.5)	微粒砂 酸化焰 黒褐色	口縁部は直立きみで、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 26 46 図版一	土師器 杯	埋土 口縁部1/8	口径(14.0) 底径— 器高(2.9)	微粒砂 酸化焰 灰褐色	口縁部は直立きみで、口唇部の内面に1条の凹線がめぐり、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 27 46 図版一	土師器 杯	埋土 口縁部1/8	口径(13.2) 底径— 器高(2.8)	微粒砂 酸化焰 黒褐色	口縁部は内傾し、底部との間に明瞭な稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 28 46 図版一	土師器 杯	埋土 口縁- 底部1/6	口径— 底径— 器高(2.7)	微粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部は内傾し、底部との間に弱い稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 52 29 46 図版一	土師器 短頸甕	埋土 口縁1/2- 胴部一部	口径(12.0) 底径— 器高(6.6)	微粒砂 酸化焰 褐色	口縁部はやや内傾し、2条の凹線がめぐり、体部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、体部はへら削り。	
図一 52 30 46 図版一	土師器 短頸甕	埋土 口縁-底 部1/2	口径(9.8) 底径— 器高(8.6)	微粒砂 酸化焰 に赤褐色	口縁部は直立きみで、2条の凹線がめぐり、体部との間に稜をもつ。底部は丸底。口縁部は横溝で、体部・底部はへら削り。	

遺物観察表

神国番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考			
図一 52 31	土師器 短頸壺	甕口縁~底	口径(11.6) 底径 — 器高(7.7)	微粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部は直立どみで、口唇部縁部と中位に各1条の凹線がめぐり、体部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。				
図一 52 32	土師器 短頸壺	甕口縁1/5	口径(17.0) 底径 — 器高(5.6)	微粒砂 酸化焰 にぶい藍色	口縁部はやや内傾し、体部との間に鋭い稜をもつ。口縁部は横撫で、体部はへら削り。				
図一 52 33	土師器 小型壺	口縁1/2~ 底部	口径 11.3 底径 7.0 器高 16.0	夾雑物 酸化焰 浅黄褐色	口縁部は僅かに開き、胴部は緩い膨らみをもつ。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へら削り、底部もへら削り、内面胴部下半はへら撫で。				
図一 52 34	土師器 瓶	甕口縁	口径 16.8 底径 3.7 器高 14.1	夾雑物 酸化焰 褐色	口縁部は僅かに外反し、底部は穿孔。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へら削り、内面胴部はへら撫で後、粗いへら研磨。				
図一 53 35	土師器 壺	甕口縁~胴部1/2	口径 — 底径 6.2 器高(8.5)	夾雑物 酸化焰 明赤褐色	胴部・底部ともへら削り、内面はへら撫で。				
図一 53 36	土師器 壺	甕口縁~胴部1/2	口径 — 底径 5.6 器高(8.4)	夾雑物 酸化焰 褐色	胴部は中位が縦方向、下位が横方向へら削り、底部もへら削り、内面はへら撫で。				
図一 52 37	土師器 高杯	甕口縁1/3	口径 — 底径 — 器高(6.3)	細粒砂 酸化焰 にぶい藍色	外面はへら研磨、内面はへら撫で。				
図一 53 38	土師器 壺	甕口縁~胴部1/5	口径(17.3) 底径 — 器高(5.6)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部はやや開き、胴部は大きく膨らむと思われる。口縁部は横撫で、胴部はへら削り。				
図一 53 39	土師器 壺	甕口縁1/4~ 胴部1/8	口径(22.0) 底径 — 器高(9.5)	夾雑物 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部は外反し、胴部は直線的である。口縁部は横撫で、胴部はへら削り、内面胴部はへら撫で。				
図一 53 40	土師器 壺	甕口縁1/4~ 胴部1/8	口径(22.0) 底径 — 器高(8.8)	夾雑物 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部は外反し、胴部は直線的である。口縁部は横撫で、胴部はへら削り、内面胴部はへら撫で。				
図一 53 41	土師器 壺	甕口縁~胴部2/3	口径 18.3 底径 — 器高(20.3)	夾雑物 酸化焰 褐色	口縁部は短く僅かに開き、胴部は直線的である。口縁部は横撫で、胴部はへら削りが施されているが単位は不鮮明、内面胴部はへら撫で。				
図一 53 42	土師器 壺	甕口縁~胴部1/4~ 欠	口径 20.6 底径 3.3 器高 41.0	夾雑物 酸化焰 褐色	長頸壺。口縁部は外反し、胴部は直線的で、底部は小径、口縁部は横撫で、胴部は3段の縦方向へら削り、内面胴部はへら撫で、胴部下半に僅か付着。				
図一 53 43	土師器 壺	甕口縁~胴部1/3	口径 — 底径 — 器高(8.4)	夾雑物 酸化焰 褐色	胴部は縦方向へら削り、内面はへら撫で。				
神国番号 図版番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状況・特徴	長さ	幅	厚さ	備考	
図54-44	図版-46	鉄器・釘	埋土	断面四角形。両端部欠損。やや長く釘以外か。	(9.5)	0.5	0.4		
図54-45	図版-46	鉄器・釘	埋土	断面四角形。両端部欠損。やや長く釘以外か。	(4.2)	0.4	0.4		
図54-45	図版-46	鉄器・釘	埋土	断面長方形。上半部・先端部欠損。	(4.5)	0.4	0.6		
神国番号 図版番号	図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図54-46	図版-47	石製模造品	埋土	頁岩	2.4	6.56	0.5	12.77	両面研磨、穿孔両方向
図54-47	図版-47	石製白玉	床面直上	蛇紋岩	1.3	1.3	0.5	2.38	一面面研磨、穿孔一方
図54-48	図版-47	棒状碑	埋土	粗粒安山岩	13.8	7.0	3.8	668.4	横円碑、被熱痕
図54-49	図版-47	棒状碑	床面下	粗粒安山岩	12.5	5.6	4.3	382.8	横円碑、端部に斜磨痕
図54-50	図版-47	棒状碑	床面下	安賢安山岩	14.5	6.2	4.4	562.0	横円碑
図54-51	図版-47	棒状碑	埋土中位	安賢安山岩	13.2	7.0	4.9	711.5	横円碑
図54-52	図版-47	棒状碑	埋土下位	粗粒安山岩	13.6	7.1	4.5	590.4	横円碑
図54-53	図版-47	凹石	埋土上位	粗粒安山岩	11.0	10.3	6.2	699.0	やや深い凹部と敲打痕
図54-54	図版-47	加工痕のある礫	床面下	角閃石安山岩	36.0	17.3	11.2	7200.0	中央部に削り痕、被熱痕

1区15号住居

種類番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土	焼成色調	製作技法等の特徴	備考		
図一 56 1 図版-48	土師器 杯	埋土 ほぼ完形	口径 12.0 底径 - 器高 4.8	細粒砂 酸化焰 明褐色		口縁部を一部欠くが、型筒が一部残る。口縁部はやや内傾し、底部との間に稜をもち、底部は丸底。口縁部は横撫で、底部はへら削り。			
図一 56 2 図版-48	土師器 杯	埋土 口縁部約 1/4欠	口径 12.0 底径 - 器高 5.8	細粒砂 酸化焰 暗褐色		口縁部はやや内傾し、底部との間に稜をもち、底部は丸底。口縁部は横撫で、稜の直下は無調整、底部はへら削り。			
図一 56 3 図版-48	土師器 杯	埋土 1/2	口径(11.2) 底径 - 器高(3.5)	細粒砂 酸化焰 赤褐色		口縁部は内傾し、体部・底部は丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。			
図一 56 4 図版-48	土師器 杯	埋土 口径1/3 一部欠	口径(13.0) 底径 - 器高(4.0)	細粒砂 酸化焰 銅灰色		口縁部は外反し、底部との間に稜をもち、底部は丸底。口縁部は横撫で、稜の直下は無調整、底部はへら削り。			
図一 57 5 図版-48	土師器 杯	埋土 2/3残	口径 12.5 底径 - 器高 4.2	細粒砂 酸化焰 棕色		口縁部は内傾し、体部・底部は丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。			
図一 57 6 図版-48	土師器 壺	埋土 口径-底 部1/4	口径(18.7) 底径 - 器高(15.1)	夾雑物 酸化焰 にぶい黄褐色		口縁部は外反し、底部は丸底。口縁部は横撫で、胴部・底部はへら削り、内面はへら撫で。			
図一 57 7 図版-48	土師器 壺	埋土 口径一部 欠	口径(10.8) 底径 - 器高(12.9)	微粒砂 酸化焰 棕色		口縁部は内傾し、口唇部が僅かに外反する。胴部は球状を呈す。口縁部は横撫で、胴部・底部はへら削り、内面はへら撫で。			
図一 57 8 図版-48	土師器 壺	埋土 口径完 胴部	口径 10.2 底径 - 器高(10.6)	微粒砂 酸化焰 棕色		口縁部は直さきみで、口唇部が僅かに外反する。胴部は球状を呈す。口縁部は横撫で、胴部はへら削り、内面はへら撫で。			
図一 57 9 図版-48	土師器 壺	埋土 口径1/2 胴部	口径 13.1 底径 - 器高 13.6	細粒砂 酸化焰 棕色		口縁部は僅かに外反し、胴部は球状を呈す。口縁部は横撫で、胴部はへら削り、内面はへら撫で。			
図一 57 10 図版-48	土師器 壺	埋土 口径一部 欠-胴部	口径 20.6 底径 - 器高(17.8)	夾雑物 酸化焰 にぶい褐色		口縁部は外反し、胴部は直線的である。口縁部は横撫で、胴部は縦方向のへら削り、内面はへら撫で。			
図一 57 11 図版-48	土師器 壺	埋土 口径2/3 -胴部1/2	口径 22.5 底径 - 器高(18.8)	夾雑物 酸化焰 棕色		口縁部は外反し、胴部は直線的である。口縁部は横撫で、胴部は縦方向のへら削り、内面はへら撫で。			
図一 57 12 図版-	土師器 壺	カマド掘 り方 底部約1/2	口径 - 底径(4.8) 器高(1.1)	夾雑物 酸化焰 にぶい褐色		体部・底部へら削り。			
図一 58 13 図版-48	土師器 壺	埋土 底部欠	口径(17.8) 底径 - 器高(23.8)	夾雑物 酸化焰 にぶい黄褐色		口縁部は外反し、胴部は直線的である。口縁部は横撫で、胴部は縦方向のへら削り、内面はへら撫で。			
図一 58 14 図版-48	土師器 壺	埋土 口径1/2	口径(20.8) 底径(6.0) 器高 39.4	細粒砂 酸化焰 棕色		長胴壺。口縁部は大きく外反し、胴部は僅かに膨らむ。口縁部から胴部は横撫で、胴部は縦方向へら削り、底部もへら削り、内面胴部はへら撫で。			
図一 58 15 図版-48	土師器 台付壺	埋土 口径-胴 部1/3	口径(11.7) 底径 - 器高(4.9)	夾雑物 酸化焰 にぶい赤褐色		口縁部は直線的に開き、胴部は大きく膨らむ。口縁部は横撫で、胴部は胴部からの縦方向刷毛目、内面口縁部は横方向刷毛目、胴部も同様。			
図一 58 16 図版-48	土師器 台付壺	埋土 口径胴部 片	口径(12.4) 底径 - 器高(5.1)	細粒砂 酸化焰 赤褐色		外面口縁部横撫で、胴部縦方向の刷毛目。単位は11条。内面胴部横方向刷毛変形、縦方向の根いへら磨き。			
図一 58 18 図版-48	軟質陶器 鉢	埋土 小片	口径 - 底径 - 器高(9.1)	細粒砂 還元焰 灰色		外面体部へら撫で、底部へら削り。内面はへら撫で 使用痕あり。			
種類番号 図版-17	図版-49	加工痕のある礎	埋土上位	塊状安山岩	長さ 28.9	幅 12.5	厚さ 7.9	重量 3000.0	製作技術、形態等の特徴 備面部削り痕、端部敲打痕

1区16号住居

遺物観察表

拝領番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-59 1 図版-49	土師器 杯	埋土 1/4欠	口径 19.2 底径 - 器高 4.7	尖錐物 酸化焰 褐色	口縁は外反し、底部との間に弱い稜をもつ、底部は緩い丸底。口縁部は横撫で、胴部はへら削り。	
図-59 2 図版-49	土師器 杯	埋土 1/3残	口径(10.1) 底径 - 器高(3.6)	尖錐物 酸化焰 褐色	口縁部はやや内傾し、体部から底部にかけては緩い丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。	
図-59 3 図版-49	土師器 葉	埋土 口縁-胴部1/8	口径(15.4) 底径 - 器高(6.6)	尖錐物 酸化焰 明赤褐色	口縁部は外反。口縁部から胴部は横撫で、胴部は縦方向へら削り。	

1区17号住居

拝領番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考			
図-62 1 図版-49	須臾器 横敷	埋土 体部-底部1/4	口径 - 底径 - 器高(9.9)	細粒砂 還元焰 灰色	胴部端部。外面は平行印き、内面はへら撫で。				
図-62 2 図版-49	土師器 杯	埋土 完形	口径 10.0 底径 - 器高 3.2	微粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は内傾し、体部・底部は緩い丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。				
図-62 3 図版-49	土師器 杯	埋土 完形	口径 10.2 底径 - 器高 3.6	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は内傾し、底部は丸底。口縁部は横撫で、体部上位は無調整、体部中位から底部はへら削り。				
図-62 4 図版-49	土師器 杯	埋土 1/2	口径(11.3) 底径 - 器高(3.3)	微粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は内傾し、体部は丸みをもり開く、底部はほぼ平底。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。				
図-62 5 図版-49	土師器 杯	埋土 1/2	口径(12.1) 底径 - 器高(4.1)	微粒砂 酸化焰 褐色	口縁部はやや外傾し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。内面に指頭痕が残る。				
図-62 6 図版-49	土師器 杯	埋土 2/3残	口径 10.6 底径 - 器高 3.2	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は内傾し、体部は丸みをもり開く。底部はほぼ平底。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。				
図-62 7 図版-49	土師器 杯	カマド掘り方口縁-底部1/2	口径(13.5) 底径 - 器高(4.4)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は外傾し、中位に凹縁が1条めぐり、底部との間に弱い稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。				
図-63 8 図版-49	土師器 壺	埋土 口縁-胴部1/4	口径(10.2) 底径 - 器高(6.8)	微粒砂 酸化焰軟質 褐色	口縁部は外反し、胴部は中位に最大径をもつ。口縁部は横撫で、胴部はへら削り、内面はへら撫で。				
図-63 9 図版-49	土師器 高杯	埋土 杯部底部胴上部片	口径 - 底径 - 器高(3.2)	微粒砂 酸化焰 褐色	胴部は凹取り状のへら削り。				
図-63 10 図版-49	土師器 葉	埋土 口縁-胴部片	口径 23.6 底径 - 器高(14.6)	尖錐物 酸化焰 ふい色	口縁部は外反し、胴部は直線的。口縁部から胴部は横撫で、胴部は縦方向へら削り、内面はへら撫で。				
拝領番号 図版番号	図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図63-11	図版-49	石製管玉	床面直上	蛇紋岩	2.2	0.7	0.25	1.50	両方向穿孔
図63-12	図版-49	砥石	埋土中位	凝灰岩	9.9	5.4	2.7	239.2	四面研磨、湾曲
図63-13	図版-50	棒状礫	埋土下位	凝灰安山岩	11.0	6.1	3.9	352.7	楕円礫
図63-14	図版-50	棒状礫	埋土下位	凝灰安山岩	11.0	6.0	4.1	419.2	楕円礫
図63-15	図版-50	棒状礫	埋土下位	凝灰安山岩	9.7	6.1	5.0	284.5	楕円礫
図63-16	図版-50	棒状礫	床面直上	凝灰安山岩	11.7	5.8	3.9	373.0	楕円礫
図63-17	図版-50	棒状礫	床面直上	凝灰安山岩	12.0	6.1	3.1	389.8	楕円礫
図63-18	図版-50	棒状礫	床面直上	凝灰安山岩	13.0	7.6	4.7	541.5	楕円礫、中央部に割痕
図63-19	図版-50	棒状礫	床面直上	凝灰安山岩	12.3	7.9	4.3	443.0	楕円礫
図63-20	図版-50	棒状礫	床面直上	溶結凝灰岩	14.2	6.8	5.2	739.2	楕円礫
図63-21	図版-50	棒状礫	床面下	石英閃緑岩	14.0	5.8	5.4	859.3	楕円礫
図63-22	図版-50	棒状礫	床面直上	凝灰安山岩	14.7	6.6	5.4	695.1	楕円礫
図63-23	図版-50	棒状礫	埋土下位	凝灰安山岩	14.6	6.4	4.1	585.6	楕円礫
図63-24	図版-50	棒状礫	床面下	石英閃緑岩	13.7	6.6	4.3	561.2	楕円礫

神田番号	図版番号	器 種	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図64-25	図版-50	棒状罐	床面下	四稜岩	15.5	7.9	5.3	1123.7	棒状罐
図64-26	図版-50	棒状罐	床面直上	石英閃緑岩	13.8	5.8	5.1	780.9	棒状罐、被熱痕
図64-27	図版-50	棒状罐	埋土下位	砂岩	12.3	4.8	3.8	441.0	棒状罐
図64-28	図版-50	棒状罐	床面下	壱粒安山岩	13.4	7.3	4.1	592.1	棒状罐
図64-29	図版-50	加工痕のある罐	埋土下位	壱粒安山岩	10.4	6.7	4.3	343.1	棒状罐素材、敲打痕
図64-30	図版-50	加工痕のある罐	埋土中位	壱粒安山岩	13.9	8.3	4.6	604.0	棒状罐素材、肩部に割離痕
図64-31	図版-50	棒状罐	床面下	壱粒安山岩	14.1	5.2	4.9	613.1	棒状罐
図64-32	図版-50	棒状罐	埋土下位	実質安山岩	14.5	6.3	4.5	601.3	棒状罐、肩部に割離痕
図64-33	図版-50	磨石	床面直上	壱粒安山岩	11.9	5.5	6.5	543.3	棒状罐素材、研磨痕
図64-34	図版-50	棒状罐	埋土中位	壱粒安山岩	12.6	6.8	5.8	516.5	棒状罐、側面研磨痕・割離痕
図64-35	図版-50	西石	床面直上	壱粒安山岩	14.5	6.8	6.9	829.1	棒状罐素材、中央部に敲打痕
図64-36	図版-50	加工痕のある罐	床面直上	壱粒安山岩	14.0	6.0	5.0	551.3	棒状罐素材、肩部に割離痕

1区18号住居

神田番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状況	法 量	粘土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備 考		
図版-67 1	土師器 杯	埋 土	口径 12.8 底径 - 器高 4.3	細粒砂 酸化焙 褐色	口縁部は外反し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り、内面にはへらあり。			
図版-50 1	土師器 2 広口盃	埋 土 底部一部 欠	口径 11.4 底径 - 器高(11.8)	細粒砂 酸化焙 褐色	口縁部は直立きみ、胴部から底部は球状を呈す。口縁部は横撫で、胴部・底部はへら削り、内面はへら撫で。			
図版-67 3	土師器 3 羹	埋 土 胴部一割 部1/3	口径 - 底径 - 器高(9.8)	夾雑物 酸化焙 黄色	口縁部は外反し、胴部は直線的。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へら削り、内面はへら撫で。			
図版-50 3	土師器 4 羹	埋 土 胴部一体 部1/4	口径 - 底径 - 器高(16.2)	夾雑物 酸化焙 褐色	胴部は縦方向へら削り、内面はへら撫で。			
図版-67 5	土師器 5 器台	埋 土 底部一部 一割1/4	口径(9.4) 底径(5.5) 器高(7.4)	細粒砂 酸化焙 褐色	外面の受部は整形不鮮明、脚部はへら研磨、内面はへら撫で。			
図版-50 5	土製品 7 不明	埋 土	長さ 10.6 幅 4.5 厚さ 0.9	細粒砂 還元焙 赤灰色	成型技法は不明。			
図版-50 7	神田番号 図版-67	図版-50	製 品 名 鉄器・釘	出土位置 埋土	遺 存 状 態 ・ 特 徴	長さ 幅 厚さ 備考		
図版-67	図版-50	鉄器・釘	埋土	断面正方形か。両端部欠損。	(4.2)	0.4	0.4	

1区19号住居

神田番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状況	法 量	粘土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備 考
図版-71 1	須恵器 1 盃	埋 土	口径 - 底径 - 器高(14.2)	細粒砂 還元焙 灰色	外面は刷毛状工具による回転の撫で、内面も同様。	
図版-50 1	土師器 2 杯	埋土1/4	口径(10.0) 底径 - 器高(2.5)	細粒砂 酸化焙 にぶい褐色	口縁部はやや外反し、体部との間に弱い稜をもつ。口縁部は横撫で、体部は無調整。底部はへら削り。	
図版-50 2	土師器 3 高杯	埋 土 脚部1/5	口径 - 底径 - 器高(8.0)	夾雑物 酸化焙 にぶい黄褐色	外面は丁寧なへら削り、内面はへら撫で。	
図版-71 4	土師器 4 高杯	埋 土 胴部一部 欠	口径 - 底径 13.6 器高(9.5)	細粒砂 酸化焙 褐色	脚部は直線的にやや開き、胴部は大きく開く。外面は胴部底部が横撫で、他は縦方向へら研磨。内面は、胴部が刷毛目(1単位5条)、脚部はへら撫で。	
図版-50 4	土師器 5 高杯	埋 土 胴部1/3欠	口径 - 底径 - 器高(8.7)	細粒砂 酸化焙 褐色	脚部のほぼ中位に円形の透かしをもつ。外面は刷毛整形後へら撫で、内面はへら削り。	
図版-71 6	土師器 6 高杯	埋 土 脚部・帯 部	口径 - 底径(13.8) 器高(10.6)	細粒砂 酸化焙 褐色	粘土紐巻上げ成形。脚部は直線的にやや開き、胴部は外反きみに開く。外面は上部から胴部までへら研磨。内面は刷毛整形後へら撫で。	

遺物取表

神宮番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考			
図一 7 図版-50	土師器 高杯	埴土 舞部3/4 器高(8.4)	口径- 底径(12.9) 器高(8.4)	細粒砂 酸化焙 明赤褐色	舞部中に輪積み痕が残る。舞部は縦方向の丁寧なへら削り、裾部は刷毛目(単位不明)。				
図一 8 図版-51	土師器 高杯	埴土 舞部1/3 器高(7.2)	口径- 底径- 器高(7.2)	微粒砂 酸化焙 にぶい赤褐色	外面はへら研磨。内面舞部はへら撫で。裾部は刷毛目(単位不明)。				
図一 9 図版-51	土師器 高杯	埴土 舞部 器高(9.6)	口径- 底径- 器高(9.6)	微粒砂 酸化焙 明赤褐色	舞部は膨らみをもち、裾部は大きく開く。舞部はへら削り、内面はへら撫で。				
図一 10 図版-51	土師器 高杯	埴土 舞部裾部 1/2残 器高(5.6)	口径- 底径- 器高(5.6)	微粒砂 酸化焙 褐色	粘土練巻上げ成形。外面はへら研磨、内面は刷毛目整形後へら撫で。				
図一 11 図版-51	土師器 高杯	埴土 舞部・裾部1/4	口径- 底径(13.8) 器高(5.9)	細粒砂 酸化焙 褐色	舞部はやや膨らみをもち、裾部は大きく開く。舞部は外面へら削り、内面へら撫で。				
図一 12 図版-51	土師器 高杯	埴土 舞部・体部下半	口径- 底径- 器高(10.2)	微粒砂 酸化焙 褐色	杯身部分とはへら削り、舞部は縦方向へら研磨、内面はへら撫で。				
図一 13 図版-51	土師器 高杯	埴土 杯部・底部2/3	口径- 底径- 器高(3.4)	細粒砂 酸化焙 にぶい褐色	杯身底部はほぼ平底、体部は直線的に開く。体部・底部はへら削り後へら研磨、内面もへら研磨。				
図一 14 図版-51	土師器 高杯	埴土 舞部1/2	口径- 底径- 器高(6.2)	細粒砂 酸化焙 にぶい黄褐色	杯身に舞部をほぞ状に差し込む形態、内外面の整形は不明。				
図一 15 図版-51	土師器 高杯	埴土 口縁部片	口径(18.1) 底径- 器高(3.4)	微粒砂 酸化焙 褐色	内外面とも縦方向へら研磨。				
図一 16 図版-51	土師器 壺	埴土 底部1/2	口径- 底径(8.2) 器高(2.9)	微粒物 酸化焙 にぶい黄褐色	胴部は大きく膨らむ。胴部・底部はへら削り、内面はへら撫で。				
図一 17 図版-51	土師器 椀	埴土 口縁部欠	口径- 底径- 器高(6.1)	細粒砂 酸化焙 褐色	胴部下半は細かいへら削り、胴部上半はへら撫で。内面に指痕が残る。				
図一 18 図版-51	土師器 椀	埴土 体部1/4	口径- 底径- 器高(7.2)	細粒砂 酸化焙 にぶい褐色	胴部上位は縦方向、中位・下位は横方向へら削り。内面はへら削り。				
図一 19 図版-51	土師器 台付壺	埴土 舞部1/2	口径- 底径(5.6) 器高(6.9)	細粒砂 酸化焙 にぶい黄褐色	舞部外面は刷毛目(単位不明)、内面はへら撫で。				
図一 20 図版-51	土師器 台付壺	埴土 口縁部1/3	口径(14.9) 底径- 器高(5.7)	細粒砂 酸化焙 黒色	頸部に輪積み痕が残る。外面は縦方向の刷毛目(1単位16条)、内面口縁部は横方向刷毛目、頸部に指痕が残る。				
図一 41 図版-51	陶器 壺	埴土 破片	口径- 底径- 器高-	細粒砂 還元焙 にぶい赤褐色	外面青花印文。内面はへら撫で。外面は刷毛目。				
神宮番号 図版番号	図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図72-21	図版-51	石製模造品・刺	床面下	蛇紋岩	3.75	1.6	0.5	3.6	両面あらい研磨
図72-22	図版-51	磁石	埴土	砂岩	16.5	7.1	4.5	710.1	横内面塗材。敲打痕
図72-23	図版-51	棒状礫	床面下	粗粒安山岩	15.2	6.7	4.9	889.5	横内面、側面に敲打痕
図72-24	図版-51	棒状礫	床面下	法賢頁岩	14.9	4.7	3.4	429.1	横内面
図72-25	図版-51	棒状礫	床面直上	安賢玄武岩	14.8	5.2	3.8	497.5	横内面
図72-26	図版-51	棒状礫	床面直上	粗粒安山岩	18.2	7.8	5.0	860.6	横内面
図72-27	図版-51	棒状礫	床面下	滑結凝灰岩	13.9	7.5	3.8	597.3	扁平な横内面
図72-28	図版-51	棒状礫	埋土下位	石英閃緑岩	15.8	6.7	4.5	716.7	横内面
図72-29	図版-51	棒状礫	埋土下位	粗粒安山岩	18.3	6.1	5.2	933.1	横内面
図72-30	図版-51	棒状礫	埋土上位	石英閃緑岩	15.2	6.1	4.2	647.3	横内面、被熱痕
図72-31	図版-51	加工痕のある礫	埋土下位	軽石	10.3	7.6	4.8	147.9	円盤、研磨痕
図73-32	図版-51	棒状礫	床面直上	安賢安山岩	12.9	5.7	3.7	429.4	横内面
図73-33	図版-51	棒状礫	埋土下位	滑結凝灰岩	15.9	7.2	4.2	724.3	横内面、被熱痕
図73-34	図版-51	棒状礫	床面下	滑結凝灰岩	14.1	6.0	3.8	505.9	横内面

検出番号	図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図73-35	図版-51	棒状罐	床面下	石英閃緑岩	14.5	6.6	4.1	600.2	楕円罐
図73-36	図版-51	棒状罐	床面下	稚粒安山岩	15.0	5.5	4.6	545.9	楕円罐
図73-37	図版-51	棒状罐	床面下	稚粒安山岩	13.7	5.8	2.8	369.4	楕円罐
図73-38	図版-51	棒状罐	床面下	稚粒安山岩	13.9	7.1	3.4	504.6	扁平な楕円罐
図73-39	図版-51	棒状罐	埋土	游粘層状岩	14.4	6.8	4.0	424.3	楕円罐
図73-40	図版-51	磨石	床面直上	稚粒安山岩	18.8	15.1	4.5	2600.0	両面に研磨痕、被熱痕

1区20号住居

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図一 1 図版-52	須恵器 楕瓶	埋土 小片	口径— 底径— 器高—	微粒砂 還元焙焼跡 灰白色	フラスコ形。轆轤成形。胴部は同心円カキ目、2条の凹線がめぐる。	
図一 2 図版-52	土師器 杯	埋土 完形	口径12.8 底径— 器高4.2	微粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は外傾し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、稜の部分は無調整、底部はへら削り。	
図一 3 図版-52	土師器 杯	埋土 3/4	口径13.3 底径— 器高4.4	微粒砂 還元焰 褐色	口縁部は外傾し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 4 図版-52	土師器 杯	埋土 1/3	口径(12.1) 底径— 器高3.9	微粒砂 還元焰 赤褐色	口縁部は内傾し、下位に凹線がめぐる。底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、胴部はへら削り。	
図一 5 図版—	土師器 杯	埋土 口縁1/3	口径(12.6) 底径— 器高(2.9)	微粒砂 還元焰 黒灰色	口縁部は内傾し、下位に凹線がめぐる。底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、胴部はへら削り。	
図一 6 図版-52	土師器 杯	埋土 1/4	口径(12.7) 底径— 器高(3.9)	微粒砂 還元焰 灰褐色	口縁部は直立きみで下位に凹線がめぐる。底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、胴部はへら削り。	
図一 7 図版-52	土師器 杯	埋土 1/2	口径12.1 底径— 器高4.5	微粒砂 還元焰 にぶい赤褐色	口縁部は直立きみで、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、胴部はへら削り。	
図一 8 図版—	土師器 杯	埋土 口縁3/5	口径(12.3) 底径— 器高(3.5)	微粒砂 還元焰 灰褐色	口縁部は直立きみで下位に凹線がめぐる。底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、胴部はへら削り。	
図一 9 図版-52	土師器 高杯	埋土 胴部上位	口径— 底径— 器高(4.3)	細粒砂 還元焰 にぶい褐色	外面はへら削り、内面は撫で。	
図一 10 図版-52	土師器 盃	埋土 口縁1/4	口径(15.0) 底径— 器高(6.9)	細粒砂 還元焰 にぶい褐色	口縁部はやや外傾し、胴部は大きく膨らむ。口縁部は横溝で、胴部は削り、内面はへら撫で。	
図一 11 図版-52	土師器 壺	埋土 口縁1/5	口径(9.8) 底径— 器高(7.6)	夾雑物 還元焰 にぶい褐色	口縁部は外反し、胴部は直線的。口縁部は横溝で、胴部は縦方向へら削り、内面はへら撫で。	
図一 12 図版-52	土師器 壺	埋土 口縁-胴部1/4	口径(17.3) 底径— 器高(7.2)	夾雑物 還元焰 灰黄色	口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は僅かに外傾し、胴部も僅かに膨らむ。口縁部は横溝で、胴部は縦方向へら削り、内面はへら撫で。	
図一 13 図版-52	土師器 瓶	埋土 1/2	口径(20.0) 底径— 器高(14.0)	細粒砂 還元焰 褐色	口縁部・胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横溝で、胴部は縦方向へら削り、内面はへら撫で。	
図一 14 図版-52	土師器 瓶	埋土 口縁1/6 底部完	口径(19.4) 底径4.2 器高11.1	細粒砂 還元焰 褐色	口縁部は僅かに外反し、底部孔は小径である。口縁部は横溝で、胴部はへら削り、内面はへら撫で。	
図一 15 図版—	土師器 瓶	埋土 底部孔部 片	口径— 底径5.0 器高(1.3)	細粒砂 還元焰 褐色	外面はへら削り、内面はへら撫で。	
図一 16 図版-52	土師器 壺	埋土 口縁1/2 胴部1/2次	口径(20.3) 底径— 器高(32.4)	夾雑物 還元焰 褐色	長胴壺。胴部に輪積み痕が残る。口縁部はやや外反し、胴部は僅かに膨らむ。口縁部は横溝で、胴部は縦方向へら削り、内面はへら撫で。	

遺物観察表

神田番号 国版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考			
図-76 17 国版-52	土師器 甕	カマド 口縁-体 部1/8	口径(21.3) 底径 - 器高(18.0)	夾雑物 酸化焰 明赤褐色	長割莞。口縁部はやや外反し、胴部は僅かに膨らむ。 口縁部は横撫で、胴部は縦方向へら削り、内面はへら撫で。				
図-76 18 国版-52	土師器 甕	埋土 底部2/3	口径 - 底径 5.3 器高(7.6)	夾雑物 酸化焰 明赤褐色	胴部はへら削り、底部は本業痕が残る。内面胴部はへら撫で。				
神田番号 国版-19	国版-52	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
		加工痕のある甕	カマド左輪部	粗粒安山岩	35.2	23.0	11.1	7100.0	扁平な楕円盤、背面部割縁直

1区21号住居

神田番号 国版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-77 1 国版-52	土師器 壺	埋土 口縁片	口径(12.3) 底径 - 器高(3.9)	微粒砂 酸化焰軟質 褐色	口縁部は直立し、横撫で。	

1区22号住居

神田番号 国版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-77 1 国版-52	須恵器 椀	埋土 口縁-体 部1/8	口径(12.9) 底径 - 器高(4.2)	微粒砂 還元焰 灰黄色	縦横成形、回転方向不明。	
図-77 2 国版-52	土師器 高杯又は 脚部片	埋土 脚部片	口径 - 底径(19.4) 器高(3.0)	微粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は外反し、横撫で。	
図-77 3 国版-52	土師器 甕	埋土 口縁片	口径(17.5) 底径 - 器高(3.5)	微粒砂 酸化焰 褐色	「コ」の字状口縁莞。口縁部は横撫で。	
図-77 4 国版-52	土師器 甕	埋土 底部片	口径 - 底径(2.2) 器高(2.6)	微粒砂 酸化焰 にぶい褐色	胴部はへら削り、内面はへら撫で。	

2区1号住居

神田番号 国版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考			
図-78 1 国版-53	土師器 杯	埋土 1/8	口径(14.8) 底径 - 器高(3.5)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。				
図-78 2 国版-53	土師器 杯	埋土 底部	口径 - 底径 - 器高(1.4)	夾雑物 酸化焰 褐色	底部はへら削り。				
図-78 13 国版-53	土師器 鉢縁車	埋土 一部欠	口径 5.0 底径 3.5 器高 2.7	微粒砂 酸化焰 暗赤灰色	へら撫で後へら磨き。				
神田番号 国版-5	国版-53	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
		椀	床面直上	ひん岩	13.2	5.8	3.2	358.8	楕円盤
		椀	埋土上位	石英閃緑岩	11.7	4.9	4.0	375.7	楕円盤
		椀	床面直上	粗粒安山岩	10.4	4.9	3.5	248.9	楕円盤
		椀	床面直上	石英閃緑岩	10.1	5.5	2.6	246.9	扁平な楕円盤
		椀	床面直上	砂岩	12.6	4.6	4.0	367.8	楕円盤
		椀	床面直上	溶結凝灰岩	11.1	4.5	3.6	261.2	楕円盤
		椀	床面直上	粗粒安山岩	11.5	5.4	4.1	377.8	楕円盤
		椀	床面直上	石英閃緑岩	12.0	4.9	3.4	302.5	楕円盤

押印番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備考
図78-3	図版-53	鉄器・不明	埋土下位	断面円形か。	(8.5)	0.3	0.3	4と同一か。
図78-4	図版-53	鉄器・不明	埋土下位	端が歪み、断面形不明。	(3.1)	0.3	0.3	3と同一か。

2区2号住居

押印番号	図版番号	種別	出土位置	法量	胎土	焼成	色調	製作技法等の特徴	備考
図-79	須恵器	埋土	口径13.3 底径6.4 器高4.4	織粒砂 酸化焰 褐色	横轆成形、回転方向右回り。底部回転車切り、内面は口縁部から底部までへら研削で黒色処理。				
図版-53	杯	口縁1/4欠							
図-79	土師器	埋土	口径(18.7) 底径— 器高(3.7)	織粒砂 酸化焰 明赤褐色	「コ」の字状口縁部。口縁部は横撫で、胴部はへら撫で。				
図版-53	2	口縁部欠							
押印番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備考	
図79-3	図版-53	鉄器・刀子	埋り方	基部欠損、身は細く、使用に伴う磨き減りと推定	(11.0)	(1.0)	0.3		
押印番号	図版番号	種別	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図79-4	図版-53	加工痕のある礫	床面直上	礫石	(10.0)	10.5	5.8	181.7	円礫素材

2区3号住居

押印番号	図版番号	種別	出土位置	法量	胎土	焼成	色調	製作技法等の特徴	備考
図-81	土師器	埋土	口径(14.5) 底径— 器高3.8	織粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は内彎ぎみで底部は横い丸みをもつ。口縁部はへら削り、体部は無調整、底部はへら削り。				
図版-53	1	口縁1/4底部2/3							
図-81	土師器	埋土	口径12.6 底径— 器高3.9	織粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は直立し、底部はほぼ平底。口縁部は横撫で、体部は撫でと無調整、底部はへら削りて周辺部に撫でが見られる。				
図版-53	2	口縁1/2欠							
図-81	須恵器	埋土	口径22.1 口縁— 器高(13.4)	織粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は幅狭み痕が残る。口縁部は外反し、胴部は横い丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部はへら削り、内面胴部はへら撫で。				
図版-53	3	口縁—胴部1/2							
図-81	土師器	埋土	口径— 底径6.2 器高(14.0)	織粒砂 酸化焰 いぶい褐色	胴部は中位が大きく膨らむ。胴部・底部ともへら削り、内面はへら撫で。				
図版-53	4	底唇—胴部片							

2区4号住居

押印番号	図版番号	種別	出土位置	法量	胎土	焼成	色調	製作技法等の特徴	備考
図-82	土師器	埋土	口径(13.4) 底径— 器高(3.5)	夾雑物 酸化焰 いぶい褐色	口縁部は直立きみで底部は横い丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。				
図版-54	1	1/4							

2区5号住居

押印番号	図版番号	種別	出土位置	法量	胎土	焼成	色調	製作技法等の特徴	備考
図-84	土師器	埋土	口径(11.2) 底径— 器高(4.0)	織粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は直立きみで底部は丸底。口縁部は横撫で、体部上半は無調整、体部下半・底部はへら削り。				
図版-54	1	1/4							
図-84	土師器	カマド	口径— 底径3.2 器高(2.3)	夾雑物 酸化焰 褐色	胴部・底部ともへら削り、内面はへら撫で。				
図版-54	2	底部片							
図-84	土師器	埋土	口径— 底径(5.3) 器高(3.6)	夾雑物 酸化焰 いぶい黄褐色	胴部は縦方向へら削り、底部もへら削り、内面はへら撫で。				
図版-54	3	底唇—胴部1/4							
押印番号	図版番号	種別	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図84-4	図版-54	加工痕のある礫	埋土中位	礫石安山岩	14.0	8.1	4.6	625.3	楕円礫素材、端部に鋭形痕

遺物観察表

2区6号住居

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図一 84 1 図版-54	土師器 杯	埋土 口縁から 1/5	口径(13.3) 底径 - 器高(2.7)	微粒砂 酸化焰 にぶい褐色	口縁部はやや外傾し、底部はほぼ平底。口縁部は横溝で、体部は無調整、底部はへら削り。	
図一 84 2 図版-54	土師器 杯	埋土 口縁-底部 小片	口径(15.1) 底径 - 器高(2.7)	微粒砂 酸化焰 棕色	口縁部はやや外傾し、底部はほぼ平底。口縁部上半は横溝で、下半は無調整、底部はへら削り。	
図一 84 3 図版-54	土師器 甕	埋土 底部-割 部1/4	口径 - 底径(5.1) 器高(4.9)	微粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	胴部は縦方向へら削り、底部もへら削り、内面はへら溝で。	

2区7号住居

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図一 85 1 図版-54	土師器 甕	埋土 頸部付近 の破片	口径 - 底径 - 器高(4.2)	夾雑物 酸化焰 棕色	胴部は球状に膨らむ。胴部は横方向へら削り、内面はへら溝で。	
図一 85 2 図版-54	土師器 甕	埋土 口縁片	口径(17.4) 底径 - 器高(7.5)	微粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部はやや外反する。口縁部は横溝で、胴部は横方向へら削り、内面胴部はへら溝で。	
図一 85 3 図版-54	土師器 甕	埋土 底部片	口径 - 底径(5.5) 器高(2.0)	微粒砂 酸化焰 黒褐色	胴部・底部ともへら削り、内面はへら溝で。	

2区8号住居

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図一 86 1 図版-54	土師器 杯	埋土 3/4	口径 11.5 底径 - 器高 4.1	微粒砂 酸化焰 棕色	口縁部は僅かに外反し、底部との間に稜をもち、底部は丸底。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図一 86 2 図版-54	土師器 高杯	埋土 杯部片	口径(14.4) 底径 - 器高(2.7)	微粒砂 酸化焰 棕色	口縁部は外反し、横溝で。	
図一 86 3 図版-54	土師器 甕	埋土 底部1/2	口径 - 底径 4.1 器高(4.9)	夾雑物 酸化焰 黒褐色	胴部・底部ともへら削り、内面はへら溝で。	

2区9号住居

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図一 87 1 図版-54	土師器 高杯	埋土 脚部片	口径 - 底径 - 器高(2.0)	微粒砂 酸化焰 黒色	脚部接合部。	
図一 87 2 図版-54	土師器 甕	埋土 底部片	口径 - 底径 3.2 器高(1.7)	微粒砂 酸化焰 明赤褐色	胴部・底部はへら削り、内面はへら溝で。	

2区10号住居

押戻番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考			
図一 89 1	土師器 杯	埋土	口径(11.5) 底径 — 器高(2.3)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は外傾し、底部は横い丸みをもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。				
図版—54	口縁片								
図一 89 2	土師器 杯	カマド	口径(13.3) 底径 — 器高(2.2)	細粒砂 酸化焰 にぶい褐色	口縁部は直立どみで体部は丸みをもち開く。口縁部は横撫で、体部は無調整。				
図版—54	口縁片								
図一 89 3	土師器 杯	埋土	口径(9.1) 底径 — 器高(2.8)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は外反し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で。				
図版—54	口縁片								
図一 89 4	土師器 罍	埋土 口縁1/8割 部2/3底完	口径(21.3) 底径 7.2 器高 35.7	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部は外反し、胴部は直線的である。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へら削り、底部へら削り、内面胴部はへら撫で。				
図版—54	口縁片								
図一 89 5	土師器 罍	埋土	口径(20.1) 底径 — 器高(7.8)	実粒物 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部は僅かに外反し、胴部は直線的である。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へら削り、内面胴部はへら撫で。				
図版—54	口縁片								
押戻番号	図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図90—6	図版—54	砥石	埋土	砥沢石	10.3	4.0	3.65	132.07	使用面変形、両面曲状削り

2区11号住居

押戻番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考			
図一 91 1	須恵器 杯	埋土	口径(11.4) 底径(5.4) 器高 3.9	細粒砂 還元焰 灰色	轆轤成形、回転方向不明。底部は回転糸切り。				
図版—55	1/4								
図一 91 2	土師器 杯	埋土	口径(12.7) 底径(9.0) 器高(3.1)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は外反し、底部は平底。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。				
図版—55	口縁片1/8								
図一 91 3	土師器 杯	埋土	口径(11.7) 底径 — 器高(2.8)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は外反し、底部は平底。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。				
図版—55	口縁片								
図一 91 4	土師器 罍	埋土	口径 — 底径(5.7) 器高(1.7)	細粒砂 酸化焰 黒褐色	胴部・底部はへら削り、内面はへら撫で。				
図版—55	底部片								
図一 91 5	土師器 罍	床下	口径 — 底径(3.7) 器高(3.0)	細粒砂 酸化焰 黒褐色	胴部・底部はへら削り、内面はへら撫で。				
図版—55	底部片								
図一 91 6	土師器 罍	埋土	口径(20.5) 底径 — 器高(16.3)	細粒砂 酸化焰 灰褐色	口縁部は外反し、胴部は膨らむ。口縁部は横撫で、頸部はへら撫で、胴部上位は横方向、中位は縦方向へら削り、内面胴部はへら撫でで指頭部が残る。				
図版—55	口縁~胴部1/8								
図一 91 7	土師器 罍	埋土	口径(18.3) 底径 — 器高(11.2)	細粒砂 酸化焰 褐色	「コ」の字状口縁突。口縁部は横撫で、頸部はへら撫で、胴部は横方向へら削り、内面胴部はへら撫で。				
図版—55	口縁~胴部1/8								
図一 91 8	土師器 罍	埋土	口径 — 底径 — 器高(15.3)	細粒砂 酸化焰 灰褐色	内面に輪積み痕が見られる。外面は縦方向へら削り、内面はへら撫でで指頭部が残る。				
図版—55	胴部1/4								
押戻番号	図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図91—9	図版—55	加工痕のある罐	埋土	粗粒安山岩	30.2	18.8	14.6	7700.0	片面に限りある

2区12号住居

押戻番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図一 93 1	須恵器 蓋	埋土	口径 14.5 底径 4.3 器高 3.2	実粒物 還元焰 灰色	轆轤成形、回転方向右回り。内面は火押痕。つまみは輪状。天井部は中位まで回転へら削り。	
図版—55	定形					
図一 93 2	須恵器 蓋	埋土	口径 12.9 底径 2.6 器高 4.0	細粒砂 還元焰 灰白色	轆轤成形、回転方向右回り。口縁部は焼成時の歪みが大い。つまみは輪状。天井部の中央部は回転へら削り。	
図版—55	定形					

遺物観察表

神図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考			
図-93 3 図版-55	須臾器 杯	埋土 口縁一部	口径 10.8 底径 6.7 器高 3.7	夾雑物 還元焰 にぶい黄褐色	轆轤成形、回転方向右回り。底部は回転糸切り後回転へら調整、中央部に糸切り痕が残る。				
図-93 4 図版-55	須臾器 杯	埋土 底部3/4	口径 - 底径 7.1 器高(1.3)	夾雑物 還元焰 黄灰色	轆轤成形、回転方向右回り。底部は回転糸切り後回転へら調整、中央部に糸切り痕が残る。				
図-93 5 図版-55	土師器 杯	埋土 口縁2/3底 部欠	口径(12.2) 底径 - 器高(3.1)	細粒砂 還元焰 褐色	口縁部は直立し、底部はほぼ平底。口縁部は横溝で、体部は無調整、底部はへら削り。				
図-93 6 図版-55	土師器 杯	埋土 1/3	口径(12.8) 底径 - 器高(3.3)	細粒砂 酸化焰 にぶい褐色	口縁部は直立さみで底部は緩い丸みをもつ。口縁部は横溝で、体部は無調整、底部はへら削り。				
図-93 7 図版-55	土師器 杯 埋土	カマド 口縁一部 部1/3	口径(13.0) 底径 - 器高(2.8)	細粒砂 酸化焰 褐色	体部から口縁部は僅かに開き、底部は平底。口縁部は横溝で、体部は無調整、底部はへら削り。				
図-93 8 図版-55	須臾器 柄	埋土 口縁一部 欠	口径 10.6 底径 6.3 器高 5.1	細粒砂 酸化焰 灰色	轆轤成形、回転方向右回り。高台は貼付。底部は回転へら切り。				
神図番号 図版-9	図版-55	器種 加工のある礫	出土位置 床面直上	石材 粗粒安山岩	長さ 14.1	幅 13.9	厚さ 6.6	重量 1400.0	製作技術、形態等の特徴 片面研磨痕、片面削り痕

2区13号住居

神図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考			
図-94 1 図版-56	須臾器 杯	埋土 1/2	口径(11.9) 底径 5.8 器高 4.2	細粒砂 還元焰 にぶい黄褐色	轆轤成形、回転方向右回り。底部は回転糸切り、内面は全面にへら研磨し、黒色処理。				
図-94 2 図版-56	須臾器 杯	埋土 完形	口径 12.4 底径 6.0 器高 3.9	夾雑物 還元焰 灰色	轆轤成形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。				
図-94 3 図版-56	土師器 杯	埋土 口縁1/3欠	口径 12.3 底径 - 器高 3.1	夾雑物 還元焰 褐色	体部から口縁部は直線的にやや開き、底部は平底。口縁部は横溝で、体部は無調整、底部はへら削り。				
図-94 4 図版-56	土師器 杯	埋土 口縁一部 部1/4	口径(12.0) 底径 - 器高(3.2)	細粒砂 還元焰 明赤褐色	口縁部は内傾し、体部は丸みをもち開く。口縁部は横溝で、体部は無調整、底部はへら削り。				
図-94 5 図版-56	土師器 杯	埋土 底部1/2	口径 - 底径(5.9) 器高(2.1)	細粒砂 還元焰 にぶい褐色	轆轤成形、回転方向不明。高台は貼付。底部切り直し技法不明。内面はへら研磨で黒色処理。				
図-94 6 図版-56	土師器 壺	埋土 口縁一部 部1/3	口径(8.7) 底径 - 器高(9.3)	細粒砂 還元焰 明赤褐色	「コ」の字状口縁変。口縁部には1条の凹線がめぐり、横溝で、頸部は上半が無調整、下半は横溝で、胴部は横方向へら削り、内面胴部はへら削り。				
神図番号 図版-47	図版-56	製品名 鉄器・刀子	出土位置 床面直上	遺存状態・特徴 全面錆に覆われ、身の一部が空洞であるが、完形。	長さ 16.0	幅 1.2	厚さ 0.5	重量	製作技術、形態等の特徴
神図番号 図版-48	図版-56	器種 砥石	出土位置 埋土	石材 砥沢石	長さ 9.4	幅 3.8	厚さ 3.3	重量 100.35	製作技術、形態等の特徴 3側面研磨、1側面横削り

2区14号住居

神図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-96 1 図版-56	須臾器 台付皿	埋土 口縁一部 欠高有欠	口径 13.9 底径(6.6) 器高(2.7)	細粒砂 還元焰焼成 黒色	轆轤成形、回転方向右回り。高台は割離。底部は回転糸切り。	
図-96 2 図版-56	土師器 壺	埋土 口縁一部 部1/4	口径(19.6) 底径 - 器高(7.6)	細粒砂 還元焰 明赤褐色	「コ」の字状口縁変。口縁部には1条の凹線がめぐり、横溝で、頸部は上半がへら削り、下半は横溝で、胴部は横方向へら削り、内面胴部はへら削り。	

2区15号住居

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図一 97 1 図版-56	須恵器 杯	埋土 1/4	口径(11.2) 底径(7.1) 器高(3.5)	微粒砂 還元焰 灰白色	轆轤成形、回転方向不明。底部は回転へら調整。	
図一 97 2 図版-56	土師器 杯	埋土 1/3	口径(12.8) 底径 - 器高(3.5)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は直立し、体部は丸みをもち開く。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。	
図一 97 3 図版-56	土師器 杯	埋土 口縁片	口径(12.4) 底径 - 器高(2.3)	微粒砂 酸化焰 明褐色	口縁部は直立し、底部はほぼ平底。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図一 97 4 図版-56	土師器 杯	埋土 口縁片1/8	口径(11.6) 底径 - 器高(3.0)	微粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は内彎し、体部は丸みをもち開く。口縁部は横撫で、体部上半は無調整、下半はへら削り。	
図一 97 5 図版-56	土師器 杯	埋土 口縁片	口径(12.7) 底径 - 器高(2.2)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は内彎し、体部は丸みをもち開く。口縁部は横撫で、体部上半は無調整、下半はへら削り。	
図一 97 6 図版-56	土師器 杯	埋土 口縁片	口径(13.3) 底径 - 器高(2.7)	微粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部は直立し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図一 97 7 図版-56	土師器 杯	埋土 口縁片	口径(10.5) 底径 - 器高(2.3)	微粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は直立きみで底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図一 97 8 図版-56	土師器 杯	埋土 口縁片	口径(10.0) 底径 - 器高(3.8)	微粒砂 還元焰 にぶい黄褐色	口縁部は僅かに外傾し、中位・下位に各1条の凹線がめぐり、底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図一 97 9 図版-56	土師器 杯	埋土 口縁片	口径(13.4) 底径 - 器高(3.1)	微粒砂 酸化焰 にぶい褐色	口縁部は直立きみで底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図一 97 10 図版-56	土師器 杯	埋土 口縁片	口径(12.9) 底径 - 器高(4.0)	微粒砂 酸化焰 にぶい褐色	口縁部は僅かに外傾し、中位・下位に各1条の凹線がめぐり、底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図一 97 11 図版-56	土師器 罍	埋土 口縁片	口径(17.2) 底径 - 器高(6.0)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は横撫で、胴部は横方向へら削り、内面胴部はへら撫で。	
図一 97 12 図版-56	土師器 罍	埋土 口縁片	口径(18.8) 底径 - 器高(7.3)	細粒砂 酸化焰 にぶい褐色	長胴罍。口縁部は外反し、胴部は直線的。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へら削り、内面胴部はへら撫で。	
図一 97 13 図版-56	土師器 鉢	埋土 口縁片	口径(19.2) 底径 - 器高(4.6)	細粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は横撫で、体部はへら削り、内面は黒色処理。	

2区17号住居

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図一 99 1 図版-57	土師器 杯	埋土 口縁片	口径(11.1) 底径 - 器高(2.2)	微粒砂 酸化焰 褐色	体部から口縁部は僅かに開き、底部は平底。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。	
図一 99 2 図版-57	土師器 杯	埋土 口縁片	口径(12.9) 底径 - 器高(2.3)	微粒砂 酸化焰 褐色	口縁部はやや外反し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図一 99 3 図版-57	土師器 杯	埋土 口縁片	口径(12.9) 底径 - 器高(3.5)	微粒砂 酸化焰 灰黄褐色	口縁部は直立きみで底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図一 99 4 図版-57	土師器 杯	埋土 口縁-底部	口径(14.8) 底径 - 器高(3.3)	微粒砂 酸化焰 灰黄褐色	口縁部は僅かに外傾し、中位に1条、下位に2条の凹線がめぐり、底部との間に稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	

遺物観察表

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考			
図-99 5 図版-57	土師器 甕	埋土 口縁-胴 部1/4	口径(21.3) 底径 - 器高(16.0)	夾雑物 酸化焰 にぶい黄褐色	長胴甕。口縁部は外反し、胴部はほぼ直線的。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へら削り、内面胴部はへら撫で。				
図-99 6 図版-57	土師器 カマド	埋土 底部-胴 部2/3	口径 - 底径(4.7) 器高(10.8)	夾雑物 酸化焰 褐色	胴部は縦方向・斜め方向へら削り、底部もへら削り、内面はへら撫で。				
図-99 7 図版-57	土師器 甕	埋土 1/6欠	口径17.0 底径3.9 器高27.6	夾雑物 酸化焰 にぶい褐色	口縁部はやや外反し、胴部は僅かに膨らむ。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へら削り、内面胴部はへら撫で。				
検出番号 図版番号	図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図99-8	図版-57	磨石	床面直上	稜粒安山岩	13.3	6.7	5.3	501.0	焼内磨石材、中央部に磨打痕

2区18号住居

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-101 1 図版-57	須恵器 蓋	埋土 1/2	口径13.0 底径2.9 器高4.2	夾雑物 還元焰 灰白色	横轆成形、回転方向右回り、つまみは小径の扁平。天井部は回転へら削り。	
図-101 2 図版-57	須恵器 杯	埋土 口縁-胴 部1/4	口径9.6 底径 - 器高3.0	細粒砂 還元焰 灰白色	横轆成形、回転方向右回り。底部は回転へら調整。	
図-101 3 図版-57	須恵器 椀	埋土 底部1/2	口径 - 底径(7.0) 器高(2.2)	夾雑物 還元焰 灰白色	横轆成形、回転方向不明。高台は貼付。底部は回転へら削り。扇辺部は高台貼付時の撫で。	
図-101 4 図版-57	須恵器 長頸壺	埋土 頸部2/3	口径 - 底径 - 器高(6.9)	夾雑物 還元焰 黒色	横轆成形、回転方向不明。	
図-101 5 図版-57	軟質陶器 類	埋土 体部片	口径 - 底径 - 器高 -	細粒砂 還元焰 灰黄色	外面不明。内面へら撫で。	
図-101 6 図版-57	土師器 杯	埋土 1/4	口径(11.1) 底径 - 器高(3.3)	夾雑物 酸化焰 明赤褐色	口縁部は直立し、体部は丸みをもち大きく開く。口部縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。	
図-101 7 図版-57	土師器 杯	埋土 1/3	口径(13.3) 底径 - 器高(3.3)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は内彎し、底部は緩い丸底。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。	
図-101 8 図版-57	土師器 杯	埋土 口縁-体 部1/6	口径(16.0) 底径 - 器高(4.0)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は内彎さみで体部は丸みをもち開く。口縁部は横撫で、体部はへら削り。	
図-101 9 図版-57	土師器 杯	埋土 口縁-底 部1/4	口径(12.3) 底径 - 器高(2.9)	細粒砂 酸化焰 にぶい褐色	口縁部は直立し、体部は丸みをもち開く。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。	
図-101 10 図版-57	土師器 杯	カマド 口縁片	口径(10.7) 底径 - 器高(2.7)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部は内彎し、横撫で。	
図-101 11 図版-57	土師器 杯	埋土 口縁-底 部1/4	口径(16.2) 底径 - 器高(3.2)	夾雑物 酸化焰 明赤褐色	口縁部は内彎し、体部は丸みをもち開く。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。	
図-101 12 図版-57	土師器 杯	埋土 口縁-底 部1/4	口径(14.1) 底径 - 器高(3.9)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は内彎し、体部は丸みをもち開く。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。	
図-101 13 図版-57	土師器 杯	埋土 2/3	口径(13.3) 底径 - 器高4.8	細粒砂 酸化焰 灰黄褐色	口縁部は直線的にやや開き、3本の凹線がめぐる。底部との間に線をもち、底部は丸底。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図-101 14 図版-57	土師器 杯	埋土 口縁-体 部片	口径(16.0) 底径 - 器高(4.1)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部は内彎し、体部は丸みをもち開く。口縁部は横撫で、体部はへら削り。	

種別番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法 量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備 考			
図一 101 15 図版一57	須恵器 杯	埴土 口縁一底 部1/8	口径(10.3) 底径 一 器高(3.5)	細粒砂 還元焰 棕色	轆轤成形、回転方向不明。底部は回転へら調整。				
図一 101 16 図版一57	土師器 柑	埴土 口縁1/3	口径(6.4) 底径 一 器高(2.6)	微粒砂 還元焰 明赤褐色	口縁部は直線的にやや開き、横撫で。				
図一 101 17 図版一57	土師器 柑	埴土 頸部1/3	口径 一 底径 一 器高(1.7)	細粒砂 還元焰 明赤褐色	外面の整形は不鮮明、内面はへら撫で。				
図一 101 18 図版一57	土師器 壺	埴土 口縁一胴 部1/2	口径(14.2) 底径 一 器高(6.2)	細粒砂 還元焰 明赤褐色	口縁部は外反し、胴部は緩い膨らみをもつ。口縁部は横撫で、胴部は横方向へら削り、内面胴部はへら撫で。				
図一 101 19 図版一57	土師器 把手付皿	埴土 1/2	口径(11.6) 底径 一 器高(2.5)	細粒砂 還元焰 にぶい藍色	口縁部はやや外反し、底部は緩い丸みをもつ。内面に把手が付けられていたようである。口縁部は横撫で、底部はへら撫で。				
図一 101 20 図版一57	土師器 壺	カマド 口縁片	口径(20.9) 底径 一 器高(5.7)	細粒砂 還元焰 にぶい藍色	口縁部は外反し、横撫で、胴部はへら削り、内面はへら撫で。				
図一 101 21 図版一58	土師器 壺	埴土 口縁一胴 部1/5	口径(18.4) 底径 一 器高(10.0)	夾雑物 還元焰 暗灰黄色	口縁部は外反し、胴部は直線的。口縁部は横撫で、胴部は横方向へら削り、内面はへら撫で。				
図一 101 22 図版一58	土師器 壺	埴土 口縁一胴 部1/3	口径(21.9) 底径 一 器高(10.5)	夾雑物 還元焰 にぶい黄褐色	口縁部に輪痕み痕が残る。口縁部は外反し、胴部は直線的。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へら削り、内面はへら撫で。				
図一 102 23 図版一58	土師器 壺	埴土 口縁1/2	口径(23.4) 底径 一 器高(6.5)	夾雑物 還元焰 褐色	口縁部は直線的に開き、胴部は球状。口縁部は横撫で、胴部は横方向へら削り、内面はへら撫で。				
種別番号 図版番号	図版番号	器 種	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図102-24	図版一58	加工痕のある磚	カマド石箱部	粗粒安山岩	36.0	20.5	13.1	1030.0	精円磚、1側面研ぎ供

2区19号住居

種別番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法 量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備 考
図一 104 1 図版一58	土師器 柑	埴土 口縁部	口径(6.3) 底径 一 器高(2.9)	細粒砂 還元焰 棕色	口縁部は直線的に開く。口縁部上半は横撫で、下半から胴部にかけては縦方向研毛目(単位不鮮明)、内面口縁部にへら撫で。	
図一 104 2 図版一58	土師器 柑	埴土 口縁一部 胴部1/4	口径(9.5) 底径 一 器高(6.0)	夾雑物 還元焰 明褐色	口縁部は直線的にやや開き、胴部は球状。口縁部から胴部上位は縦方向研毛目、中位はへら削り、内面口縁部は横方向研毛目、胴部はへら撫で。	
図一 104 3 図版一58	土師器 柑	カマド 口縁部一 胴部1/3	口径 8.6 底径 一 器高(8.3)	夾雑物 還元焰 黒色	口縁部は直線的にやや開き、胴部は球状。口縁部は横撫で、胴部は横方向へら削り、内面口縁部下位から胴部はへら撫で。	
図一 104 4 図版一58	土師器 高杯	埴土 杯部1/6	口径(16.9) 底径 一 器高(6.3)	細粒砂 還元焰 明赤褐色	口縁部は直線的に開き、底部との間に割れをもつ。外面の口縁部と内面口縁部・底部に粗いへら磨き。	
図一 104 5 図版一58	土師器 高杯	埴土 杯底部	口径 一 底径 10.0 器高(3.5)	細粒砂 還元焰 明褐色	口縁部は直線的に開き、底部との間の様子は明確ではない。口縁部と内面はへら研ぎ、底部はへら削り。	
図一 6 図版一58	土師器 高杯	埴土 舞部片	口径 一 底径 一 器高 一	細粒砂 還元焰 にぶい赤褐色	外面が縦方向へら削り。内面へら撫で。	
図一 104 7 図版一58	土師器 壺	埴土 口縁一胴 部1/5	口径(14.7) 底径 一 器高(9.1)	夾雑物 還元焰 黒褐色	口縁部はやや外反し、胴部は球状を呈す。口縁部は横撫で、胴部は横方向へら削り、内面はへら撫で。	
図一 104 8 図版一58	土師器 壺	埴土 口縁一胴 部1/4	口径(19.8) 底径 一 器高(7.3)	夾雑物 還元焰 にぶい褐色	口縁部は直線的に開き、胴部は球状を呈す。口縁部は横撫で、胴部はへら削り。	

遺物観察表

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-104 9 図版-58	土師器 甕	埋土 底部-胴部1/4	口径 一 底径(6.0) 器高(9.3)	細粒砂 酸化焰 黒褐色	胴部は大きな膨らみをもち、縦方向へら削り、底部はへら削り、内面はへら削り。	
図-104 10 図版-58	須恵器 碗	埋土 底部-胴部1/2	口径 一 底径 7.1 器高(4.5)	尖雑物 還元焰 灰色	轆轤成形、回転方向右回り。高台は貼付。底部は回転糸切り、高台置付け部はへら削り。	

2区20号住居

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-105 1 図版-59	須恵器 杯	埋土 口縁小底 部1/2	口径(10.3) 底径(7.3) 器高(3.2)	細粒砂 還元焰 灰色	轆轤成形、回転方向不明。底部は手持ちへら削り、体部下位もへら削り。	
図-105 2 図版-59	須恵器 杯	埋土 口縁片	口径(11.7) 底径 一 器高(3.1)	尖雑物 酸化焰 褐色	口縁部はやや外反し、横撫で。	
図-105 3 図版-59	土師器 杯	埋土 口縁片	口径(10.3) 底径 一 器高(2.5)	微粒砂 酸化焰 褐色	体部は丸みをもちやや開く。口縁部は横撫で、体部は無調整。	
図-105 4 図版-59	土師器 杯	埋土 口縁内欠	口径 11.1 底径 一 器高(3.6)	尖雑物 酸化焰 褐色	口縁部は僅かに外反し、底部との間には弱い稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図-105 5 図版-59	土師器 杯	埋土 口縁-底部1/5	口径(11.4) 底径 一 器高(2.9)	尖雑物 酸化焰 褐色	口縁部は僅かに外反し、底部との間には弱い稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図-105 6 図版-59	土師器 杯	埋土 口縁片	口径(9.7) 底径 一 器高(2.9)	微粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部はやや外反し、底部との間には稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図-105 7 図版-59	土師器 杯	埋土 1/4	口径(11.9) 底径 一 器高(4.0)	微粒砂 酸化焰 黒褐色	口縁部は直線的にやや開き、口唇部内側に1本の凹線がめぐる。底部との間には弱い稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。	
図-105 8 図版-59	土師器 甕	埋土 口縁-胴部1/4	口径(14.2) 底径 一 器高(7.2)	細粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	胴部から口縁部は外反し、口唇部端部は平坦。口唇部から胴部は横撫で、胴部はへら削り、内面はへら削り。	
図-105 9 図版-59	土師器 甕	埋土 底部1/2	口径 一 底径(4.5) 器高(4.6)	細粒砂 酸化焰 褐色	胴部下位と底部はへら削り、内面はへら削り。	
図-106 10 図版-59	土師器 高杯	埋土 杯口縁部1/4	口径(22.8) 底径 一 器高(5.3)	細粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	外面口縁部上手横撫で、口縁部下半と底部刷毛整形後横方向の粗いへら磨き。内面へら削り後横方向の粗いへら磨き。	
図-106 11 図版-59	土師器 碗	埋土 底部-胴部1/6	口径 一 底径(10.3) 器高(13.5)	尖雑物 酸化焰 褐色	外面は縦方向へら削り、内面はへら削り。	
図-106 13 図版-1	土師器 高杯	掘り方 杯部口縁破片	口径(17.4) 底径 一 器高(4.1)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	内外面とも横撫で後粗い放射状へら研磨。	
検出番号 図版-12	図版-59	製品名 鉄器・釘	出土位置 埋土	遺存状態・特徴	長さ 幅 厚さ	備考
				断面長方形。胴部欠損。先端部が鈎針状に湾曲。	(6.5) 0.4 0.5	

2区21号住居

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-107 1 図版-59	土師器 杯	埋土 口縁-体部片	口径(12.6) 底径 一 器高(3.0)	微粒砂 酸化焰 赤褐色	口縁部は内磨きで体部から底部は丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部の整形は不鮮明。	

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-107 2 図版-59	土師器 杯	埋土 1/8	口径(14.2) 底径— 器高(3.6)	細粒砂 酸化焰 黒褐色	口縁部は内傾し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図-107 3 図版-59	土師器 杯	埋土 口縁片1/8	口径(12.1) 底径— 器高(2.3)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は外反し、底部との間に稜をもつ。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図-107 4 図版-59	土師器 台付壺	埋土 台部1/3	口径— 底径(10.2) 器高(5.5)	細粒砂 酸化焰 明褐色	頸部はやや膨らみをもつ。胴部上・中位はへら撫で、下位は横溝で、内面底部は刷毛目(単位不明)。	

2区22号住居

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-108 1 図版-59	須恵器 長頸壺	埋土 肩部片	口径— 底径— 器高(1.8)	細粒砂 還元焰 にぶい赤褐色	横溝成形、回転方向不明。肩部端部に1条の凹線がめぐり、列点文が施されている。	
図-108 2 図版-59	須恵器 杯	埋土 1/3	口径(1.4) 底径(7.7) 器高(3.8)	細粒砂 還元焰 灰色	横溝成形、回転方向不明。底部は回転へら調整。	
図-108 3 図版-59	土師器 杯	埋土 1/2	口径(12.0) 底径— 器高(3.3)	細粒砂 酸化焰 明褐色	口縁部は直立し、体部は鋭い丸みをもつ。口縁部は横溝で、体部は無調整。底部はへら削り。	
図-108 4 図版-59	土師器 高杯	埋土 杯部1/8	口径(16.3) 底径— 器高(5.6)	細粒砂 酸化焰 赤色	底部は小径で口縁部は直線的に開く。外面は刷毛整形後へら横溝、内面はへら横溝。	
図-108 5 図版-59	土師器 附	埋土 1/2	口径(6.8) 底径— 器高(7.6)	細粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部は直線的にやや開き、胴部はあまり膨らみをもたない。口縁部と胴部は横溝で、胴部・底部はへら削り。	
図-108 6 図版-59	土師器 壺	埋土 口縁小胴部1/2底面	口径(15.0) 底径7.0 器高14.3	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部は直線的に開き、胴部は大きく膨らみ、底部はほぼ平底。口縁部・胴部は横溝で、胴部・底部はへら削り。内面胴部はへら撫で。	
図-108 7 図版-59	土師器 壺	埋土 胴部1/4	口径— 底径— 器高(4.3)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	胴部は横溝で、胴部は縦方向へら削り、内面はへら撫で。	

2区23号住居

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-109 1 図版-60	土師器 杯	埋土 口縁片	口径(9.3) 底径— 器高(2.5)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は外反し、底部との間に弱い稜をもち、底部は丸底。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図-109 2 図版-60	土師器 杯	埋土 口縁片	口径(10.5) 底径— 器高(1.5)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は外反し、底部との間に弱い稜をもち、底部は丸底。口縁部は横溝で、底部はへら削り。	
図-109 3 図版-60	土師器 鉢	埋土 口縁片	口径(16.7) 底径— 器高(4.0)	細粒砂 酸化焰 にぶい褐色	口縁部は外反し、横溝で、体部はへら削り。	
図-109 4 図版-60	土師器 壺	埋土 口縁2/3	口径21.0 底径— 器高(7.7)	細粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部は外反きみに開き、胴部は鋭い膨らみをもつ。口縁部は横溝で、胴部はへら削り、内面はへら撫で。	
図-109 5 図版-60	土師器 壺	埋土 口縁片	口径(9.3) 底径— 器高(5.0)	細粒砂 酸化焰 にぶい褐色	口縁部は外反きみに開き、胴部は直線的。口縁部から胴部は横溝で、胴部はへら削り、内面はへら撫で。	
図-109 6 図版-60	土師器 壺	埋土 胴部下半	口径— 底径— 器高(12.4)	夾雑物 酸化焰 にぶい黄褐色	胴部は縦方向へら削り、内面はへら撫で。	

遺物観察表

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考			
図-109 7 図版-60	土師器 甕	埴土 口縁-胴部1/3	口径(23.0) 底径 - 器高(16.4)	細粒砂 酸化焰 灰オリーブ色	口縁部は外反し、胴部は球状を呈す。口縁部から頸部は横撫で、胴部はへら削り、内面はへら撫で。				
神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 ある碑	出土位置 床下土坑	石材 粗粒安山岩	長さ 20.3	幅 17.7	厚さ 5.2	重量 1650.5	製作技術、形態等の特徴 扁平内凹、片面に顔状削り
図110-8	図版-60	加工痕のある碑	床下土坑	粗粒安山岩	20.3	17.7	5.2	1650.5	扁平内凹、片面に顔状削り

2区24号住居

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図-111 1 図版-60	土師器 杯	埴土 1/2	口径(12.0) 底径 - 器高 3.4	細粒砂 酸化焰 橙色	口縁部は外反し、底部は平底。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。	
図-111 2 図版-60	土師器 高杯	埴土 杯部1/8	口径(18.3) 底径 - 器高(5.6)	細粒砂 酸化焰 にぶい橙色	口縁部は外反ぎみに開き、底部は緩い丸みをもつ。口縁部は横撫で後種いへら研磨、底部・脚部はへら削り、内面底部はへら研磨。	
図-111 3 図版-60	土師器 高杯	埴土 脚部部欠	口径 - 底径 - 器高(7.5)	細粒砂 酸化焰 赤灰褐色	脚部は緩い膨らみをもち、縦方向へら削り、内面下半はへら撫で。	
図-111 4 図版-60	土師器 高杯	埴土 脚部部欠	口径 - 底径 - 器高(7.0)	細粒砂 酸化焰 にぶい赤褐色	脚部は大きく膨らみをもち、縦方向へら削り後へら研磨、内面はへら撫で。	
図-111 5 図版-60	土師器 高杯	埴土 脚部部欠	口径 - 底径 - 器高(9.0)	微粒砂 酸化焰 明赤褐色	脚部は直線的で、縦方向へら削り後種いへら研磨、内面下半はへら撫で。	
図-111 6 図版-60	土師器 高杯	埴土 脚部部欠	口径 - 底径 - 器高(7.3)	細粒砂 酸化焰 橙色	脚部は緩い膨らみをもち、縦方向の種かいへら削り、内面下半はへら撫で。	
図-111 7 図版-60	土師器 高杯	埴土 脚部部1/3 欠	口径 - 底径(14.0) 器高(9.9)	細粒砂 酸化焰 赤色	脚部は直線的で頸部は水平に開く。杯身との接合部、頸部は刷毛目(1単位7条)、脚部は縦方向へら削り、内面下半はへら撫で。	
図-111 8 図版-60	土師器 椀	埴土 口縁-胴部2/3	口径(7.6) 底径 - 器高(7.1)	細粒砂 酸化焰 灰黄褐色	口縁部は直線的に開き、胴部は球状を呈す。口縁部から頸部は横撫で、胴部上位・中位はへら撫で、下位はへら削り、内面胴部はへら撫で。	
図-111 9 図版-60	土師器 小型甕	埴土 口縁欠	口径 - 底径 2.7 器高(11.2)	夾雑物 酸化焰 にぶい黄褐色	胴部は球状を呈し、下位に穿孔あり。胴部は上位・中位は縦方向へら削り後種かい縦方向へら削り、下位は横方向へら削り、内面はへら撫で。	
図-111 10 図版-60	土師器 甕	埴土 口縁-胴部	口径(18.5) 底径 - 器高(14.2)	夾雑物 酸化焰 にぶい橙色	口縁部は直線的に開き、胴部は球状。口縁部は横撫でで指痕が残る。頸部は縦方向刷毛目、胴部は横方向刷毛目、内面口縁部は刷毛目胴部はへら撫で。	
図-111 11 図版-60	土師器 甕	埴土 口縁-胴部1/3	口径(14.8) 底径 - 器高(6.0)	夾雑物 酸化焰 黒色	口縁部は外反ぎみに開く。口縁部から頸部は横撫で、胴部は横方向へら削り、内面胴部に指痕が残る。	
図-111 12 図版-60	土師器 甕	埴土 口縁-胴部1/3	口径(13.9) 底径 - 器高(5.7)	夾雑物 酸化焰 黒褐色	口縁部は外反し、胴部は球状を呈す。口縁部から頸部は横撫で、胴部は縦方向へら削り、内面胴部はへら削り。	
図-112 13 図版-60	土師器 壺	埴土 口縁-胴部	口径(14.0) 底径 - 器高(15.6)	夾雑物 酸化焰 黒褐色	頸部に接合痕が残る。口縁部は外反し、胴部は歪んでいる。口縁部は横撫で、胴部はへら削り。	
図-112 14 図版-60	土師器 壺	埴土 口縁-胴部	口径(16.0) 底径 - 器高(21.7)	夾雑物 酸化焰 黒色	口縁部は直立的に開き、胴部は直線的に膨らむ。口縁部は横撫で、胴部はへら削り、内面口唇部は横撫で、口唇部から胴部はへら撫で。	
図-112 15 図版-60	土師器 壺	埴土 完形	口径 16.7 底径 5.5 器高 24.1	夾雑物 酸化焰 にぶい赤褐色	口縁部は直線的に開き、胴部は球状を呈す。口唇部は横撫で、頸部は縦方向刷毛目、胴部上半は横方向刷毛目、下半は縦方向刷毛目、内面胴部はへら撫で。	

棟回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-112 16 図版-60	土師器 壺	埋土 口縁-胴 部1/4	口径(12.9) 底径 - 器高(9.8)	夾雑物 酸化焰 赤褐色	口縁部は外反きみに閉じ、胴部は縦い影らみをもつ。 口縁部は横溝で、胴部はへら削り。内面胴部はへら 溝で。	
図-112 17 図版-60	土師器 壺	埋土 口縁-胴 部1/4	口径(17.6) 底径 - 器高(13.1)	夾雑物 酸化焰 黒褐色	口縁部は外反きみに閉じ、胴部は縦い影らみをもつ。 口縁部は横溝で、胴部はへら削り。内面胴部はへら 溝で。	

2区25号住居

棟回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考				
図-114 1 図版-61	土師器 杯	埋土 1/4	口径(12.2) 底径 - 器高(3.3)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	体部から口縁部は丸みをもち、底部は平底。口 縁部は横溝で、体部は無調整、底部はへら削り。					
図-114 2 図版-61	土師器 杯	埋土 1/2	口径(12.5) 底径 - 器高(3.0)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部は内彎し、底部は平底。口縁部は横溝で、体 部は無調整、底部はへら削り。					
図-114 3 図版-61	土師器 杯	カマド	口径(16.7) 底径 - 器高(3.8)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は外反し、底部は縦い丸みをもつ。口縁部は 横溝で、胴部の整形は不鮮明であるが、へら削り。					
図-114 4 図版-61	土師器 短頸壺	埋土 口縁1/2	口径(10.0) 底径 - 器高(4.3)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は僅かに内傾し、胴部は縦い丸みをもつ。口 縁部は横溝で、胴部はへら削り。					
図-114 5 図版-61	土師器 壺	埋土 口縁-胴 部1/6	口径(22.8) 底径 - 器高(29.3)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部に輪痕み痕が残る。口縁部は外反し、胴部は 縦い影らみをもつ。口縁部は横溝で、胴部は縦方向 へら削り。内面胴部はへら溝で。					
図-114 6 図版-61	土師器 壺	カマド 底部2/3	口径 - 底径 5.4 器高(3.1)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	胴部・底部ともへら削り、内面はへら溝で。					
棟回番号 図版番号	図版番号	製品名	出土位置 遺存状況	遺存状態・特徴			長さ	幅	厚さ	備考
図114-7	図版-61	鉄器・斧	埋土	基部袋状ソケット式。刃部は片減りか。			7.3	4.1	1.9	
図114-8	図版-61	鉄器・鏃	埋土	刃部の形状と先端部の関係から右利き用と推定。			(6.0)	2.2	0.2	

2区26号住居

棟回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-116 1 図版-61	須恵器 壺	埋土 1/5	口径(18.0) 胴径(4.8) 器高 3.0	微粒砂 還元焰 灰白色	横轆成形、回転方向不明。輪状鼓。天井部中央は回 転へら削り。	
図-116 2 図版-61	須恵器 杯	埋土 1/4	口径(14.0) 底径(8.4) 器高(3.3)	微粒砂 還元焰 灰白色	横轆成形、回転方向不明、底部は回転へら調整。	
図-116 3 図版-61	土師器 杯	埋土 1/6	口径(10.7) 底径 - 器高(2.5)	細粒砂 酸化焰 にぶい褐色	口縁部は直立きみで底部は平底。口縁部は横溝で、 体部は無調整、底部はへら削り。	
図-116 4 図版-61	土師器 杯	埋土 1/6	口径(10.3) 底径 - 器高(3.0)	細粒砂 酸化焰 灰黄褐色	口縁部は直立し、底部は縦い丸みをもつ。口縁部は 横溝で、底部はへら削り。	
図-116 5 図版-61	土師器 杯	埋土 1/3	口径(12.8) 底径 - 器高 3.2	細粒砂 酸化焰 にぶい褐色	口縁部は内彎きみで底部はほぼ平底。口縁部は横溝 で、体部は無調整、底部はへら削り。	
図-116 6 図版-61	土師器 台付壺	埋土 脚部1/4	口径 - 底径(10.7) 器高(2.9)	微粒砂 酸化焰 明赤褐色	胴部に輪痕み痕が残る。内外面ともに横溝で。	
図-116 7 図版-61	土師器 台付壺	埋土 脚部(輪 欠)	口径 - 底径 - 器高(8.5)	夾雑物 酸化焰 明褐色	外面はへら削りが施されているが単位等は不鮮明。 内面はへら溝で。	

遺物観察表

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考			
図-116 8 図版-61	土師器 短頸壺	埋土 口縁1/8	口径(12.2) 底径— 器高(4.0)	細粒砂 酸化焰 にぶい赤褐色	口縁部は横撫で、胴部はへら削り、内面はへら撫で。				
図-116 9 図版-61	土師器 壺	掘り方 口縁部片	口径(9.4) 底径— 器高(6.1)	夾雑物 酸化焰 浅黄色	口縁部は外反きみに開き、胴部は直線的。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へら削り。				
図-116 10 図版-61	土師器 壺	埋土 口縁部片	口径(22.4) 底径— 器高(3.2)	細粒砂 酸化焰 棕色	口縁部に輪積み痕が残り、横撫で。				
図-116 11 図版-61	土師器 壺	埋土 口縁部片	口径(21.1) 底径— 器高(4.8)	夾雑物 酸化焰 にぶい黄褐色	口縁部は外反きみに開き、胴部は直線的。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へら削り。				
図-116 12 図版-61	土師器 壺	埋土 底部片	口径— 底径(5.0) 器高(1.3)	細粒砂 酸化焰 にぶい褐色	胴部・底部ともにはら削り、内面はへら撫で。				
図-116 14 図版-61	軟質陶器 火消し壺	埋土 破片	口径(20.0) 底径— 器高(4.1)	細粒砂 酸化焰 黒褐色	内外面とも撫で。				
神田番号 図版-61	図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図116-13	図版-61	加工痕のある磚	埋土	角閃石安山岩	24.0	15.8	13.4	3900.0	輪円雑素材、両側面に削り痕

2区27号住居

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-118 1 図版-61	須恵器 壺	埋土 底部1/6	口径— 底径19.6 器高(2.8)	細粒砂 還元焰 灰白色	縦輪成形、回転方向不明。高台は貼付。底部外面は回転へら削り、内面はかき目。	
図-118 2 図版-61	須恵器 杯	埋土 口縁1/5- 底部小	口径(13.0) 底径(9.2) 器高3.5	細粒砂 還元焰 灰白色	縦輪成形、回転方向不明。底部は回転車削り。	
図-118 3 図版-61	土師器 杯	埋土 2/3	口径13.2 底径— 器高3.4	細粒砂 酸化焰 にぶい棕色	口縁部は直線的、底部は縦い丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。	
図-118 4 図版-61	土師器 杯	埋土 1/4	口径(9.9) 底径— 器高(2.7)	細粒砂 酸化焰 にぶい棕色	口縁部は直線的、底部は縦い丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。	
図-118 5 図版-61	土師器 杯	埋土 底部片	口径— 底径— 器高(1.0)	細粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	外面の整形は不鮮明。	
図-118 6 図版-61	土師器 壺	埋土 口縁部2/6	口径(14.0) 底径— 器高(4.8)	細粒砂 酸化焰 棕色	口縁部は直線的にやや開く。口縁部は横撫でで中位に無調整部分が残る、胴部はへら削り。	
図-118 7 図版-61	土師器 壺	埋土 口縁-胴 部1/8	口径(24.2) 底径— 器高(13.0)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部は外反きみにやや開き、胴部は縦い丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部はへら削り、内面はへら撫で。	
図-118 8 図版-61	土師器 壺	埋土 口縁-胴 部1/5	口径(23.7) 底径— 器高(13.4)	夾雑物 酸化焰 にぶい棕色	口縁部は外反きみにやや開き、胴部は大きく膨らむ。口縁部は横撫で、胴部はへら削り、内面はへら撫で。	
図-118 9 図版-61	土師器 壺	埋土 底部	口径— 底径6.1 器高(4.2)	夾雑物 酸化焰 明赤褐色	胴部は球状を呈し、胴部・底部はへら削り、内面はへら撫で。	
図-118 10 図版-61	土師器 壺	埋土 底部1/2	口径— 底径4.4 器高(1.0)	細粒砂 酸化焰 にぶい褐色	外面胴部。底部へら削り、内面へら撫で。	

2区28号住居

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	粘土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考			
図-119 1 図版-62	土師器 杯	埋土 口縁1/3欠	口径13.8 底径— 器高4.0	細粒砂 酸化焰 にぶい赤褐色	口縁部は内彎きみで底部は緩い丸みをもつ。口縁部は横撫で、底部はへら削り、口縁部と底部の間に無調整部分が残る。				
図-119 2 図版-62	土師器 杯	埋土 1/2	口径14.5 底径— 器高2.8	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は外反し、底部は平底。口縁部上半は横撫で、下半は無調整、底部はへら削り。				
図-119 3 図版-62	土師器 杯	埋土 口縁1/5	口径(11.9) 底径— 器高(2.6)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部は内彎きみで、底部は緩い丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。				
図-119 4 図版-62	土師器 杯	埋土 1/3	口径(13.9) 底径— 器高(2.2)	細粒砂 酸化焰 にぶい藍色	口縁部は直立きみで、底部は緩い丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。				
図-119 5 図版-62	土師器 杯	埋土 口縁1/6	口径(14.8) 底径— 器高(2.7)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は直立きみで、底部は緩い丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。				
図-119 6 図版-62	土師器 杯	埋土 口縁-底部 1/6	口径(13.0) 底径— 器高(2.4)	細粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は外反し、底部は平底。口縁部上半は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。				
図-119 7 図版-62	土師器 杯	埋土 口縁1/6	口径(12.9) 底径— 器高(1.7)	細粒砂 酸化焰 にぶい褐色	底部は平底。口縁部上半は横撫で、下半は無調整、底部はへら削り。				
図-119 8 図版-62	土師器 杯	埋土 1/3	口径(15.0) 底径— 器高(4.3)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部は直立きみで、体部は丸みをもち、底部は平底。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。				
神田番号 図版番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ (11.0)	幅 0.5	厚さ 0.5	備考 身は鑄て空洞	
図119-9	図版-62	鉄器・不明	床面直上	前面長方形。両端が尖るか。					
神田番号 図版番号	図版番号	種別 器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図119-10	図版-62	棒状礎	埋土下位	粗粒安山岩	12.0	6.0	5.0	695.7	歪角礎。端部に刺痕痕
図119-11	図版-62	棒状礎	埋土下位	粗粒安山岩	11.6	7.3	4.7	668.8	棒状礎。被熱後予割
図120-12	図版-62	棒状礎	埋土中位	粗粒安山岩	12.5	6.0	3.3	334.9	棒状礎。側面に刺痕痕
図120-13	図版-62	棒状礎	床面直上	粗粒安山岩	12.7	7.0	5.3	590.7	棒状礎
図120-14	図版-62	棒状礎	埋土下位	実質安山岩	19.7	8.3	4.2	1132.6	棒状礎。手割、接合
図120-15	図版-62	棒状礎	床面直上	粗粒安山岩	15.2	5.9	4.5	724.7	棒状礎。端部に刺痕痕

2区29号住居

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	粘土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図-120 1 図版-	土師器 甕	埋土 割断片	口径— 底径— 器高(5.4)	細粒砂 酸化焰 にぶい褐色	外面はへら削り、内面はへら撫で。	

2区31号住居

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	粘土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図-121 1 図版-62	土師器 甕	埋土 1/2	口径21.7 底径4.4 器高43.0	夾雑物 酸化焰 褐色	口縁部は外反し、胴部は直線的。口縁部は横撫で、胴部は縦方向に3段のへら削り、底部はへら削り、内面胴部はへら撫で。	

2区1号溝

遺物観察表

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図一 122 図版-62	土師砂 1 杯	埋土 口縁-割 部1/5	口径(12.3) 底径 - 器高(3.4)	細粒砂 酸化焰 橙色	口縁部は内傾し、体部は丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部上手は無調整、下手はへら削り。	

2区3号溝

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図一 123 図版-62	土師器 1 碗	埋土 口縁-体 部1/4	口径(12.4) 底径 - 器高(6.1)	細粒砂 酸化焰 明赤褐色	口縁部はやや外反し、横撫で、体部はへら削り、内面はへら撫で部分的にへら削りが見られる。	
図一 123 図版-62	陶器 2 壺	埋土 破片	口径 - 底径 - 器高 -	細粒砂 還元焰 にぶい赤褐色	外面十文字菊花印文。内面はへら撫で。外面は横撫	

2区1号井戸

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考			
図一 124 図版-62	軟質陶器 土製円盤 2	埋土 完形	長径 6.85 短径 7.0 厚さ 0.75	細粒砂 酸化焰 橙色	上面はへら撫で、下面は整形不明。				
採回番号 図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴	
図124-1	図版-62	台石	埋土	横粒安山岩	27.8	11.5	10.6	6000.0	並角礫素材、4個面に敲打痕

2区26号土坑

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図一 125 図版-62	縄文土器 1 深鉢	埋土中位 口縁部1/4	口径(40.0) 底径 - 器高(17.2)	砂粒を多く含む。 堅緻 黄褐色	口縁やや内傾。口縁部に縦帯による区画文。体部に幅広い沈線による区画。間に磨面状工具によるコンパス文、鉋行文。内面上部横撫で、以下縦撫で。	
図一 125 図版-62	縄文土器 2 深鉢	埋土中位 割部破片	口径 - 底径 - 器高 -	砂粒・岩片を多く含む。 堅緻 にぶい赤褐色	磨面状工具による縦位のコンパス文。	
図一 125 図版-62	縄文土器 3 深鉢	埋土中位 割部破片	口径 - 底径 - 器高 -	砂粒少ない。 やや堅緻 灰白色	Rし斜位回転による縦帯縄文。平行沈線の懸垂文。内面横撫で。	4と同一個体か。 風化著しい。
図一 125 図版-62	縄文土器 4 深鉢	埋土中位 割部破片	口径 - 底径 - 器高 -	砂粒少ない。 やや堅緻 灰白色	平行沈線の懸垂文。	3と同一個体か。 風化著しい。

2区23号土坑

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図一 126 図版-63	弥生土器 1 壺	埋土 口縁部	口径 13.5 底径 - 器高(5.7)	砂粒をわずかに含む。 やや堅緻 にぶい橙色	やや内傾しながら外傾する壺形土器の口縁部。折り返し口縁部の側面と口唇部に無加縄文Rの施文。頸部に5-7条の縦位の沈線4単位?と平行沈線。	破片になった後に被熱。
図一 126 図版-63	弥生土器 2 壺	底面直上 破片	口径 - 底径 - 器高 -	砂粒をほとんど含まず。 堅緻 黒褐色	体部に磨面状工具により斜行文。内面横撫で。	3と同一か。
図一 126 図版-63	弥生土器 3 壺	底面直上 破片	口径 - 底径 - 器高 -	砂粒をほとんど含まず。 堅緻 にぶい黄褐色	2と同じ。	2と同一か。

2区溝、2区井戸、2区土坑、1区土坑

押印番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図-126 4	弥生土器 甕	底面直上	口径(13.0) 底径— 器高(5.4)	砂粒をわずかに含む。 堅緻 赤褐色	口縁部外傾。外面撫で調整後、頸部下に棒状工具による沈線文。	
図版-63		口縁片				
図-126 5	弥生土器 甕	底面直上	口径— 底径— 器高(8.7)	砂粒を少し含む。 やや堅緻 灰褐色	口縁部やや外傾。頸部に歯数4による縲状文。等間隔止めか。体部に棒状工具による縦溝文。一部重親。歯数は4が主体であるが、部分的に3。	6・7・8・9と同一か。
図版-63		胴部1/2				
図-126 6	弥生土器 甕	底面直上	口径— 底径— 器高—	砂粒を少し含む。 やや堅緻 灰褐色	口縁部外傾。内外面横撫で。	5・7・8・9と同一か。
図版-63		破片				
図-126 7	弥生土器 甕	底面直上	口径— 底径— 器高—	砂粒を少し含む。 やや堅緻 灰黄色	口縁部外傾。内外面横撫で。	5・6・8・9と同一か。
図版-63		破片				
図-126 8	弥生土器 甕	埋土	口径— 底径— 器高—	砂粒を少し含む。 やや堅緻 灰褐色	頸部に歯数4による縲状文。内面横撫で。	5・6・7・9と同一か。
図版-63		破片				
図-126 9	弥生土器 甕	埋土	口径— 底径— 器高—	砂粒を少し含む。 やや堅緻 黒色	頸部に縲状文。体部に棒状工具に斜行文。	5・6・7・8と同一か。
図版-63		破片				

2区24号土坑

押印番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図-127 1	弥生土器 甕	2の上 口頸部の み残存	口径 11.8 底径— 器高(17.0)	砂粒を含まないが、小 石片を含む。堅緻 明赤褐色	外面縦位～斜位撫で。口唇部横撫で。口縁～頸部内 面横撫で。胴部内面輪縁み痕。斜位の雫のあたり。	2にかぶせら れていた。
図版-63						
図-127 2	弥生土器 甕	底面直上 口頸部欠 損	口径— 底径 11.0 器高(29.3)	砂粒をわずかに含む。 堅緻 明黄褐色	外面縦位・横位・斜位磨き。内面横撫で。底部やや 上げ底。外面に縦目痕跡あり。	1をかぶって いた。
図版-63						
図-127 3	弥生土器 甕か	埋土上位	口径— 底径— 器高(5.9)	砂粒をわずかに含む。 堅緻 黒色	外面横撫で後段磨き。内面横撫で。	
図版-63		体部片				

1区2号土坑

押印番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図-135 1	土師器 甕	埋土 底部	口径— 底径(4.3) 器高(1.5)	細粒砂 酸化焙 黒褐色	胴部・底部はへら削り。内面はへら撫で。	
図版-63						

1区6号土坑

押印番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図-135 1	土師器 甕	埋土	口径 8.5 底径— 器高 3.1	細粒砂 酸化焙 褐色	底部は丸底釜み。外面はへら研磨。内面はへら撫で と部分的なへら研磨。	
図版-63		完形				
図-135 2	土師器 甕	埋土	口径— 底径(5.6) 器高(4.0)	細粒砂 酸化焙 明赤褐色	胴部は球状。底部は平底。胴部は縦方向研毛目(単 位等は磨耗のため不鮮明)底部はへら削り。内面は 横方向研毛目。	
図版-63		底部1/2				

遺物観察表

1区10号土坑

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図-135 1 図版-63	埴輪 円筒埴輪	埴土	口径 - 底径 - 器高 -	細粒砂 酸化焰 にぶい黄褐色	外面赤色塗彩。縦刷毛。	
図-135 2 図版-63	埴輪 円筒埴輪	埴土	口径 - 底径 - 器高 -	細粒砂 酸化焰 浅黄褐色	外面赤色塗彩。縦刷毛。	

1区11号土坑

検出番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備考
図135-1	図版-63	銅製・金具	埴土	四角を切り落した方形銅版の中央を円形に打出す。	8.8	8.7	0.1	「時」宜勝

1区23号土坑

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考			
図-135 4 図版-64	縄文土器 深鉢	埴土 胴部破片	口径 - 底径 - 器高 -	砂粒やや多い。 やや堅緻 赤褐色、裏赤褐色	内外面縦撫で。				
検出番号	図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図135-1	図版-64	加工痕のある環	埴土	粗粒安山岩	33.5	18.5	14.0	6600.0	縄文縄素材、1個面割削あり
図135-2	図版-64	磨石	埴土	粗粒安山岩	13.9	7.5	5.0	622.9	片面研磨、側面・端部敲打痕
図135-3	図版-64	凹石	埴土	粗粒安山岩	7.3	6.9	4.0	160.6	円縄素材、片面凹部地面磨り
図135-5	図版-64	石皿	埴土	粗粒安山岩	-	-	4.7	847.3	扁平円環、両面磨痕、被熱痕
図135-6	図版-64	敲石	埴土	粗粒安山岩	9.6	4.2	4.1	286.5	円縄素材、両面・端部敲打痕

1区27号土坑

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図-136 1 図版-70	縄文土器 深鉢	埴土 胴部破片	口径 - 底径 - 器高 -	砂粒少ない。 やや堅緻 褐色	細隆帯上に斜行筋あり、交点に円形凹突。内外面縦撫で。	1区確認面-1と同一個体か。黒之内式
図-136 2 図版-70	縄文土器 深鉢	1区AQ27 胴部破片	口径 - 底径 - 器高 -	砂粒少ない。 やや堅緻 褐色	内外面縦撫で。	1と同一個体

1区28号土坑

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考		
図-135 1 図版-64	焼酎瓶	埴土 胴部下半 器高(28.3) 明赤褐色	口径(10.0) 胴径(28.3) 器高(28.3)	微粒砂 堅緻 明赤褐色	巻上成形肩部口縁部胴部は別作り。外面縦撫で。胴部内面縦撫で後肩部接合し強い横撫で。その後口縁部を接合。内外面に輪磨。肩部外側磨れ。	常滑焼		
検出番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備考
図135-2	図版-65	鉄器・釘	埴土中位	断面長方形。頭端部、先端部欠損。欠損は調査前	(4.2)	0.5	0.3	

1区30号土坑

検出番号	図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図136-1	図版-65	磨石	埴土	黒色頁岩	7.2	4.3	1.4	29.66	折られた製片素材

1区33号土坑

1区土坑、1区確認面、2区土坑

神田番号	図版番号	器 種	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図136-1	図版-65	台石	埋土	細粒安山岩	18.0	14.1	7.2	2300.0	扁平円礫素材、両面に敲打痕

1区35号土坑

神田番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状況	法 量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備 考
図-136 1 図版-64	縄文土器 深鉢	埋 土 口縁片	口径 - 底径 - 器高 -	砂粒少ない。 やや堅緻 褐色	やや肥厚した口縁。内外面横撫で。	
図-136 2 図版-64	縄文土器 深鉢	埋 土 体部片	口径 - 底径 - 器高 -	砂粒多い。 やや堅緻 明赤褐色	早期R.L.縄文版指文か。滑潤縄文。	
図-136 3 図版-64	縄文土器 深鉢	埋 土 口縁片	口径 - 底径 - 器高 -	砂粒少ない。 やや堅緻 表暗灰黄色 裏浅黄色	口縁肥厚し、口唇部に沈線1条。光潤縄文か。早期L.R.縄文横位・縦位指文。	
図-136 4 図版-65	土師器 杯	埋 土 1/5	口径(12.9) 底径 - 器高(4.3)	微粒砂 酸化鉛 褐色	口縁部は直線的で浅かに開き、底部との間に弱い稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はへら磨り。	

1区36号土坑

神田番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状況	法 量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備 考			
図-136 1 図版-65	土師器 高杯	埋 土 杯部2/3	口径(16.1) 底径 - 器高(5.9)	細砂粒 酸化鉛 にぶい褐色	口縁部は直線的にやや開き、底部中央に脚部への差し込み状突起をもつ。口唇部は横撫で、口縁部・底部はへら磨り。				
神田番号	図版番号	器 種	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図136-2	図版-65	棒状礫	底面直上	細粒安山岩	14.9	6.6	3.5	492.5	横円礫
図136-3	図版-65	棒状礫	底面直上	石英閃緑岩	14.2	5.3	4.9	567.5	横円礫、端部に敲打痕
図136-4	図版-65	棒状礫	底面直上	細粒安山岩	13.0	5.3	3.7	398.9	横円礫
図136-5	図版-65	棒状礫	底面直上	実質安山岩	17.2	5.4	4.5	606.9	歪角礫、端部に刺摩痕
図136-6	図版-65	棒状礫	底面直上	黒色頁岩	14.2	4.9	4.1	449.1	横円礫、銅片に刺摩痕

1区確認面

神田番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状況	法 量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備 考
図-136 1 図版-70	縄文土器 深鉢	1区AQ27 口縁片1/5	口径 - 底径 - 器高 -	砂粒少ない。 やや堅緻 にぶい黄褐色	やや内傾する口縁。口縁上端部に横位沈線1条。体部に縦位の細隆帯上に斜行刻み列。その上端と右・口唇部に円形突起。外面横撫で、内面横撫で。	1区27土坑-1・2と同一個体。
図-136 2 図版-70	縄文土器 深鉢	1区埋土 胴部破片	口径 - 底径 - 器高 -	砂粒少ない。 やや堅緻 にぶい黄褐色	体部に縦位の細隆帯上に斜行刻み列。外面横撫で、内外面横撫で。	1と同一個体
図-136 3 図版-70	縄文土器 深鉢	1区埋土 口縁片	口径 - 底径 - 器高 -	砂粒少ない。 やや堅緻 にぶい黄褐色	やや内傾する口縁。口縁上端部に横位沈線1条。内外面横撫で。	1と同一個体

2区1号土坑

神田番号	図版番号	器 種	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図137-1	図版-65	円石	底面直上	細粒安山岩	11.5	6.75	4.35	319.0	円礫素材、両面に敲打痕

2区7号土坑

遺物観察表

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考	
図一 137 1 図版-64	縄文土器 深鉢	埋土 底部破片	口径 - 底径 - 器高 -	口徑 - 底径 - 器高 -	砂粒やや多い。 やや堅緻 にぶい黄褐色	単筋L縄文縦位施文。沈線による曲線文。磨消縄文。	

2区11号土坑

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考			
図一 137 1 図版-64	縄文土器 深鉢	埋土 底部破片	口径 - 底径 - 器高 -	口徑 - 底径 - 器高 -	繊維を含む。 堅緻 明赤褐色	単筋L縄文か。	内外面ともにローリングにより磨滅		
図一 137 2 図版-64	縄文土器 深鉢	埋土 底部破片	口径 - 底径 - 器高 -	口徑 - 底径 - 器高 -	砂粒少ない。 やや堅緻 にぶい黄褐色	単筋L縦位施文。縦位平行沈線文。内面横線で。			
図一 137 3 図版-65	須恵器 長頸壺	埋土	口径 - 底径 - 器高(5.8)	口徑 - 底径 - 器高(5.8)	微粒砂 還元焰 灰色	雙輪成形。回転方向不明。内外面に自然釉の付着が見られる。			
図一 137 4 図版-65	土師器 杯	埋土 口縁一部欠	口径 15.3 底径 - 器高 3.8	口徑 15.3 底径 - 器高 3.8	細粒砂 還元焰 褐色	口縁部は内唇きみで底部は平底。口縁部は横線で、体部・底部はへら削り、内面体部には放射状暗文。			
図一 137 5 図版-65	土師器 甕	埋土 底部割部1/3	口径 - 底径(7.0) 器高(3.2)	口徑 - 底径(7.0) 器高(3.2)	細粒砂 還元焰 褐色	胴部は大きな影らみをもつ。胴部・底部はへら削り、内面胴部はへら擦で。			
採回番号 図版番号	図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図137-6	図版-65	棒状埴土	埋土	石灰閃緑岩	13.1	6.4	4.4	594.1	棒円筒
図137-7	図版-65	磁石	埋土	粗粒安山岩	14.8	7.3	5.4	651.3	棒円筒面材。中央部に敲打痕
図137-8	図版-65	磁石	埋土	粗粒安山岩	13.9	7.9	5.4	647.7	両面・1側面・両端部敲打痕

2区25号土坑

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考	
図一 137 1 図版-65	土師器 長頸壺	埋土 底部欠	口径 8.4 底径 5.7 器高 12.6	口径 8.4 底径 5.7 器高 12.6	細粒砂 還元焰 にぶい褐色	口縁部は外反し、胴部は首部が大きく膨らむ。口縁部から胴部は横線で、肩部上半はへら削り、下半はへら擦で、胴部・底部はへら削り。	

第1遺物集中出土地点

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考			
図一 139 1 図版-66	縄文土器 深鉢	1EAP21 口縁部 底部欠損	口径 - 底径 - 器高 -	口徑 - 底径 - 器高 -	砂粒を少し含む。 堅緻 にぶい黄褐色	単筋R L縄文縦位施文。平行沈線の懸垂文11単位による磨消縄文。			
図一 139 2 図版-66	縄文土器 深鉢	1EAO23 体部破片	口径 - 底径 - 器高 -	口徑 - 底径 - 器高 -	砂粒やや多い。 やや堅緻 明赤褐色	単筋R L縄文縦位施文。平行3条の沈線の懸垂文による磨消縄文。			
図一 139 3 図版-66	縄文土器 深鉢	1EAO23 体部破片	口径 - 底径 - 器高 -	口徑 - 底径 - 器高 -	砂粒やや多い。 やや堅緻 明褐色	単筋R L縄文縦位施文。沈線の懸垂文による磨消縄文。			
図一 139 4 図版-66	縄文土器 深鉢	1EAP21 体部破片	口径 - 底径 - 器高 -	口徑 - 底径 - 器高 -	砂粒少ない。 やや堅緻 赤褐色	単筋R L縄文。沈線の懸垂文による磨消縄文。			
採回番号 図版番号	図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図139-5	図版-66	削片	AP-21	黑色頁岩	4.85	8.95	0.7	42.60	一部に自然面が残る
図139-6	図版-66	使用痕のある削片	AP-21	黑色頁岩	6.5	6.8	0.7	33.09	自然面に残る削片素材
図139-7	図版-66	楔形石斧	AP-21	黑色安山岩	3.25	3.5	1.3	12.81	削片素材
図139-8	図版-66	打製石斧	AP-21	頁岩	9.4	3.6	1.4	45.31	短冊形。刃部・基部一部欠損

遺物観察表

押回番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴	備考			
図一 143 18 図版一67	縄文土器 深鉢	2区2G	口径— 底径— 器高—	— — —	砂粒少ない。 堅緻 明赤褐色	単節R L縄文土文。幅広い沈線による区画。磨面縄文。内面横線で。			
図一 143 19 図版一67	縄文土器 深鉢	2区2G	口径— 底径— 器高—	— — —	砂粒少ない。 やや堅緻 にぶい褐色	幅広い沈線による縦位の平行沈線。間に単節R L縄文縦位施文。横溝状工具による縦位の蛇行文。内面縦線で。			
図一 143 20 図版一67	縄文土器 深鉢	2区2G	口径— 底径— 器高—	— — —	砂粒やや多い。 堅緻 明赤褐色	幅広い沈線による縦位の平行沈線。間に単節R L縄文縦位施文。幅広い沈線による縦位の蛇行文。内面縦線で。			
図一 143 21 図版一67	縄文土器 深鉢	2区2G	口径— 底径— 器高—	— — —	砂粒少ない。 堅緻 褐色	縦位の2条単位の平行沈線。間に単節R L縄文縦位施文。内面横線で。			
図一 143 22 図版一67	縄文土器 深鉢	2区2G	口径— 底径— 器高—	— — —	砂粒を多く含む。 堅緻 にぶい赤褐色	縦位の平行沈線。単節R L縄文縦位施文。内面横線で。			
図一 143 23 図版一67	縄文土器 深鉢	2区2G	口径— 底径— 器高—	— — —	砂粒を多く含む。 堅緻 褐色	口縁やや内彎する。口唇部に突起か。口縁部に幅広い沈線による区画文。単節R L縄文横位施文。体部縦位の沈線。単節R L縄文縦位施文。内面横線で。			
図一 143 24 図版一67	縄文土器 深鉢	2区2G	口径— 底径— 器高—	— — —	砂粒少ない。 堅緻 褐色	幅広い沈線による区画。単節R L縄文縦位・横位・斜位施文。内面横線で。			
図一 143 25 図版一67	縄文土器 深鉢	2区2G	口径— 底径— 器高—	— — —	砂粒やや多い。 堅緻 にぶい赤褐色	幅広い沈線による縦位の区画文。間に単節R L縄文斜位施文。内面縦線で。			
図一 143 26 図版一67	縄文土器 深鉢	2区2G	口径— 底径— 器高—	— — —	砂粒少ない。 堅緻 明赤褐色	口縁やや内彎する。幅広い沈線による区画。口縁部に単節R L縄文横位施文。体部単節R L縄文斜位施文。内面横線で。			
押回番号	図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図143-27	図版一	使用痕のある剥片	AY-46	黒色安山岩	2.4	2.56	0.7	3.29	折られた剥片素材
図143-28	図版一67	楔形石器	AX-44	黒色安山岩	3.25	3.1	1.25	12.79	剥片素材
図143-29	図版一	剥片	AX-45	黒色安山岩	2.4	2.45	0.85	2.74	折られた剥片
図143-30	図版一67	剥片	AX-43	黒色頁岩	2.6	4.3	0.3	4.08	折られた剥片。一部自然面
図143-31	図版一67	楔形石器	AY-46	黒色頁岩	5.5	4.95	0.9	27.34	自然面の残る剥片素材
図143-32	図版一67	削器	AY-46	黒色頁岩	5.4	4.8	1.1	36.13	折られた剥片素材
図143-33	図版一67	剥片	AY-45	黒色頁岩	4.8	3.73	0.4	6.46	自然面の残る折られた剥片
図143-34	図版一67	削器	AY-47	灰色安山岩 (4.65)	5.2	1.05	32.24	折られた剥片素材	
図143-35	図版一67	剥片	AX-45	輝緑岩	5.7	7.25	3.4	104.53	折られた剥片
図143-36	図版一67	削器	AX-44	珪質頁岩	6.0	11.9	1.7	144.80	自然面の残る剥片素材

第3 遺物集中出土地点

押回番号	図版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図145-1	図版一68	剥片	27G	黒色頁岩	5.8	5.4	1.2	46.6	自然面の残る剥片。2と接合
図145-2	図版一68	剥片	27G	黒色頁岩	6.2	5.9	0.9	38.7	自然面の残る剥片。1と接合
図145-3	図版一68	剥片	27G	黒色頁岩	7.3	3.0	1.4	22.1	自然面の残る剥片。3・4・
図145-4	図版一68	剥片	27G	黒色頁岩	5.8	5.1	1.4	29.3	5・6・7が接合
図145-5	図版一68	剥片	27G	黒色頁岩	4.1	6.8	1.3	18.2	
図145-6	図版一68	剥片	27G	黒色頁岩	6.9	2.8	1.6	20.8	
図145-7	図版一68	剥片	27G	黒色頁岩	7.0	2.7	0.9	12.7	
図145-8	図版一68	剥片	27G	黒色頁岩	4.0	4.0	1.6	18.9	折れた剥片
図145-9	図版一68	剥片	27G	黒色頁岩	6.0	5.9	1.7	37.7	自然面の残る剥片
図145-10	図版一68	剥片	27G	珪質頁岩	5.4	3.9	2.0	26.2	自然面の残る剥片
図145-11	図版一68	剥片	27G	黒色頁岩	15.0	13.0	3.4	586.4	自然面の残る剥片
図147-12	図版一68	打製石筭	27G	粗粒安山岩	13.5	7.2	2.0	191.5	自然面が残る
図147-13	図版一68	剥片	27G	珪質頁岩	5.2	3.4	1.2	16.7	折れた剥片
図147-14	図版一68	剥片	36G	黒色頁岩	3.0	2.9	0.7	4.3	自然面の残る剥片
図147-15	図版一68	剥片	26G	頁岩	5.1	7.0	0.9	24.2	自然面の残る剥片
図147-16	図版一68	剥片	26G	黒色頁岩	10.4	9.5	2.6	204.0	自然面の残る折れた剥片
図147-17	図版一68	剥片	26G	粗粒安山岩	6.7	9.7	1.2	92.0	折れた自然面の残る剥片

遺物集中出土地点、1区沢、遺構外出土遺物

1区1号沢

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考			
図-149 1 図版-68	縄文土器 鉢	埋土 胴部-体 部破片	口径- 底径- 器高(14.2)	- - - 砂粒少ない。 やや堅緻 にぶい黄色	単筋L R横位施文。沈線による曲線文。内面横撫で。	3と同一個体			
図-149 2 図版-68	縄文土器 深鉢	埋土 体部破片	口径- 底径- 器高	- - - 砂粒少ない。 やや堅緻 にぶい黄色	内外面撫で。				
図-149 3 図版-68	縄文土器 鉢	埋土 体部破片	口径- 底径- 器高	- - - 砂粒少ない。 やや堅緻 浅黄色	1に同じ。	1と同一個体			
図-149 4 図版-68	縄文土器 深鉢	埋土 体部破片	口径- 底径- 器高	- - - 砂粒少ない。 やや堅緻 にぶい黄褐色	単筋L R横位施文。磨消縄文。縦位区画文。内面縦撫で。				
採回番号	図版番号	器種	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
図149-5	図版-68	打製石筴	埋土上層	黒色頁岩	(7.0)	6.25	1.5	88.29	分蘗形、刃部に磨痕、平削
図149-6	図版-68	凹石	埋土	粗粒安山岩	11.6	12.8	5.7	724.9	扁平な円錐形、一面に凹部

遺構外出土 縄文

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴	備考
図-150 1 図版-70	縄文土器 深鉢	2区24住 口縁部小 破片	口径- 底径- 器高	- - - 砂粒・繊維を含む。 堅緻 鮮赤褐色	無筋L縄文と無筋R縄文で菱形構成小。	内外面磨減著しく、ローリングを受ける
図-150 2 図版-70	縄文土器 深鉢	2区14住 埋土 体部破片	口径- 底径- 器高	- - - 繊維を多く含む。 堅緻 褐色	無筋L縄文。	内外面磨減著しく、ローリングを受ける
図-150 3 図版-70	縄文土器 深鉢	1区埋土 上層 体部破片	口径- 底径- 器高	- - - 砂粒・繊維を含む。 やや軟質 にぶい赤褐色	無筋L、0段3条R Lの羽状縄文。	
図-150 4 図版-70	縄文土器 深鉢	1区3住 埋土 体部破片	口径- 底径- 器高	- - - 白色岩片砂粒多く含む。 堅緻 明赤褐色	半截竹管による新突列、押し引きによる副歯文、斜行縄文、L R横位施文。	ローリングによる磨減
図-150 5 図版-70	縄文土器 深鉢	2区26住 埋土 体部破片	口径- 底径- 器高	- - - 細砂粒をやや多く含む。 堅緻 淡黄色	上部単筋L R縄文横位施文、中央部縦位沈線1条、下部歯数4の脚歯状工具による条痕文。	
図-150 6 図版-70	縄文土器 深鉢	1区14住 埋土 口縁部片	口径- 底径- 器高	- - - 細砂粒を少し含む。 堅緻 にぶい黄褐色	外面無筋L横位施文。	
図-150 7 図版-70	縄文土器 深鉢	1区14住 埋土 体部破片	口径- 底径- 器高	- - - 結晶片岩の岩片を含む。 堅緻 赤褐色	半截竹管による副歯文。	
図-150 8 図版-70	縄文土器 深鉢	1区17住 床下埋土 体部破片	口径- 底径- 器高	- - - 細砂粒を少し含む植物質(藁)の痕跡。堅緻 明赤褐色	体部下下部で底部に近い、外面縦位平行沈線による区画文。内外面縦撫で。	
図-150 9 図版-70	縄文土器 深鉢	1区18住 埋土 体部破片	口径- 底径- 器高	- - - 砂粒やや多い。 やや堅緻 にぶい赤褐色	単筋L R縄文縦位施文による斜行縄文小、しかし筋が不明で無筋Lの可能性もある。沈線による蛇行および直線の縦重文。	
図-150 10 図版-70	縄文土器 深鉢	1区19住 埋土 体部破片	口径- 底径- 器高	- - - 細砂粒をやや多く含む。 堅緻 にぶい褐色	磨消縄文手法、横位区画?縦位蛇行文、地文単筋L R縄文縦位施文、内面縦撫で。	
図-150 11 図版-70	縄文土器 深鉢	2区7 G 埋土 体部破片	口径- 底径- 器高	- - - 砂粒やや多い。 やや堅緻 褐色	縦位L R横位施文、単筋L R縄文横位施文。内面撫で。	
図-150 12 図版-70	縄文土器 深鉢?	2区18 G 埋土 体部破片	口径- 底径- 器高	- - - 砂粒多い。 堅緻 赤褐色	単筋L R縄文縦位施文。内面撫で。	

遺物観察表

種別番号 図版番号	種別	出土位置 遺存状況	法	量	胎土 焼成色 調	製作技法等の特徴	備考
図一 150 13 図版一70	縄文土器 鉢?	2区24- 26G 体部片	口径 底径 器高	— — —	砂粒少ない。 やや堅緻 淡黄色	上部に隆起帯か口縁部。単節LR縄文横位施文。	
図一 150 14 図版一70	縄文土器 深鉢?	2区24- 26G 口縁部片	口径 底径 器高	— — —	砂粒少ない。 やや堅緻 にぶい褐色	内外面横撫で。	
図一 151 15 図版一70	縄文土器 深鉢	1区15住 埋土 口縁部片	口径 底径 器高	— — —	砂粒少ない。 堅緻 灰黄色	沈痾による区画文、内部に縦位交互斜突列。外面上 縁部横撫で・体部縦撫で。内面横撫で。	15-21同一個 体か。
図一 151 16 図版一70	縄文土器 深鉢	1区14住 埋土 体部破片	口径 底径 器高	— — —	砂粒少ない。 堅緻 にぶい黄褐色	沈痾による区画文、内部に縦位交互斜突列。外面縦 撫で。内面横撫で。	
図一 151 17 図版一70	縄文土器 深鉢	1区埋土 体部破片	口径 底径 器高	— — —	砂粒少ない。 堅緻 にぶい黄褐色	16に同じ。	
図一 151 18 図版一70	縄文土器 深鉢	1区AQ 29G 体部破片	口径 底径 器高	— — —	砂粒少ない。 堅緻 淡黄色	16に同じ。	
図一 151 19 図版一70	縄文土器 深鉢	1区AQ 29G 体部破片	口径 底径 器高	— — —	砂粒少ない。 堅緻 にぶい黄褐色	16に同じ。	
図一 151 20 図版一70	縄文土器 深鉢	1区AQ 30G 体部破片	口径 底径 器高	— — —	砂粒少ない。 堅緻 表淡黄色 裏黒色	16に同じ。	
図一 151 21 図版一70	縄文土器 深鉢	1区15住 埋土 底部内1/4	口径 底径(13.0) 器高	— — —	砂粒少ない。 堅緻 淡黄色	内外面横撫で。	
図一 151 22 図版一70	縄文土器 深鉢	1区3ト レンテ 体部破片	口径 底径 器高	— — —	砂粒少ない。 やや堅緻 灰色	沈痾による幾何学(三角形)文の区画文施文後、単 節LR縄文を充填。内面横撫で。	
図一 151 23 図版一70	縄文土器 深鉢	2区30住 埋土 体部破片	口径 底径 器高	— — —	細砂粒を多く含む。 堅緻 にぶい黄褐色	沈痾により三角形状幾何学文施文。単節LR縄文。 内面横撫で。	24・25・27と 同一個体か。
図一 151 24 図版一70	縄文土器 深鉢	2区12住 体部破片	口径 底径 器高	— — —	細砂粒をやや多く含む。 堅緻 にぶい黄褐色	沈痾により三角形状幾何学文施文後、単節LR縄文 を充填。内面横撫で。	23・25・27と 同一個体か。
図一 151 25 図版一70	縄文土器 深鉢	2区12住 埋土 体部破片	口径 底径 器高	— — —	細砂粒をやや多く含む。 堅緻 にぶい黄褐色	沈痾により三角形状幾何学文施文後、単節LR縄文 を充填。内面横撫で。	23・24・27と 同一個体か。
図一 151 26 図版一70	縄文土器 深鉢	2区12住 埋土 体部破片	口径 底径 器高	— — —	細砂粒を少し含む。 堅緻 淡黄色	沈痾により幾何学文施文後、単節LR縄文の充填。 内面横撫で。	
図一 151 27 図版一70	縄文土器 深鉢	2区11住 埋土 体部破片	口径 底径 器高	— — —	細砂粒をやや多く含む。 堅緻 淡黄色	沈痾により三角形状幾何学文施文後、単節LR縄文 を充填。内面横撫で。	23・24・25と 同一個体か。
図一 151 28 図版一70	縄文土器 深鉢	2区11住 埋土 体部破片	口径 底径 器高	— — —	砂粒を少し含む。 堅緻 にぶい黄褐色	沈痾により幾何学文施文後、単節LR縄文を充填。 下部に屈曲部有り。内面縦撫で。	
図一 151 29 図版一70	縄文土器 深鉢	2区11住 埋土 体部破片	口径 底径 器高	— — —	砂粒を少し含む。 堅緻 にぶい黄褐色	沈痾により幾何学文施文後、単節LR縄文を充填。 下部に屈曲部有り。内面横撫で。	
図一 151 30 図版一70	縄文土器 深鉢	2区1号 地割埋土 体部破片	口径 底径 器高	— — —	細砂粒を少し含む。 やや堅緻 淡黄色	沈痾による区画文施文後、単節LR縄文を充填。	
図一 151 31 図版一70	縄文土器 深鉢	2区12住 埋土 体部破片	口径 底径 器高	— — —	砂粒を少し含む。 堅緻 にぶい黄褐色	沈痾による幾何学文施文後、単節LR縄文の充填。 内面横撫で。	33・35・36と 同一個体か。
図一 151 32 図版一70	縄文土器 深鉢	2区12住 埋土 体部破片	口径 底径 器高	— — —	砂粒を少し含む。 堅緻 黒色	沈痾による幾何学文施文後、縄文(原形不明)の充 填。内面横撫で。	

棟号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土・焼成色調	製作技法等の特徴	備考
図-151 33 図版-70	縄文土器 深鉢	2区12住 堀土 体部破片	口径 底径 器高	- - -	砂粒を少し含む。 - 堅緻 - 灰青褐色	沈線による幾何学文施文後、単筋L縄文の充填。 31・33・36と同一個体か。
図-151 34 図版-70	縄文土器 深鉢	2区12住 堀土 体部破片	口径 底径 器高	- - -	砂粒を少し含む。 - 堅緻 - 灰青褐色	沈線による幾何学文施文後、単筋L縄文の充填。 内面横線で。
図-151 35 図版-70	縄文土器 深鉢	2区12住 堀土 体部破片	口径 底径 器高	- - -	砂粒を少し含む。 - 堅緻 - 灰青褐色	沈線による幾何学文施文後、単筋L縄文の充填。 内面横線で。
図-151 36 図版-70	縄文土器 深鉢	2区12住 堀土 体部破片	口径 底径 器高	- - -	砂粒を少し含む。 - 堅緻 - 灰青褐色	沈線による幾何学文施文後、単筋L縄文の充填。 内面横線で。
図-151 37 図版-70	縄文土器 深鉢	2区12住 堀土 口縁部片	口径 底径 器高	- - -	細砂粒を含む。 - 堅緻 - 褐色	口縁部に細帯彫付。帯部上に斜み目列、縁部下に沈線施文か。内面1条沈線。
図-151 38 図版-70	縄文土器 深鉢	1区2住 堀土 口縁部片	口径 底径 器高	- - -	細砂粒を少し含む。 - 堅緻 - 灰青褐色	無筋L横位施文。口縁上端部内面に横位沈線1条。 内面横線で。
図-151 39 図版-70	縄文土器 深鉢	1区9住 堀土 体部破片	口径 底径 器高	- - -	砂粒をやや多く含む。 - 堅緻 - 暗褐色	体部幾何学文。内面横線で。
図-151 40 図版-70	縄文土器 深鉢	2区12住 堀土 口縁部片	口径 底径 器高	- - -	細砂粒を含む。 - 堅緻 - 灰青褐色	体部充塞縄文手法による文様抽出。R L縦位施文か。 口縁上端部内面に横位沈線1条。内面横線で。
図-151 41 図版-70	縄文土器 深鉢	2区12住 堀土 口縁部片	口径 底径 器高	- - -	砂粒・黄色透明粒を多 く含む。やや堅緻 - 淡黄色	単筋L縄文横位施文。内面横線で。
図-151 42 図版-70	縄文土器 深鉢	2区12住 堀土 体部破片	口径 底径 器高	- - -	細砂粒を少し含む。 - 堅緻 - 淡黄色	沈線による波杉文。内面横線で。
図-151 43 図版-70	縄文土器 深鉢	2区18住 堀土 体部破片	口径 底径 器高	- - -	砂粒をやや多く含む。 - やや堅緻 - 灰青褐色	横位帯部1条、その上に斜み目列。内面横線で。
図-151 44 図版-70	縄文土器 鉢	1区AO -27C 口縁部片	口径 底径 器高	- - -	砂粒をやや多し。 - 堅緻 - 灰青褐色	突起部、中央孔内外面貫通。首孔3。口唇部沈線1 条、内外面横線で。
図-151 45 図版-70	縄文土器 深鉢	1区試掘 トレンチ 小破片	口径 底径 器高	- - -	砂粒少ない。 - やや堅緻 - 明赤褐色	沈線による区画文施文後、単筋R L縄文の充填か。 内面横線で。
図-151 46 図版-70	縄文土器 深鉢	2区6住 堀土 口縁部片	口径 底径 器高	- - -	細砂粒を少し含む。 - 堅緻 - 灰青褐色	単筋L縄文横位施文。内面横線で。
図-151 47 図版-70	縄文土器 深鉢	2区19住 堀土 口縁部片	口径 底径 器高	- - -	細砂粒を含む。 - 堅緻 - 黒褐色	沈線による斜格子文。左下りの後に右下り施文。口 縁部内面に平行沈線1条。内面横線で。
図-151 48 図版-70	縄文土器 鉢	2区26住 堀土 口縁部片	口径 底径 器高	- - -	砂粒をやや含む。 - 堅緻 - 灰青褐色	口縁上端部に平行沈線1条。内外面横線で。

遺構外出土 遺物

棟号 図版番号	種別 器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴	
図152-1	図版-71	石磯	1区17住埋土	黒色頁岩	2.75	1.5	0.4	1.34	有茎、基部欠損
図152-2	図版-71	石磯	1区11住埋土	黒色頁岩	(2.35)	(1.65)	0.4	1.44	有茎、先端部・基部一部欠損
図152-3	図版-71	石磯	1区17住埋土	黒色安山岩	(3.3)	(2.4)	0.5	3.96	凹茎、先端部・基部一部欠損
図152-4	図版-71	石磯	2区13住床下	チャート	(3.5)	(2.0)	0.75	2.72	有茎
図152-5	図版-71	石磯	1区17住埋土	黒色安山岩	(2.85)	1.15	0.5	1.48	先端部欠損
図152-6	図版-71	打製石斧	2区26住埋土	黒色頁岩	11.9	4.45	1.55	87.59	短菱形、基部に自然面が残る
図152-7	図版-71	打製石斧	1区13住埋土	黒色安山岩	(8.0)	3.7	1.6	66.09	短菱形、自然面残、刃部欠損

遺物観察表

神田番号	国版番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量	製作技術、形態等の特徴
国152-8	国版-71	打製石斧	1区2住埋土	黒色頁岩	(7.1)	7.2	1.6	91.33	分銅形、半割
国152-9	国版-71	打製石斧	2区15住埋土	黒色頁岩	(7.6)	6.5	0.9	104.78	分銅形、半割
国152-10	国版-71	削器	1区9住埋土	黒色頁岩	(6.0)	10.2	1.2	83.46	自然面の残る製片素材
国152-11	国版-71	削器	1区AQ-25	網紋安山岩	(7.65)	8.9	1.6	130.18	自然面の残る製片素材
国152-12	国版-71	削器	1区AO-25	黒色頁岩	5.7	5.85	1.2	40.53	自然面の残る製片素材
国152-13	国版-71	削器	1区14住掘方	黒色頁岩	4.0	4.6	1.6	39.10	自然面の残る製片素材
国152-14	国版-71	削器	2区18住埋土	黒色頁岩	5.0	4.5	1.3	25.70	自然面の残る製片素材
国152-15	国版-71	削器	1区AO-23	頁岩	5.7	4.6	0.75	23.05	製片素材
国152-16	国版-71	削器	1区17住埋土	頁岩	6.25	5.35	0.8	30.82	自然面の残る製片素材
国152-17	国版-71	削器	1区	黒色頁岩	7.3	4.1	1.2	42.75	自然面の残る製片素材
国153-18	国版-71	削片	2区6G	頁岩	5.9	2.9	0.45	6.85	自然面の残る製片
国153-19	国版-71	削片	2区6G	黒色頁岩	2.2	1.6	0.35	0.74	自然面が残る
国153-20	国版-71	削器	2区8G	黒色頁岩	10.5	5.45	1.7	89.12	自然面の残る製片素材
国153-21	国版-71	削片	2区12・18住	黒色頁岩	4.6	4.85	0.9	17.28	自然面の残る製片素材、分割
国153-22	国版-71	削片	2区15G	黒色頁岩	4.2	6.4	1.0	22.17	折られた削片
国153-23	国版-71	砥石	1区	流紋岩	3.2	2.35	1.6	19.72	四隅面研磨、両端欠損
神田番号 国版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成色調	製作技法等の特徴				備考
国-153 24 国版-72	須恵器 杯	2区24住 埋土・G 底高1/2欠	口径(12.6) 底径 7.0 器高 3.5	網粒砂 還元焰 灰色	轆轤成形。回転方向右廻り。底部回転糸切り後凹底部に回転へら削り。				
国-153 25 国版-72	須恵器 長頸瓶	2区15G 底高1/3	口径 - 底径(6.9) 器高(2.0)	網粒砂 還元焰 灰色	轆轤成形。回転方向右廻りか。底部は回転糸切り。(平城宮 壹G)				
国-153 26 国版-72	土師器 杯	1区埋土 上層 1/2	口径(10.2) 底径 - 器高(4.0)	網粒砂 酸化焰 ぶい黄褐色	口縁部は直立し、底部との間に稜をもち、体部は脚みをもち開く。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。				
国-153 27 国版-72	土師器 杯	2区24- 26G 1/2	口径(12.3) 底径 - 器高(3.1)	網粒砂 酸化焰 赤褐色	口縁部は内彎し、底部は平底。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。				
国-153 28 国版-72	土師器 杯	2区24- 26G 1/3	口径(10.3) 底径 - 器高 2.8	網粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は直立し、体部との間に稜をもち、底部は平底。口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。				
国-153 29 国版-72	土師器 杯	2区18- LG深掘 口径1/3	口径(11.3) 底径 - 器高(3.2)	網粒砂 酸化焰 褐色	口縁部は外反し、底部との間に稜をもち、底部は丸底きみ。口縁部は横撫で、底部はへら削り。				
国-153 30 国版-72	土師器 杯	2区埋土 上層 1/3	口径(12.0) 底径 - 器高(2.9)	網粒砂 酸化焰 赤褐色	口縁部は僅かに外反し、底部は平底。口縁部は横撫で、体部は無調整、底部はへら削り。				
国-153 31 国版-72	土師器 壺	2区グリ ッド 口径1/6	口径(10.1) 底径 - 器高(5.3)	微粒砂 還元焰軟質 褐色	口縁部は直立し、胴部は球状を呈す。口縁部は横撫で、胴部はへら削り。				
国-153 32 国版-72	土師器 短頸壺	1区埋土 上層 頸部片	口径 - 底径 - 器高(3.4)	微粒砂 酸化焰 ぶい褐色	頸部に輪痕み痕。胴部はへら削り、内面はへら撫で。				
国-153 33 国版-72	土師器 短頸壺	1区AR 28G 口径片	口径 11.9 底径 - 器高(2.6)	微粒砂 酸化焰 赤色	頸部に輪痕み痕。口縁部は横撫で。				
国-153 34 国版-72	土師器 台付壺	1区AR 27・28G 頸台部欠	口径 - 底径 5.4 器高(16.7)	微粒砂 還元焰 ぶい黄褐色	胴部上位に最大径をもち、胴部は縦方向刷毛目、胴部は斜めの刷毛目、内面胴部はへら撫で。				
国-153 35 国版-72	土師器 台付壺	1区AQ 脚部1/8	口径 - 底径(6.1) 器高(5.7)	網粒砂 酸化焰 ぶい褐色	脚部は壺の底部までを成形し、胴部と接合。外面の整形は不鮮明、内面はへら撫で。				
国-153 36 国版-72	土師器 高杯	2区遺構 外 脚部欠	口径 - 底径 - 器高(6.5)	微粒砂 還元焰 ぶい黄褐色	脚部はやや膨らみをもち、胴部は大きく開く。外面は縦方向へら削り、内面はへら撫で。				
国-154 37 国版-72	埴輪 円筒埴輪 破片	2区2住 埋土	口径 - 底径 - 器高 -	網粒砂 還元焰 褐色	縦刷毛、尖部部分割離。				

遺構外出土遺物

種別番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴			備考	
図-154 38 図版-72	土製品 土鉢	1区AQ 30G 完形	長さ 4.3 幅 1.5 厚さ 1.5	微粒砂 酸化焰 灰黄色	外面撫で。				
種別番号 図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴			長さ	幅	厚さ	備考
図154-39	図版-72 鉄器・不明	1区	平面形は隅丸方形か長方形。重量感あり。			2.3	2.7	0.5	
図154-40	図版-72 鉄器・不明	1区	現状を呈す。断面形は長方形。			—	—	0.2	直径3.2cm
図154-41	図版-72 鉄器・釘	不明	断面正方形。先端部は緩やかに細くなる。完形。			8.3	0.6	0.5	
図154-42	図版-72 鉄器・釘	2区	断面正方形。上半部欠損。先端部起曲。			(4.5)	0.6	0.4	
図154-43	図版-72 鉄器火打鑢	2区	万部緩やかに湾曲。頂部は欠損するが一孔を推定。			7.7	(2.6)	0.6	
種別番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土 焼成 色調	製作技法等の特徴			備考	
図-154 44 図版-72	軟質陶器 擂鉢	1区AQ 23G 破片	口径 — 底径 — 器高(3.9)	粗砂粒 還元焰 橙色	内面に使用時のものと思われる擦痕あり。外面撫で。				
図-154 45 図版-72	軟質陶器 擂鉢	2区28G 破片	口径 — 底径 — 器高(4.8)	細粒砂 還元焰 灰色	内外面撫で。				
図-154 46 図版-72	軟質陶器 擂鉢	1区埋土 上層 破片	口径 — 上層 底径 — 器高 —	細粒砂 還元焰 にぶい黄色	内面に使用時のものと思われる擦痕あり。外面刺磨。				
図-154 47 図版-72	軟質陶器 擂鉢	1区埋土 上層 破片	口径 — 底径 — 器高 —	細粒砂 還元焰 灰白色	外面横撫で。内面横撫で。				
図-154 48 図版-72	軟質陶器 不明	1区試掘 埋土 破片	口径 — 底径 — 器高 —	細粒砂 還元焰 灰色	軟質陶器の破片の周囲を削って円形にしたものが、さらに割れて半分になったものである。				
図-154 49 図版-72	軟質陶器 不明	1区埋土 破片	口径 — 底径(8.0) 器高(3.1)	細粒砂 還元焰 橙色	立上り部分と底部は別作り。小片のため遺物の全体像は不明である。				
図-154 50 図版-72	陶器 壺	1区排水 坑 口縁欠	口径 — 底径(22.8) 器高(36.5)	細粒砂 還元焰 赤褐色	壺上成形叩き締めを行い内面全体に撫でを施す。外面は丁寧な撫で、内外面に刷毛を使って刷毛を施している。底部は離れ砂。				

報 告 書 抄 録

フリガナ	イマイハクサン
書名	今井白山遺跡
副書名	一般国道50号(東前橋拡幅)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第1集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第146集
編著者名	飯島義雄
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	群馬県勢多郡北橋村下箱田784-2
発行年	西暦1993年3月26日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
イマイハクサン 今井白山	マサシマシイマイハクサン 前橋市今井町 字白山	102016		36°21'59"	139°8'55"	19900130 ↓ 19910331 19901113 ↓ 19910204	950㎡ 750㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
今井白山	住居	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代	敷石住居跡 土坑 竪穴住居跡	1軒 1基 24軒	縄文時代中期土器、石器 弥生時代後期土器 古墳時代前期～後期 土師器、須恵器 奈良時代土師器、須恵器、鉄器 平安時代土師器、須恵器、灰釉 陶器、鉄器、鉄製品	818(弘仁9)年 に発生か?

写 真 图 版

図版1 航空写真



1. 調査区と航空写真① (1952年2月6日米極東空軍撮影)



2. 調査区と航空写真② (1964年5月27日建設省国土地理院撮影)

図版2 遺跡全景、1区23号住居



1. 調査区遠景 (南より)



2. 1区全景 (上空より)



3. 1区全景 (西より)



4. 2区全景 (北より)



5. 2区東半部 (上空より)



6. 2区西半部 (上空より)



7. 1区23号住居全景 (南より)



8. 1区23号住居 (部分南より)

図版3 1区1号・2号住居



1. 1区1号住居全景 (西より)



2. 1区1号住居カマド (西より)



3. 1区1号住居廻り方全景 (西より)



4. 1区1号住居カマド廻り方 (西より)



5. 1区2号住居全景 (西より)



6. 1区2号住居遺物出土状況 (西より)



7. 1区2号住居遺物出土状況 (南より)



8. 1区2号住居遺物出土状況 (部分南より)

図版 4 1区2号・3号住居



1. 1区2号住居遺物出土状況 (部分西より)



2. 1区2号住居遺物出土状況 (部分南より)



3. 1区2号住居遺物出土状況 (下部西より)



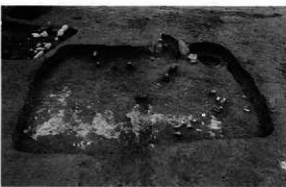
4. 1区2号住居掘り方全貌 (西より)



5. 1区3号住居全貌 (西より)



6. 1区3号住居カマド (西より)



7. 1区3号住居遺物出土状況 (西より)

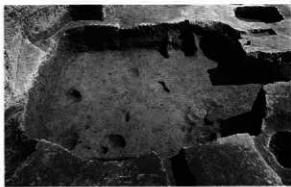


8. 1区3号住居掘り方全貌 (西より)

図版5 1区3～5号住居



1. 1区3号住居カマド掘り方(西より)



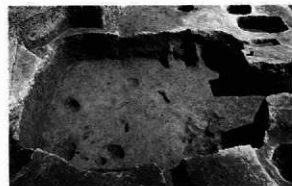
2. 1区4号住居全景(西より)



3. 1区4号住居カマド(西より)



4. 1区4号住居カマド掘り方(西より)



5. 1区4号住居掘り方全景(西より)



6. 1区5号住居全景(南より)



7. 1区5号住居カマド(南より)



8. 1区5号住居全景(南より)

図版 6 1区6～8号住居



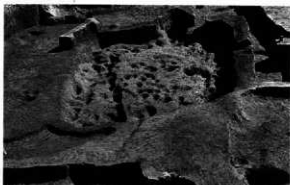
1. 1区6号住居全景 (西より)



2. 1区6号住居西マド (西より)



3. 1区6号住居全景・12号住居 (南より)



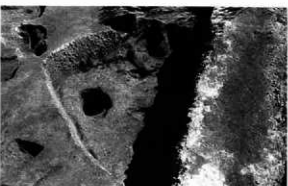
4. 1区6号住居掘り方全景 (西より)



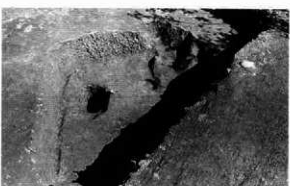
5. 1区7号住居全景 (西より)



6. 1区7号住居掘り方全景 (西より)



7. 1区8号住居全景 (西より)



8. 1区8号住居遺物出土状況 (西より)

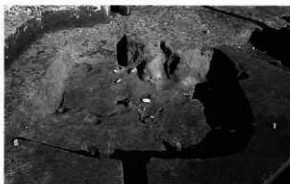
図版7 1区8号・9号住居



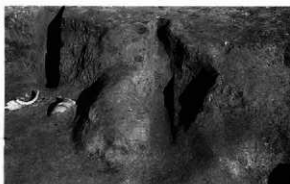
1. 1区8号住居掘り方全景 (西より)



2. 1区8号住居カマド掘り方 (西より)



3. 1区9号住居全景 (西より)



4. 1区9号住居カマド (西より)



5. 1区9号住居埋土断面 (北より)



6. 1区9号住居埋土断面 (東より)



7. 1区9号住居東壁袋状土境 (西より)

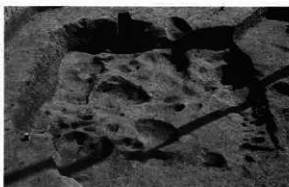


8. 1区9号住居東壁袋状土境 (北西より)

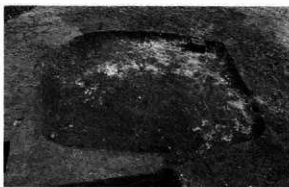
図版 8 1区9-12号住居



1. 1区9号住居東壁状土坑埋土断面 (北より)



2. 1区9号住居掘り方全景 (西より)



3. 1区10号住居全景 (西より)



4. 1区11号住居全景 (西より)



5. 1区11号住居カマド (西より)



6. 1区11号住居カマド (部分)



7. 1区11号住居掘り方全景 (西より)

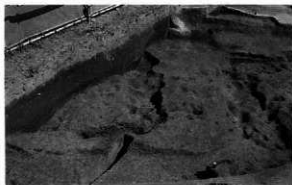


8. 1区12号住居全景 (南より)

図版9 1区12号・13号住居



1. 1区12号住居遺物出土状況 (南より)



2. 1区12号住居掘り方全景 (西より)



3. 1区12号住居埋土断面 (南より)



4. 1区12号住居地割れ (噴砂)：aと断面①



5. 1区12号住居地割れ (噴砂)：aと断面②



6. 1区12号住居地割れ (噴砂)：aと断面③

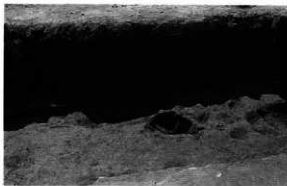


7. 1区13号住居全景 (西より)



8. 1区13号住居掘り方全景 (西より)

図版10 1区13～15号住居



1. 1区13号住居埋土断面 (北より)



2. 1区14号住居全景 (南より)



3. 1区14号住居遺物出土状況 (東より)



4. 1区14号住居掘り方全景 (東より)



5. 1区15号住居全景 (西より)



6. 1区15号住居全景 (南より)



7. 1区15号住居カマド (西より)



8. 1区15号住居カマド掘り方 (西より)

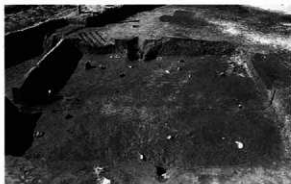
図版11 1区16-18号住居



1. 1区16号住居全景(西より)



2. 1区16号住居廻り方(西より)



3. 1区17号住居全景(東より)



4. 1区17号住居カマド(東より)



5. 1区17号住居廻り方全景(東より)



6. 1区17号住居カマド廻り方(東より)



7. 1区18号住居全景(西より)



8. 1区18号住居カマド(西より)

図版12 1区18号・19号住居



1. 1区18号住居掘り方全景（西より）



2. 1区18号住居カマド掘り方（西より）



3. 1区19号住居全景（北より）



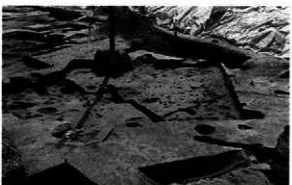
4. 1区19号住居全景（西より）



5. 1区19号住居埋土断面（西より）



6. 1区19号住居遺物出土状況（西より）



7. 1区19号住居掘り方全景（北より）



8. 1区19号住居カマド掘り方（北より）

図版13 1区19号住居



1. 1区19号住居北西隅柱穴埋土断面（西より）



2. 1区19号住居北西隅柱穴内遺物出土状況（西より）



3. 1区19号住居沈降部と亀裂の遺景（北より）



4. 1区19号住居沈降部埋土断面



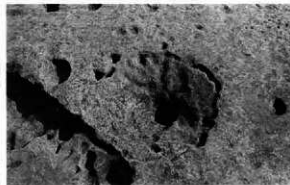
5. 1区19号住居
沈降部と地割れb
（北より）



6. 1区19号住居
地割れb
（北より）



7. 1区19号住居亀裂断面（北より）



8. 1区19号住居沈降部（北より）

図版14 1区19号住居



1. 1区19号住居地割れ (噴砂) : b (南より)



2. 1区19号住居地割れ (噴砂) : b 断面 (南より)



3. 1区19号住居地割れ (噴砂) : bと沈降部の断面① (南より)



4. 1区19号住居地割れ (噴砂) : bと沈降部の断面② (南より)



5. 1区19号住居地割れ (噴砂) : bの断面①



6. 1区19号住居地割れ (噴砂) : bの断面②



7. 1区19号住居沈降部の断面①



8. 1区19号住居沈降部の断面②

図版15 1区19～22号住居



1. 1区19号住居地割れと沈降部 (南より)



2. 1区20号住居 (南より)



3. 1区20号住居全景 (西より)



4. 1区20号住居廻り方全景 (西より)



5. 1区20号住居カマド廻り方 (西より)



6. 1区21号住居全景 (南より)



7. 1区21号住居廻り方全景 (南より)



8. 1区22号住居全景 (南より)

図版16 2区1～3号住居



1. 2区1号住居全景 (北より)



2. 2区1号住居土製紡錘車出土状況 (北より)



3. 2区2号住居幅り方全景 (東より)



4. 2区2号住居全景 (南より)



5. 2区2号住居遺物出土状況 (南より)



6. 2区3号住居全景 (西より)



7. 2区3号住居
カマド(西より)



8. 2区3号住居
カマド廻り方
(西より)

図版17 2区4～8号住居



1. 2区4号住居全景 (西より)



2. 2区4号住居カマド廻り方 (西より)



3. 2区5号住居全景 (南より)



4. 2区5号住居カマド廻り方 (西より)



5. 2区6号住居全景 (西より)



6. 2区6号住居廻り方全景 (西より)



7. 2区7号住居全景 (北より)



8. 2区8号住居全景 (南より)

図版18 2区8-11号住居



1. 2区8号住居カマド (南より)



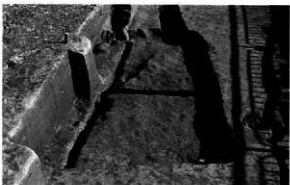
2. 2区8号住居カマド廻り方 (南より)



3. 2区9号住居全景 (南より)



4. 2区9号住居廻り方全景 (西より)



5. 2区10号住居全景 (西より)



6. 2区10号住居廻り方全景 (西より)



7. 2区10号住居カマド (西より)



8. 2区11号住居全景 (西より)

図版19 2区12-15号住居



1. 2区12号住居全景（西より）



2. 2区12号住居カマド（西より）



3. 2区13号住居全景（北より）



4. 2区13号住居遺物出土状況（南より）



5. 2区14号住居全景（左部・北より）



6. 2区15号住居全景（東より）



7. 2区15号住居カマド（東より）



8. 2区15号住居掘り方全景（南より）

図版20 2区15・17-19号住居



1. 2区15号住居噴砂(西より)



2. 2区17号住居全景(右部・西より)



3. 2区17号住居カマド(西より)



4. 2区17号住居廻り方全景(西より)



5. 2区17号住居カマド廻り方(西より)



6. 2区18号住居全景(西より)



7. 2区18号住居カマド(西より)



8. 2区19号住居全景(東より)

図版21 2区19～23号住居



1. 2区19号住居カマド (東より)



2. 2区20号住居遺物出土状況 (西より)



3. 2区20号住居カマド (西より)



4. 2区21号住居全景 (西より)



5. 2区21号住居廻り方全景 (西より)



6. 2区22号住居全景 (西より)



7. 2区22号住居廻り方全景 (西より)



8. 2区23号住居全景 (北より)

図版22 2区23～26号住居



1. 2区23号住居遺物出土状況(北より)



2. 2区24号住居全景(北より)



3. 2区24号住居遺物出土状況(東より)



4. 2区25号住居全景(南より)



5. 2区25号住居カマド(西より)



6. 2区25号住居廻り方全景(西より)



7. 2区25号住居カマド廻り方(西より)



8. 2区26号住居全景(西より)

図版23 2区26～29・31号住居



1. 2区26号住居カマド(西より)



2. 2区27号住居全景(北より)



3. 2区27号住居カマド(北より)



4. 2区28号住居全景(北より)



5. 2区29号住居カマド(西より)



6. 2区29号住居カマド廻り方(西より)



7. 2区31号住居全景(南より)



8. 2区31号住居全景(南より)

図版24 2区溝、2区井戸、2区23号土坑



1. 2区1号溝全景 (南より)



2. 2区3号溝全景 (西より)



3. 2区4号溝全景 (南より)



4. 2区1号井戸遺物出土状況



5. 2区1号井戸全景



6. 2区2号井戸全景



7. 2区23号土坑遺物出土状況



8. 2区23号土坑全景

图版25 2区24·1区1~3·5号土坑



1. 2区24号土坑遗物出土状况①



2. 2区24号土坑遗物出土状况②



3. 2区24号土坑遗物出土状况③



4. 2区24号土坑遗物出土状况④



5. 1区1号土坑



6. 1区2号土坑



7. 1区3号土坑



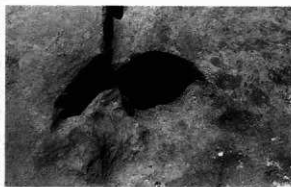
8. 1区5号土坑

图版26

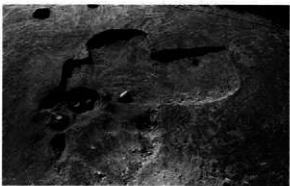
1区6-8·27·28·35·36号土坑



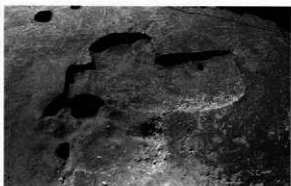
1. 1区6号土坑遗物出土状况



2. 1区6号土坑



3. 1区6·7·8号土坑遗物出土状况



4. 1区6·7·8号土坑



5. 1区27号土坑



6. 1区28号土坑



7. 1区35·36号土坑遗物出土状况



8. 1区35号土坑



1. 1区36号土坑遗物出土状况



2. 2区1号土坑



3. 2区2号土坑



4. 2区3·4号土坑遗物出土状况



5. 2区8号土坑



6. 2区9号土坑

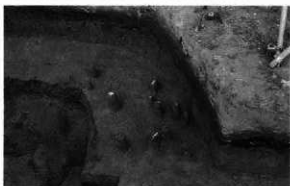


7. 2区12号土坑



8. 2区25号土坑遗物出土状况

図版28 第1・2遺物集中出土地点



1. 縄文時代 第1遺物集中出土地点① (1区)



2. 縄文時代 第1遺物集中出土地点② (1区)



3. 縄文時代 第1遺物集中出土地点③ (1区)



4. 縄文時代 第1遺物集中出土地点④ (1区)



5. 縄文時代 第1遺物集中出土地点⑤ (1区)



6. 縄文時代 第2遺物集中出土地点① (2区)



7. 縄文時代 第2遺物集中出土地点② (2区)



8. 縄文時代 第2遺物集中出土地点③ (2区)

图版29 第2·3遺物集中出土地点



1. 縄文時代 第2遺物集中出土地点④ (2区)



2. 縄文時代 第2遺物集中出土地点⑤ (2区)



3. 縄文時代 第2遺物集中出土地点⑥ (2区)



4. 縄文時代 第2遺物集中出土地点⑦ (2区)



5. 縄文時代 第3遺物集中出土地点① (2区)



6. 縄文時代 第3遺物集中出土地点② (2区)



7. 縄文時代 第3遺物集中出土地点③ (2区)



8. 縄文時代 第3遺物集中出土地点④ (2区)

図版30 1区沢、2区グリッド土層断面



1. 1区1号沢全景 (南東より)



2. 1区1号沢全景 (南より)



3. 2区2グリッド土層断面 (南より)



4. 2区4グリッド土層断面 (南より)



5. 2区6グリッド土層断面 (南より)



6. 2区8グリッド土層断面 (南より)



7. 2区10グリッド土層断面 (南より)



8. 2区12グリッド土層断面 (南より)

図版31 2区グリッド土層断面



1. 2区14グリッド土層断面 (南より)



2. 2区16グリッド土層断面 (南より)



3. 2区18グリッド土層断面 (南より)



4. 2区20グリッド土層断面 (南より)



5. 2区22グリッド土層断面 (南より)



6. 2区24グリッド土層断面 (南より)



7. 2区26グリッド土層断面 (南より)



8. 2区28グリッド土層断面 (南より)

图版32 2区地割れ



1. 地割れ：k (2区・東より)



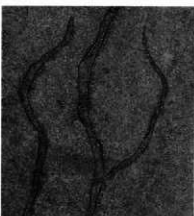
2. 地割れ：k (2区・西より)



3. 地割れ：k (2区・西より)



4. 地割れ：k (2区・東より)



5. 地割れ
(噴砂)：l
(2区・東より)



6. 地割れ
(噴砂)：m
(2区・西より)



7. 地割れ
(噴砂)：
k・l・m
(2区・東より)



8. 地割れ
(噴砂)：
k・l・m
(2区・西より)

図版33 2区地割れ



1. 地割れ
(噴砂):
k・i・j
(2区・西より)



2. 地割れ
(噴砂):
h・i・j
(2区・東より)



3. 地割れ (噴砂): 8① (2区・南より)



4. 地割れ (噴砂): 8② (2区・南より)



5. 地割れ
(噴砂): f①
(2区・南より)



6. 地割れ
(噴砂): f②
(2区・南より)



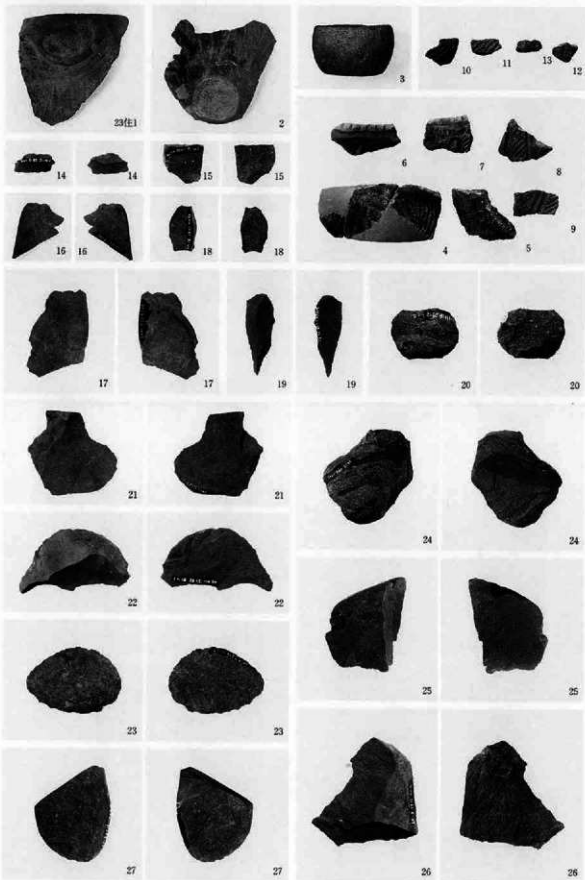
7. 地割れ
(噴砂): f③
(2区・南より)



8. 地割れ
(噴砂): f④
(2区・南より)

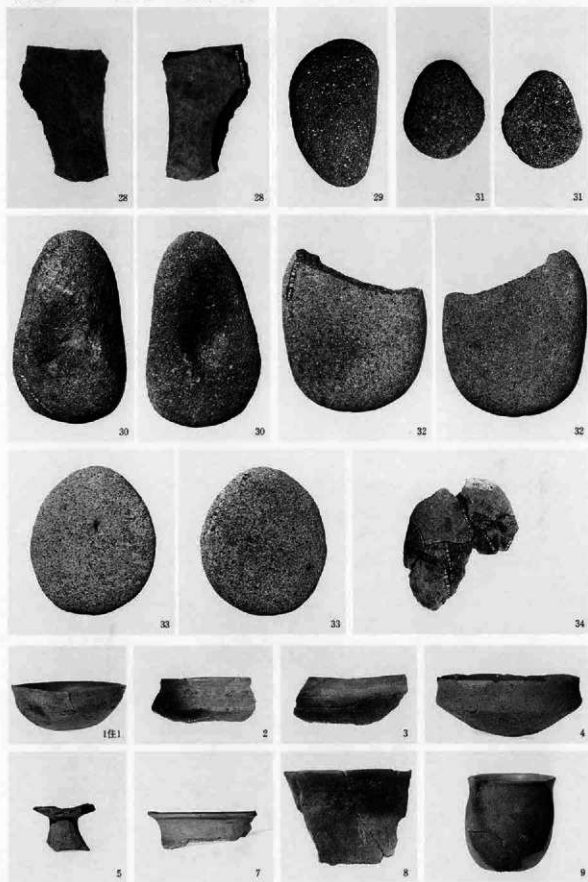
图版34

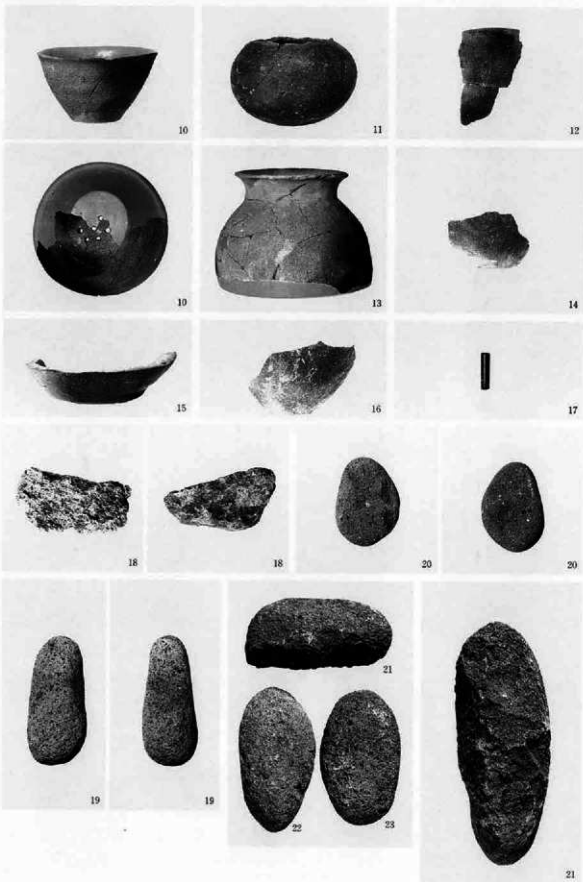
1区23号住居出土遺物



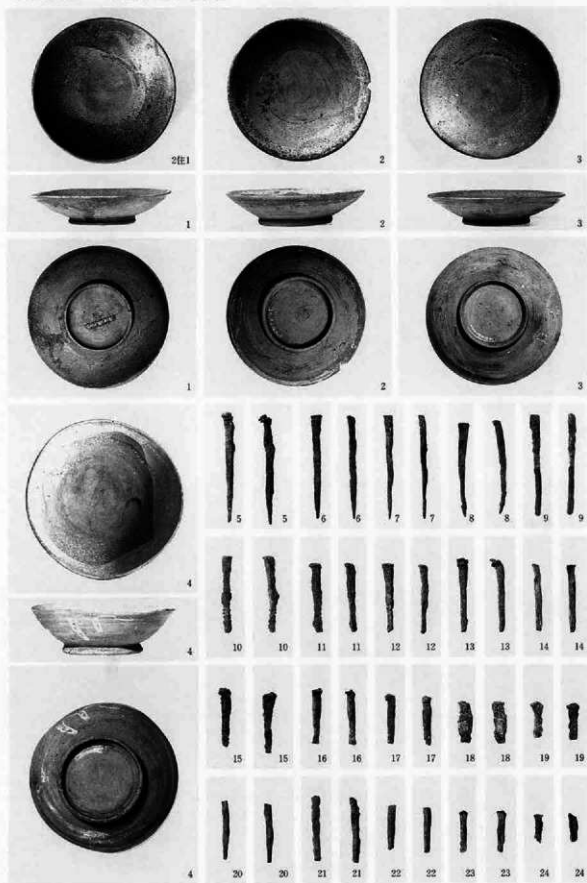
图版35

1区23号·1号住居出土遺物



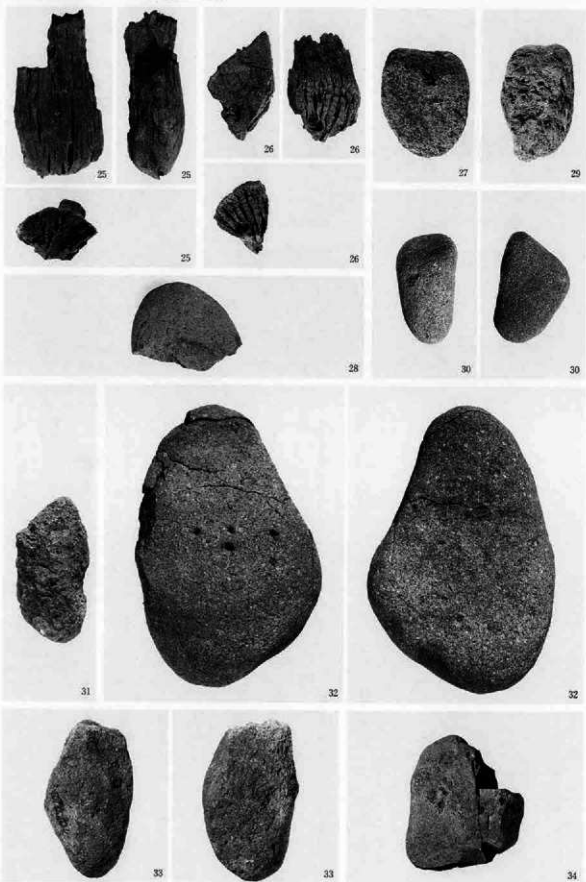


图版37 1区2号住居出土遗物

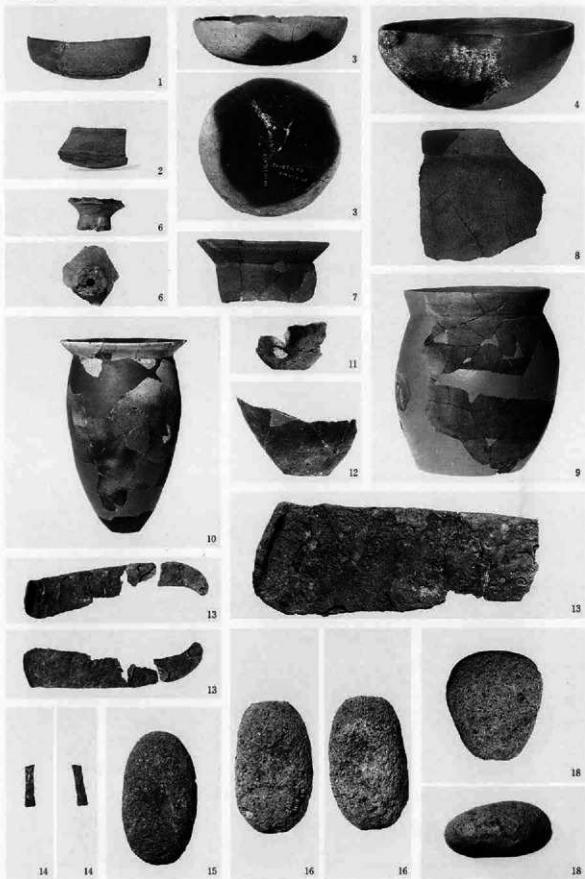


图版38

1区2号住居出土遺物

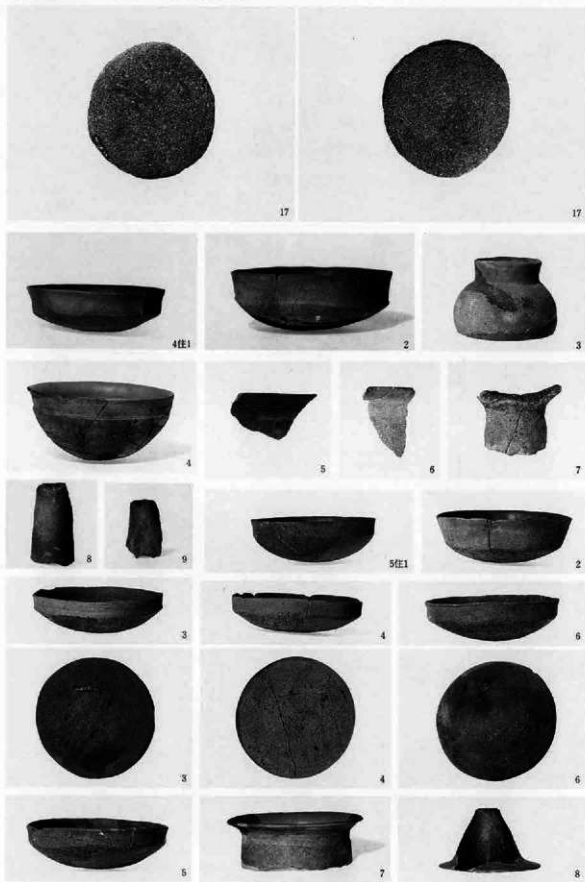


图版39 1区3号住居出土遗物

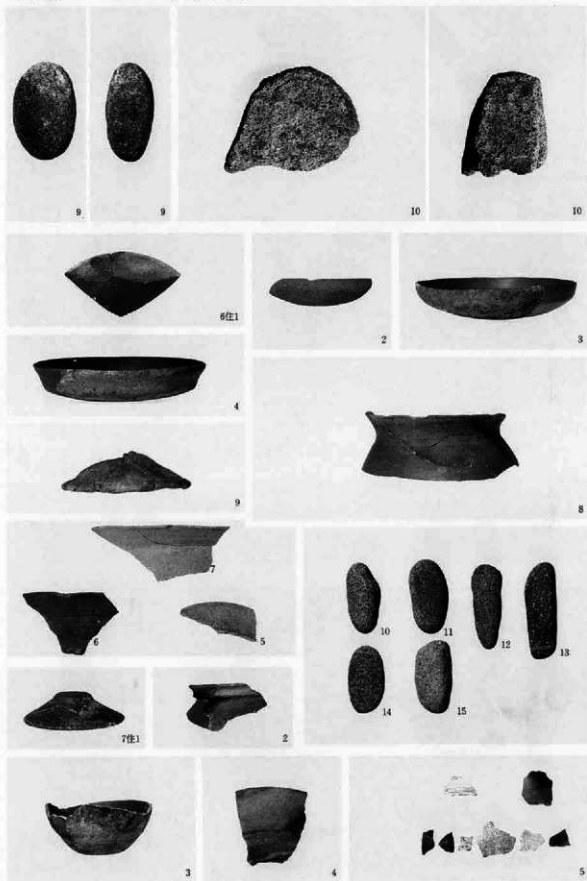


图版40

1区3-5号住居出土物



图版41 1区5-7号住居出土遺物

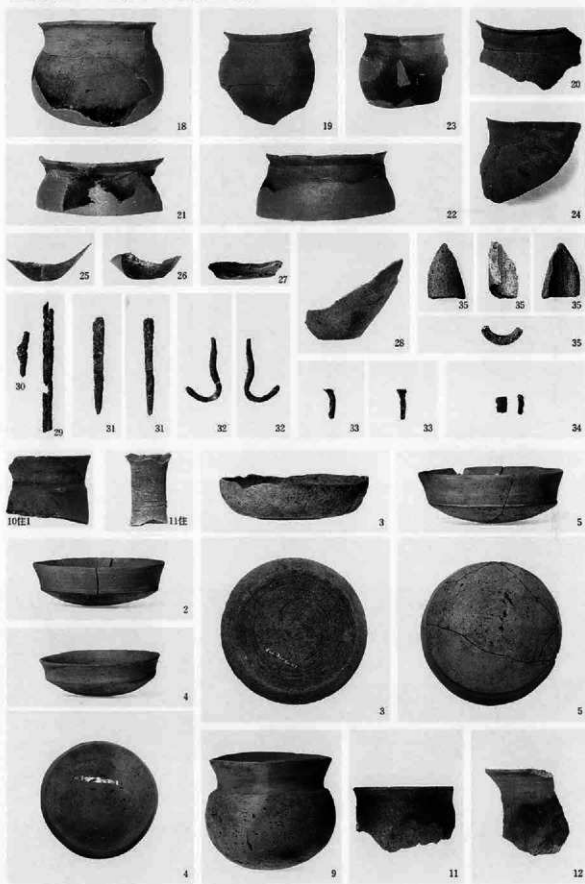


图版42

1区8号·9号住居出土遺物

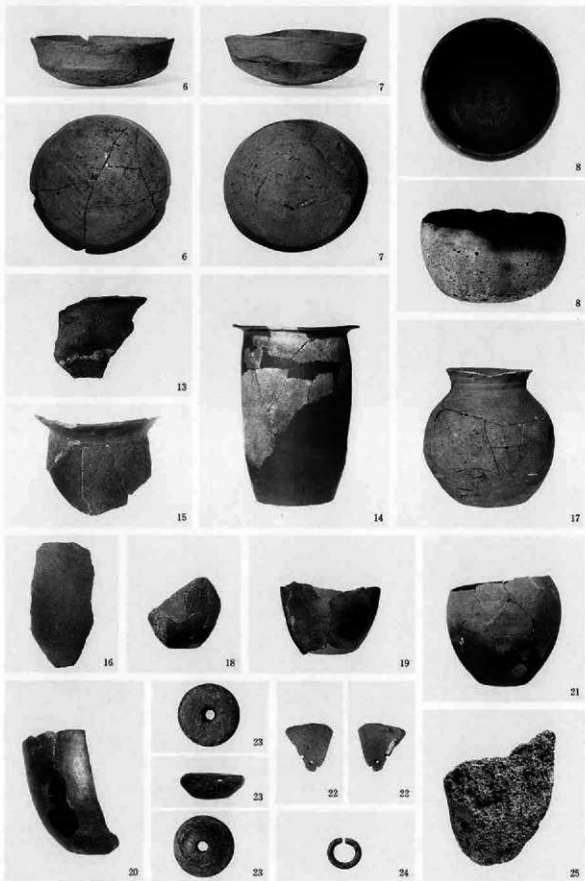


図版43 1区9号・10号住居出土遺物

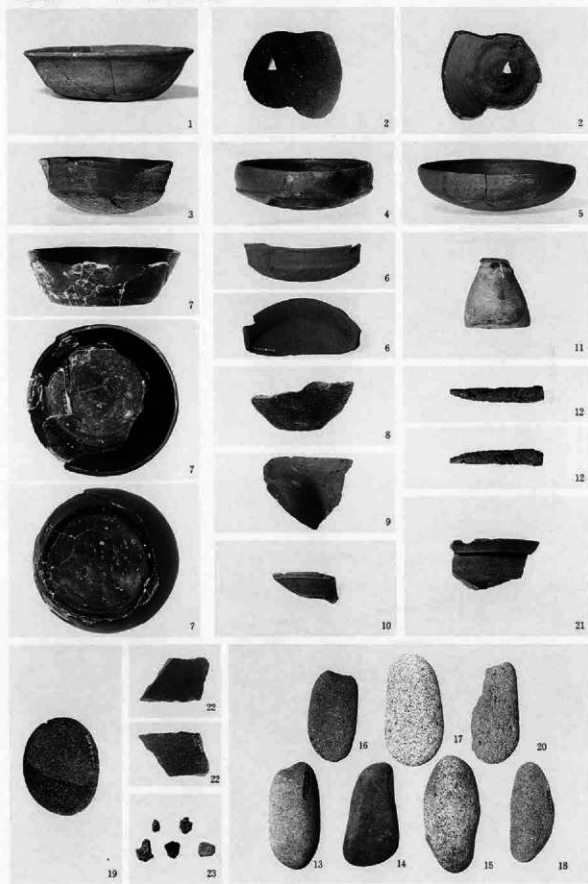


图版44

1区11号住居出土遗物

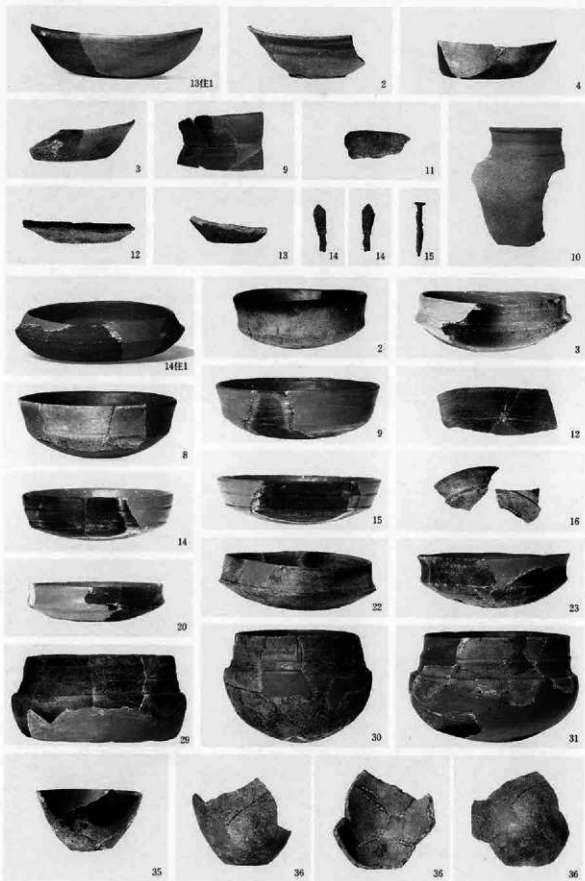


图版45 1区12号住居出土遗物

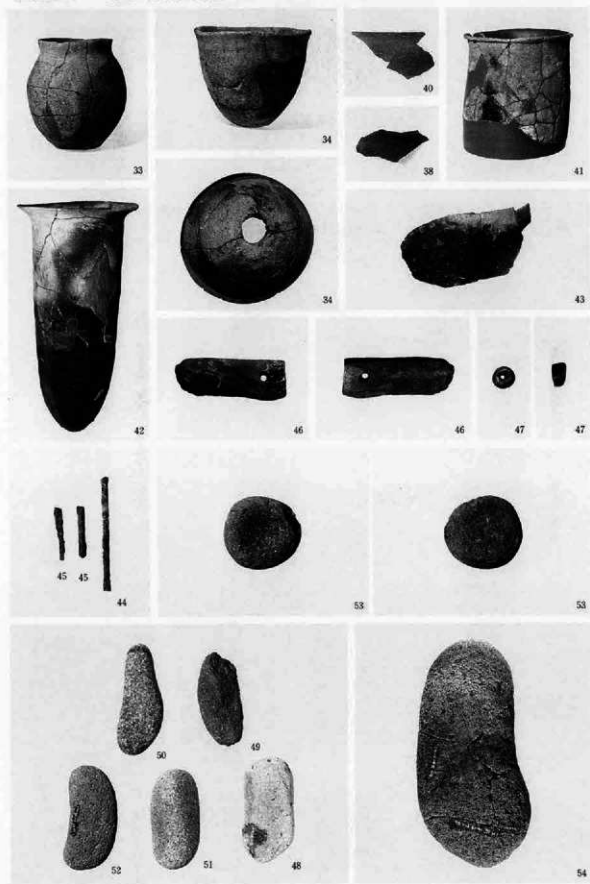


图版46

1区13号·14号住居出土遺物



图版47 1区14号住居出土土遺物



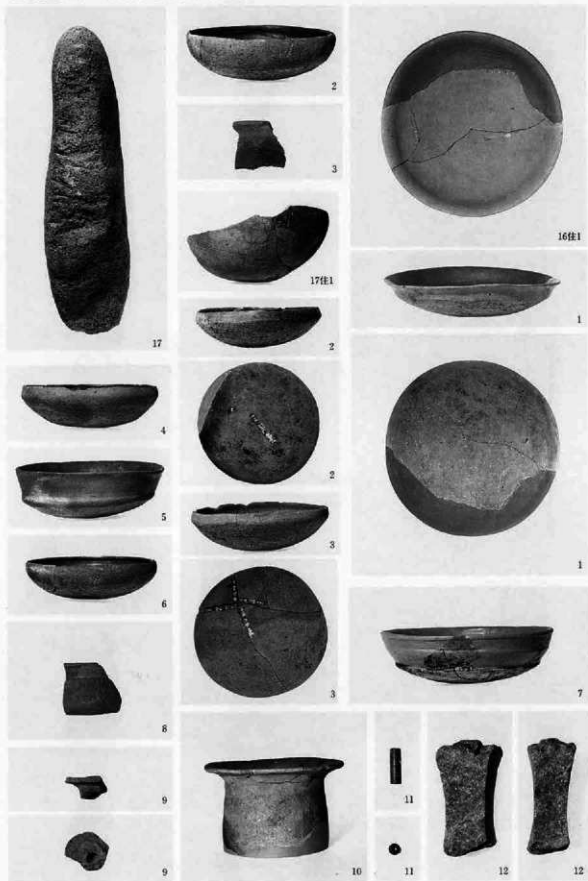
图版48

1区15号住居出土遺物



图版49

1区15—17号住居出土遗物



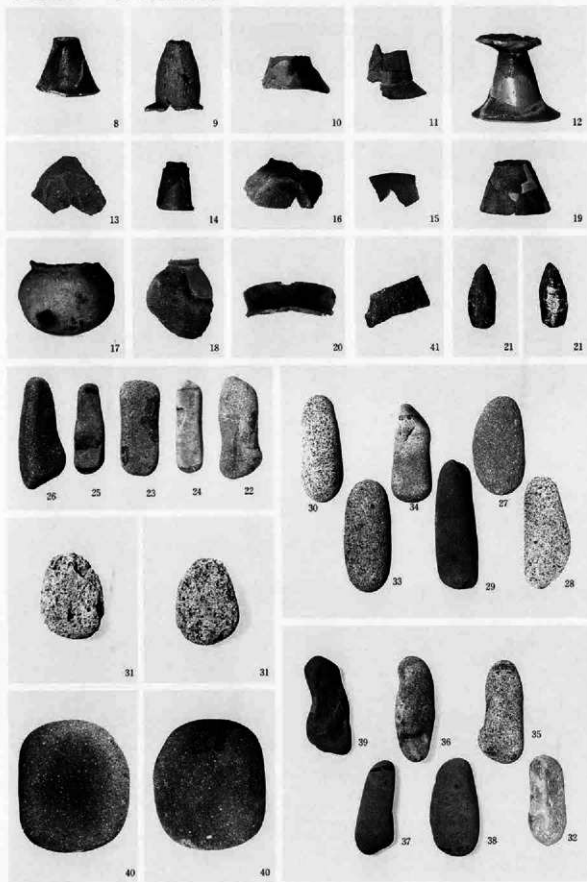
图版50

1区17-19号住居出土遗物



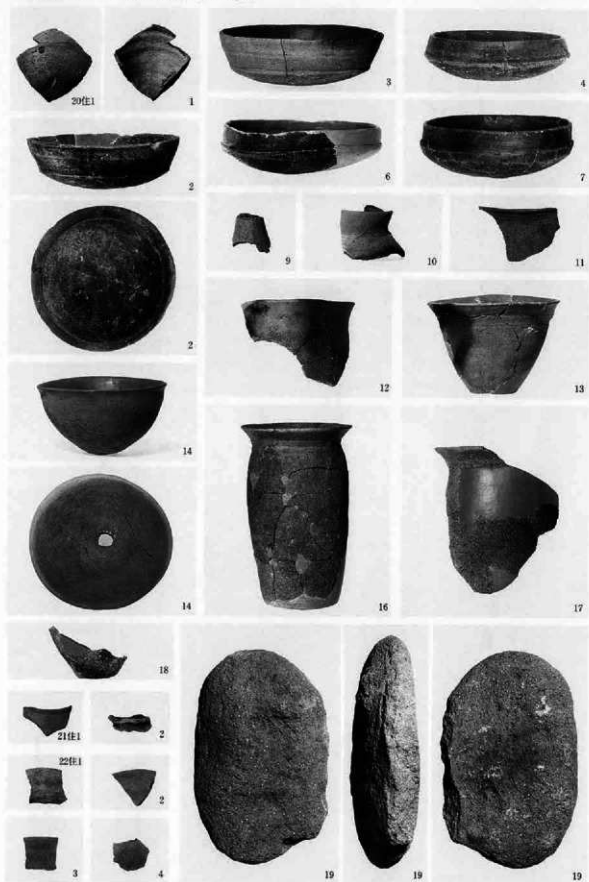
图版51

1区19号住居出土遗物

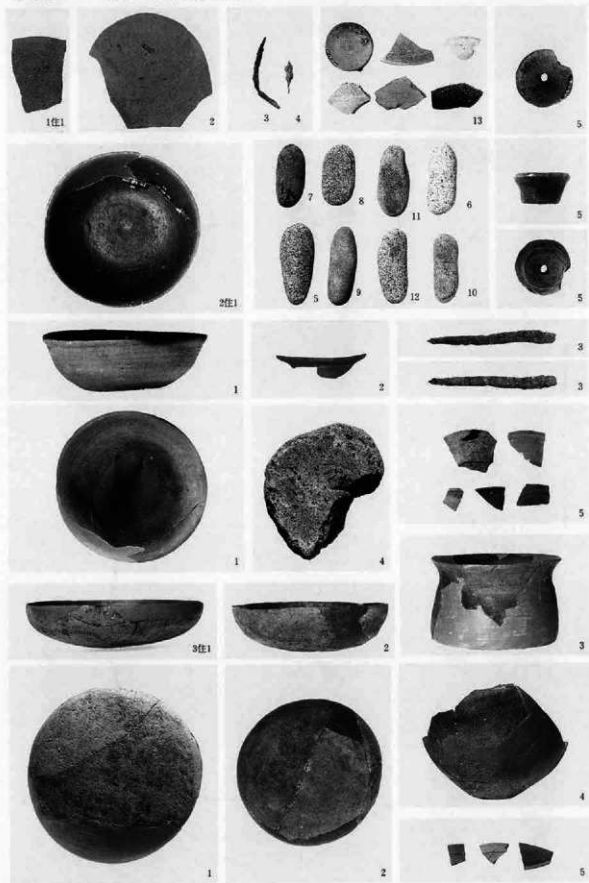


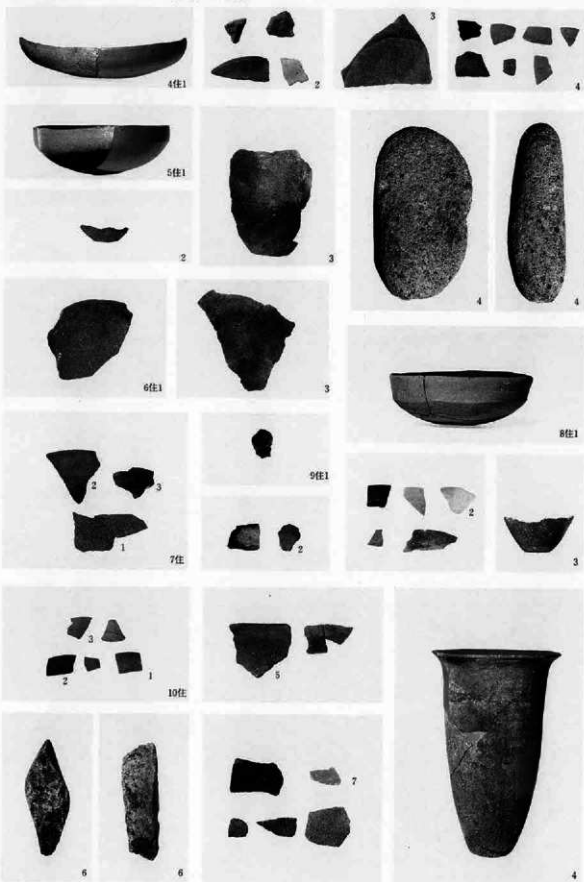
图版52

1区20-22号住居出土遗物



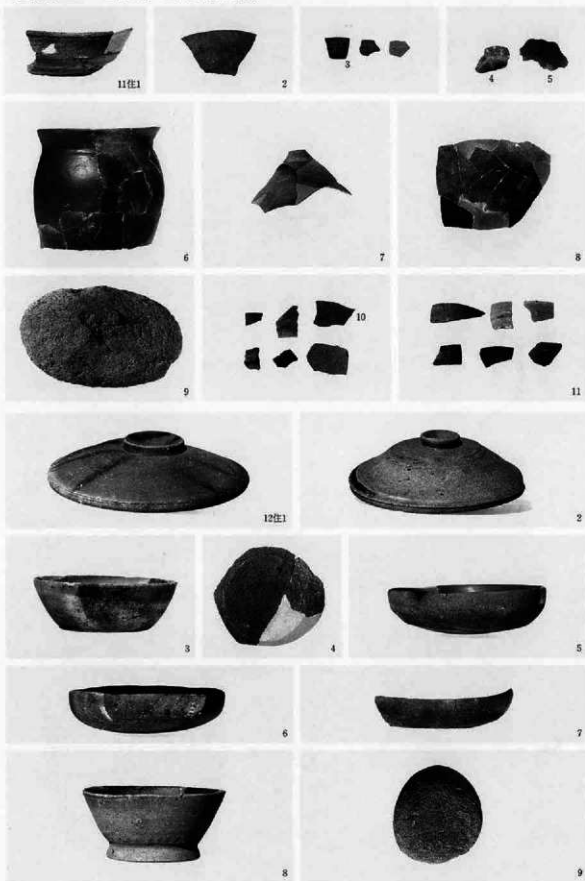
图版53 2区1-3号住居出土遗物





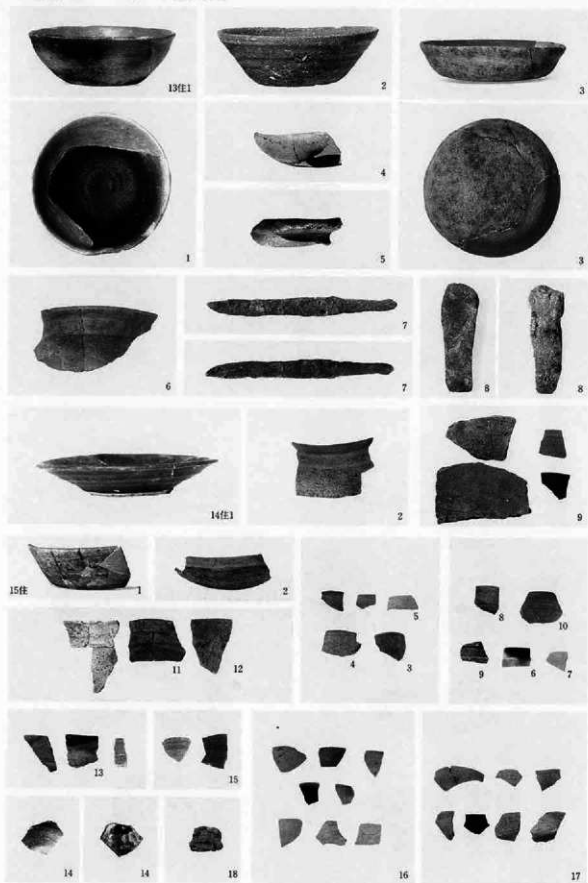
图版55

2区11号·12号住居出土遺物

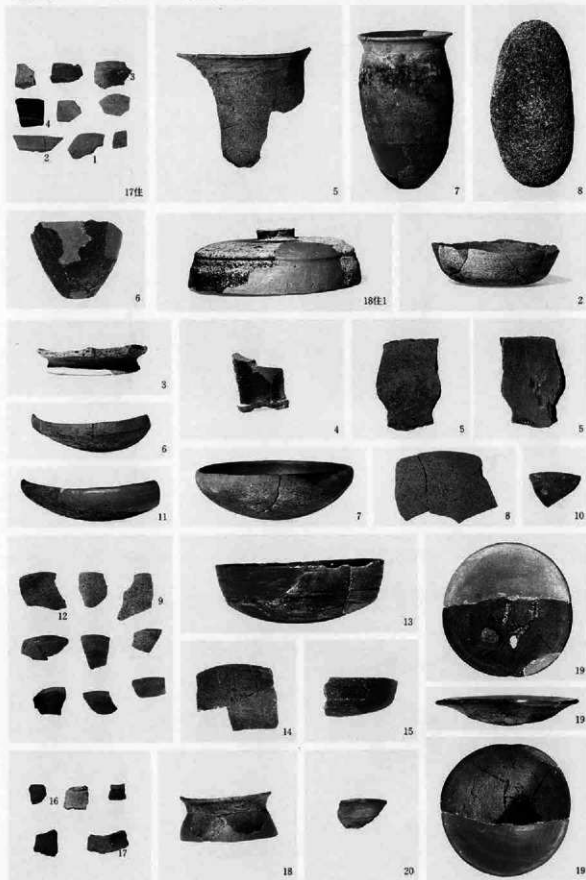


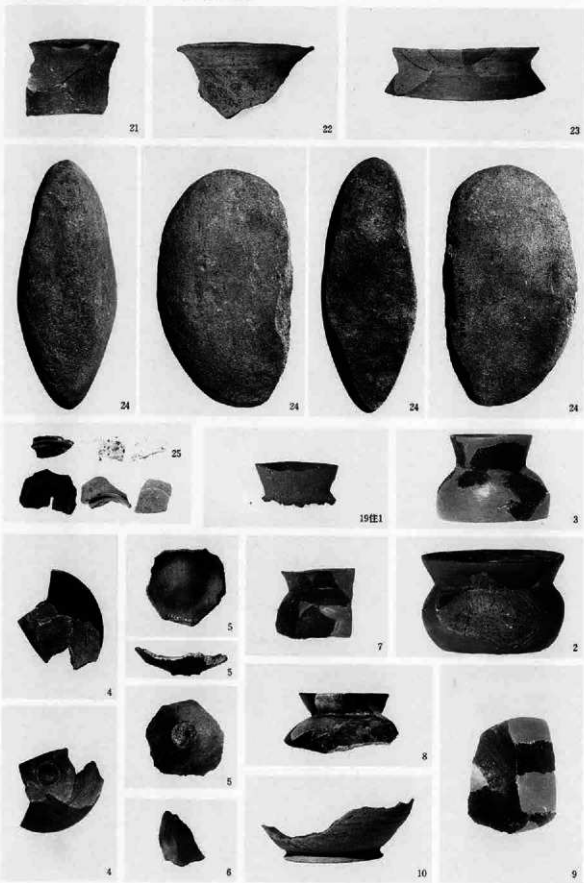
图版56

2区13-15号出土物



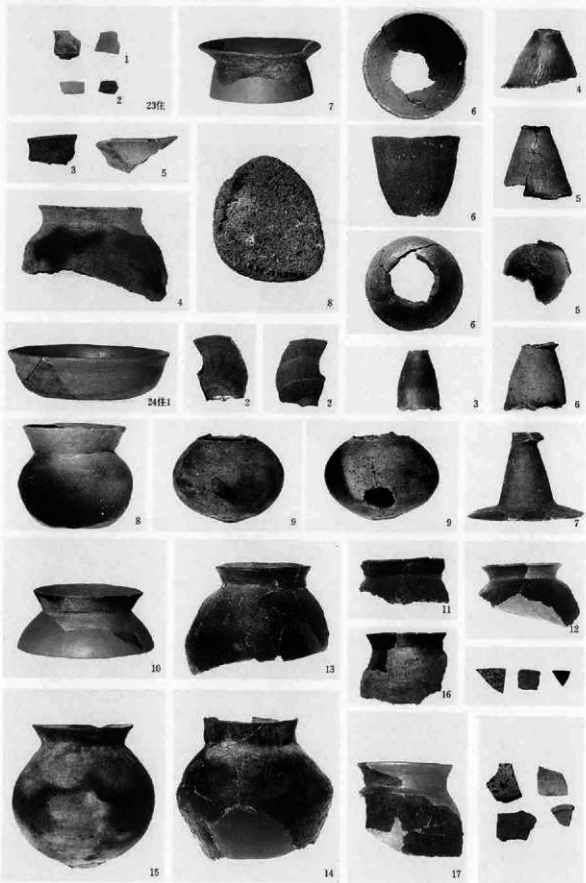
图版57 2区17号·18号住居出土遺物





图版60

2区23号·24号住居出土遺物



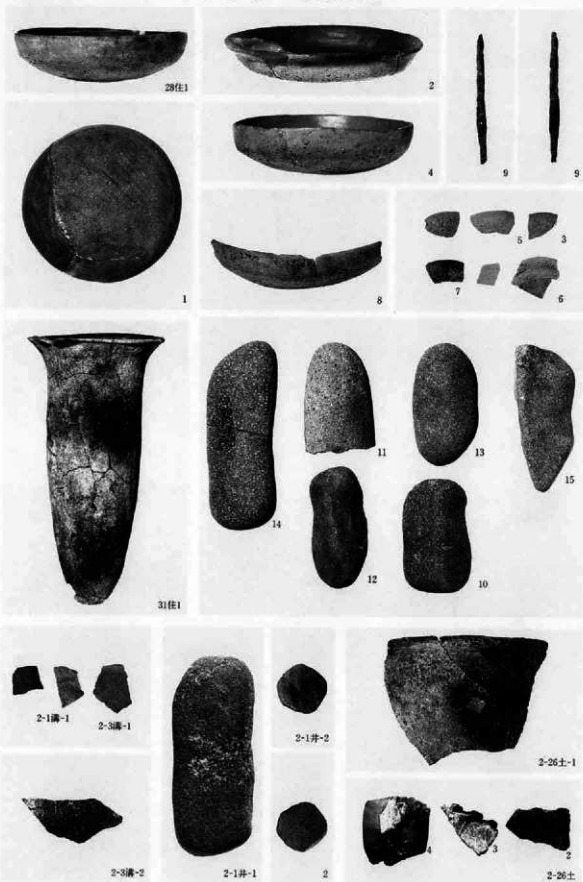
图版61

2区25-27号住居出土遺物



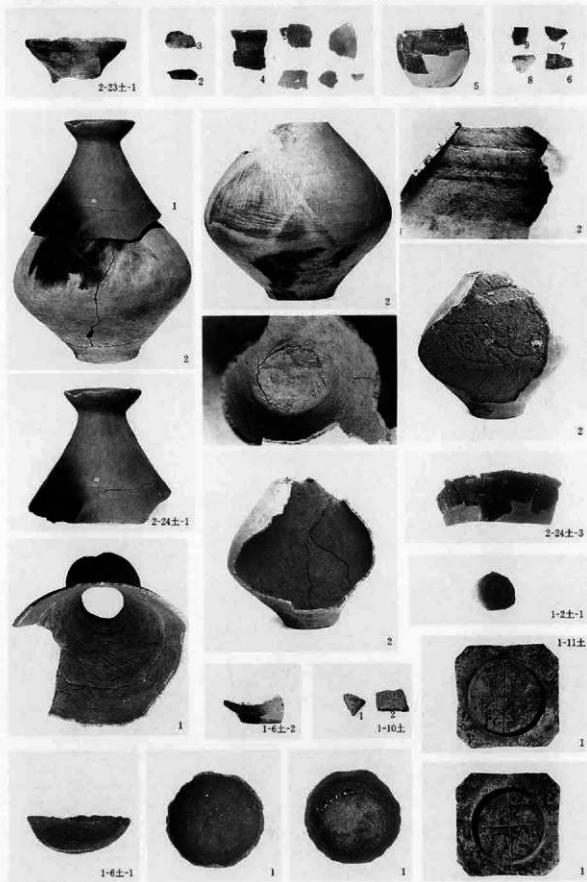
图版62

2区28号·31号住居·溝·井戸·26号土坑出土遺物



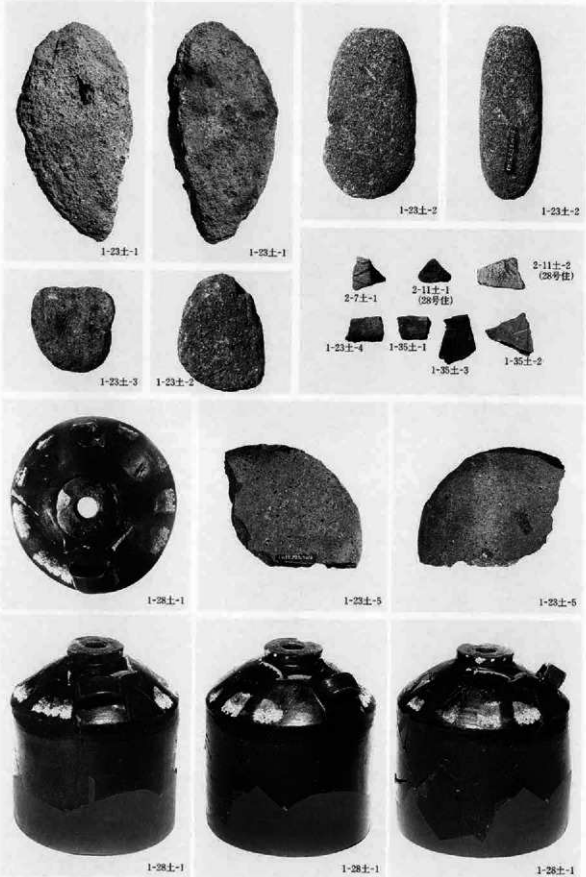
图版63

2区23号·24号·1区2号·6号·11号土坑出土遗物



图版64

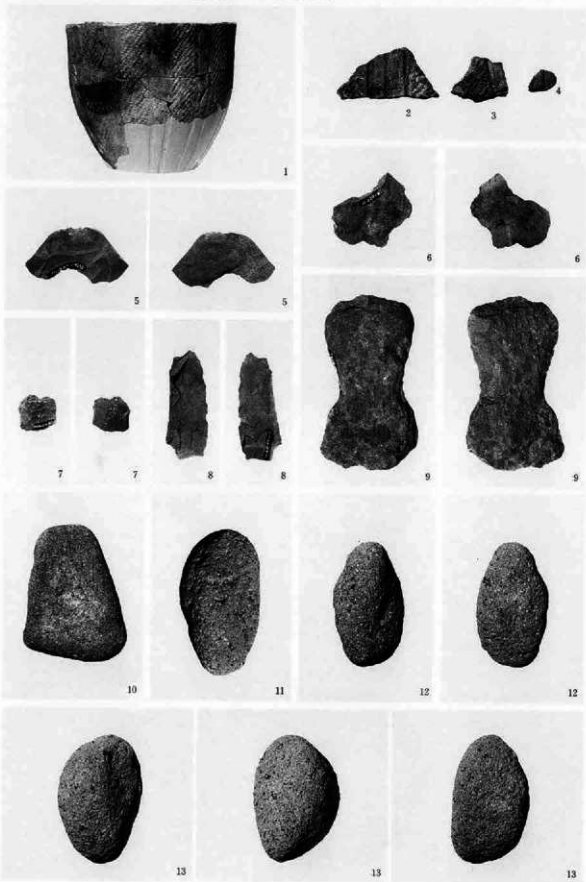
1区23号·35号·2区7号·11号土坑出土土遺物



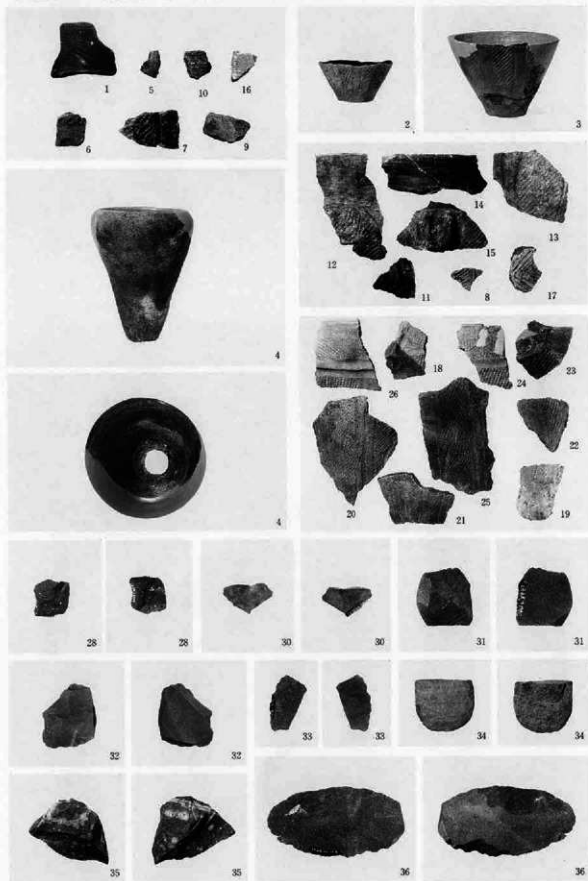
图版65

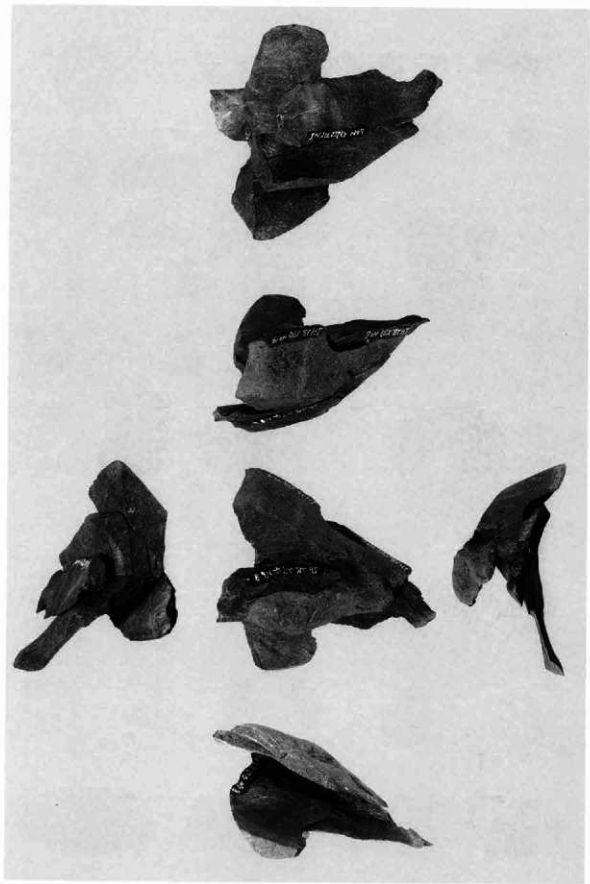
1区28号·30号·33号·35号·36号·2区1号·11号·25号土坑出土遗物





図版67 縄文時代 第2遺物集中出土地点出土遺物

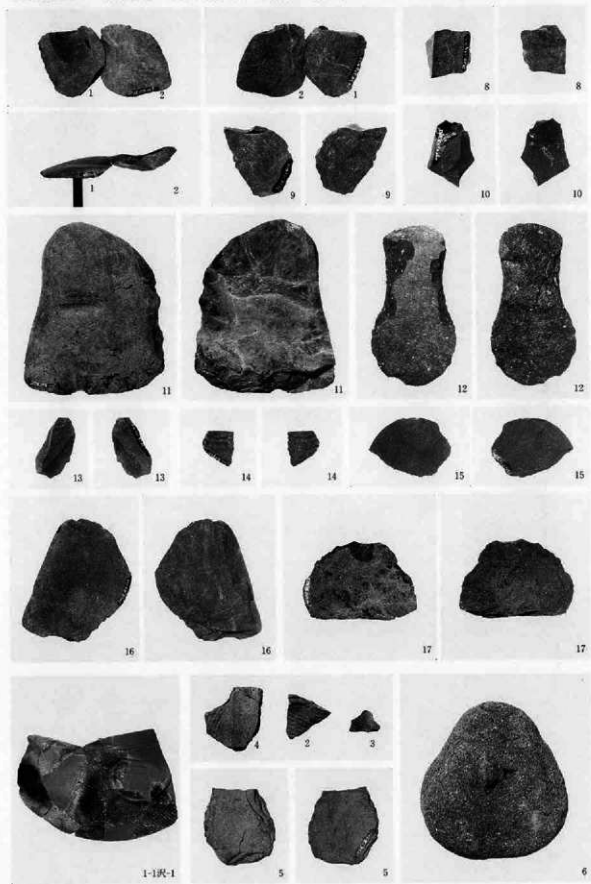


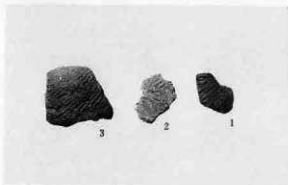


图版68 绳文时代 第3遺物集中出土地点出土遺物①

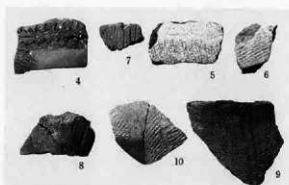
图版69

縄文時代 第3遺物集中出土地点出土遺物① 1区1号沢出土遺物

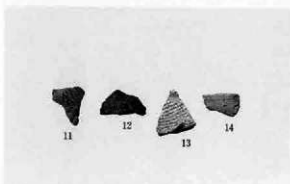




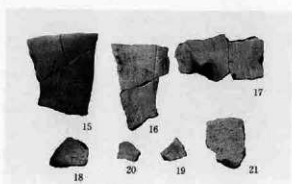
1. 縄文土器 前期



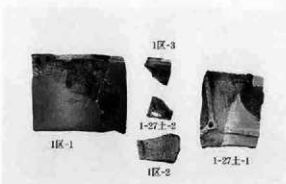
2. 縄文土器 中期①



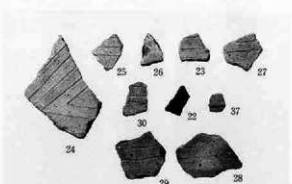
3. 縄文土器 中期②



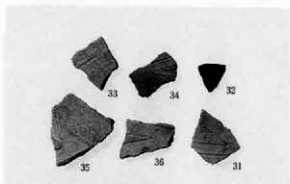
4. 縄文土器 後期①



5. 縄文土器 後期②



6. 縄文土器 後期③



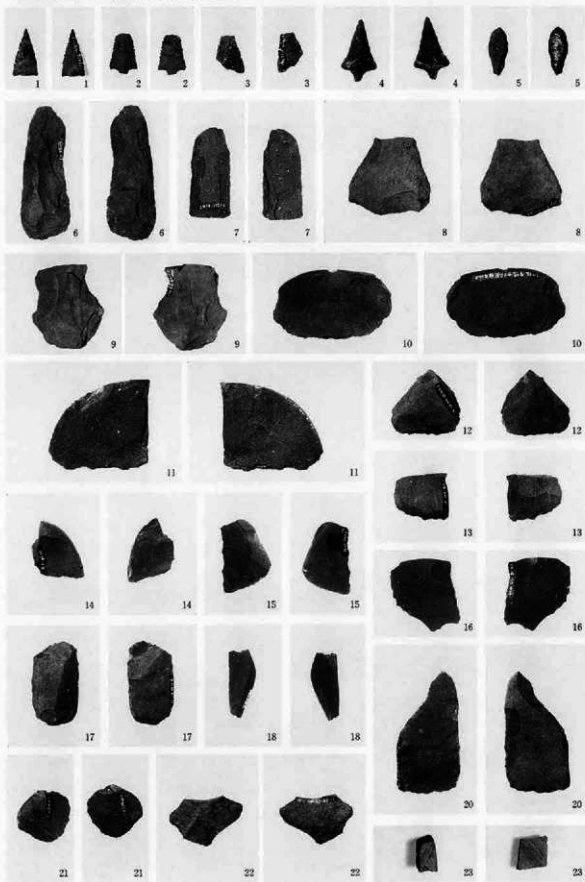
7. 縄文土器 後期④



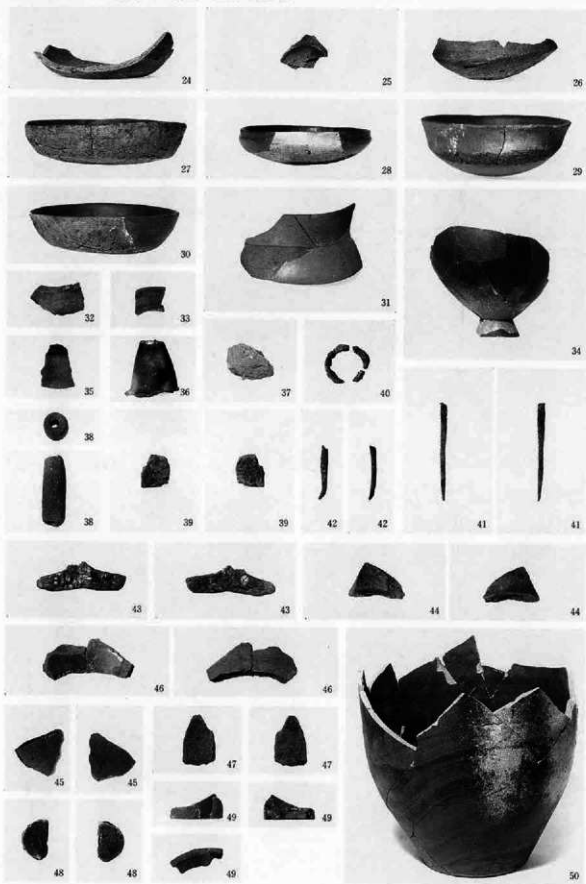
8. 縄文土器 後期⑤

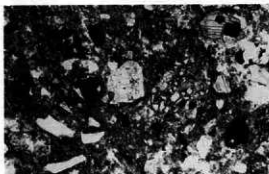
图版71

遺構外出土遺物② (石器)

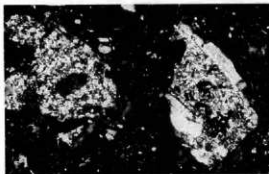
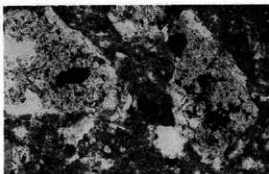


図版72 遺構外出土遺物⑥ (土器・鉄器等)

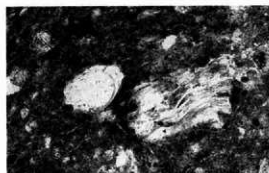




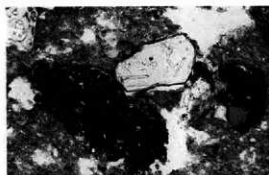
1. I H-051の偏光顕微鏡写真(上:単ニコル,下:直交ニコル)。黄褐色から褐色の基質中に、楕円形の火山岩石片(中央右)、暗褐色岩石片(左中央)、石英破砕片、斜長石破砕片、普通輝石、不透明鉱物などが散在している。スケールは0.5mm。



2. I H-051中の火山岩片の偏光顕微鏡写真(上:単ニコル,下:直交ニコル)。斜長石集晶と完晶質の石英からなる岩石片。中央上端に軽石質岩石片もみられる。スケールは0.25mm。



3. I H-051中の軽石質岩石片の偏光顕微鏡写真(単ニコル)。中央右に軽石質岩石片、中央左に円形の外形を示す生物起源と思われる物質がみられる。スケールは0.15mm。

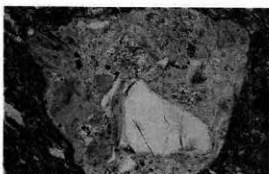


4. I H-051の偏光顕微鏡写真(上:単ニコル,下:直交ニコル)。中央に自形の斜方輝石、その両側に黒褐色岩石片、また、左上端にガラス質岩石片がみられる。スケールは0.2mm。

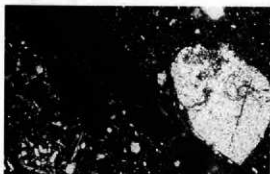
図版74 鉱物学的研究 (2)



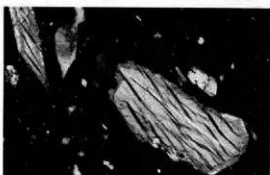
1. IH-051の偏光顕微鏡写真 (上:単ニコル,下:直交ニコル)。中央部に植物片がみられ、その右側にチャート様岩石片、そして左下に火山岩片がみられる。スケールは0.2mm。



2. IH-051中の岩石片の顕微鏡写真 (上:単ニコル,下:直交ニコル)。堆積岩起源の岩石片(砂岩?)と思われる。スケールは0.2mm。



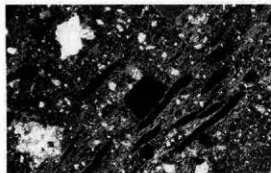
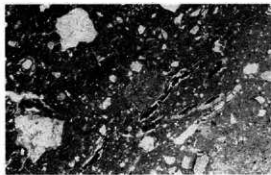
3. IH-051の偏光顕微鏡写真 (単ニコル)。中央右側に高温型石英の形態を示す石英がみられ、内部には小さな空晶(ネガティブクリスタル)もみられる。左上端は斜長石の破砕片である。スケールは0.25mm。



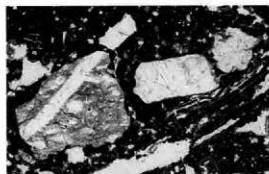
4. IH-051中の普通角閃石の偏光顕微鏡写真 (上:単ニコル,下:直交ニコル)。2方向の劈理が発達し、双晶もみられる。スケールは0.15mm。



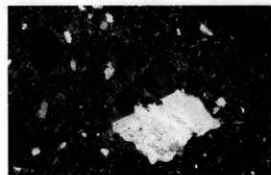
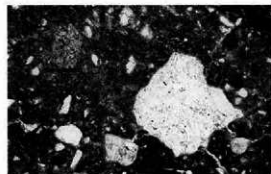
1. IH-051の偏光顕微鏡写真(単ニッケル, 中央に環形を示す生物起源の結晶性標物質(?)がみられる。スケールは0.02mm。



2. IH-052の偏光顕微鏡写真(上:単ニッケル, 下:直交ニッケル)。細長い標物質の他、直角一重円形の鉱物片および岩石片がみられる。微細な基質部は直交ニッケル下でやや高い干渉色を示すことがわかる。スケールは0.5mm。

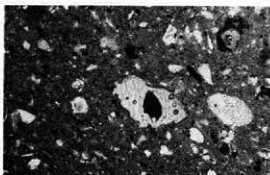


3. IH-052の偏光顕微鏡写真(上:単ニッケル, 下:直交ニッケル)。左にチャート様岩石片, 中央部にパーサイト(アルカリ長石)がみられる。右上方の岩石片は他形の細粒石英および長石様鉱物からなるものである。スケールは0.3mm。



4. IH-052の偏光顕微鏡写真(上:単ニッケル, 下:直交ニッケル)。中央にパーサイト(アルカリ長石), 左上方に火山岩片(?)がみられる。スケールは0.15mm。

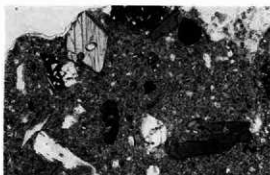
図版76 鉱物学的研究(4)



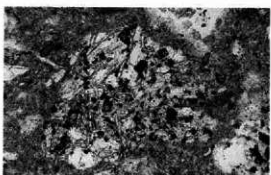
1. I H-052の偏光顕微鏡写真(単ニコル)。中央にみられる斜方輝石は内部に褐色ガラスを包有している。



2. I H-052中の植物片の偏光顕微鏡写真(単ニコル)。スケールは0.25mm。



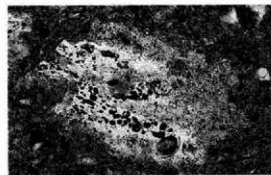
3. I H-054の偏光顕微鏡写真(上:単ニコル,下:直交ニコル)。火山岩片、斜長石、斜方輝石、角閃石、不透明鉱物などの間を黄褐色の微細な基質がうめられている。スケールは0.5mm。



4. I H-054中の火山岩片の偏光顕微鏡写真(上:単ニコル,下:直交ニコル)。スケールは0.2mm。



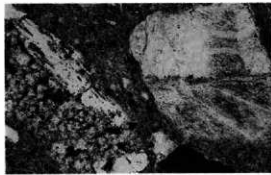
1. 1H-054中の火山岩片の偏光顕微鏡写真(単ニコル)。角閃石微晶に微細な石基が付着している。スケールは0.1mm。



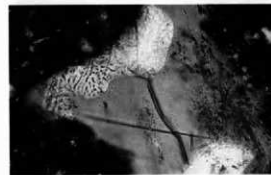
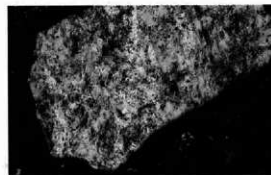
2. 1H-054中のガラス質岩石片の偏光顕微鏡写真(単ニコル)。内部に斜長石、輝石および円形の気泡がみられる。スケールは0.2mm。



4. 1H-054の偏光顕微鏡写真(単ニコル)。右の斜長石は自形結晶の破砕片であり、内部に褐色ガラスを包含している。左にアルカリ長石がみられ、その下に褐色および暗褐色を示す角閃石2片がみられる。スケールは0.2mm。



3. 1H-054の偏光顕微鏡写真(上:単ニコル,下:直交ニコル)。右にチャート様岩石片がみられる。左は斜長石微晶を含む火山岩片。右下に角閃石(暗褐色)もみえる。スケールは0.2mm。



5. 1H-054中のアルカリ長石の偏光顕微鏡写真(直交ニコル)。パーサイト(上)とミルメカイト様組織(下)がみられる。スケールはそれぞれ0.2mm(上)、0.05mm(下)である。

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第167集

今井白山遺跡

一般国道50号(東前橋拡幅)改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集

平成5年3月20日 印刷

平成5年3月26日 発行

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局